(財)八尾市文化財調査研究会報告37

八尾市埋蔵文化財発掘調査報告

1993年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

八尾市埋蔵文化財発掘調査報告

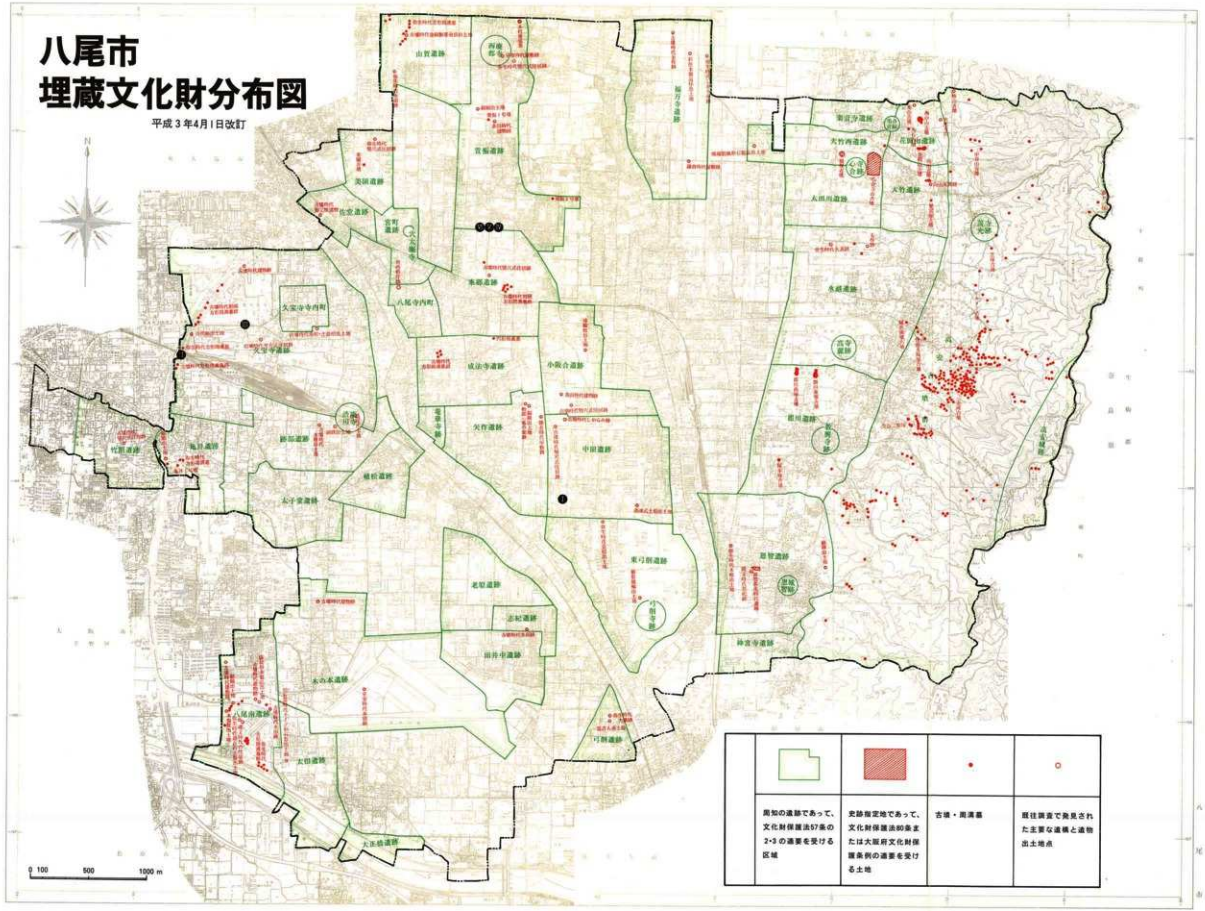
Ⅰ　東弓削遺跡（第4次調査）
Ⅱ　久宝寺遺跡（第1次調査）
Ⅲ　久宝寺遺跡（第6次調査）
Ⅳ　萱振遺跡（第4次調査）
Ⅴ　萱振遺跡（第5次調査）
Ⅵ　萱振遺跡（第8次調査）

1993年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

八尾市
埋蔵文化財分布図

平成３年4月１日改訂



はしがき

本市は、大阪府の東部に位置し、近年の急激は市街化により変貌を遂げた衛生都市であります。

歴史的には、大和川のもたらした豊かな土壌を背景に水稲耕作の初期の段階から活発な開発が行われたり、古代には「河内の京」が設けられるなど、難波と大和を結ぶ大陸文化の中継地としての役割を果してきました。

このように、本市には先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しており、これらの文化財を開発による破壊から守り、後世に永く伝承させることが我々の大きな責務と認識し、昭和39年に市民憲章に「文化財を大切にしましょう」の条文を設けて文化財の保護・保存の徹底をはかってきたところであります。

今回、昭和59年度～平成2年度に実施しました東弓削遺跡（第4次）、久宝寺遺跡（第1次・第6次）、萱振遺跡（第4次・第5次・第8次）の発掘調査の整理が完了しましたので、これをまとめ報告書として刊行することに致しました。

本書が学術研究の資料として、また、文化財保護への関心と理解を深める上で広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して御協力いただきました関係機関の皆様に対して心から厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　福島　孝

序

1．本書は財団法人八尾市文化財研究会が昭和59年・昭和61年・昭和62年・昭和63年・平成元年・平成2年度に実施した発掘調査の調査報告を集録したもので、内業整理および本書作成業務は各現地調査終了後に着手し、平成5年3月31日をもって終了した。なお、本書の末に八尾市教育委員会からの指示書を掲載した。

1．本書に集録した調査報告は、下記の目次のとおりである。

1．本書の構成・編集は原田昌則・西村公助が行い、文責は各例言に明示した。

1．本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2500分の1（昭和61年8月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成3年4月1日改訂）をもとに作成した。

1．本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海水面である。

1．本書で用い方法は磁北・座標北である。

1．遺構は下記の略号で表した。

掘立柱建物－SB　井戸－SE　土坑－SK　小穴－SP　溝－SD　落ち込み－SO

1．実測図の縮尺は、遺構は20分の1・40分の1・50分の1・100分の1を基調とし、遺物は4分の1に統一した。

1．遺物実測図は、断面の表示によって以下のように分類した。

弥生土器・土師器・埴輪・瓦器－白　須恵器・陶器・磁器－黒　石製品・木製品－斜線

1．庄内式土器・布留式土器の分類および時期については、本書掲載の「Ⅱ久宝寺遺跡第1次調査」で呈示したものを使用した。

1．各調査に際しては、写真・実測図の他にカラースライドも多数作成している。市民の方々に広く利用されることを希望する。

目　　次

はしがき
序
八尾市埋蔵文化財分布図
Ⅰ　東弓削遺跡第4次調査（HY88－4）発掘調査報告 …… 1
Ⅱ　久宝寺遺跡第1次調査（KH84－1）発掘調査報告 …… 41
Ⅲ　久宝寺遺跡第6次調査（KH90－6）発掘調査報告 …… 153
Ⅳ　萱振遺跡第4次調査（KF86－4）発掘調査報告 …… 179
Ⅴ　萱振遺跡第5次調査（KF87－5）発掘調査報告 …… 197
Ⅵ　萱振遺跡第8次調査（KF89－8）発掘調査報告 …… 237
Ⅶ　指示書 …… 267

I 東弓削遺跡第4次調査（HY88－4）

例　　言

1．本書は、八尾市八尾木東１丁目先で実施した公共下水道布設工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する東弓削遺跡第４次調査（ＨＹ88－４）の発掘調査の業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は昭和64年１月６日から平成元年１月23日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。面積は72㎡を測る。調査においては上野宣則・柏本幸寿・沢村妙子・八元聡志が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成５年３月31日に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－中西隆子・北原清子・八元、図面レイアウト－原田、図面トレース－中西・北原、遺物観察表－原田、遺物写真撮影－原田が行った。

1．付章「東弓削遺跡出土土器の砂礫」については、大阪府八尾市立曙川小学校教諭奥田尚氏に依頼した。

1．本書の執筆・編集は原田が行った。

1．調査及び本書作成にあたっては、以下の方々から御指導、御教示を受けた。

関川尚功（橿原考古学研究所）、奥田尚（八尾市立曙川小学校）、米田敏幸（八尾市教育委員会）（敬称略・順不同）

本 文 目 次

第1章　調査に至る経過…… 1

第2章　地理・歴史的環境…… 3

第3章　調査概要…… 4

　第1節　調査方法と経過…… 4

　第2節　基本層序…… 4

　第3節　検出遺構・出土遺物…… 5

　　1）第1調査面…… 5

　　2）第2調査面…… 13

　　3）包含層の出土遺物…… 13

第4章　出土遺物観察表……16～22

第5章　まとめ…… 23

付章　東弓削遺跡出土土器の砂礫種…… 32

挿 図 目 次

第 1 図　調査地周辺図…… 1

第 2 図　基本層序模式図…… 4

第 3 図　第1調査面検出遺構平面図…… 6

第 4 図　ＳＤ－１平断面図および遺物出土位置図…… 7

第 5 図　ＳＤ－１出土遺物実測図１…… 10

第 6 図　ＳＤ－１出土遺物実測図２…… 11

第 7 図　ＳＤ－１出土遺物実測図３…… 12

第 8 図　ＳＫ－１平断面図…… 13

第 9 図　ＳＫ－１出土遺物…… 13

第 10 図　第2調査面検出遺構平面図…… 14

第 11 図　包含層（第 6 層）出土遺物実測図…… 15
第 12 図　包含層（第 3 層）出土遺物実測図…… 16
第 13 図　東弓削遺跡へ搬入された土器…… 36

表　目　次

第 1 表　周辺の発掘調査一覧表…… 2
第 2 表　弥生時代後期末（プレ庄内期）・庄内Ⅰ期・庄内Ⅱ期資料一覧表…… 25
第 3 表　器種と類型…… 37
第 4 表　土器胎土の砂礫種（その 1 ～その 3）……38～40

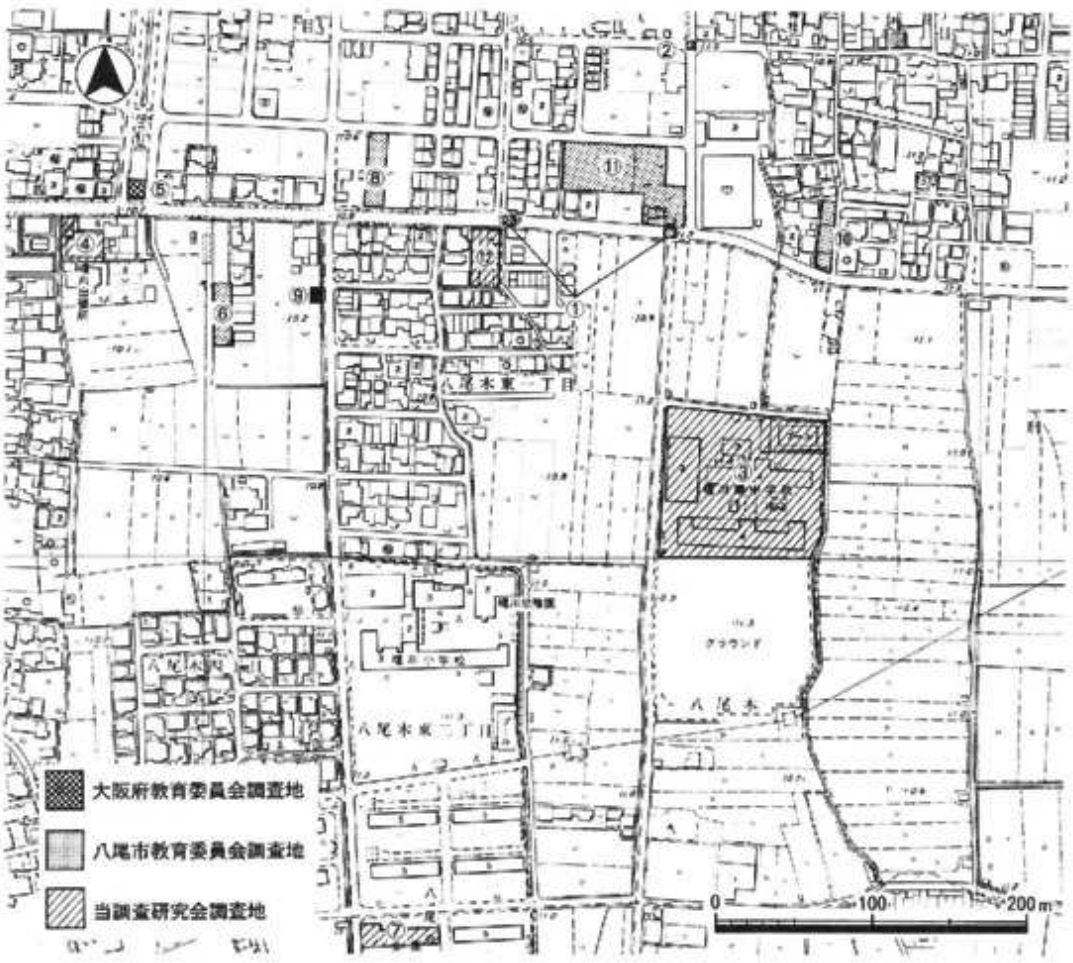
図　版　目　次

図版　一　第 1 調査面全景
ＳＤ－１検出状況
図版　二　ＳＤ－１内遺物出土状況
ＳＤ－１内遺物出土状況
図版　三　第 2 調査面全景
ＳＫ－１検出状況
図版　四　ＳＤ－１出土遺物
図版　五　ＳＤ－１出土遺物
図版　六　ＳＤ－１出土遺物
図版　七　ＳＤ－１、第 6 層出土遺物

第1章　調査に至る経過

東弓削遺跡は、八尾市南部の東弓削・東弓削1～3丁目・八尾木1～6丁目・八尾木東1～3丁目・都塚・刑部に所在しており、地理的には旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地上に位置している。

当遺跡一帯は、『続日本紀』の神護景雲三年（769）十月三十日の条に「詔似由義宮、為西京」と記されている由義宮・西の京の推定地にあたる地域で、昭和42年に行われた大阪外環状線（国道170号線）の敷設工事の際、当該期に比定される土器類が出土したことにより、遺跡の存在が認識されるようになった。その後、昭和50年に八尾市教育委員会より送水管敷設工事に伴う発掘調査が遺跡内で実施されて以来、現在（平成4年3月）に至るまでに8次（八尾市教育委員会3次・当調査研究会5次）にわたる発掘調査が実施されてきた。これらの発掘調査の結



第1図　調査地周辺図

果、当遺跡が弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡であることが確認されている。

このような状況下、八尾市下水道部建設課から八尾市八尾木１丁目先で公共下水道の発進竪坑を構築する旨の届出書が八尾市教育委員会に提出された。発進竪坑の構築位置は既往調査地に近接していることから文化財保護法に基づき発掘調査が必要であると判断し、申請者へその旨を通知した。発掘調査にあたっては、事業者・八尾市教育委員会・(財) 八尾市文化財調査研究会の三者間で協議を行い、当調査研究会が事業者から委託を受けて実施することが決定された。現地での発掘調査は、昭和64年１月６日から平成元年１月23日まで実施した。調査面積は72㎡である。内業整理および本書作成業務は、調査終了後平成５年３月31日まで随時実施した。

第１表　周辺の発掘調査一覧表

番　号	遺跡名	調査主体	調査地	調査期間	主な検出遺構と出土遺物	文献名
①	東弓削	市教育委員会	八尾木～東弓削	昭和50．12．8～昭和51．3．31	弥生土器（中期～後期）・土師器・須恵器・埴輪	八尾市教育委員会「東弓削遺跡」1976
②	中田	市教育委員会	荊部３丁目	昭和53．4	庄内式土器 鳥形木製品	八尾市教育委員会「昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報」1981
③	東弓削（HY82－1）	財調査研究会	八尾木167	昭和57．10．13～10．18	水田（平安末～鎌倉）	財八尾市文化財調査研究会「昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査」1983
④	東弓削	財調査研究会	八尾木４丁目	昭和59．2．2～2．19	弥生土器（中期～後期）・庄内式土器	財八尾市文化財調査研究会「昭和58年度事業概要報告」1984
⑤	中田	府教育委員会	八尾木北５丁目	昭和60．8	不明遺構（庄内式期）	大阪府教育委員会「中田遺跡発掘調査概要」1986
⑥	東弓削	市教育委員会	八尾木４丁目５	昭和61．9．24～9．30	竪穴（弥生中期） 庄内式土器	八尾市教育委員会「八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ」1987
⑦	東弓削（HY88－3）	財調査研究会	八尾木東３丁目38	昭和63．1．7～2．20	水田（鎌倉） 遺物包含層（庄内式期）	財八尾市文化財調査研究会報告16「八尾市文化財調査研究会年報昭和62年度」1988
⑧	中田	市教育委員会	八尾木北６丁目166	昭和62．8．19・8．26～9．5	遺物包含層（庄内式新相～布留式古相）	八尾市文化財調査報告17昭和62年度民家解体事業・八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ」1988
⑨	東弓削（HY89－5）	財調査研究会	八尾木東１丁目	昭和64．1．6～平成1．1．23	土坑（弥生中期） 溝（庄内式期）	財八尾市文化財調査研究会報告25「八尾市文化財調査研究会年報昭和63年度」1987　本書掲載
⑩	中田	市教育委員会	荊部４丁目407－2・4・8	平成2．9．21	遺物包含層（奈良末～平安初頭）	八尾市文化財調査報告22 八尾市内遺跡平成２年度発掘調査報告書Ⅰ」1991
⑪	中田	市教育委員会	荊部３丁目53－1	平成2．10．23	遺物包含層（古墳～奈良）	〃
⑫	東弓削（HY90－5）	財調査研究会	八尾木東１丁目94	平成2．11．19～12．6	土坑・溝・小穴（古墳前～中）	財八尾市文化財研究会報告32「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」1991

第2章　地理・歴史的環境

東弓削遺跡は、大阪府八尾市の南部に位置しており、現在の行政区画では東弓削、東弓削1～3丁目、八尾木1～6丁目、八尾木東1～3丁目、都塚、刑部にあたる。

八尾市の地形は、生駒山地とその西麓に広がる扇状地が占める東部地域と、狭義の河内平野と呼ばれる沖積低平地が広がる西部地域から成る。平野部においては江戸時代の宝永元年（1704）に新大和川の付け替えが実施される以前は、八尾市の二俣地区より旧大和川が長瀬川と玉串川に分流して河内平野内を北流していた。この二大河川に挟まれた地域は、デルタ状の低位沖積地が南北方向に形成されており、肥沃な土壌や豊富な水量といった農耕社会を成立させていくための基礎的な条件を背景に、水稲耕作の比較的早い段階から定着した集落が営まれている。東弓削遺跡は、この低位沖積地の南端部に位置する遺跡で、同一沖積地上には当遺跡より北に中田遺跡、矢作遺跡、小阪合遺跡、成法寺遺跡、東郷遺跡、賞振遺跡、山賀遺跡が位置している。また、玉串川を隔てて東に恩智遺跡、長瀬川を隔てて南に弓削遺跡、西に田井中遺跡、志紀遺跡、老原遺跡が位置している。

東弓削遺跡一帯は、現在のように複合遺跡として認識される以前は、『続日本紀』に記された「弓削行宮」「弓削寺」「由義宮」「由義寺」「西の京」の推定地を含む地域であるため、歴史地理的な観点から論争の場を提供してきた。この地が考古学的に認識された嚆矢は、昭和42年に大阪外環状道路（国道170号線）敷設工事に際して当該時期の遺物が出土したことによるが[註1]、発掘調査によるものでなく詳細は不明であった。その後、昭和50年に送水管敷設工事に伴う発掘調査が八尾市教育委員会により実施された結果[註2]、弥生時代中期から鎌倉時代に至る遺構・遺物が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認された。今回の調査地である八尾市八尾木東1丁目は東弓削遺跡範囲の北端に位置し、道路を隔てて北側は中田遺跡とされている。この地域一帯では、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、当調査研究会により12次にわたる発掘調査が実施されており、弥生時代中期から平安時代に至る遺構・遺物が検出されている。

註記

註1　山本博『滝田越』学生社　1971

註2　山本昭ほか『東弓削遺跡』八尾市文化財調査報告3　八尾市教育委員会　1976

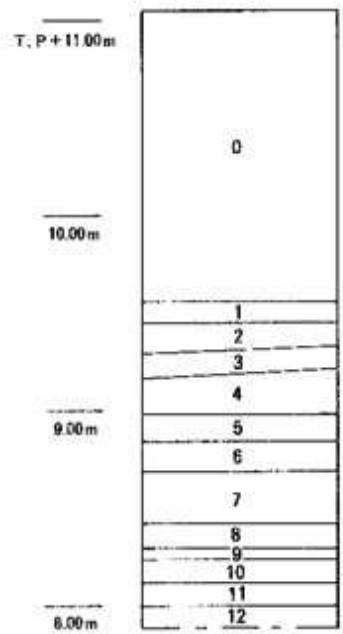
第３章　調査概要

第１節　調査方法と経過

調査地は、公共下水道の発進竪坑で12ｍ四方の範囲に鋼矢板が打設されていた。当初は、全域が調査対象であったが、東半分が現道路部分にあたり、しかも各種の既設構築物があることから、東半分については八尾市教育委員会が立会調査を実施することになった。したがって、発掘調査は西側部分の72㎡を対象とした。調査部分は調査以前に現道路面から2.1ｍまでの機械掘削が完了していた。調査では以下１ｍについて層理にしたがって人力掘削を実施し、遺構・遺物の検出に務めた。調査の結果、現地表下2.25ｍ前後に存在する第６層上面（標高8.8ｍ）で古墳時代初頭（庄内式古相）に比定される溝２条（SD－１・SD－２）を検出した（第１調査面）。第１調査面からさらに0.4ｍ下部に存在する第８層上面で（標高8.4ｍ）で弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）に比定される土坑１基（SK－１）を検出した（第２調査面）。出土遺物は土器類が主で遺構、包含層を含めてコンテナ５箱程度が出土している。

第２節　基本層序

調査前に地表下2.1ｍまで機械掘削が完了していたが、地表下1.5ｍに設置されていた切梁より下部に土層が残っており、この部分より下部で層序が確認できた。全体で12層を確認した。層相は第１層～第４層および第８層～12層が比較的安定しており全域に存在していたが、第５層～第７層は不安定な土層で、一部欠如している部分があった。なお、機械掘削は第５層上面



第１層	淡灰色～淡灰青色	粘質
第２層	灰青色	砂質～粘質
第３層	灰黒色	粘質
第４層	暗灰色	粘質
第５層	暗青灰色	粘質
第６層	淡灰緑色～暗灰色	砂質
第７層	淡灰緑色～淡灰青色	シルト
第８層	灰色	粘質シルト
第９層	暗灰色	粘質シルト
第10層	淡青灰色	シルト
第11層	淡灰色	シルト
第12層	灰青色	粘土

第２図　基本層序模式図（１／40）

におよんでおり、平面的な調査はこの七層以下で実施している。

第0層：調査前に掘削されていたため層相は不明である。地表面の標高は11.05mである。

第1層：淡灰色～淡灰青色。粘質土。層厚0.1m。

第2層：灰青色。砂質～粘質土。層厚0.15m前後。

第3層：灰黒色。粘質土で一部小砂礫が混じる。層厚0.15m。古墳時代中期の遺物を含む。

第4層：暗灰色。粘質土で一部小砂礫が混じる。層厚0.2m。古墳時代前期の遺物を含む。

第5層：暗青灰色。粘質土。層厚0.15m。古墳時代前期の遺物を極少量含む。

第6層：淡灰緑色～暗灰色。砂質土。層厚0.15m。弥生時代中期から後期の遺物を含む。上面が第1調査面（古墳時代初頭）である。

第7層：淡灰緑色～淡灰青色。土質は大半がシルトであるが、南部は粗砂である。層厚0.25m前後。

第8層：灰色。粘質シルト。層厚0.15m前後。上面が第2調査面（弥生時代中期）である。

第9層：暗灰色。粘質シルト。層厚0.05m。

第10層：淡青灰色。シルト。層厚0.15m。

第11層：淡灰色。シルト。層厚0.15m。

第12層：灰青色。粘土。層厚0.15m。

第3節　検出遺構・出土遺物

1）第1調査面

溝（SD）

SD－1

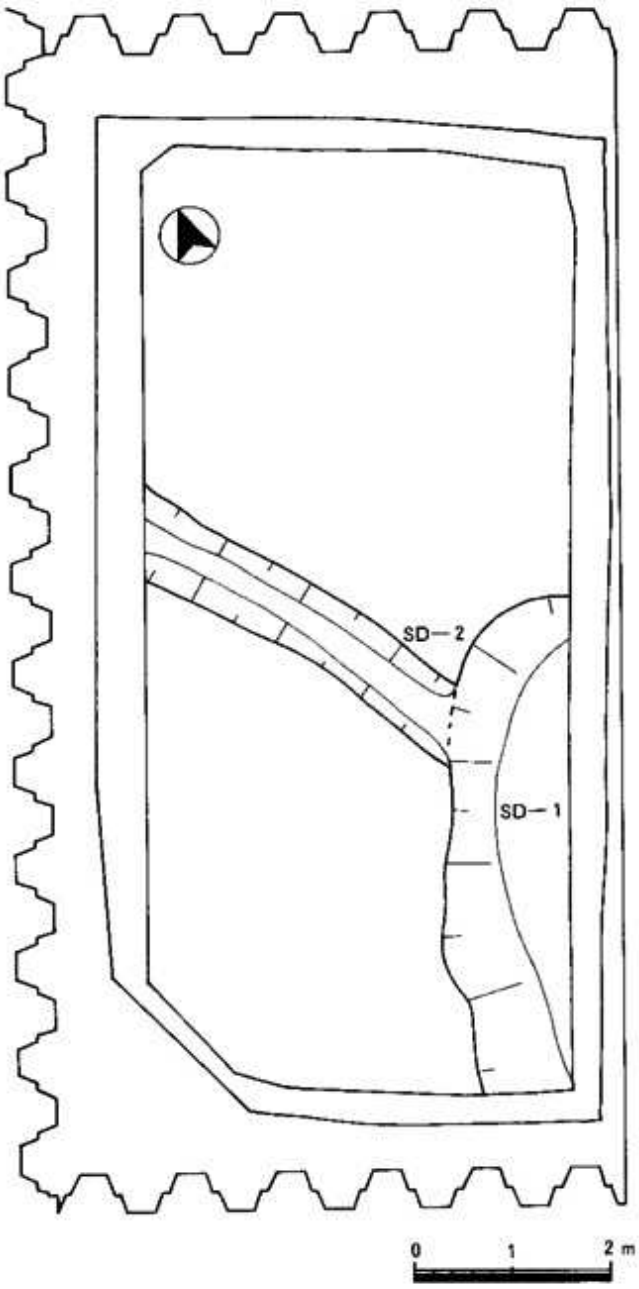
調査区の南東部で検出した。南北方向に伸びるもので検出長5m、幅1.3m以上、深さ0.3mを測る。南部および東部が調査区外に至るため全容は不明であるが、北端は東部へ屈曲するものと推定される。内部埋土は上層の暗灰色粘土と下層の灰色粘土の二層である。遺物は上層から古墳時代初頭(庄内Ⅱ期）に比定される土器類が多量に出土している。

SD－1出土遺物

遺物はすべて第1層暗灰色粘土（層厚20cm）から出土した。遺物の総量はコンテナ箱に4箱程度である。なお、SD－1の北東部から東側の調査区外に続く部分でも、一部遺物採集を実施しており、この部分から出土した遺物もSD－1に含めた。そのうち図化し得たものは39点（1～39）である。土器の分類については、中河内地域における庄内式～布留式土器分類表（P－61～P－66）を参照されたい。

・広口壺C（1）、D₁（2）

（1）は外面全体にハケナデ調整を施す中型の壺。加賀南部産である。（2）は頸部が直上

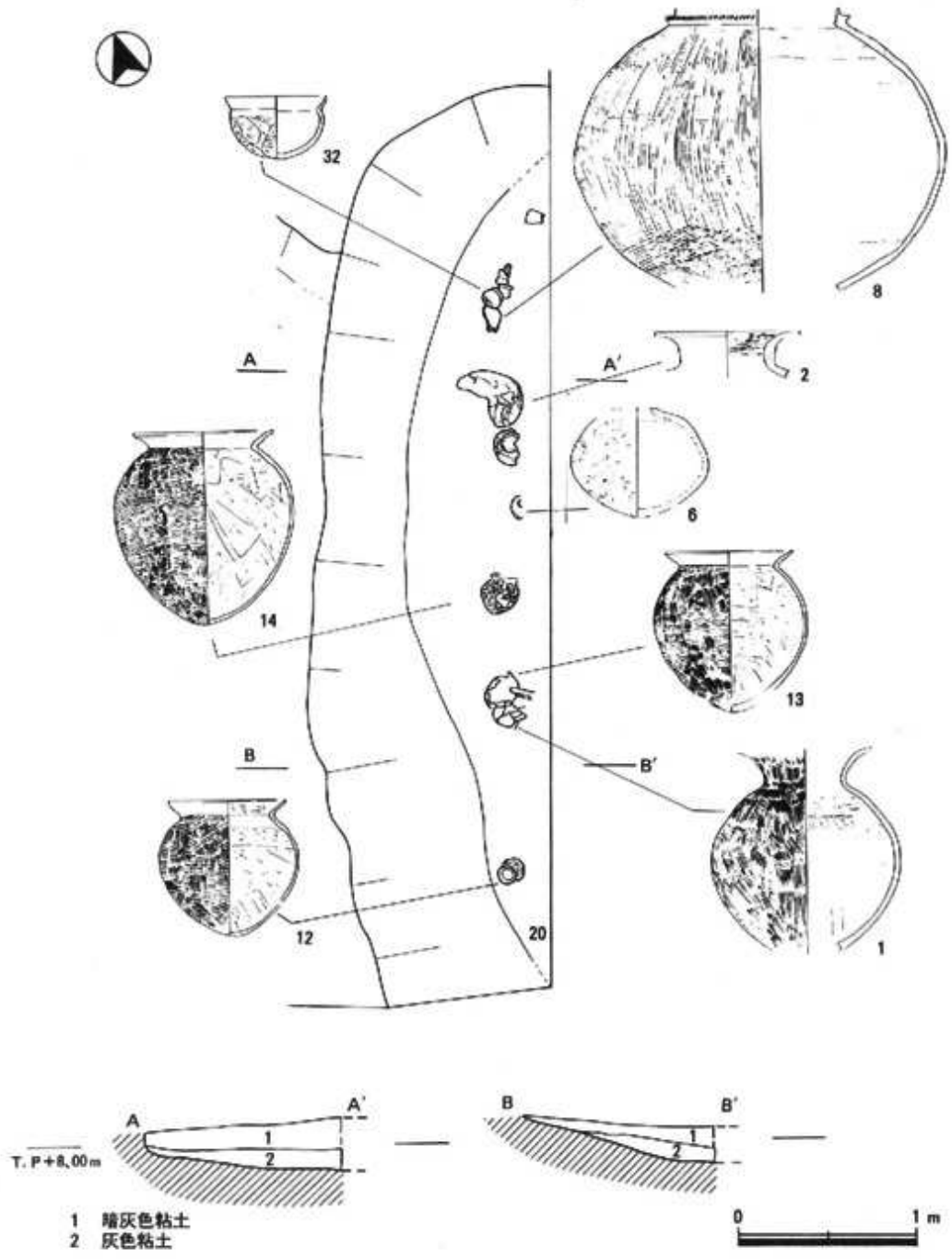


第３図　第１調査面検出遺構平面図

に伸びた後、強く屈曲して口縁部が水平方向に広がるもの。泉南産である。

・短頸直口壷Ａ（３）

（３）は口頸部が上外方に直線的に伸びるもので、体部外面と口縁部内面にハケナデ調整を施す。在地産（生駒西麓恩智）である。



第4図　SD－1平断面図および遺物出土位置図

・複合口縁壷 A_1（5）、D（4）

（5）は口縁部下半に粘土帯を垂下させ二重口縁とする小型の壷。口縁端部外面と体部外面上位に波状文を施文している。（4）は頸部が外反して伸びた後、有段の口縁部を持つ。加賀南部産である。

・壷（6～8）

（6）（7）ともに口頸部が欠損する小型の壷で全容は不明であるが、体部の形態は偏球形で底部は尖り底である。（6）は体部外面に単位の細かいヘラミガキを横方向に密に施すもので、色調は明るい褐色系を呈する。（7）は体部外面に単位のやや粗いヘラミガキを斜め方向に密に施す。在地産（生駒西麓恩智＋平野部）である。（8）は大型の壷で口頸部および底部を欠損しており全容は不明である。体部は球形を呈し、体部下半はタタキ調整で上位から中位にかけては縦方向にヘラミガキを施すもので、体部と頸部の境に貼り付け凸帯を有する。このように体部と頸部の境に凸帯を有し、しかも凸帯上面に刻目を施す例は短頸直口壷や複合口縁壷の一部に見られる特徴である。（8）は阿波産である。

・甕 A（10）、A_2（9・11）

いわゆるV様式系甕と呼称される甕である。（10）は細片であるため不明であるが（11）は（9）と同様球形の体部に平底の底部を有する甕A_2にあたる。（9）は在地産（生駒西麓恩智）、（10）は加賀南部産、（11）は八尾市南西部産である。

・甕B_1（12～15・24）、B_2（16～23）

甕B_1は河内型庄内式甕（以下庄内式甕）の最古のタイプである。

甕B_1（12～15・24）は体部の最大径が上位に位置するもので、底部は小さな平底ないしは尖り底である。口縁部は屈曲外反し、端部はつまみ上げられている。体部の器壁の厚みは4㎜前後で甕B_2に比してやや厚い傾向が認められる。体部外面のタタキ調整の単位はV様式甕と同様太目（3～4本／1㎝）で、三分割成形に沿ってタタキ調整が施されており、成形技法はV様式甕と変わることがない。タタキ調整後に施される縦方向のハケナデ調整は、体部の特に上位と下位を中心に施されている傾向が認められるが、それほど密でない。体部内面は屈曲部分までヘラケズリが施されている。器高の違いから15㎝前後を甕B_1－Ⅰ（12・24）、18㎝前後を甕B_1－Ⅱ（13）、21.5㎝前後を甕B_1－Ⅲ（14）に区別した。そのうち、（12・13）が在地産（生駒西麓恩智）、（15）が在地産（生駒西麓水越）、（14・24）が在地産（生駒西麓恩智＋平野部）である。

甕B_2（16～23）は口縁部が屈曲外反するもので、口縁端部が上方へつまみ上げられ面を持つ。体部外面のタタキ調整が下位まで連続的に行われることにより、体部中位に最大径が移り球形化した形態に変化している。底部は小さな平底ないしは尖り底である。タタキ調整の単位

は甕B_1に比してやや細目で、甕B_1の段階までみられたV様式甕の伝統を引く太めのタタキメが減少し中細のタタキメ（4～5本／1㎝）のものが増加している。タタキ調整後のハケナデは中位以下を中心に施されており、甕B_1に比して密に施される傾向が顕著である。そのうち、(16・17・21～23)が在地産（生駒西麓恩智＋平野部）、(18・19)が在地産（生駒西麓恩智）、(20)が在地産（生駒西麓水越）である。

・甕C（25・26）

(25・26)は左上りのタタキ調整を施すことや、口縁部の屈曲部が甕B_1に比して鋭くない点や内面のケズリ調整が屈曲部におよばない点などからみて大和型庄内式甕の特徴と共通している。そのうち、(25)は播磨産である。(26)は砂礫粒が少量のため産地同定は不能であった。

・甕I（27）

口縁部が斜上方に伸びた後、強く外反して水平方向に広がる。体部は長胴形で体部中位に最大径を持つ。底部は突出しない平底である。水平方向にタタキ調整を行った後、全体に縦方向にハケナデを施す。体部内面は縦方向の密なハケナデ、口縁部は横方向にハケナデを施す。在地産（生駒西麓恩智＋平野部）である。

・甕H（28～30）

長胴形の体部に「く」の字に屈曲する口縁部が付くもので、口縁部の成形に際しては、「叩き出し技法」を使用してる。底部は突出しない平底で(30)のようにタタキメが底部外面におよぶものもある。体部外面全体に粗いタタキ調整が施されており、タタキメの方向は、体部から口縁部上位にかけては右上りで、そのほかは水平方向である。内面の調整は体部はハケナデないしは板ナデで、口縁部内面は横方向にハケナデが施されている。(28・30)が摂津産、(29)が近江産である。

・鉢G_1（31・32）

半球形の体部にわずかに内彎気味に立ち上がる口縁部が付く小型鉢。体部外面上位から底部にかけて鱗状のヘラケズリを施す。(31)は在地産（調査地付近）である。

・器台B_3（33）

皿状の受部をもつもので、受部と脚部が貫通しない小型器台。脚部および受け部外面に横方向に密なヘラミガキ。受部内面には放射状にヘラミガキが施されている。吉備産である。

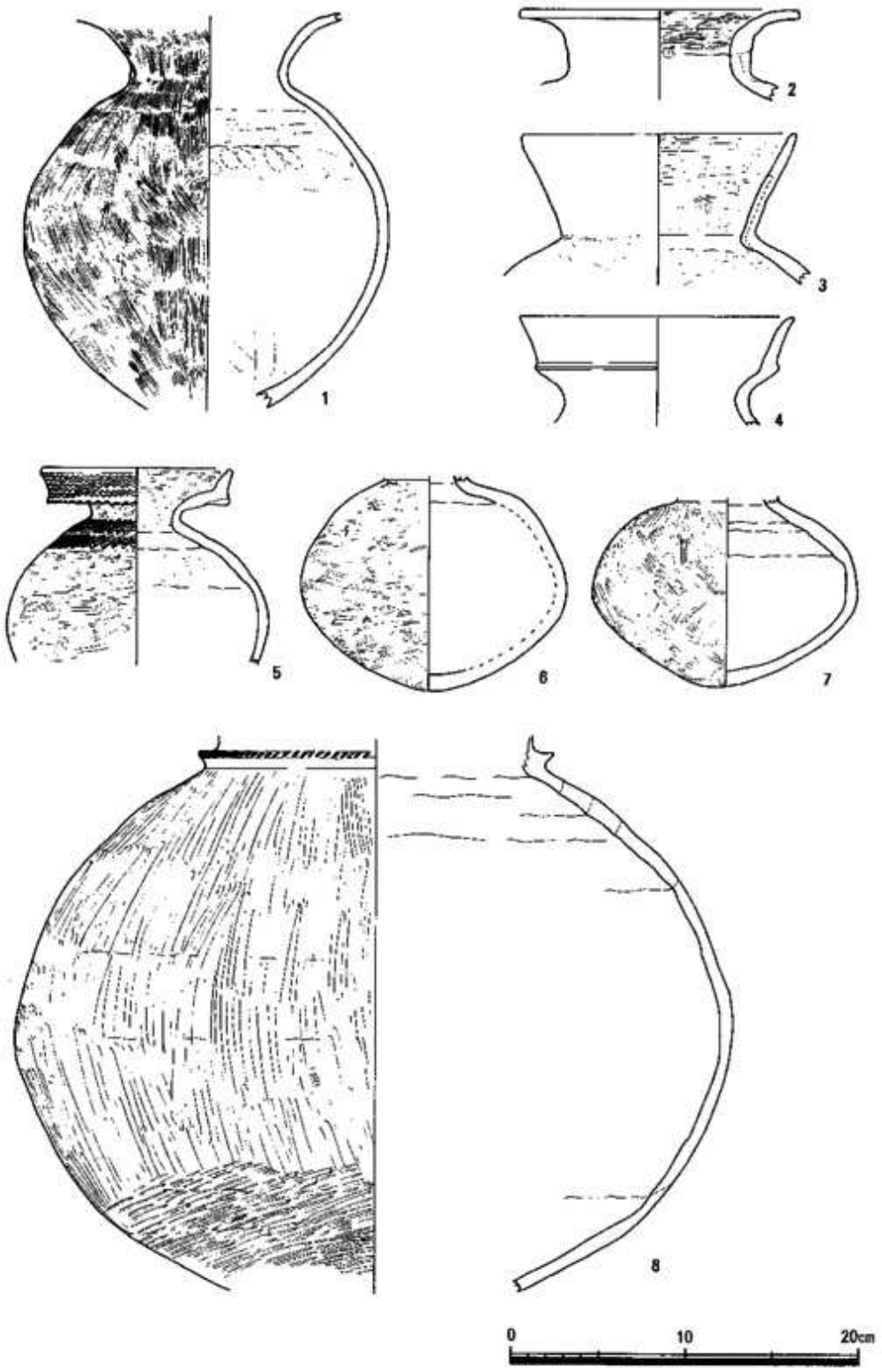
・高杯C_1（34）

椀状の杯部を持つ高杯と推定されるが細片のため明確でない。

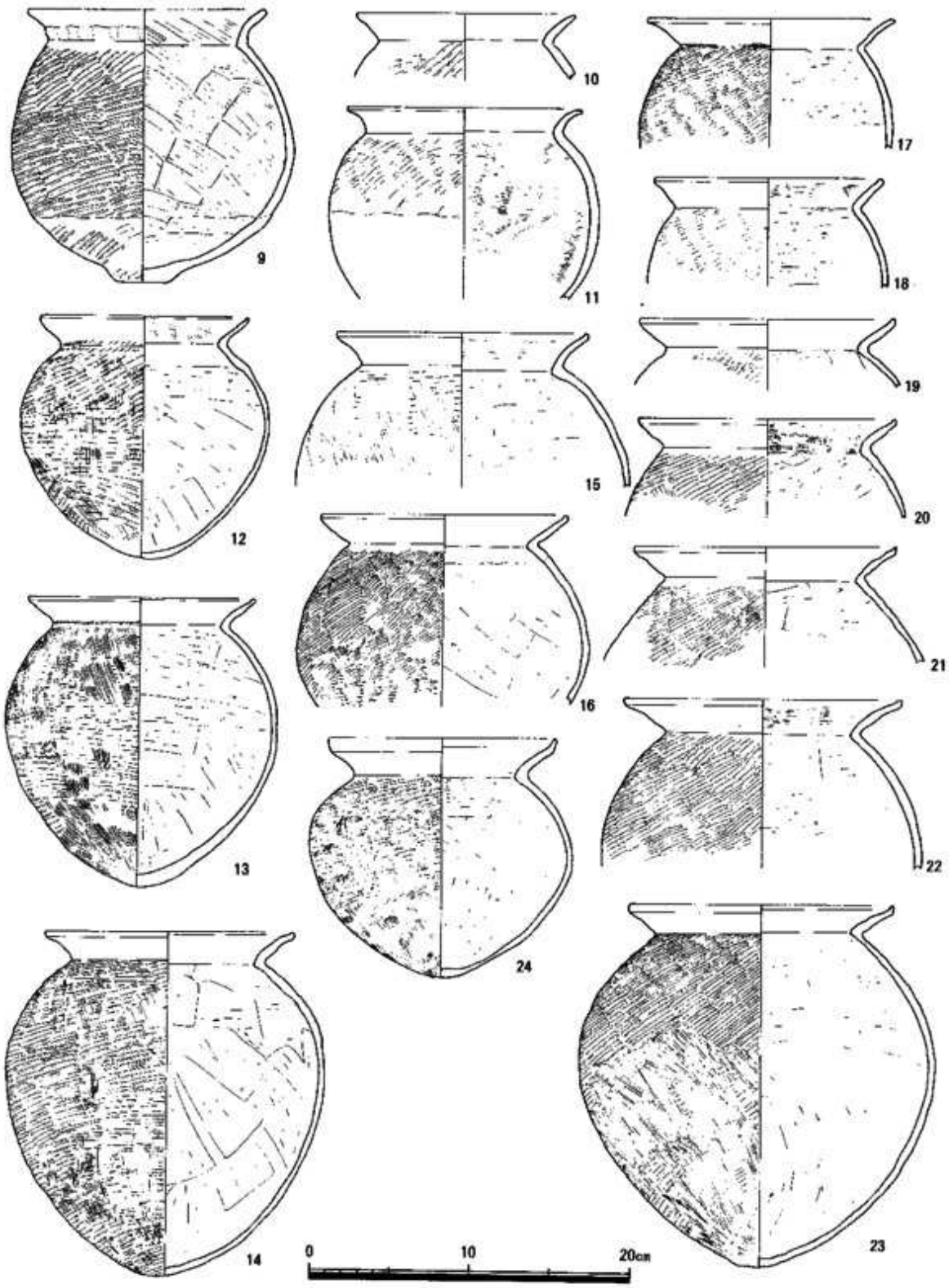
・高杯B_2（35）

杯部の細片であるが二段に屈曲する杯部を持つ高杯と推定される。八尾市南西部産である。

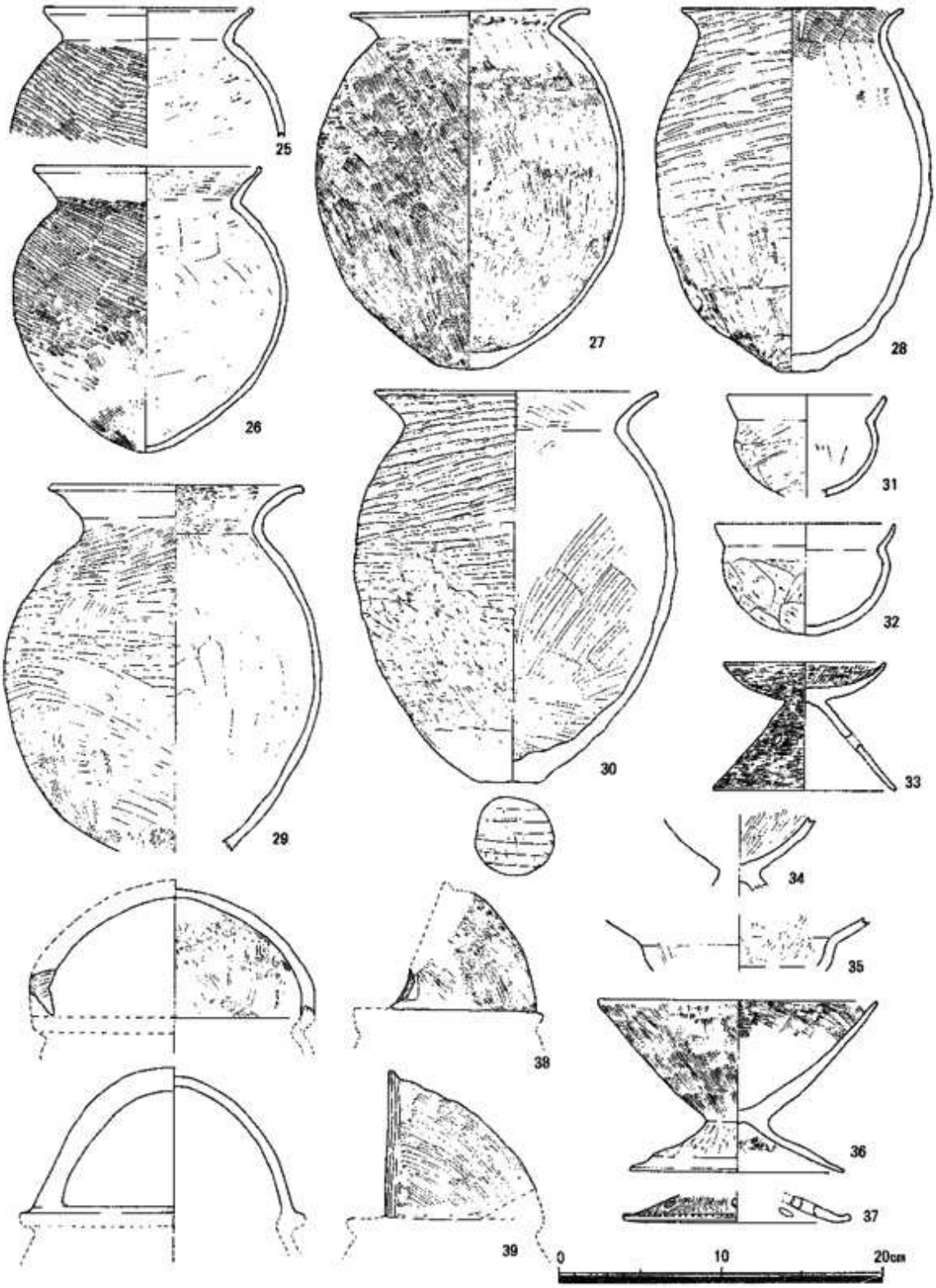
・高杯D_1（36）



第5図　ＳＤ－１出土遺物実測図１



第6図　SD－1出土遺物実測図2



第7図　SD－1出土遺物実測図3

杯部の形状が逆三角形状を呈するもので、脚部は外下方へ直線的に伸びる。杯部外面および口縁部内面に密なハケナデを施す。八尾市南西部産である。

・高杯（37）

高杯の裾部と推定されるもので、端部には刻目が施されている。

・手焙形土器（38・39）

いずれも覆部のみの資料であるため、A類・B類の区別は困難である。（38）の覆部端面には綾杉文が施されている。（38）は加賀南部産、（39）は在地産（生駒西麓水越）である。

SD－2

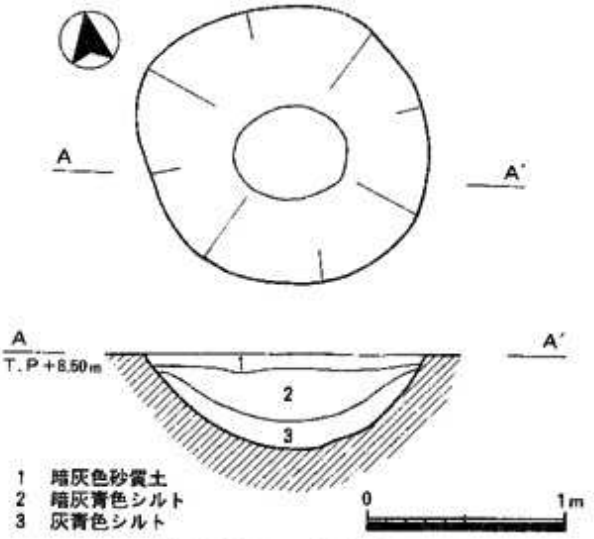
SD－1と合流して北西－南東に伸びるもので、検出長3.5m、幅0.7m、深さ0.15mを測る。埋土は暗灰色粘土である。遺物は出土していない。

2）第2調査面

土坑（SK）

SK－1

上面の形状が円形を呈するもので、東西幅1.5m、南北幅1.4mを測る。断面の形状は半円形で深さ1mを測る。埋土は第1層暗灰色砂質土、第2層暗灰青色シルト、第3層灰青色シルトで、遺物は弥生時代中期後半に比定される鉢（40）が出土している。

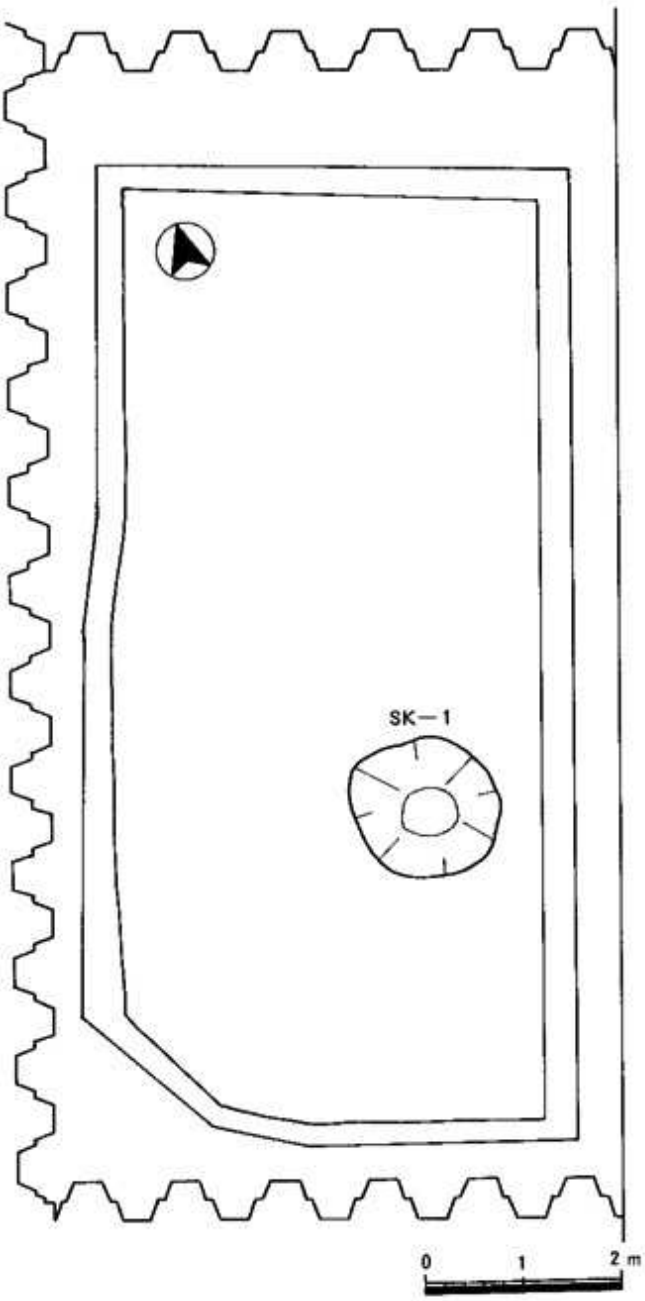


第8図　SK－1平断面図

3）包含層の出土遺物

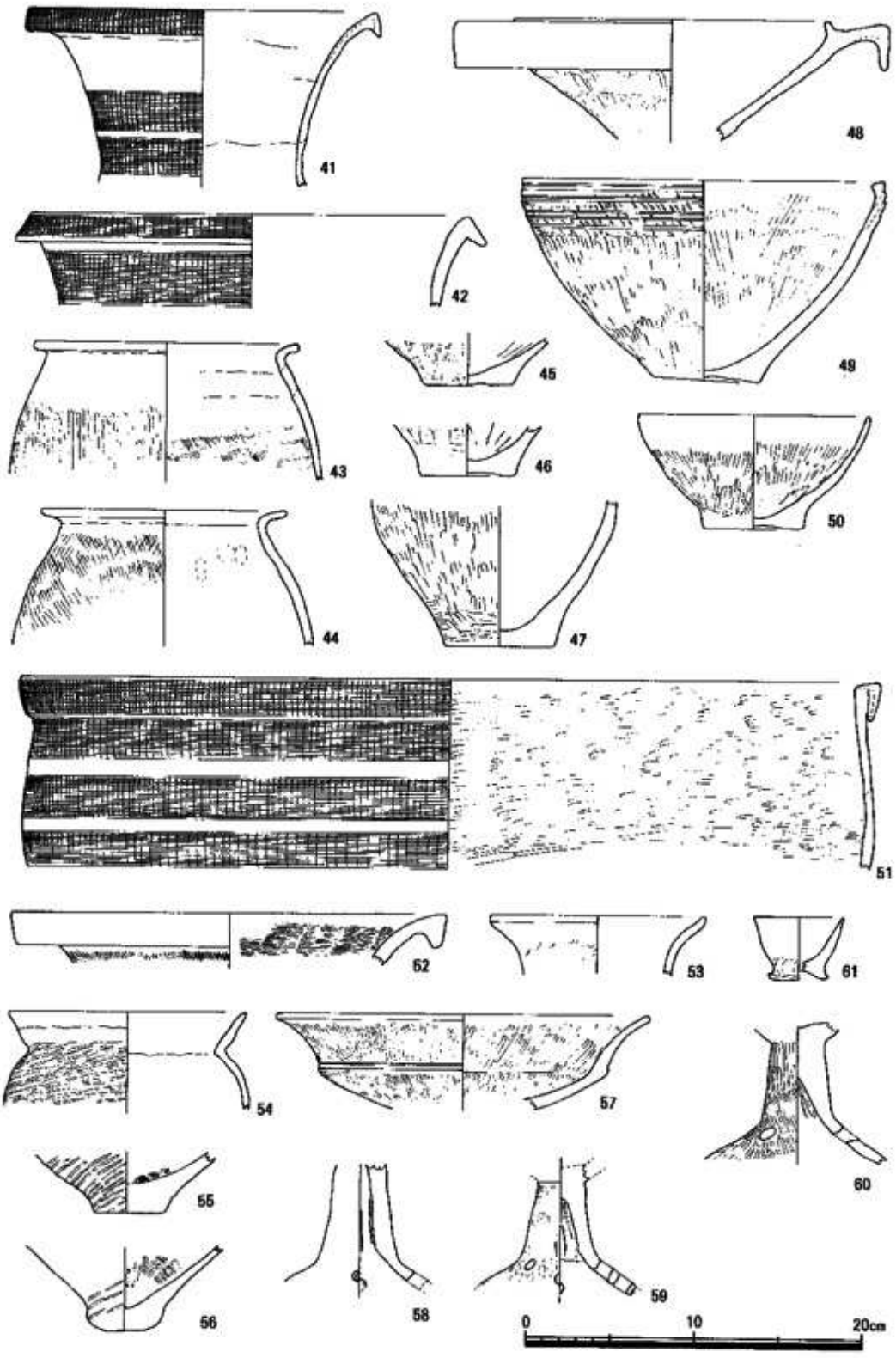
前述したように遺物が出土した土層は第3層～第6層で、総出土量はコンテナ1箱程度である。そのうち、第3層と第4層出土遺物については、壁面の精査時に出土したものである。遺物は古墳時代前期から古墳時代中期に比定される土器類、円筒埴輪等が極少量出土している。第5層については、第1調査面を覆う土層であるが、古墳時代前期の土器類が極少量出土した程度である。第6層からは、弥生時代中期から後期に比定される土器類が少量出土している。図示した遺物は25点（41～65）である。そのうち、第6層の出土遺物は21点（41～61）、第3層の出土遺物は4点（62～65）である。

第9図　SK－1出土遺物

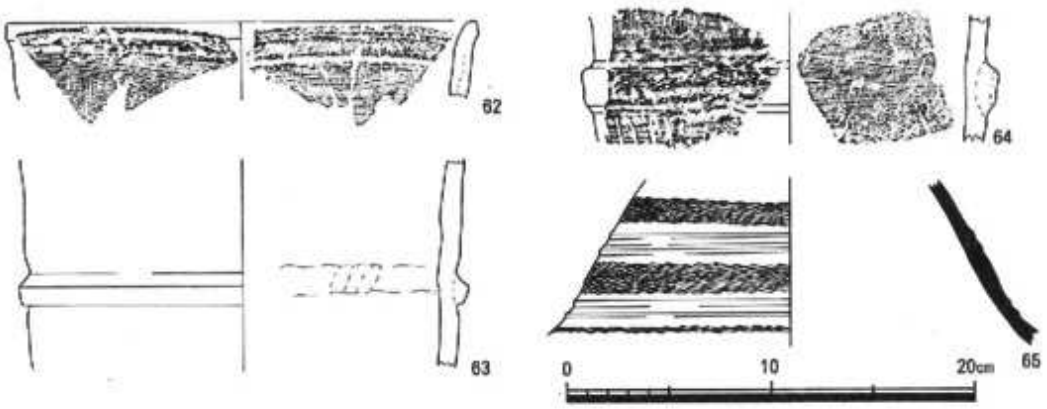


第10図　第２調査面検出遺構平面図

第６層出土遺物－第６層出土遺物には、弥生時代中期（畿内第Ⅲ～Ⅳ様式）に比定される壷２点（41・42）、鉢２点（49・50）、大型鉢１点（51）、高杯１点（48）、甕２点（43・44）、甕底部３点（45～47）と弥生時代後期（畿内第Ⅴ様式）に比定される壷２点（52・53）、小型鉢１点（61）、高杯４点（57～60）、甕３点（54～56）がある。第３層出土遺物－第３層出土遺物には、古墳時代中期に比定される円筒埴輪３点（62～64）、須恵器器台１点（65）がある。



第11図　包含層（第6層）出土遺物実測図



第12図　包含層（第３層）出土遺物実測図

第４章　出土遺物観察表

SD－1

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1 四	土師器 広口壺C	— (25.5) 頸部径9.0 体部最大径 21.0	口頸部内面ヨコナデ。口頸部外面縦方向のハケナデ（７本／cm）。体部内面上位ヨコナデ。以下はナデ。一部板状工具によるナデが残る。体部外面縦方向のハケナデ。体部内面上位に粘土紐による接合痕と指頭圧痕が遺存。	淡灰色	やや粗 長石・チャート（0.1～1㎜）を含む。	良好	体部中位以下煤付着
2 四	土師器 広口壺D1	16.0 —	口縁部および口頸部内面上半ヘラミガキ。下半ナデ。口縁部外面ヨコナデ。口縁部外面ナデ。	明黄褐色	やや粗 チャート・長石（3㎜）を多量に含む。	良好	口縁部⅓
3 四	土師器 短頸直口壺A	14.8 —	口縁部および口頸部内面ハケナデ（８本／cm）。口縁部および口頸部外面ヨコナデ。一部ハケ目が残る。体部内面ヘラケズリ。体部外面左上りのハケナデ。	黄褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母（0.1～1㎜）を多量に含む。	良好	口縁部⅓
4 四	土師器 複合口縁壺D	18.5 —	口縁部および口頸部内外面ヨコナデ。	淡黄色	やや粗 チャート・赤色酸化土粒・長石（0.1～3㎜）を多量に含む。	良好	口縁部⅙
5 四	土師器 複合口縁壺A1	12.8 — 頸部径4.0 体部最大径 13.2	口縁部および口頸部内面ヘラミガキ。口縁部外面５条の波状紋。下端キザミ目。口頸部外面ヘラミガキ。体部内面ナデ。体部外面ヘラミガキ。上位ヘラによる15条の波状紋。体部内面上位に粘土紐による接合痕。	外面 明黄褐色 内面 灰色	精良 長石・石英・チャート（２㎜）を含む。	良好	½
6 四	土師器 壺	— — 頸部径3.0 体部最大径 16.0	体部内面ナデ。体部外面上位ヘラミガキ。一部ハケ目が遺存。中位横方向のハケナデ（８本／cm）。下位乱方向のヘラミガキ。底部に黒斑。	明黄褐色	精良	良好	体部のみ

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
7 四	土師器 甕	— — 頸部径4.4 体部最大径 15.2	体部内面ナデ。体部外面乱方向のヘラミガキ。体部内面上位3本の粘土紐による接合痕が遺存。底部に黒斑。	暗褐色	やや粗 長石・雲母・角閃石を含む。	良好	体部のみ
8 四	土師器 壺	— — 頸部径 17.6 体部最大径 41.2	口頸部および体部内面ナデ。頸部と体部の境に貼り付け凸帯。凸帯の端部にキザミ目を施す。体部外面中位まで縦方向のヘラミガキ。下位は右上りのタタキ（3本／cm）。	橙色	精良	良好	体部½
9 四	土師器 甕A₂	14.8 17.1 体部最大径 18.6	突出する平底。口縁部内面板ナデ。口縁部外面ヨコナデ。体部内面板ナデ。体部外面上位右上りのタタキ。中位横方向のタタキ。下位右上りのタタキ（3本／cm）。口縁部外面下半に指頭圧痕が遺存。	灰黄褐色	やや粗 角閃石・長石・雲母を多量に含む。	良好	ほぼ完形
10 四	土師器 甕A	13.7 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面右上りのタタキ（3本／cm）。	にぶい橙色	やや粗 長石・石英(0.1～0.5)を多量に含む。	良好	口縁部¼
11 四	土師器 甕A₂	14.6 — 体部最大径 16.8	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面横方向のハケナデ。体部外面上位右上りのタタキ（3本／cm）。以下はナデ。	乳灰灰色	やや粗 長石・石英を多量に含む。	良好	口縁部¼ 体部½
12 五	土師器 甕B₁－I	13.0 15.2 体部最大径 15.6	口縁部内面ヨコナデ。一部ハケ目が遺存。口縁部外面ヨコナデ。屈曲部タタキ。体部内面ヘラケズリ。体部外面上位右上りのタタキ（3本／cm）。中位水平方向のタタキ。下位左上りのタタキ。体部全体に縦方向のハケナデを粗く施す。底部はナデ。	暗茶褐色	やや粗 角閃石・長石・雲母(0.1～3mm)を多量に含む。	良好	完形 煤付着
13 五	土師器 甕B₁－II	14.2 18.1 体部最大径 17.2	口縁部内外面ヨコナデ。屈曲部ハケナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面中位まで水平方向のタタキ（3本／cm）後縦方向のハケナデ（7本／cm）。下位は右上りのタタキの後、密なハケナデ。	茶褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母(0.1～3mm)を含む。	良好	ほぼ完形 煤付着
14 五	土師器 甕B₁－III	15.6 21.5 体部最大径 40.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面上位右上りのタタキ（4本／cm）。中位水平方向のタタキ、下位右上りのタタキの後、ハケナデを縦方向に粗く施す。	茶褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母(0.1～3mm)を多量に含む。	良好	ほぼ完形 煤付着
15 五	土師器 甕B₁	14.7 —	口縁部内面ハケナデ（7本／cm）。口縁部外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面横方向のタタキ（3本／cm）後左上りのハケナデ。	淡茶褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母(0.1～3mm)を多量に含む。	良好	口縁部½ 体部¼
16 五	土師器 甕B₂	15.4 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面中位まで右上りのタタキ（6本／cm）。中位下半横方向のタタキ。部分的に縦方向のハケナデ。	暗茶色	やや粗 長石・角閃石・雲母(0.1～1mm)を多量に含む。	良好	口縁部¼ 体部¼
17 五	土師器 甕B₂	15.6 —	口縁部内面ハケナデ（12本／cm）。口縁部外面ヨコナデ。屈曲部にハケ目が遺存。体部内面ヘラケズリ。体部外面右上りのタタキ（4本／cm）。	暗茶黒色	やや粗 長石・角閃石（0.1～2mm）を多量に含む。	良好	口縁部・ 体部½ 煤付着
18 五	土師器 甕B₂	14.2 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面右上りのタタキ（3本／cm）。	暗茶褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母を多量に含む。	良好	口縁部⅓ 体部¼

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
19 五	土師器 甕B₂	16.0 —		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部内面ヘラケズリ。体部外面右上りのタタキ。	暗褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母を多量に含む。	良好	口縁部⅓
20 五	土師器 甕B₂	16.2 —		口縁部内面ハケナデ（8本／cm）。口縁部外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面右上りのタタキ。部分的に縦方向のハケナデ。	褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母を多量に含む。	良好	口縁部⅓
21 五	土師器 甕B₂	16.4 —		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面右上りのタタキ（5本／cm）。部分的に縦方向のハケナデ。	外面 明黄褐色 内面 灰黄褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母を多量に含む。	良好	口縁部½ 体部⅓
22 五	土師器 甕B₂	17.4 —		口縁部内面ハケナデ。口縁部外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面右上りのタタキ（3本／cm）。部分的に縦方向のハケナデ。	灰黄褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母を多量に含む。	良好	口縁部¼ 体部⅓
23 五	土師器 甕B₂	16.6 22.8 体部最大径 22.6		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面右上りの連続タタキ（4本／cm）。後中位左上りのハケナデ（4本／cm）。下位は縦方向のハケナデ（10本／cm）。	暗褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母（0.1～1mm）を多量に含む。	良好	完形 煤付着
24 六	土師器 甕B₁－I	14.2 15.25 体部最大径 16.6		口縁部内面ハケナデ。口縁部外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面中位まで右上りのタタキ（4本／cm）。後縦方向のハケナデ。下位は右上りのタタキの後左上りのハケナデ（9本／cm）。	暗茶色	密 長石・角閃石・雲母（0.1～1mm）を多量に含む。	良好	ほぼ完形
25 六	土師器 甕C	13.0		口縁部内面ヨコナデ。口縁部外面タタキ後ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面左上りのタタキ（3本／cm）。	淡黄褐色	密 長石・赤色酸化土粒（0.1～3mm）を多量に含む。	良好	口縁部 体部½
26 六	土師器 甕C	14.0 18.0		口縁部内面横方向のハケナデ。口縁部外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面上位から中位にかけて左上りのタタキ（3本／cm）。下半縦方向のハケナデ。	淡灰褐色	密 角閃石・雲母（0.1mm）を多量に含む。	良好	½ 体部外面煤付着
27 六	土師器 甕I	14.8 22.7		口縁部内面ハケナデ。口縁部外面ヨコナデ。体部内面縦方向のハケナデ。体部外面上位横方向のタタキ（3本／cm）。後左上りのハケナデ（9本／cm）。以下は左上りのハケナデ。体部内面上位に指頭圧痕が遺存。	淡橙色～暗灰褐色	やや粗 角閃石（1mm）を多量に含む。	良好	ほぼ完形 体部外面煤付着
28 六	土師器 甕H	15.8 22.9 体部最大径 17.0		口縁部内面ハケナデ。口縁部外面タタキ。体部内面上位ハケナデ後指ナデ。以下はナデ。体部外面横方向の粗いタタキ。中位から底部まで縦方向のハケナデ。一部タタキ目が遺存。	外面 淡赤橙色 内面 灰黒色	粗 チャート（3mm）を多量に含む。	良好	ほぼ完形
29 六	土師器 甕H	15.4 — 体部最大径 19.7		口縁部内面ハケナデ。口縁部外面ヨコナデ。体部内面上位左上りのハケナデ（4本／cm）。以下は板ナデ。体部外面中位まで横方向の粗いタタキ（2本／cm）。以下は左上りのタタキ後縦方向のハケナデ（4本／cm）。	外面 乳灰色 内面 乳黒灰色	密 長石・チャート・赤色酸化土粒（0.5～3mm）を多量に含む。	良好	ほぼ完形
30 六	土師器 甕II	17.4 24.6 体部最大径 19.9		口縁部内面板ナデ。口縁部外面タタキ。体部内面上位ナデ。以下は板ナデ。口縁部外面から体部上半は右上りの粗いタタキ。体部中位以下水平方向の粗いタタキ。体部下半はナデの後左上りのハケナデ。底部外面タタキ。体部外面に黒斑。	淡橙色	やや粗 長石・チャート（1～4mm）を多量に含む。	良好	口縁部⅗ 体部½

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
31	土師器 鉢G1		9.8 -	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。一部工具痕が遺存。体部外面へラケズリ。	明褐灰色	密 長石（2㎜）を散見する。	良好	口縁部½ 体部½
32 六	土師器 鉢G1		11.4 7.0 体部最大径 10.4	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面へラケズリ。底部に黒斑。	黄橙色	密	良好	完形
33 七	土師器 器台B1	受部径 脚径 裾径	10.2 8.1 11.4	受部内面へラミガキ後放射状暗文。受部外面へラミガキ。脚部内面ナデ。脚部内面へラミガキ。三方に透孔を穿つ。	黄橙色	精良	良好	完形
34	土師器 高杯C1		2.6 —	杯部内面へラミガキ。杯部外面不明。	黄橙色	密 長石・石英（0.1～1㎜）を含む。	良好	杯部½
35	土師器 高杯B2		- —	杯部内外面へラミガキ。	黄橙色	密 長石（0.5～）を散見する。	良好	杯部¼
36 七	土師器 高杯D1		17.3 10.8 裾径 13.4	杯部内面ナデ。上位にハケ目が遺存。杯部外面縦位のハケナデ（12本／㎝）。脚部内面上位ハケナデ。裾端部ヨコナデ。体部外面へラケズリ。裾端部ヨコナデ。	明褐灰色～淡赤橙色	密	良好	ほぼ完形
37	土師器 高杯	裾径	14.2 —	脚部内面ナデ。裾端部内面ヨコナデ。脚部外面へラミガキ。裾端部外面へラミガキ。透孔を5個穿つ。	にぶい黄橙色	精良	良好	脚部½
38	土師器 手焙形 土器		— —	蔽部内面ハケナデ。一部指頭押圧遺存。蔽部外面ハケナデ。蔽部端面にヘラ描による綾杉文。	淡赤褐色	やや粗 長石・雲母赤色酸化土粒を散見する。	良好	蔽部½
39	土師器 手焙形 土器	蔽部高	8.8 —	蔽部内面および端部ナデ。蔽部外面へラミガキを密に施す。	褐色～暗褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母（0.1～1㎜）を多量に含む。	良好	蔽部½以上

SK－1

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
40	弥生土器 鉢		18.1 —	口縁端部内外面ヨコナデ。口縁部および体部内面ナデ。口縁部外面4条の凹線。体部外面へラミガキ。	暗灰茶色	精良	良好	口縁部¼

第6層出土遺物

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
41 七	弥生土器 壺		20.6 —	口縁部および口頸部内面ナデ。口縁部外面に簾状文を1帯施す。口頸部外面上位ハケ目が遺存。中位に簾状文（2.5cm）を2条施す。	にぶい黄橙色	密 長石・雲母を少量含む。	良好	口縁部¼
42	弥生土器 壺		26.1 —	口縁部および口頸部内面ナデ。口縁部外面に1条の簾状文を施す。口頸部外面1条の簾状文を施す。	外面 明赤褐色 内面 暗褐色	密	良好	
43 七	弥生土器 壺		14.7 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面上位はナデ。一部ハケ目が遺存。他はハケナデ（9本／cm）。体部外面上位ヨコナデ。以下はヘラミガキ。	暗茶色	やや粗 長石（0.1～5mm）を少量含む。	良好	口縁部½ 体部⅓ 煤付着
44 七	弥生土器 甕		14.6 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面上位ヨコナデ。他はナデ。体部外面上位ハケナデ後ヨコナデ。上位下半右上りの粗いハケナデ。以下は左上りの粗いハケナデ。体部内面上位に指頭圧痕が遺存。	暗褐色	密 雲母・長石（0.1mm）を多量に含む。	良好	口縁部⅓ 体部½ 煤付着
45	弥生土器 甕	底径	— — 5.2	平底の底部。体部内面ナデ。一部工具痕が遺存。体部外面ヘラミガキ。	淡灰褐色～茶褐色	やや粗 長石・角閃石・チャート（0.1～0.5mm）を含む。	良好	底部のみ 煤付着
46	弥生土器 甕	底径	— — 5.6	やや突出する平底の底部。体部内面ナデ。一部工具痕が遺存。体部外面ヘラケズリ。下位はナデ。	淡灰茶色～淡茶色	やや粗 石英・長石（0.1～1mm）を含む。	良好	底部のみ 煤付着
47 七	弥生土器 甕	底径	— — 6.4	平底の底部。体部内面ナデ。他はナデ。体部外面ヘラミガキ。	灰黄褐色	やや粗 長石・チャート・角閃石（0.2～1mm）を含む。	良好	体部½ 底部
48 七	弥生土器 高杯		19.0 —	口縁部内外面および杯部内面ナデ。杯部外面縦方向のヘラミガキ。	淡灰茶色～淡黒灰色	密 長石・角閃石（0.1～1mm）を多量に含む。	良好	杯部½
49 七	弥生土器 鉢	底径	21.8 12.8 6.2	やや突出するくぼみ底。口縁部内面ヨコナデ。口縁部外面4本の凹線が廻る。体部内面中位まで粗い縦方向のハケナデ。下位はナデ。体部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ。体部外面に黒斑。	明赤褐色～茶褐色	やや粗 長石・チャート（0.3～1mm）を含む。	良好	ほぼ完形
50	弥生土器 鉢	底径	14.0 6.8 6.0	突出する平底。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ヘラミガキ。底部内外面ナデ。	淡橙色	やや粗	良好	½
51 七	弥生土器 鉢		51.4 —	口縁部内面ヘラミガキ。口縁部外面原体16条（2.3cm）の簾状文を1帯施した後刺突文を2cm間隔に（推定72個）施す。体部内面ヘラミガキ。体部外面原体24条（2.6cm）の簾状文を3帯施す。	褐色	密 チャート・角閃石・長石（0.1～2mm）を多量に含む。	良好	口縁部⅙ 体部⅛
52	弥生土器 広口壺		26.2 —	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面上半横方向のハケナデ。頸部外面縦方向のハケナデ。	灰白色	粗 長石・角閃石・赤色酸化七粒（0.1～5mm）を含む。	良好	口縁部¼

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
53	弥生土器 壺		12.8 —	口縁部内面ヨコナデ。口縁部外面ハケナデ後ヨコナデ。	淡黄橙色～黄橙色	精 長石・石英赤色酸化土粒（0.1～2㎜）を多量に含む。	良好	口縁部⅓
54 七	弥生土器 甕		14.1 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面やや右上りの粗いタタキ（2本／cm）。	外　灰褐色 内　明褐灰色	やや粗 長石（5㎜）石英・チャートを含む。	良好	口縁部⅓ 体部¼
55	弥生土器 甕	底径　3.7	— —	突出する平底。体部内面ハケ後ナデ。体部外面右上りの連続螺旋状タタキ（2本／cm）。	黄褐色	密 長石・黒雲母を含む。	良好	底部のみ 炭化物付着
56	弥生土器 甕	底径　3.6	— —	突出する平底。体部内面ハケナデ（8本／cm）。体部外面下位はタタキ（2本／cm）。他は不明。	外面　灰黄褐色 内面　褐色	やや粗 長石・チャート・石英を含む。	良好	底部のみ 煤付着
57	弥生土器 高杯		23 —	口縁部および杯部内外面ヘラミガキ。口縁部と杯部の屈曲部に1本の凹線が廻る。	橙色	精良	良好	杯部のみ
58	弥生土器 高杯		— —	柱状部内面シボリ目。柱状部外面ナデ。裾部内外面ナデ。裾部上位の三方に透孔を穿つ。	淡赤橙色	密 長石（0.1～1㎜） 赤色酸化土粒を含む。	良好	脚部のみ
59	弥生土器 高杯		— —	柱状部内外面シボリ目。柱状部外面ヘラミガキ。裾部内面ナデ。裾部外面ヘラミガキ。裾部上位に二方と中位の四方に透孔を穿つ。	淡赤橙色	やや粗 長石・石英（0.1～2㎜）を含む。	良好	脚部のみ
60	弥生土器 高杯		— —	柱状部内面シボリ目。柱状部外面ヘラミガキ。裾部内面ナデ。裾部外面ヘラミガキ。裾部上位に二方に透孔を穿つ。	淡赤橙色	やや粗 長石・チャートを多量に含む。	良好	脚部のみ
61 七	弥生土器 小型鉢		5.4 3.8	口縁部内外面および体部内外面ナデ。体部外面下半指頭圧痕遺存。	赤茶色	長石・チャート（0.1～1㎜）を散見する。	良好	½

第3層出土遺物

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
62	円筒埴輪		23.1 —	体部内面ヨコハケ（11本／cm）。体部外面上位ヨコハケ。以下タテハケ後ヨコハケ。	赤茶色	密 長石（0.1～3㎜）を多量に含む。	良好	口縁部⅛
63	円筒埴輪		— —	体部内外面ナデ。タガ外面ヨコナデ。体部内面に指頭圧痕が遺存。	淳淡茶色	やや粗 長石を少量含む。	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
64	円筒埴輪		— —	体部内面ヨコハケ（9本／cm）。体部外面ヨコハケ後タテハケ。タガ外面ヨコナデ。一部工具痕が遺存。	淡橙色	やや粗 長石・チャートを含む。	良好	
65	須恵器 器台			脚部内面回転ナデ。脚部外面波状文を施す。	暗灰紫色	密	堅緻	脚部¼

第5章　ま　と　め

今回の調査では、小面積にもかかわらず古墳時代初頭（庄内式古相）の良好な資料が得られた。なかでも、SD－1出土遺物は胎土分析による産地同定の結果から、河内型庄内式甕の最古とされる甕B_1の成立段階で、生駒西麓部の八尾市恩智・水越地区に分布する閃緑岩の媒乱砂礫が混和材として使用されていたことが明確になったほか、播磨産の大和型庄内式甕の河内地域における存在が明らかとなった。さらに、加賀南部・摂津・阿波・泉南・吉備・近江の各地域から搬入された土器類の存在は、同時期の交流関係を示すものだけでなく、他地域の土器類との併行関係を知るうえでも示唆に富む資料である。[註1] ここでは、これらの調査成果から、この時期の中河内地域における土器組成を考えてみたい。

1）弥生終末期から古墳時代初頭（庄内式古相）の土器様相について

第1調査面で検出したSD－1の出土遺物は、河内型庄内甕の最古に比定される甕B_1と後出の形態である甕B_2が共伴した資料で、中河内地域の庄内式古相の土器様相を知るうえで重要な資料と考えられる。中河内地域においては米田敏幸氏による河内型庄内式甕の形態変化を中心とした編年案が示されており[註2]大概的な編年感は整っているが、個々の器種を総て網羅して細分されたものでなく細部については不明な点も多かった。特に庄内式古相段階においては、膨大な量の庄内式期の資料が出土している中にあっては、資料数が極端に少ないため、中河内地域においてはこの時期の土器組成が明確でなく、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭に至る過渡期の土器の様相を知るうえでも当該期の土器の型式学的な分析が急務と考えられてきた。ここではこれらの事柄を踏まえて、当該期に比定される既往調査の資料を細分し、中河内地域における弥生時代後期末から古墳時代初頭（庄内式古相）の土器組成を考えてみたい。なお、各資料の検討にあたっては、甕B_1の出現をもって庄内式期の嚆矢と規定したしたうえで甕B_1のみが出土した資料を（庄内Ⅰ期）[註3]、甕B_1．甕B_2が共伴した資料を（庄内Ⅱ期）[註4]として検討を試みた。さらに、弥生時代後期末（プレ庄内期）と古墳時代初頭（庄内式古相）との土器組成を明確にするため、中河内地域で弥生時代後期末に比定される6遺跡の資料を比較資料とした。[註5] なお、各器種の分類については中河内地域における庄内式土器・布留式土器分類（本書P－61～P－66）を参照されたい。

・広口壺

プレ庄内期とした6遺跡においては、広口壺A～Dの4型式が認められた。庄内Ⅰ・Ⅱ期においてもプレ庄内期と同様4型式が認められており、型式数では変わることがない。広口壺A

はプレ庄内期の段階では普遍的に認められる器種であるが、庄内Ⅰ・Ⅱ期の段階においてはやや減少気味である。広口壺Bは庄内Ⅰ期の段階で体部の大型化が顕著である。広口壺Cは小型・中型品を主体とするもので、プレ庄内期から庄内Ⅱ期まで継続するが、搬入品が大半を占めるためか量的な増加は認められない。形態的にはプレ庄内期段階の船橋遺跡第9トレンチ土坑で平底を有するもの（127）が認められるが、庄内Ⅰ期段階では小さな平底に変化している。[註6] また、美園遺跡DSD304（D 2 18）のように体部上半および口縁端部に装飾を施すものがあり、[註7] 他器種と同様この時期の特徴とされる加飾化が計られている。広口壺Dは庄内Ⅰ・Ⅱ期に盛行するものであるか、大半が搬入品のためか形態のバリエーションは豊富である。以上のように庄内Ⅰ・Ⅱ期段階の広口壺については、加飾化の顕在化をはじめとして広口壺A、Cの減少と広口壺Bの大型化、搬入品である広口壺D類が増加する傾向が認められる。

・短頸壺

短頸壺Aは庄内Ⅰ期に継続するものの量的に増加するのは庄内Ⅱ期である。短頸壺Aはプレ庄内期には外面にタタキ調整を施すが、庄内Ⅰ期以降は縦方向にヘラミガキないしはハケナデを施すものが多くなる。小型品である短頸壺Bは庄内Ⅱ期に出自が認められる。

・短頸直口壺

プレ庄内期に認められた短頸直口壺A_1は庄内Ⅰ期には消滅している。庄内Ⅱ期には中型品である短頸直口壺A_2が出現している。短頸直口壺A_2の中には頸部に凸帯を持つものや体部上半に加飾を行うものがあり、複合口縁壺の加飾化と同様の方向性を示している。

・大型直口壺

短頸直口壺A_2の大型化に伴って庄内Ⅰ期に成立した器種で、成法寺遺跡SK－28（1）[註8]のように平底の底部で体部がやや長めの形態がこの器種の祖形と考えられる。量的に確立するのは庄内Ⅱ期で体部の形状が球形で底部が丸底を呈するものに変化している。

・直口壺

丸底で精製品である直口壺A類は、庄内Ⅱ期に出自を認める器種であるが、量的に増加するのは庄内Ⅲ期以降である。直口壺Bについては、東海地方を中心に分布する壺に類似するもので、祖形と考えられるものが庄内Ⅰ期の成法寺遺跡SK－28（2）で出土している。庄内Ⅱ期には、外面に丁寧なヘラミガキ調整を施し、明るい色調を呈する精製品の直口壺Bの出現をみるが中河内においては量的に確立した器種とは言い難い。

・複合口縁壺

プレ庄内期に認められた複合口縁壺A_1、B_1、B_2、に加えて庄内Ⅰ期にはC型式が加わるが、庄内Ⅰ・Ⅱ期を通して複合口縁壺B_1、B_2が主流で、この時期の特徴とされる装飾化を最も顕著に受けた器種である。複合口縁壺A類は庄内Ⅰ・Ⅱ期に継続するが、数量は僅少である。

第2表 弥生時代後期末（プレ庄内期）・庄内Ⅰ期・庄内Ⅱ期資料一覧表

※㊗祖形・Ⓢ装飾

プレ庄内期

	広口壺				短頸壺		[illegible]	[illegible]	直口壺		複合口縁壺				小型	高杯					器台			甕							鉢								台付鉢	有孔鉢	手焙	その他
	A	B	C	D	A	B	A	A	A	B	A	B	C	D	A	A	B	C	D	E	A	B	D	A	B	C	H	I	J	L	A	B	C	D	E	G	J	K	A	AB		
船橋9TR			○	D_1	○										○	A_1		C_1						A_1, A_1							A_1, A_1	○	○									
北嶋地下溝	○						A_1					B_1, B_1				A_1								A_1, A_1							A_1	○								A3	A	[illegible]
温牛堂遺跡		○	○		○						A_1					A_1		C_1						A_1, A_1							A_1, A_1	○		○	E_1				A_1, A_1		A	
亀井落ち込み3	○	○		D_1	○		A_1				A_1					A_1		C_1						A_1				○				○							A_1			
成法寺SW-2	○	Ⓢ													○	A_1		C_1						A_1, A_1																		
小阪合SD-321	○	○		D_1	○						A	B_1			○	A_1		C_1, C_1㊗						A_1, A_1							A_1, A_1	○	○		E_1		○		○	A		[illegible]

庄内Ⅰ期

	広口壺				短頸壺		[illegible]	[illegible]	直口壺		複合口縁壺				小型	高杯					器台			甕							鉢								台付鉢	有孔鉢	手焙	その他
	A	B	C	D	A	B	A	A	A	B	A	B	C	D	A	A	B	C	D	E	A	B	D	A	B	C	H	I	J	L	A	B	C	D	E	G	J	K	A	AB		
中田刑部上坑			○	D_1									○		○	A_1, A_1				E_1, E_1				A_1	B_1			○	J_1, J_1				○	○			J_1	○	A_1	B		[illegible]
馬場川井戸1												B_1Ⓢ, B_1Ⓢ				A_1	BⓈ	C_1					Ⓢ		B_1			○														
成法寺SW-1		○		D_1				○																A_1, A_1	B_1						A_1											
成法寺SK-28								※		㊗						A_1		C_1							B_1											G_1㊗					○	[illegible]
成法寺(府)SE-3																		C_1						A_1	B_1																	
美園CSD-320	Ⓢ				○		A_1Ⓢ					B_1						C_1				B_1			B_1												J_1					[illegible]
〃DSD-304			Ⓢ									BⓈ				A_1		C_1						A_1, A_1	B_1							○	○			G_1						
東郷9次SE-1	○			D_1											○			C_1				B_1		A_1	B_1							○	○				○		A_1	B		
〃9次SE-2	○														○							○		A_1	B_1						○											
〃19次SX-1				D_1	○						A_1	B_1Ⓢ				A_1, A_1		C_1			○	B_1, B_1	Ⓢ	A_1	B_1						A_1	○	○		E_1	G_1	○		○	B		[illegible]

庄内Ⅱ期

	広口壺				短頸壺		[illegible]	[illegible]	直口壺		複合口縁壺				小型	高杯					器台			甕							鉢								台付鉢	有孔鉢	手焙	その他
	A	B	C	D	A	B	A	A	A	B	A	B	C	D	A	A	B	C	D	E	A	B	D	A	B	C	H	I	J	L	A	B	C	D	E	G	J	K	A	AB		
東弓削4次SD-1			○	D_1			A_1				A_1			○			B_1	C_1	D_1			B_1		A_1	B_1, B_1	○	○	○								G_1					○	
美園CSD-305		○				○		○										C_1, C_1				B_1		A_1	B_1						A_1	○				G_1	○		A_1			
〃CSD-319	○	○		D_1Ⓢ	○			○	A_1			B_1			○	A_1, A_1	B_1	C_1				B_1			B_1							○				G_1				A	○	
〃CSD-304	○	○						○							○	A_1				E_1				A_1, A_1	B_1, B_1												J_1					
西岩田瀬2																									B_1				J_1													[illegible]
成法寺(府)SE-2	○				○		A_1, A_1			○	A_1					A_1								A_1, A_1	B_1, B_1					○									○			
東郷4次SR-2						○						B_1Ⓢ					B_1								B_1, B_1																	
〃13次SK-2																								A_1	B_1, B_1			○														

複合口縁壺B類は庄内Ⅱ期に丸底化と精製化が進行している。複合口縁壺A_1とした東弓削SD－1（5）は山陰ないしは北陸地方からの搬入品である。複合口縁壺Cとした吉備系の壺は、中田刑部上坑出土のもので高橋護氏編年のⅨc期[註9]にあたる。山陰地方ないしは北陸地方を中心に分布する複合口縁壺Dは庄内Ⅱ期以降に搬入されているが量的には僅少である。

・小型壺

形態的にはプレ庄内期から継続する平底の小型壺Aが主流であるが、庄内Ⅰ期以降は減少化が顕著で、庄内Ⅱ期に消滅している。

・高杯

プレ庄内期においては高杯A_1．C_1．C_2の3型式のみであるが、庄内Ⅰ期には新たに高杯A_2．A_3．B_1．E_1．E_2の型式が加わる。高杯A類ではA_2．A_3の出現が認められ、A_2が主流である。高杯A_1は減少から消滅へと移行している。高杯B_1は庄内Ⅰ期に出自をみるものであるが、量的には確立しない器種である。高杯C類はプレ庄内式期に盛行したC_1が減少して精製品であるC_2へ移行している。高杯E_1．高杯E_2は吉備地方からの搬入品で中河内地域では出土量は僅少である。庄内Ⅱ期には新たに高杯B_2．D_1の型式が加わる。高杯A類にはA_2．A_3がありA1はこの段階で消滅している。高杯B類ではこの段階でB_2の出自をみるが、B_1はこの段階で消滅している。高杯C類はC_2が盛行している。高杯D類もこの時期に出自をみるものであるが、量的には僅少である。

・器台

小型化の傾向を一番受けた器種で、庄内Ⅰ期には器台A類．B_1．B_2．と大型品のDがある。柱状部が中空の器台A類は、この時期の資料として抽出した中では東郷遺跡19次調査SX－1（155）で1点出土した程度で、この時期以降においても検出例は少なく中河内地域では量的に確立[註10]した器種とは言い難い。器台B_1．B_2は共にこの時期に盛行するが量的には僅少である。器台Dは大型の器台でこの時期のみにみられる器種で、高杯B類の影響で成立したものと推定される。庄内Ⅱ期には精製品である器台B_3が出現し、以後中河内地域ではこの型式の小型器台に斎一化されている。

・甕

庄内Ⅰ期においては、プレ庄内期に存在した甕A_1．A_2．Ⅰの3型式に新たに甕A_3．B_1．J_1．J_2の各型式が加わる。甕A類については、A_1が激減するほかA_2の増加A_3の出現がみられる。特に甕A_3については河内型庄内甕B_1の影響を受けて成立したもので、この時期以降在地産のものが主体となる。甕B_1は河内型庄内式甕の最古に比定されるもので、平野部の胎土で製作されたものと生駒西麓産の胎土を使用したものの2タイプがある。また、従来河内型庄内式甕の成立については、北鳥池遺跡下層の畿内Ⅴ様式甕にみられるような連続ラセンタタキ

技法の多様化とそれに伴って生じた体部の球胴化等の要素が影響したものと考えられてきた。しかしながら、河内型庄内式甕の最古とした甕B_1については、体部を三分割のタタキ成形を行う点や、体部の最大径が上位にある点など北鳥池遺跡下層出土甕とは直接的に系譜上にのるものでなく、むしろ後出の甕B_2の方が共通点が認められた。[註11] また、このようなことから一部では、北鳥池遺跡下層出土甕は庄内式古相に併行するもので、庄内式甕の影響を受けて成立したとする考え方も存在するようである。[註12] しかし、今回プレ庄内期と庄内Ⅰ期の器種構成の違いでも明らかなように、北鳥池遺跡下層資料に含まれる甕A_1、高杯A_1、鉢A_1の存在等からみて庄内式古相に先行することは明らかである。甕Ⅰは長胴形の体部を持つもので、底部は平底である。体部外面はハケナデ調整、内面はヘラケズリのものとハケナデを施すものがある。吉備系のものと在地産のものがあるが、量的には僅少である。甕Jは吉備系の甕である。

庄内Ⅱ期には新たに甕B_2、C、H、L、が加わる。甕B_2は体部外面全体が連続タタキ技法で製作されたもので河内型庄内式甕の完熟した形態を示す甕である。甕Cは大和型庄内式甕の特徴を持つもので、今回の調査で2点（25・26）が確認された。そのうちの（25）は播磨産である。播磨地方で同タイプが多量に出土している兵庫県姫路市長越遺跡では甕Cに分類されているもので、長越Ⅱ式に盛行するものとされている。一方、大和地方の纒向遺跡の分類では甕Bにあたり、そのなかでもこれらのタイプは纒向3式前半に盛行するものとされている。甕Hは「口縁タタキ出し技法」で製作されたもので、体部外面から口縁部にかけて粗いタタキを施す。摂津系のものと近江系のものがある。甕Lは山陰系ないしは北陸系の甕で、この時期においては他資料を含めても僅少である。

・鉢

プレ庄内期の段階では鉢A_1、A_2、B、C、D、E_1、Jの7型式があるが、庄内Ⅰ期には新たに鉢G_1と大型鉢のKが加わる。鉢A_1はこの時期激減しており、小型化した鉢A_2に移行するが、この段階のみで消滅している。鉢B、Cは減少傾向が顕著である。鉢Dは吉備系の鉢で、プレ庄内式からこの時期に継続するが量は微量である。鉢Eも吉備系の小型鉢で、プレ庄内期から継続するものであるが鉢Dと同様量的には微量である。鉢G_1はこの時期に鉢Aの丸底化に伴って成立する器種で、成法寺遺跡SK－28（9・10）は、本調査地出土遺物のように体部下半にヘラケズリを行う鉢G_1の過渡期的な形態と言えよう。鉢Jは大型の鉢で、形態的にはバラエティーに富んでおり、斎一化が進んでいない。鉢Kは吉備系の鉢で、小型・大型品がある。庄内Ⅱ期においては、鉢G_1、Jが存在するがA_1、B、Cは消長をとげる。G_1はこの時期斎一化が計られており、器台B_2とのセット関係が推定される。有孔鉢Aはプレ庄内期から庄内Ⅰ期・Ⅱ期を通じて継続するが庄内Ⅲ期には消長をとげる。台付き鉢A類はプレ庄内期から庄内Ⅰ期・Ⅱ期を通じて存在するが量的には僅少である。

・手焙形土器

畿内Ⅴ様式のものに比して、体部の偏平化と丸底化が進行している。覆部は球形状のものが主流となり覆部端が上下に肥厚し、面を持つ形態に変化しておりこの部分に装飾を施すものが出現している。

以上のように中河内地域の弥生時代後期末（プレ庄内期）と古墳時代初頭（庄内式期古相）の器種組成の変化を考えてみた。その結果、庄内式古相の中河内地区の土器組成の特徴としては、他地域からの搬入土器の増加に伴う器種の増大とそれらに影響された新出性土器の出現にあるといえる。これらの外来性土器を含めた土器組成の特徴としては、河内型庄内式甕B_1の出現を始めとして、装飾を多様化した器種の出現と盛行、小型・中型器種の丸底化と精製化への移行である。庄内Ⅰ期に新たに出現する器種としては有段高杯B_1、小型器台Ａ類、小型器台B_1・B_2類、小型鉢G_1、器台Ｄがある。前代の系譜を引き新たに変化するものとしては、高杯C_1から精製品として成立する高杯C_2などがある。前代からの系譜を継続するが一部が変化するものには、高杯A_2・A_3、鉢A_2、甕A_3がある。一方、この時期に減少ないしは消長する器種としては、広口壺Ａ、小型壺Ａ、甕A_1、高杯A_1、鉢A_1、鉢Ｃがある。

庄内Ⅱ期においては、新たに短頸壺Ｂ、直口壺Ａ類、高杯B_2、器台B_2等の精製土器の出現をはじめとして、短頸直口壺A_2の大型化により成立した大型直口壺Ａや大和型庄内式甕の特徴をしめす甕Ｃが存在している。この時期に盛行するものには甕B_2、高杯B_2・C_2、鉢G_1・Ｊ類がある。この時期に減少ないしは消長する器種としては小型壺Ａ、高杯A_1・A_2、短頸直口壺A_1、高杯C_1、鉢Ｂ、有孔鉢Ａ、台付き鉢Ａ類がある。

2）河内型庄内式甕成立期の様相

河内型庄内式甕の最古とされる庄内式甕B_1はⅤ様式甕の製作技法を受け継ぎつつ、新たに底部を小さな平底ないしは尖り底に成形することや、内面にヘラケズリ手法を採用して器壁を薄くする等の特徴を具備した甕である。なかでも、内面にヘラケズリを施す成形法については、中河内地域では弥生中期末の土器に使用例が認められる以外は、河内型庄内式甕の成立時期まで使用されなかった技法である。そのため、河内型庄内式甕の成立においては、庄内式甕に残された属性のなかでも新出なヘラケズリ手法に着目し、河内型庄内式甕成立期以前から、ヘラケズリ手法を多様している吉備・山陰・丹波・丹後・北陸の各地方の土器製作技法から影響を受けたものと考えられてきた。なかでも、中河内地域への搬入土器が最も多い吉備地方の土器製作技法の影響を一番受けて成立したとする説[註13]が有力であった。ところが、今回、最古の河内型庄内式甕である甕B_1・B_2に共伴した大和型庄内式甕Ｃ（25）が胎土分析の結果、播磨産の

甕と認識されたことから、河内型庄内式甕の成立を考えるうえで一石を投じる結果となった。これらの播磨産の庄内式甕が、タタキ手法のV様式甕を持つ播磨地方で、地域を接する吉備地方の土器製作技法であるヘラケズリ手法とが融合して庄内式甕が成立したと推定すれば、河内型庄内式甕の成立にも影響を与えたと考えられるからである。さらに、河内型庄内式甕の最古である甕B_1と同タイプの甕は播磨地方の長越遺跡[註14]等から出土していることからみても、河内型庄内式甕の成立に関与した最も有力な成因の一つと考えられるが、中河内地域においては同時期の播磨産土器の出土例が少ないことから先後関係に不明な点が多く、現時点では蓋然性を求める資料に乏しい。ただ、少なくとも河内型庄内甕B_2の段階で播磨地方で大和型庄内甕が製作されていたことが明確になったことは、今後、各地域のこの時期の土器様相や併行関係を考えるうえで貴重な資料となろう。一方、大和型庄内式甕は、在地産を除けば播磨産であることが、胎土分析における産地同定の結果から明らかにされている。[註15]しかし、これまでに中河内地域では、播磨産の大和型庄内甕は中田遺跡1丁目39土坑2から1点出土しているのみで不明瞭な点があったが、今回の出土により、播磨－河内－大和を結ぶ土器の搬入経路の一端が明確となった。

このように、V様式甕の伝統を引くタタキ手法と外来性の内面ヘラケズリ手法の融合で成立した河内型庄内式甕であるが、その成立時期においては平野部の胎土を使用したものと考えられてきた。[註16]しかし、胎土分析の結果、河内型庄内式甕最古の甕B_1段階で生駒西麓の八尾市恩智および八尾市水越付近に分布する閃緑岩の媒乱砂礫が混和材として使用されていることが確認され、この時期、胎土が異なった2タイプの甕B_1が存在したことが明らかとなった。このことは、甕B_1の成立期の段階で、形態的な画一化が計られたものの、胎土においては集団間で差異があったことを物語っている。これらの事柄から、甕B_1の成立期の中で甕B_1の生産拠点が平野部から生駒西麓部に移動したとする考え方も成り立つ。しかし、現時点では、甕B_1ならび甕B_2段階での生産拠点は平野部にあったものと考えている。なぜならば、当遺跡をはじめ甕B_1を伴出した多くの遺跡は、生駒西麓部のそれらの地点と近距離（2～4km）に位置していることや、恩智地区や水越地区を含めた生駒西麓部では甕B_1・B_2段階の遺跡が現地点で発見されていないことによる。したがって、この段階においては、平野部の各集団が生駒西麓から採取した混和材と集落付近で取れる粘土を混ぜて生地とし、甕を中心とした土器類を各集団単位で製作した段階と推定される。しかし、甕B_2に続く甕B_3の段階では生産の拠点が生駒西麓部に移動し、画一化と量産化が計られ西日本一帯に生産流通品としての位置を確立化したようである。以上のように、SD－1の出土遺物を中心に河内型庄内式甕の出現期の様相を考えてみた。遺物が出土した遺構が溝という性格上、時間的な尺度からみた土器の廃棄時期は一定の幅を持った資料であり、資料としての限界があることは言うまでもない、今後これらの

問題も含めて、この時期の土器の様相をさらに明析にする必要があろう。

註記

註1　SD－1出土の土器39点の胎土分析を実施した結果、区分不能の3点を除いた36点中搬入土器は13点（36%）であった。同時期の資料で比較する資料は無いが、客観的に見ても高い数字であると言わざるを得ない。ただ、例外的に中田遺跡刑部3丁目土坑資料のように大半が吉備系の土器で占められる資料も存在しており、比率のみでなく遺跡の性格をも加味したうえで論じる必要があろう。

註2　米田敏幸「庄内式土器の細分試案」『八尾南遺跡』大阪高速電気軌道二号線建設に伴う発掘調査報告書　八尾南遺跡調査会　1981

註3　①中田遺跡刑部3丁目（土坑）
高木真光『昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報』八尾市教育委員会1981
②馬場川遺跡（井戸1）
下村晴文ほか『馬場川遺跡発掘調査報告』東大阪市遺跡保護調査会　1977
③成法寺遺跡（SW－1・SK－28）
高萩千秋ほか『成法寺遺跡』－八尾市光南町29番地の調査－八尾市教育委員会　1983
④成法寺遺跡（SE－3）
福田英人・嶋村友子　『成法寺遺跡発掘調査概要Ⅰ』大阪府教育委員会　1986
⑤美園遺跡（CSD－320下層・DSD－304）
渡辺昌弘ほか　『美園』（財）大阪文化財センター　1984
⑥東郷遺跡第9次調査（SE－1・SE－2）
高萩千秋ほか　『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要1980・1981』八尾市教育委員会1983
⑦東郷遺跡第19次調査（SK－2）
嶋村友子『八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書』八尾市文化財報告12八尾市教育委員会1986

註4　①本書掲載
②美園遺跡（CSD－305・CSD－319・DSX－304）
前掲註3－⑤
③西岩田遺跡（溝2）
村上年生・小山田宏一ほか『西岩田』（財）大阪文化財センター　1983
④成法寺遺跡（SE－2）
前掲註3－④
⑤東郷遺跡4次（SE－2）
前掲註3－⑥
⑥東郷遺跡第13次（SK－2）
高萩千秋『八尾市埋蔵文化財発掘調査　昭和63年度』（財）八尾市文化財調査研究会　1989

註5　①船橋遺跡（第9トレンチ土坑）
中西靖人ほか『大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴う船橋遺跡試掘調査報告書』（財）大阪文化財センター　1976
②北鳥池遺跡（下層式）
大阪府立花園高等学校『河内古代遺跡の研究』1970
③瓜生堂遺跡（古墳時代前期下層包含層）
堀江門也ほか『瓜生堂』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター　1980
④亀井遺跡（落ち込み3）
中西靖人・宮崎泰史『亀井遺跡Ⅱ』（財）大阪文化財センター　1984
⑤成法寺遺跡（SW－2）
『成法寺遺跡』－八尾市光町1丁目29番地の調査－　八尾市教育委員会　1983

⑥小阪合遺跡（SD－321）
高萩千秋『小阪合遺跡<昭和58年度第2次・第3次>』－　八尾市都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－（財）八尾市文化財調査研究会報告11　（財）八尾市文化財調査研究会　1987

註6　前掲註5－①
註7　前掲註3－⑤
註8　前掲註3－③
註9　高橋護「岡山県南部の地方の土器編年と庄内式」『八尾市文化財紀要3』八尾市教育委員会文化財室　1988
註10　前掲註3－⑦
註11　前掲註5－③
註12　・芋本隆裕「北鳥池遺跡出土土器の再整理」『東大阪市遺跡保護調査会年報1979年度』東大阪市遺跡保護調査会　1980
・置田雅昭「弥生から土器から土師器へ」『考古学ジャーナル』252　1985
・森岡秀人「土器の交流－西日本－」『考古学ジャーナル』252　1985
註13　・米田敏幸「成法寺遺跡における庄内式成立期の土器の様相」『成法寺遺跡』－八尾市光町1丁目29番地の調査－八尾市教育委員会　1983
・嶋村友子「河内における庄内式の甕形土器」『古代』第82号　1986
註14　松下勝ほか『播磨・長越遺跡』　兵庫県文化財調査報告第12冊　兵庫県教育委員会　1978
註15　奥田尚「河内型庄内甕と大和型庄内甕－土器の砂礫観察を通して－」『庄内式土器研究Ⅰ－庄内式併行期の土器生産とその移動－』庄内式土器研究会　1992
註16　前掲註13

付章　東弓削遺跡出土土器の砂礫種

奥田　尚

1．はじめに

八尾市八尾木から出土した庄内期の始めの時期を示す土器の砂礫種を肉眼で観察した。町名は異なるが、近接地である刑部３丁目いずみ屋前、八尾木北６丁目石本マンション、同丁楠根川川床から河内型庄内甕が多く出土する。これら出土地点は直径400m以内の円の中に納まる。この付近が河内型庄内甕の製作地の一つであったといえる。また、この付近の遺跡では、他地域から運ばれてきた土器も多くみられる。今回は、下水道工事に伴う事前発掘で出土した土器39点の表面に見られる砂礫種を観察した。

肉眼で土器試料の表面を観察するだけであるから、土器に破損は無い。最初、土器の表面にみられる砂礫を裸眼で観察し、次に、観察良好な部分を倍率30倍の実体鏡で観察した。観察事項は砂礫種とその粒形・粒径・量・色である。鉱物については、深成岩と火山岩を区別するため粒の形状から他形と自形に区分した。粒形は角、亜角、亜円、円の４段階に区分した。粒径は目測により㎜単位まで測定した。量はごくごく僅か、ごく僅か、僅か、中、多い、非常に多いの６段階とした。石種は小片の砂礫により決定したのであるため、全容が分かれば石種が違う場合もあり得る。

2．砂礫の種類とその構成

土器の表面を観察した結果、識別できた砂礫種は岩石片として花崗岩、斑糲岩、流紋岩、砂岩、泥岩、チャート、片岩、火山ガラス、鉱物片として、石英、長石、白雲母、黒雲母、角閃石、輝石である。各砂礫種の特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色、灰色透明で、粒形が角、亜角である。粒径は最大８㎜である。石英・長石、石英・長石・黒雲母が噛み合っている。

斑糲岩：色は暗灰色、粒形が角である。粒径は最大４㎜である。長石・角閃石・輝石が噛みあっている。

流紋岩：色は白色、灰色で粒形が角、亜角である。粒径は最大６㎜で、石基はガラス質、石英の斑晶があるものがある。

砂岩：色は灰色、暗灰色、茶色、褐色で、粒形が亜角、亜円、円である。粒径は最大６㎜である。構成砂粒は細粒である。

泥岩：色は黒色、灰色、粒形が亜角、亜円である。最大径は4㎜である。

チャート：色は灰白色、灰色、暗灰色、褐色、茶褐色と様々で、粒形は角、亜角、亜円である。粒径は最大4㎜である。

片岩：色は灰白色、粒形が角、粒径が最大3㎜である。石英片岩、泥質片岩である。

火山ガラス：無色透明、粒径が最大0.5㎜である。貝殻状、束状、フジツボ状である。

石英：無色透明、粒形が角である。粒径は最大2㎜である。複六角錐あるいはその一部がみられるものが含まれる。

長石：灰白色、灰白色透明、無色透明で、粒形が角、粒径が最大6㎜である。

白雲母：無色透明、板状で、粒径が最大0.2㎜である。

黒雲母：黒色、金色で、板状である。粒径は最大1.5㎜である。

角閃石：黒色で、粒状、柱状である。粒形は角で、粒径が最大6㎜である。結晶面で囲まれ、柱状をなすものがある。

輝石：青銅色透明、黒色透明で、柱状、粒状である。粒形は角、粒径が最大0.2㎜である。結晶面で囲まれたものや自形をなすものがある。

3．類型区分

観察された砂礫種の量と種類から、源岩を推定し、各類型に区分した。

Ⅰ類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

・花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、角閃石がごくごく僅かに含まれる。
――――――――――――――――Ⅰa類型

・花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫や角閃石が僅かに含まれる。
――――――――――――――――Ⅰb類型

・花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、チャートや角閃石が僅かに含まれる。
――――――――――――――――Ⅰc類型

Ⅱ類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

・閃緑岩質岩起源と推定される砂礫のみからなる。――――――――――――――――Ⅱa類型

・閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる。
――――――――――――――――Ⅱb類型

・Ⅱb類型の砂礫種構成であるが、黒雲母が多い。――――――――――――――――Ⅱc類型

Ⅲ類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、自形をなす角閃石や輝石が僅かに含まれる。
――――――――――――――――Ⅲa類型

・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、自形をなす角閃石や輝石、砕屑岩やチャートが僅かに含まれる。 ――――――――――Ⅲb類型

・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、チャート、角閃石が僅かに含まれる。 ――――――――――Ⅲc類型

・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、チャートが僅かに含まれる。 ――――Ⅲd類型

Ⅳ類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫、チャート・砕屑岩を主とする。

・流紋岩質岩起源と推定される砂礫、チャート・砕屑岩を主とし、角閃石が僅かに含まれる。 ――――――――――Ⅳa類型

Ⅴ類型：砕屑岩、チャートを主とする砂礫からなる。

・砕屑岩、チャートを主とし、石英が含まれる。 ――――――――――Ⅴa類型

Ⅵ類型：チャート、砕屑岩を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる。

・チャート、砕屑岩を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる。 ――――――――――Ⅵa類型

Ⅶ類型：片岩を主とし、細粒の白雲母が含まれる。

・片岩を主とし、白雲母が僅かに含まれる。 ――――――――――Ⅶa類型

その他：Ⅰ類型からⅦ類型の何れにも属さない試料をその他とした。

以上のように類型区分をすれば、僅か39試料しか観察をしていないが、第3表に示すようにⅡ類型に属する試料が多い。

4．土器に含まれる砂礫の採取地

観察した砂礫種構成の砂礫と同じ砂礫種構成の砂礫が遺跡からより近距離で採取できる地を推定する。

Ⅰ類型：大和川の砂礫は花崗岩質岩起源の砂礫を主とし、流紋岩質岩起源と推定される自形の石英、角閃石、チャートがごくごく僅かに含まれるが、観察時の条件によっては認められない場合もあり得る。八尾市の南西部になれば、比較的チャートが多く含まれるようになる。以上のことから、Ⅰa類型の砂礫は発掘地付近、Ⅰb類型の砂礫は八尾市の西南部の砂礫であると推定される。

Ⅱ類型：角閃石や長石は鋭い角があり、他形をなし、風化していることから媒乱砂を使用したと推定される。花崗岩はごく僅かであるが角が円くなっていることから、河川の砂礫であると推定される。黒雲母の量を考慮すれば、Ⅱa類型の砂礫は恩智神社東方に小規模に分布する閃緑岩の媒乱砂礫に、Ⅱc類型の砂礫は水越付近に見られる閃緑岩の媒乱礫の砂礫に酷似する。Ⅱb類型の花崗岩は河川砂礫であると推定されることから、恩智神社東方の閃緑岩の砂礫と平地

の河川砂礫とが混じったものであろう。粘土の中に花崗岩質岩起源の砂礫が入っていれば、その粘土に閃緑岩の蝶乱砂を混ぜるのであるから、Ⅱb類型のような砂礫種構成は生じると言える。

Ⅲ類型：流紋岩質岩起源の砂礫を主とし、自形の輝石や角閃石が含まれる砂礫種構成を示す砂礫は山陰地方から北陸地方にかけて多く見られる。出雲平野では柱状で自形をなす角閃石が僅かに見られ、米子付近では角閃石の量が多くなる。また、鳥取付近では角閃石が少なく、片岩や砂岩が含まれる。加賀から越前にかけては自形の輝石や角閃石が含まれることが多く、チャートや砕屑岩が含まれることも地域によっては見られる。Ⅲa類型、Ⅲb類型の砂礫は加賀南部の砂礫であると推定される。

Ⅳ類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫やチャート、砂岩や泥岩が含まれ、他形の角閃石もごくごく僅かに含まれることから、Ⅳa類型の砂礫は堆積岩や流紋岩質岩あるいは流紋岩質岩起源の砂礫が河川砂礫として含まれる野洲川の河口付近が推定される。Ⅳa類型の砂礫の採取地としては、守山市から近江八幡市にかけての付近が推定される。

Ⅴ類型：砂岩や泥岩、チャートのような堆積岩からなり、泥岩には片理が見られるものもあり、火成岩起源の砂礫が含まれないことから古期の堆積岩が広く分布するような地域から流出した河川砂礫であると推定される。Ⅴa類型の砂礫の採取地としては箕面市から高槻市にかけての北摂の山地から流出した河川の砂礫と推定される。

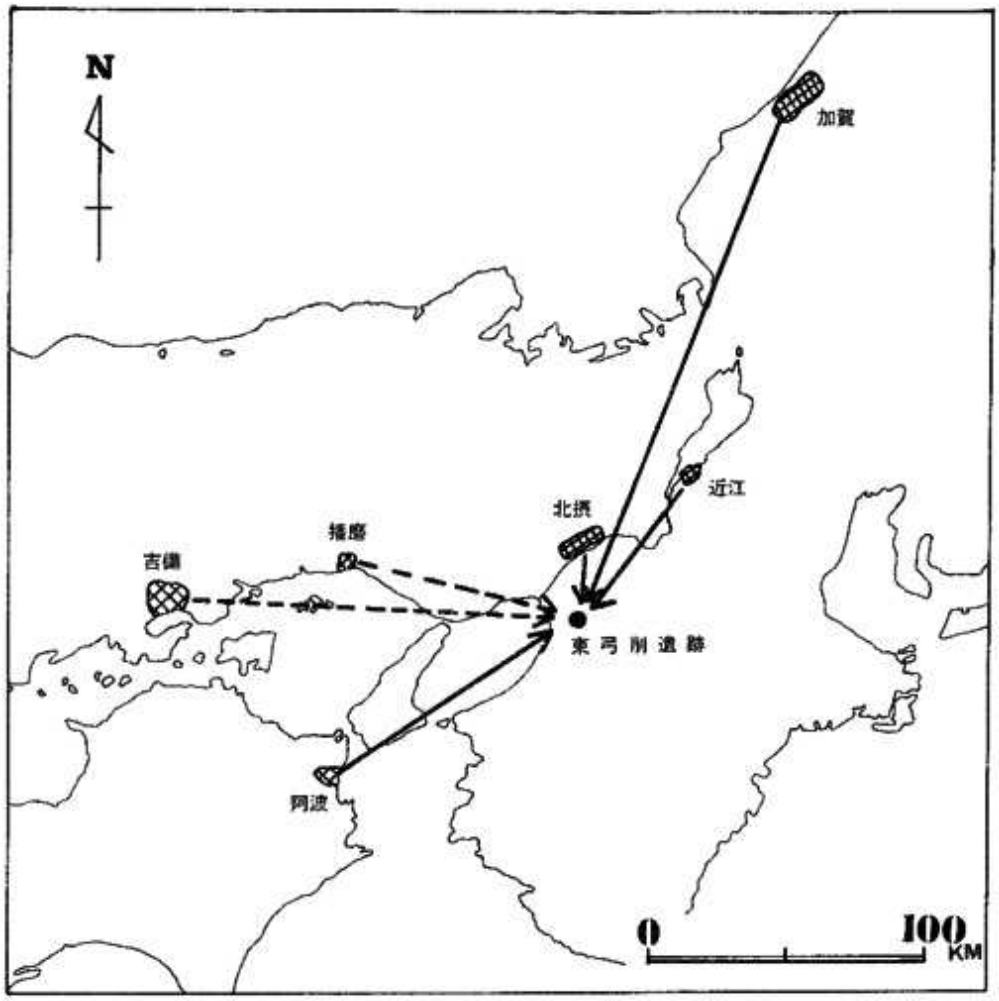
Ⅵ類型：砂岩や泥岩、チャートの亜角～亜円礫を含むことから堆積岩の分布地域の砂礫である。また、流紋岩質岩起源の砂礫が含まれることから、Ⅵa類型の砂礫は和泉層群の砂礫層と泉南酸性岩が分布する泉南地域の砂礫の可能性がある。

Ⅶ類型：片岩、細粒の白雲母を含むことから広く片岩が分布する地域であると推定される。花崗岩質岩起源の砂礫や砂岩が見られないことから、紀ノ川流域と言うよりも吉野川流域が推定される。吉野川河口の砂礫であろう。

その他：NO.25の試料は砂礫の量が比較的少ないが、流紋岩質岩起源の砂礫を主とし、自形の角閃石や輝石が含まれることから、姫路市夢前川下流域の砂礫の可能性がある。NO.33の試料は柱状で自形をなす角閃石を含む閃緑岩が認められないが、花崗岩質岩起源の砂礫を主とし、自形の石英や結晶面がある柱状の角閃石、チャートがごく僅かに含まれることから吉備地方の旭川下流域の砂礫の可能性がある。場所としては百間川遺跡付近が推定される。

5．土器の製作とその移動

土器は粘土と砂礫からなるが、現在の陶器のような粘土を使用したとは考えられがたい。発掘地などに見られる砂礫まじりの粘土に砂礫を混ぜて土器製作の生地としたようである。河内型庄内甕の古い段階から新しい段階までの砂礫種構成を見れば、米田編年のⅠ～Ⅱ期までは花



第13図　東弓削遺跡へ搬入された土器

岡岩質岩起源の砂礫を主とする胎土であり、Ⅲ期～Ⅴ期までは閃緑岩質岩起源の砂礫を主とする。Ⅱ期の時に製作技法が変化したといえる。Ⅰ期に属する河内型庄内甕は刑部３丁目土坑や成法寺遺跡である。前２地点は当発掘地と400ｍも離れていない。Ⅰ期の河内型庄内甕の砂礫種構成は発掘地の砂礫種構成と変わりがないことから、遺跡付近で製作したと推定される。Ⅱ期で、吉備の土器や特殊器台・壺の影響を受けたのであろうか、角閃石を多量に入れる技法が用いられるようになり、恩智神社の東方へ媒乱砂礫を採取するようになったといえる。使用した粘土が遺跡付近の粘土であるために、花岡岩質岩起源の砂礫の含まれる量に差が生じたのだと言える。つまり、Ⅰ期～Ⅱ期にかけての時期には、遺跡近くの粘土と砂礫を使用して甕を造っていたが、Ⅱ期のある時期からⅤ期にかけて遺跡近くの粘土に恩智東方の閃緑岩の媒乱砂礫をまぜて生地としたと考えられる。Ⅲ期に属する角閃石を多量に含む河内型庄内甕は吉備や福岡市、筑後川の下流の諸富町まで運ばれている。

土器製作用の砂礫の採取地が土器の製作地とするならば、北は加賀南部、東は近江の野洲川

下流域、南は徳島市の吉野川下流域、西は岡山市付近と広い範囲から東弓削遺跡に土器が運ばれてきたと推定される。

6．おわりに

東弓削遺跡付近の庄内期の遺跡の特徴として、河内型庄内甕が多く出土し、搬入された土器も多く、在地の砂礫を示す土器が少ない。大和川の砂礫を使用した土器はごく僅かであり、角閃石を多量に含む土器が多い。そして、角閃石を多く含む河内型庄内甕は北部や中部九州まで運ばれている。逆に、近江や加賀、因幡、出雲、吉備、阿波と広い範囲から土器が運びこまれている。

中田～東弓削遺跡にかけては、河内型庄内甕が多く出土し、時期的にも古いものから新しいものまであり、砂礫も近接する恩智付近で求められることから、河内型庄内甕の製作地の一つはこの付近であると推定される。

吉備型の特殊器台を製作したと推定される岡山市の加茂遺跡でも各地から土器が運びこまれており、中田～東弓削遺跡にかけてと同じような土器の出土状況を示す。このような遺跡は、加賀の梯川中流域、近江の野洲川下流域、伊勢の鈴鹿川下流域、阿波の吉野川下流域、播磨の夢前川下流域、出雲の神門川下流域等にあると推定される。今後、この地域の土器を調査する必要があり、製作遺跡を限定する必要があろう。

第3表　器種と類型

類型＼器種		甕	壺	高杯	器台	鉢	手焙形土器	合計	
Ⅰ類型	a					1		1	5
	b	1		2				3	
	c			1				1	
Ⅱ類型	a	5	1					6	18
	b	8	1					9	
	c	2					1	3	
Ⅲ類型	a		1					1	6
	b	1	1				1	3	
	c			1				1	
	d		1					1	
Ⅳ類型	a	1						1	
Ⅴ類型	a	2						2	
Ⅵ類型	a		1					1	
Ⅶ類型	a		1					1	
その他		1			1			2	
区分不能		1	1			1		3	
合計		22	8	4	1	2	2	39	

第4表　土器胎土の砂礫種

その1

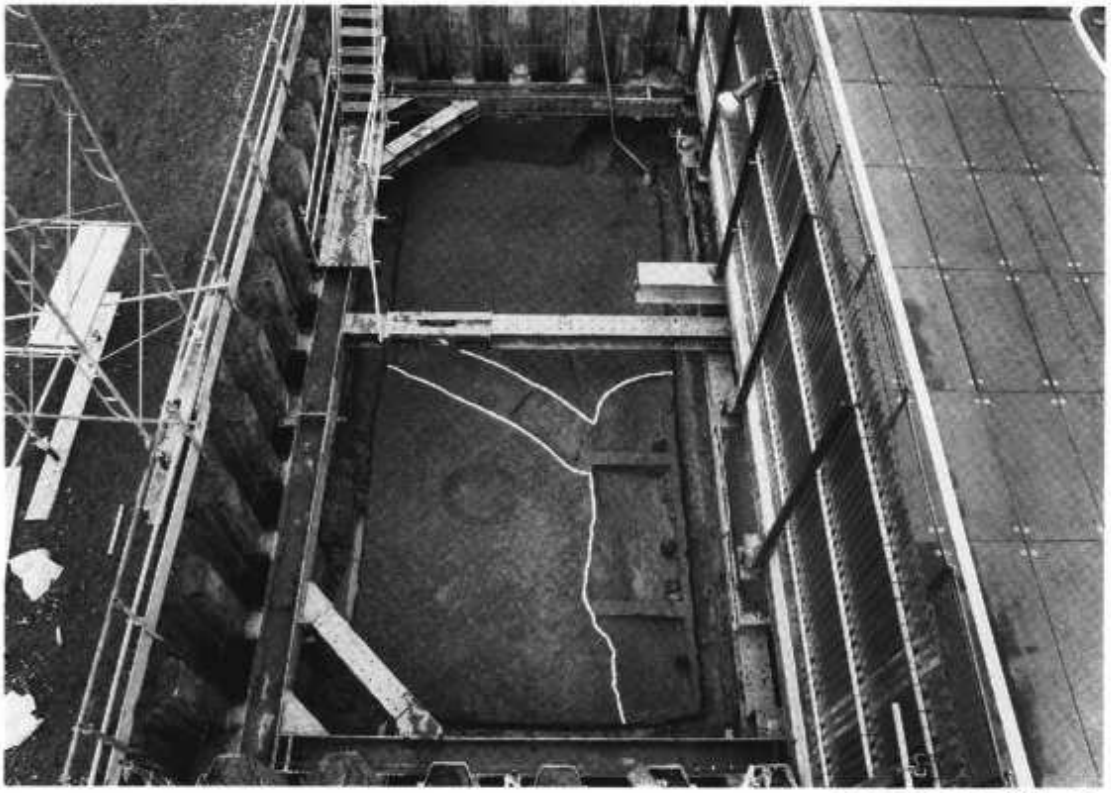
試料番号	器種	岩石																鉱物												混土	類型
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石					
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍				
東弓削遺跡H. 1	広口壺C					L-多亜角	L-中亜角											L-僅	M-中E多						S稀E非		S微E非			無	IIIa
東弓削遺跡H. 2	広口壺D					L-微亜角	L稀亜円	L-稀亜円		L-稀亜円		L-中亜角	L-僅亜角				S僅貝東	L-稀	L-微E多											無	VIa
東弓削遺跡H. 3	短頸直口壺A																	L-中	M-中			L-僅板	S僅板	L-多	L-多					無	IIa
東弓削遺跡H. 4	複合口縁壺D					L-多角	L-多亜角		L-僅亜角								S-僅貝	M-稀	L-僅E非		M-微				S稀		S稀E非			無	IIIb
東弓削遺跡H. 5	複合口縁壺A1						M-中亜角					L-僅亜角	L-微亜角					L-微	L-僅E多	L-稀										無	IIId
東弓削遺跡H. 6	壺																		S中				S微		S微					無	砂礫少量区分不能
東弓削遺跡H. 7	壺	L-稀角	M稀角																S稀	L-微	M-僅		M-微粒板	M-中	M-非					無	IIb
東弓削遺跡H. 8	壺													L-中角	L-微亜角				S僅		S僅		SM僅板							無	VIIa
東弓削遺跡H. 9	甕A1																	L-微	M微	L-僅	L-僅	L稀板	M-微粒板	L-中	L-中					無	IIa
東弓削遺跡H. 10	甕A						L-僅亜角					M稀亜角	L-稀亜角					M-中	L-非E多	M-僅					S稀E非		S稀E非			無	IIIb
東弓削遺跡H. 11	甕A2	L-微角	M稀角			M-稀角	L-稀角											L-中	L-多	L-僅	M-僅	M稀板	M-微板							有稀	Ib
東弓削遺跡H. 12	甕B1-I																		M稀	M-僅	M-僅		M-僅粒板	M-中	L-多					無	IIa
東弓削遺跡H. 13	甕B1-II																		M-微	M-僅	M-僅	M-微板	M-僅板	L-僅	L-非		M稀			無	IIa
東弓削遺跡H. 14	甕B1-III		M稀角																M稀	L-微	M-僅		M-僅板	L-多	L-非					無	IIb

試料番号	器種	岩石																鉱物												焼土塊	類型
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石					
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍				
東弓削遺跡H. 15	甕B₂	L 稀角	M 稀角																M-微	L- 稀	M-僅	S 微板	L-中粒板	L- 中	M-中					無	IIc
東弓削遺跡H. 16	甕B₂	M 稀角	M 稀角																	L- 僅	M-僅		M-微板	L- 多	L- 非					無	IIb
東弓削遺跡H. 17	甕B₂	L 微角	L 稀角																M 稀	L- 僅	M-微	M-微板	M-僅板		L- 多					無	IIb
東弓削遺跡H. 18	甕B₂																		L- 稀	M-僅	L- 中	S 稀板	S 稀板	L- 中	L- 非					有稀	IIa
東弓削遺跡H. 19	甕B₂																		L 稀	M-僅	M-中		M-板	L- 中	L- 多					無	IIa
東弓削遺跡H. 20	甕B₂		L 稀角																S 微	L- 僅	S 僅		L- 多板	L- 中	M-中					無	IIc
東弓削遺跡H. 21	甕B₂	L- 稀角	L 稀角																M 稀	L- 僅	S 僅		S 微板	L- 中	L- 非					無	IIb
東弓削遺跡H. 22	甕B₂	L- 稀角																L- 稀	L 稀	M 微	S 微		M-僅板	L- 多	L- 非					無	IIb
東弓削遺跡H. 23	甕B₂	L 稀																		L 微	L 微	S 稀板	M-稀板	M-多	L- 多					無	IIb
東弓削遺跡H. 24	甕B₂-I	L- 稀角																	M-微	S 微	M-僅	S 微板	S 微板		M-中					無	IIb
東弓削遺跡H. 25	甕C					L- 亜 微角												M-稀	L- 僅 E 中			S 稀板	M-僅板		S 僅 E 中	S 稀 E 非				有微	その他
東弓削遺跡H. 26	甕C		M 稀角																S 僅		S 稀	S 微板	S 中板		S 稀					無	砂礫少量区分不能
東弓削遺跡H. 27	甕I		M 稀角																M-稀	M-稀	M-微		L- 稀板	L- 多	M-多					無	IIb
東弓削遺跡H. 28	甕H							L- 亜 微円	L- 亜 微円	L- 中亜 中角	L- 中亜 稀円	L- 僅角	L 稀円						S 中												無	Va

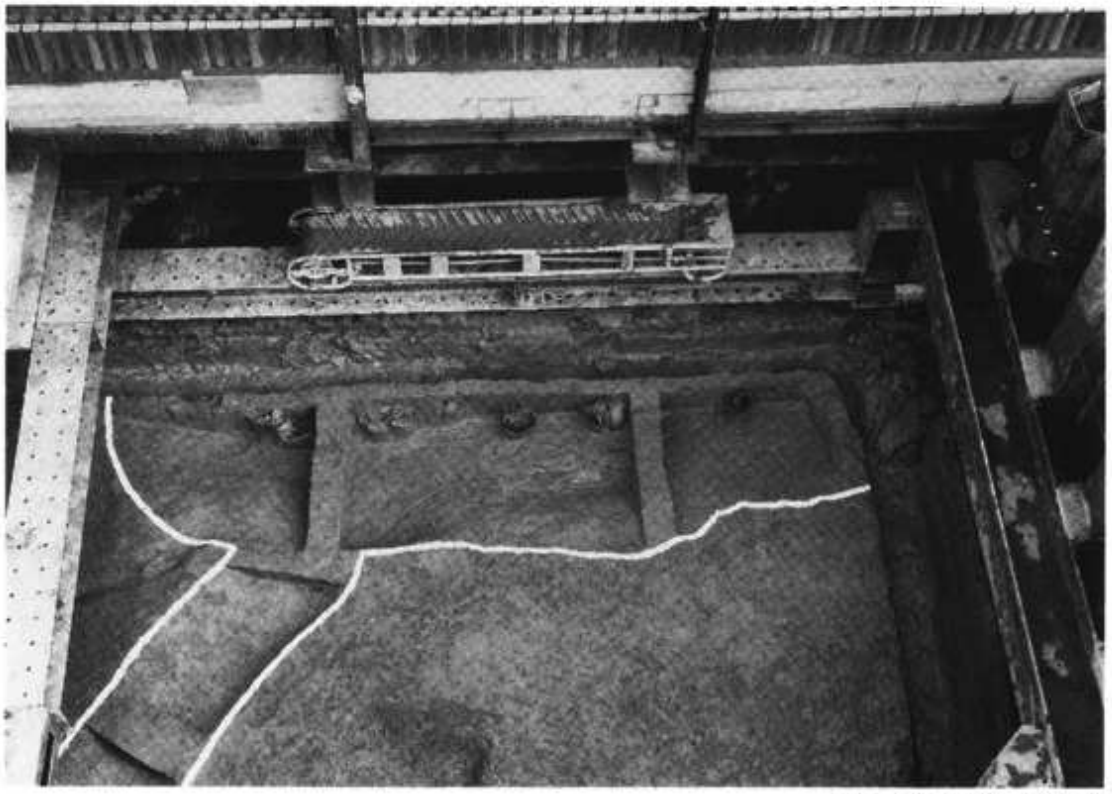
試料番号	器種	岩石																鉱物												焼土	類型
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石					
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍				
東弓削遺跡H. 29	壺H							L-亜 中角	L-亜 微円	L-亜 僅角		L-亜 僅角	L-角 微				M-員 微		L-E 多中	L- 微					S 稀					無	IVa
東弓削遺跡H. 30	壺H							L-亜 中円	L-円 微円	L-亜 僅角					L-角 稀		M-僅		M-僅											無	Va
東弓削遺跡H. 31	鉢G1		M 稀角														M-員 稀	M-稀	M-多	M-稀	M-僅	S 稀板	S 稀板		S 稀					無	Ia
東弓削遺跡H. 32	鉢G1												S 稀亜角				M-束 稀		S 多		S 中		S 稀板		S 稀					有稀	砂礫細粒以分不能
東弓削遺跡H. 33	器台B3		M 稀角									L-亜 稀角	S 稀亜角				M-フ 僅員		M-E 多僅	M-稀	M-僅		S 稀板		S 僅R 多					有稀	その他
東弓削遺跡H. 34	高杯C1					L- 中角	L- 僅角					L-亜 微角	L-亜 補角					M-僅	L-E 多僅	M-微	M-中				M-稀					無	IIc
東弓削遺跡H. 35	高杯B2	L- 稀角	L- 微角				M 微角											M-微	M-E 多僅	S 稀	M-僅		L-板 稀粒		S 稀					有稀	Ib
東弓削遺跡H. 36	高杯D1		M 稀角															M-稀	M-E 多微		M-僅	S 稀板	S 稀板		S 僅					無	Ib
東弓削遺跡H. 37	高杯	L- 稀角	L- 稀角									L-亜 微角	L- 微角					M-稀	S 多		S 中		S 稀板		S 微					無	Ic
東弓削遺跡H. 38	手焙形土器		L- 稀角									M-亜 微角						L- 僅	L-E 中中	L- 中	M-僅				M-微K 非		M-僅K 非		無	IIIb
東弓削遺跡H. 39	手焙形土器		L-亜 稀角																	M-僅	S 僅	M-僅	M-中板 粒	L- 中	M-中				無	IIc

裸眼－裸眼観察　裸眼による観察：L－粒径2㎜以上　M＝粒径2㎜未満0.5㎜以上　S＝粒径0.5㎜未満　非＝量が非常に多い　多＝量が多い　中＝量が中　僅＝量が僅か　微－量がごく僅か　稀＝量がごくごく僅か　30倍＝実体鏡の倍率が30倍　実体鏡による観察：L粒径1㎜以上　M＝1㎜未満0.5㎜以上　S＝粒径0.5㎜未満　量は裸眼に同じ　－＝以下の粒径がある　E－自形あるいは結晶面がある　W－白雲母が含まれる　板－板状　貝－貝殻状　束－束状　フ＝フジツボ状　図－報告書等の図版

図　　版



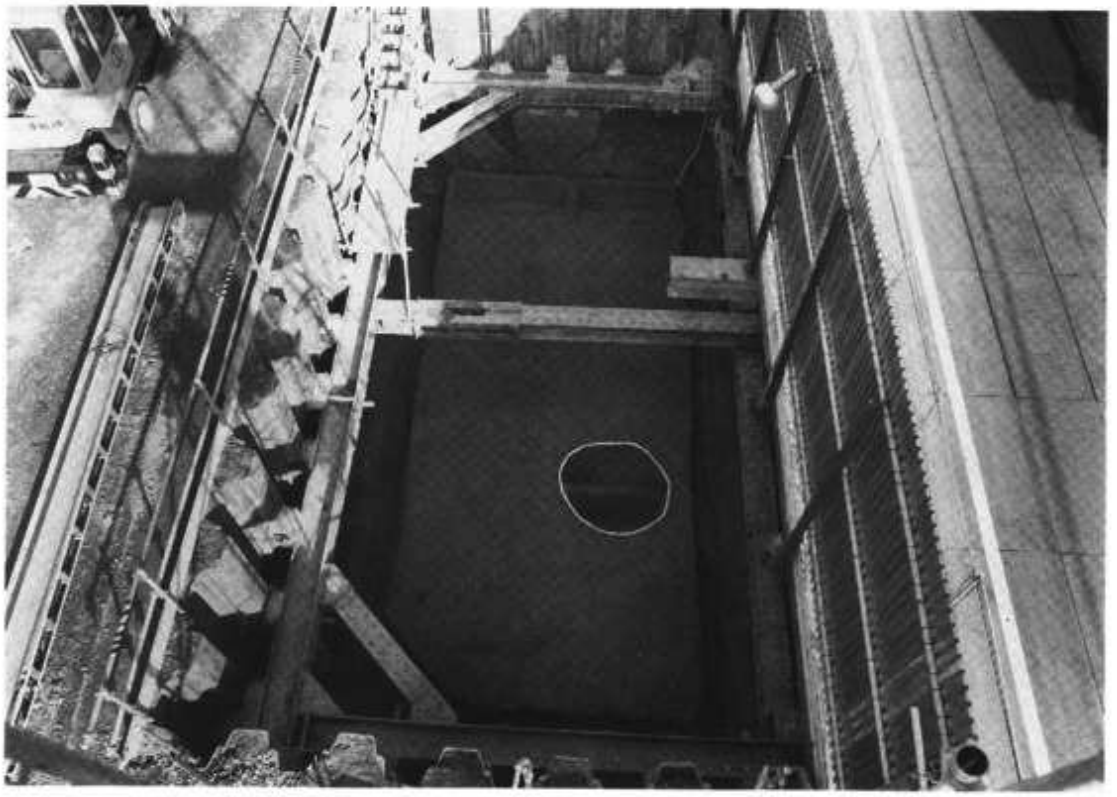
第１調査面全景（南から）



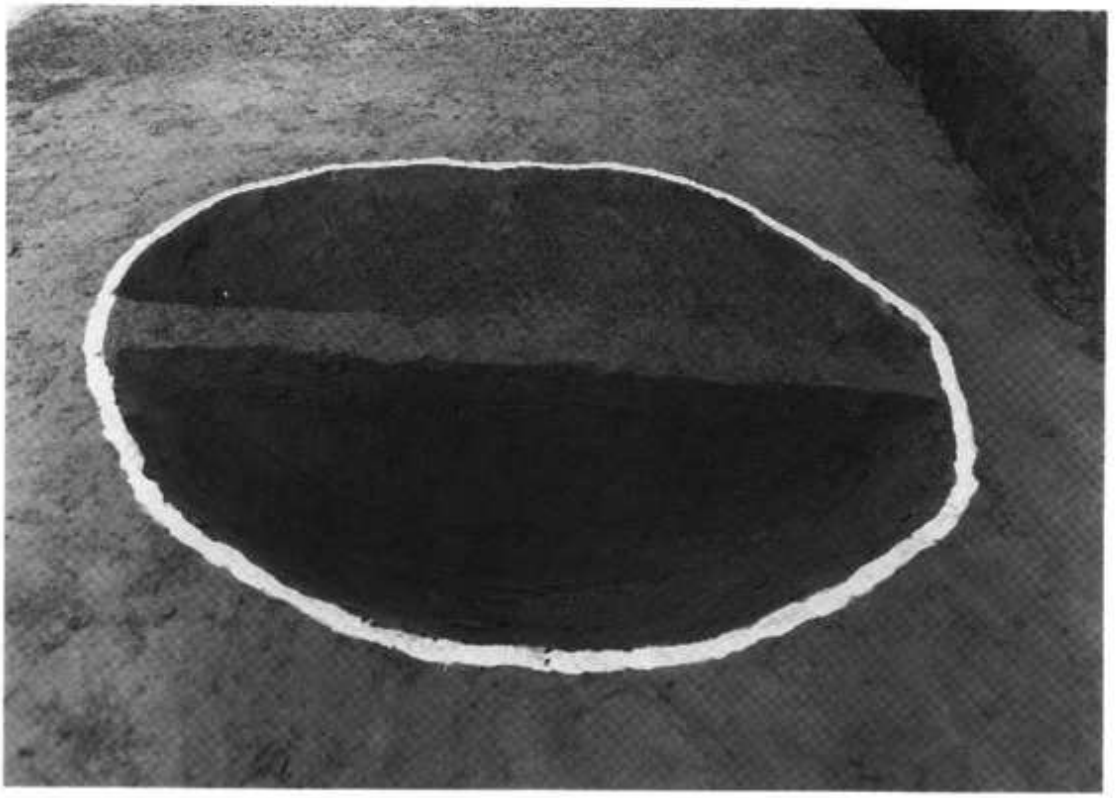
ＳＤ－１検出状況（西から）

SD－1内遺物（13・1）出土状況（西から）

SD－1内遺物（6・14）出土状況（西から）



第２調査面全景（南から）



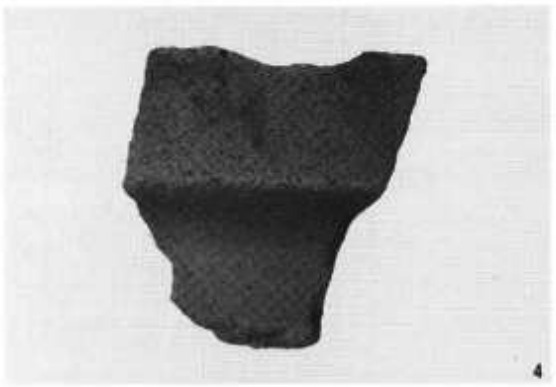
ＳＫ－１検出状況（南から）

図版四

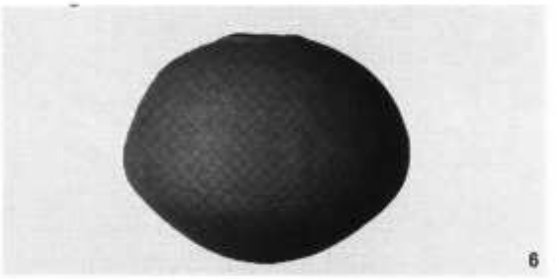
1

2

3


4

5


6

7

8

9

11

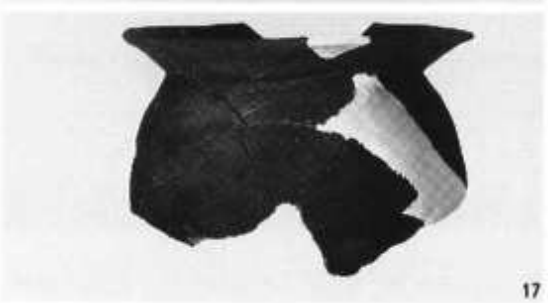
SD－1出土遺物

12

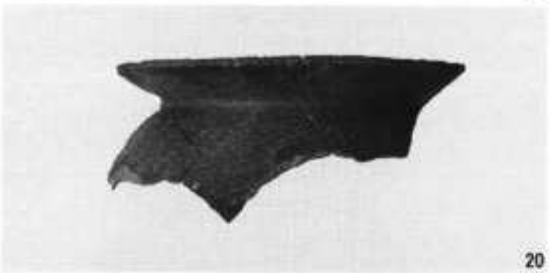
13

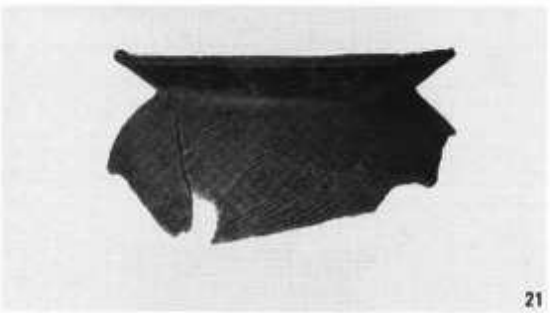
14

15


17

18


20


21

22

23

SD－1出土遺物

図版六

24

25

26

27

28

29

30

32

SD－1出土遺物

33

36

41

43

44

47

48

49

51

54

61

SD－1（33・36）、第6層出土遺物（41・43・44・47～49・51・54・61）

Ⅱ久宝寺遺跡第１次調査（ＫＨ84－１）

例　　言

1．本書は、八尾市北亀井町３丁目１で実施した工場建設に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する久宝寺遺跡第１次調査（KH84－１）の発掘調査の業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会がシャープ株式会社から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は昭和59年４月２日から５月26日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。面積は792㎡を測る。調査においては大地慶子・北尾耕三・松岡利行・郡山順夫・樽井正・西辻正信・萩原剛良・吉原早智子が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成５年３月31日に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－原田・大地・吉原・成海佳子・中西隆子・麻田優、図面レイアウト－原田、図面トレース－中西・北原清子、遺物観察表－原田・八元聡志、表関係－垣内洋平、遺物写真撮影－原田が行った。

1．付章「土器表面に見られる砂礫」については、大阪府八尾市立曙川小学校教諭奥田尚氏に依頼した。

1．本書の執筆・編集は原田が行った。

1．調査及び本書作成にあたっては、以下の方々から御指導、御教示を受けた。

田島明人（石川県埋蔵文化財保存協会）、栃木英道・北野博司・安英樹（石川県立埋蔵文化財センター）、赤沢徳明（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）、一瀬和夫・服部文章（大阪府教育委員会）、小野久隆（大阪文化財センター）、奥田尚（八尾市立曙川小学校）、米田敏幸（八尾市教育委員会）　　（敬称略・順不同）

本 文 目 次

第1章　調査に至る経過…… 41
第2章　地理・歴史的環境…… 41
第3章　調査概要…… 45
　第1節　調査方法と経過…… 45
　第2節　基本層序…… 45
　第3節　検出遺構・出土遺物…… 48
　　1）検出遺構…… 48
　　2）出土遺物…… 54
　　3）各トレンチの出土遺物…… 67
第4章　出土遺物観察表……91～ 116
第5章　まとめ…… 117

付章　土器表面に見られる砂礫…… 137

挿 図 目 次

第 1 図　調査地周辺図…… 42
第 2 図　基本層序模式図…… 46
第 3 図　調査区設定図および地区割り図…… 47
第 4 図　第2トレンチ　SW－1平断面図 …… 49
第 5 図　第3トレンチ　SW－2平断面図 …… 50
第 6 図　第2トレンチ　SW－1出土遺物位置図 ……51・52
第 7 図　第3トレンチ　SW－2出土遺物位置図 …… 53
第 8 図　第1トレンチ　第4層出土遺物実測図…… 67
第 9 図　第1トレンチ　第7層出土遺物実測図…… 68
第 10 図　第2トレンチ　SW－1出土遺物実測図1 …… 74
第 11 図　第2トレンチ　SW－1出土遺物実測図2 …… 75
第 12 図　第2トレンチ　SW－1出土遺物実測図3 …… 76

第 13 図　第2トレンチ　SW－1出土遺物実測図4 …… 77
第 14 図　第2トレンチ　第7層出土遺物実測図1 …… 78
第 15 図　第2トレンチ　第7層出土遺物実測図2 …… 79
第 16 図　第2トレンチ　第7層出土遺物実測図3 …… 80
第 17 図　第2トレンチ　第7層出土遺物実測図4 …… 81
第 18 図　第2トレンチ　第7層出土遺物実測図5 …… 82
第 19 図　第2トレンチ　第7層出土遺物実測図6 …… 83
第 20 図　第2トレンチ　第7層出土遺物実測図7 …… 84
第 21 図　第2トレンチ　第8層出土遺物実測図 …… 86
第 22 図　第3トレンチ　SW－2出土遺物実測図 …… 87
第 23 図　第3トレンチ　第7層出土遺物実測図 …… 89
第 24 図　第4トレンチ　NR－1出土遺物実測図 …… 90

表　目　次

第1表　中河内地域における庄内式・布留式土器分類－1 …… 61
第2表　〃　庄内式・布留式土器分類－2 …… 62
第3表　〃　庄内式・布留式土器分類－3 …… 63
第4表　〃　庄内式・布留式土器分類－4 …… 64
第5表　〃　庄内式・布留式土器分類－5 …… 65
第6表　甕E分類表 …… 69
第7表　SW－1・第7層出土遺物一覧表 …… 73
第8表　中河内地域における庄内式～布留式土器組成推移表1 …… 129
第9表　中河内地域における庄内式～布留式土器組成推移表2 …… 130
第10表　庄内Ⅲ期・布留1期・布留Ⅱ期資料一覧表 …… 131・132
第11表　布留Ⅲ期・布留Ⅳ期・布留Ⅴ期資料一覧表 …… 133・134
第12表　砂礫による類型区分と器種 …… 141
第13表　土器胎土の砂礫種（その1～その11） …… 142～152

図　版　目　次

図版　一　　第1トレンチ全景

図版　二　第２トレンチ全景
図版　三　第２トレンチ　SW－１検出状況
第２トレンチ　SW－１検出状況
図版　四　第２トレンチ　SW－１西部遺物出土状況
左上　第２トレンチ　SW－１南西部
左下　第２トレンチ　SW－１北部
右上　第２トレンチ　SW－１北部
右下　第２トレンチ　SW－１棒状石製品出土状況
図版　五　第３トレンチ全景
図版　六　第３トレンチ　SW－２検出状況
第３トレンチ　SW－２細部
図版　七　第４トレンチ　全景
図版　八　第１トレンチ第４層・第７層出土遺物
図版　九　第２トレンチ　SW－１出土遺物１
図版一〇　第２トレンチ　SW－１出土遺物２
図版一一　第２トレンチ　SW－１出土遺物３
図版一二　第２トレンチ　SW－１出土遺物４
図版一三　第２トレンチ　SW－１出土遺物５
図版一四　第２トレンチ　SW－１出土遺物６
図版一五　第２トレンチ　第７層出土遺物１
図版一六　第２トレンチ　第７層出土遺物２
図版一七　第２トレンチ　第７層出土遺物３
図版一八　第２トレンチ　第７層出土遺物４
図版一九　第２トレンチ　第７層出土遺物５
図版二〇　第２トレンチ　第７層・第８層出土遺物
図版二一　第２トレンチ　第８層出土遺物
図版二二　第３トレンチ　SW－２出土遺物
図版二三　第３トレンチ　SW－２・第７層出土遺物
図版二四　第３トレンチ　第７層、第４トレンチNR－１出土遺物

第1章　調査に至る経過

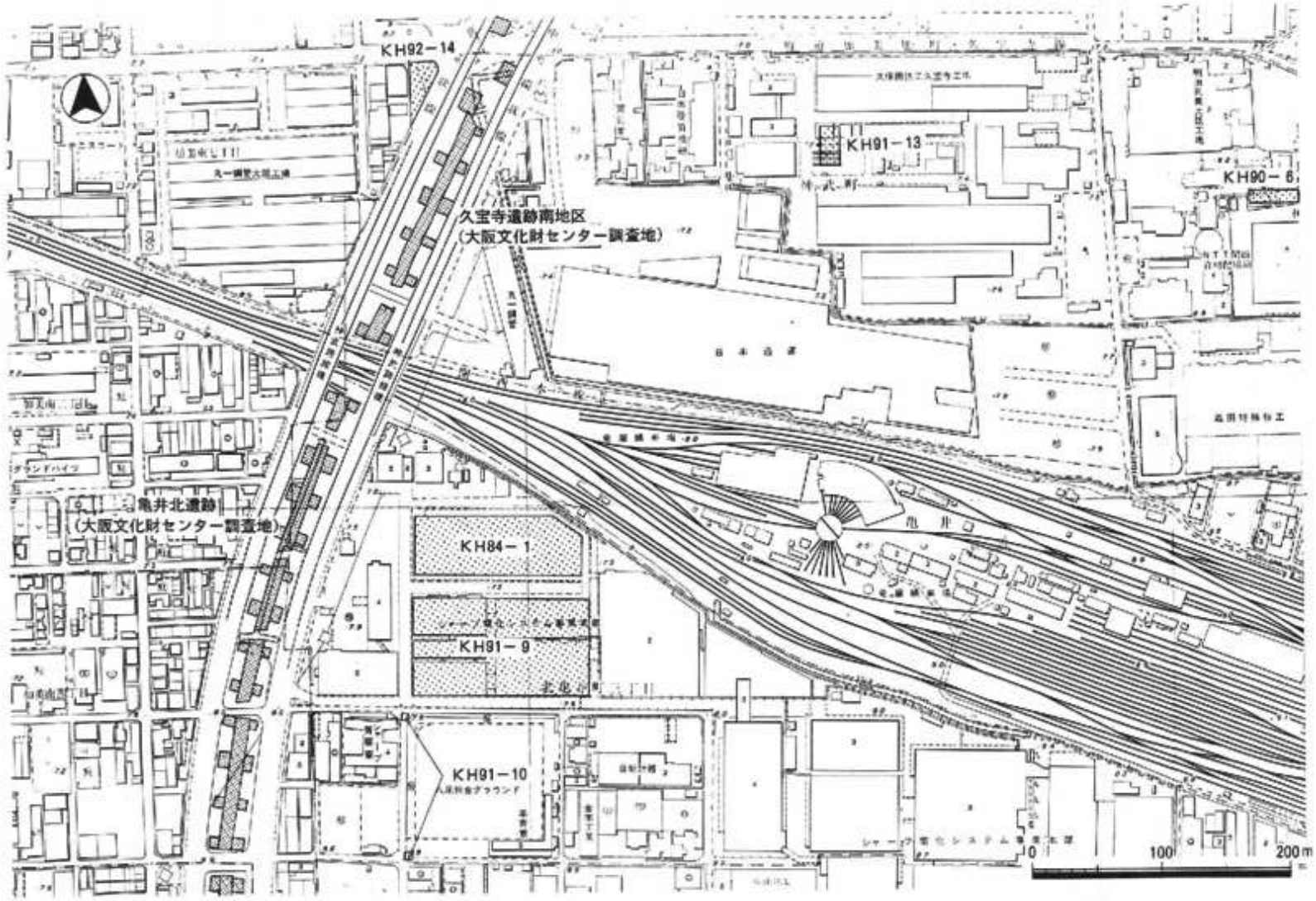
久宝寺遺跡の発見の契機は、昭和10年に八尾市久宝寺5丁目で行われた道路工事の際に船の残片とともに弥生時代中期～古墳時代に至る遺物が出土したことに端緒を発するが、それ以降は目立った調査も実施されず遺跡の実体は不明であった。昭和48年～49年にかけて近畿高速自動車道の建設予定地で実施された試掘調査では、南の八尾市神武町の国鉄関西線（現JR大和路線）から北の東大阪市大蓮東4丁目の金岡跨道橋間の約1.5km間に7ヶ所の調査区が設定された。その結果、弥生時代から中世に至る遺構・遺物が検出され、当遺跡が広範囲にわたる複合遺跡であることが確認された。これらの試掘調査の結果をもとに、昭和57年以降は㈱大阪文化財センターにより近畿自動車道建設予定地の発掘調査（久宝寺北・久宝寺南）が実施された。調査の結果、弥生時代から中世に至る多量の遺構・遺物が検出されている。なかでも、古墳時代前期の準構造船の発見は、当時の船の構造を明らかにしただけでなく、これらの船を媒介として考えられる他地域との交通・交易等を推定するうえでも示唆に富む資料を提供する結果となった。

このような情勢下、シャープ株式会社から八尾市北亀井3丁目1において工場建築の届出書が八尾市教育委員会に提出された。八尾市教育委員会では当該地が久宝寺遺跡の一画にあたる為、埋蔵文化財の有無を確認するために、昭和59年1月24日に遺構確認調査を実施した結果、現地表下1.7～2.0m付近に古墳時代前期の遺物を含む土層が確認された。以上の結果を経て発掘調査を実施することになったもので、シャープ株式会社・八尾市教育委員会・㈱八尾市文化財調査研究会の三者間の協議の上、当調査研究会が主体となって発掘調査を実施することが決定された。現地発掘調査の期間は昭和59年4月2日から6月25日で、調査面積は792㎡を測る。また、整理事業は、調査終了後平成5年3月31日まで随時実施した。

第2章　地理・歴史的環境

久宝寺遺跡の位置する八尾市は、大阪府の中央部東端に位置し、東は生駒山地の山稜線で奈良県平群町・三郷町と境し、南は柏原市・藤井寺市・松原市、西は大阪市平野区、北は東大阪市に隣接している。

八尾市の位置する大阪府の中河内地域の地形は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵・河内台地、西を上町台地、北を淀川に画されている河内平野の南部に当たる。河内平野の形成については海水面の昇降による侵食面の移動と、旧大和川と淀川による堆積作用との相互作用によると考


KH92－14
KH91－13
KH90－6
久宝寺遺跡南地区
（大阪文化財センター調査地）
亀井北遺跡
（大阪文化財センター調査地）
KH84－1
KH91－9
KH91－10
0
100
200m

第1図　調査地周辺図

えられている。特に、河内平野南部については、旧大和川水系の平野川・長瀬川・楠根川・玉串川・恩智川が北西方向に放射状に流下しており、自然堤防・扇状地性低地・三角洲性低地等の地形形成についてはこれらの河川の堆積作用によるところが大きい。現在みられる地表面の形態は宝永元年（1704）に大和川が付け替えられた当時の地形を留どめている。

今回の調査地点は、北西方向に流下していた長瀬川が北北西に流路変える地点（JR八尾駅付近）から西側一帯にあたる扇状地性低地に位置し、現地表面の海抜は9.5m前後を測る。以下、当遺跡周辺の遺跡を中心に時期ごとに概観してみる。

大阪平野（河内平野）の後氷期の発達史については、梶山彦太郎・市原実両氏の研究により九つの時期に区別されている。それによれば旧石器時代の河内平野の環境は古大阪平野の時代と呼ばれており、泥炭層のたまる沼沢地が広がっていたものと推定されている。しかし、この時期の生活面はその後、古河内平野、河内湾Ⅰ・Ⅱ、河内潟・河内湖Ⅰ・Ⅱの各時代を変遷する過程で膨大な沖積作用を受けているため、現実にはこの時期の生活面に達する発掘調査が困難である。したがって、平野部内部ではこの時期の実態は不明であるが、沖積作用の緩慢な平野部南部の長原遺跡・瓜破遺跡・八尾南遺跡ではこの時期の石器が検出されており、今後、平野部内部においても遺跡が発見される可能性が高い。亀井遺跡では、T.P.±0（G.L.−10m）付近で埋没低位段丘が検出されており、この付近一帯で生活面である可能性をもつ最古の面として認識されている。その後、河内湾Ⅰの時代の縄文海進最高頂期（6000〜5000年B.P.）にはこの付近にまで海水が侵入しており、亀井遺跡ではT.P.＋2m（G.L.−8m）付近で海成層が確認されている。縄文時代後期になると、海退現象による河内湾の干潟化と大和川・淀川の沖積作用により淡水化が顕著な河内潟の時代に移行している。平野部での調査によれば、新家・山賀・亀井の各遺跡からあまり摩耗を受けていない縄文時代晩期の土器片が出土しており、付近に集落が存在した可能性が高い。縄文時代晩期においては平野部の南部の長原遺跡で集落が検出されており、この時期の集落構造を知るうえで貴重である。

弥生時代前期には、水稲耕作の導入にともなって平野部内部に集落が出現している。当時の河内潟の汀線は瓜生堂遺跡付近（東大阪市瓜生堂・若江西新町）にあったとされており、河内潟に注ぐ河川により形成された自然堤防の微高地を中心として集落が営まれている。前期の古段階においては山賀遺跡・八尾南遺跡があるほか前期中段階から新段階にかけては美園遺跡・亀井遺跡・城山遺跡・瓜破遺跡・長原遺跡・跡部遺跡・中田遺跡・田井中遺跡がある。

弥生時代中期にはさらに河内潟の陸地に伴って新たに瓜生堂遺跡・巨摩廃寺遺跡・若江北遺跡・加美遺跡・東郷遺跡・小阪合遺跡・木の本遺跡・東弓削遺跡・弓削遺跡が出現している。また、この時期になると、農業基盤の安定化を背景として集落規模の拡大が顕著で瓜生堂遺跡や亀井遺跡などのように母村的な性格を帯びた集落が出現している。

弥生時代後期になると自然環境が不安定であったようで、中期の生活面を流水堆積層が覆っている例が平野部の各遺跡で検出されており、前代から続く既存の集落は規模の縮小と分散を余儀なくされたようである。

古墳時代前期（庄内式期・布留式期）においては前代に比して集落の増加が顕著で、西岩田遺跡・瓜生堂遺跡・友井東遺跡・美園遺跡・久宝寺遺跡・亀井遺跡・加美遺跡・萱振遺跡・東郷遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡・八尾南遺跡・瓜破遺跡がある。これらの遺跡は特に庄内式新相から布留式期にかけて盛行することが指摘でき、来るべき古墳造営前夜の動向を知るうえで示唆的である。平野部で検出された前期の古墳には美園古墳・萱振1号古墳・塚ノ本古墳・久宝寺古墳がある。

古墳時代中期の集落位置は前代に符合する傾向である。この時期の古墳は巨摩遺跡・友井東遺跡・亀井遺跡・長原遺跡・八尾南遺跡で検出されている。続く、古墳時代後期の集落は萱振遺跡・矢作遺跡・竹渕遺跡で検出されている程度で集落の減少が顕著である。長原遺跡内で検出されている小型の方墳を中心とする長原古墳群も、後期前半を境として古墳造営を停止している。

飛鳥・奈良時代の集落は久宝寺遺跡・太子堂遺跡・萱振遺跡・成法寺遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・弓削遺跡・長原遺跡で検出されている。寺院としては渋川廃寺・竜華寺・弓削寺・鞍作廃寺がある。

平安時代から鎌倉時代の集落については、萱振遺跡・佐堂遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・矢作遺跡・長原遺跡が検出されている。特に、長原遺跡では条里に基づいた集落が検出されており、この時期、このような集落の在り方が一般的であったと推定される。また、調査地一帯は中世には橘島と呼ばれており、久宝寺では中世末期から近世初頭にかけて一向宗西証寺（現顕証寺）を中心に寺内町が形成されている。

第3章　調査概要

第1節 調査方法と経過

今回の発掘調査は工場建築に伴うもので、調査の対象地は建物の基礎部分の8箇所であった。調査指示書に従って、8箇所の調査区を設定していたところ、事業者から調査対象地が既設の建物の基礎部分と重複することが指摘された。これらを確認するため当該部分を試掘したところ、4箇所は既設建物の基礎部分と一致し、既に深層まで撹乱を受けていることが判明した。以上のことから、これらを除いた4箇所にトレンチ（第1トレンチ～第4トレンチ）を設定して調査を実施した。

調査は、遺構確認調査で確認された現地表下1.7～2.0m付近に存在が予想される古墳時代前期の遺構・遺物を調査対象としたが、第1・第2トレンチでは現地表下1m前後（標高6.80m前後）で奈良時代の遺物を含む上層が確認された為、両トレンチにおいては2面を調査対象とした。調査の結果、第1・第2トレンチで奈良時代の遺物を含む第4層の広がりを確認した。現地表下2.1～2.3m（標高5.8～6.0m）前後に存在する第8層上面では、古墳時代前期（布留式古相）に比定される土器集積を第2トレンチで1箇所（SW－1）、第3トレンチで1箇所（SW－2）を検出したほか、第4トレンチでは自然河道1条（NR－1）を検出した。

なお、調査地の地区割りは、南北軸を磁北に合わせて基準線とし、それに東西軸を直交させる形をとり、東西120m、南北60mにわたって設定した。地区割りの一区画単位は10m四方で、東西方向はアルファベット（西からA～L）、南北方向は算用数字（北から1～6）で示し、地区名の表示は1A区～6L区と呼称した。地点の表示については、地区割りの北西隅をY0・X0とし、東西線はX（X0～X60）、南北線はY（Y0～Y120）と設定し、X線とY線の交点の数字で示した。

第2節 基本層序

第2・第3トレンチにおいては、大規模な撹乱部分が認められたが、それ以外は安定した層相が確認された。全体的にみて東から西に向かって緩やかに傾斜しており、西部では洪水を起因とする水成層の堆積が東部に比べて厚い傾向が看取された。ここでは、8層を摘出して基本層序とした。

第0層　コンクリート及び盛土。層厚20～70cm。上面の標高は8.1m前後。

第1層　旧耕土。淡灰～灰色砂質土。層厚20cm前後。

第2層　床土。淡灰～黄灰色砂質土。層厚20cm。比較的安定した土層で、調査区全域にわたって堆積している。層中に床土に特有の酸化鉄・マンガン等が斑点状に沈着している。

第3層　淡灰～灰黄色の色調で、土質には砂質・粘質がある。層厚20～30cm。層中に中世に比定される遺物を含むが出土量は僅少である。

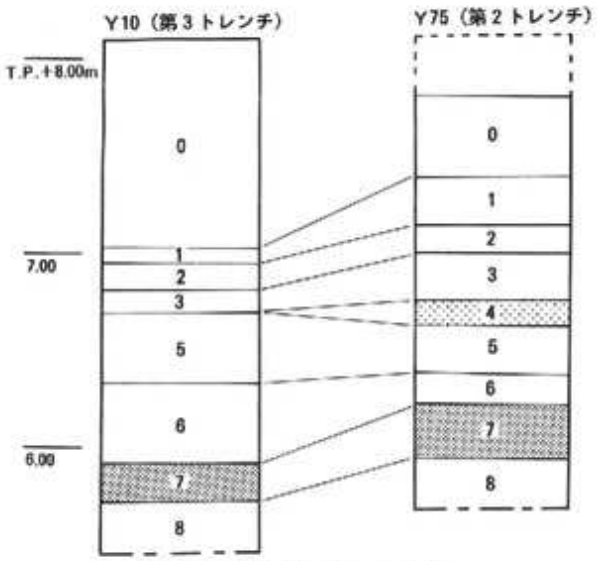
第4層　灰茶色の色調で、土質には砂質・粗砂がある。層厚10～30cm。第1トレンチ・第2トレンチで検出した土層で、奈良時代の遺物を包含している。

第5層　淡灰～灰褐色の色調で、土質には粗砂・細砂・シルトの3種がある。層厚10～70cm。洪水に関連した堆積土層である。ただ、一度の堆積でなく少なくとも2回以上の洪水に伴う土層であることが看取される。西側に行くに従って、層厚が漸増している。上面が第1トレンチ・第2トレンチの第1調査面である。

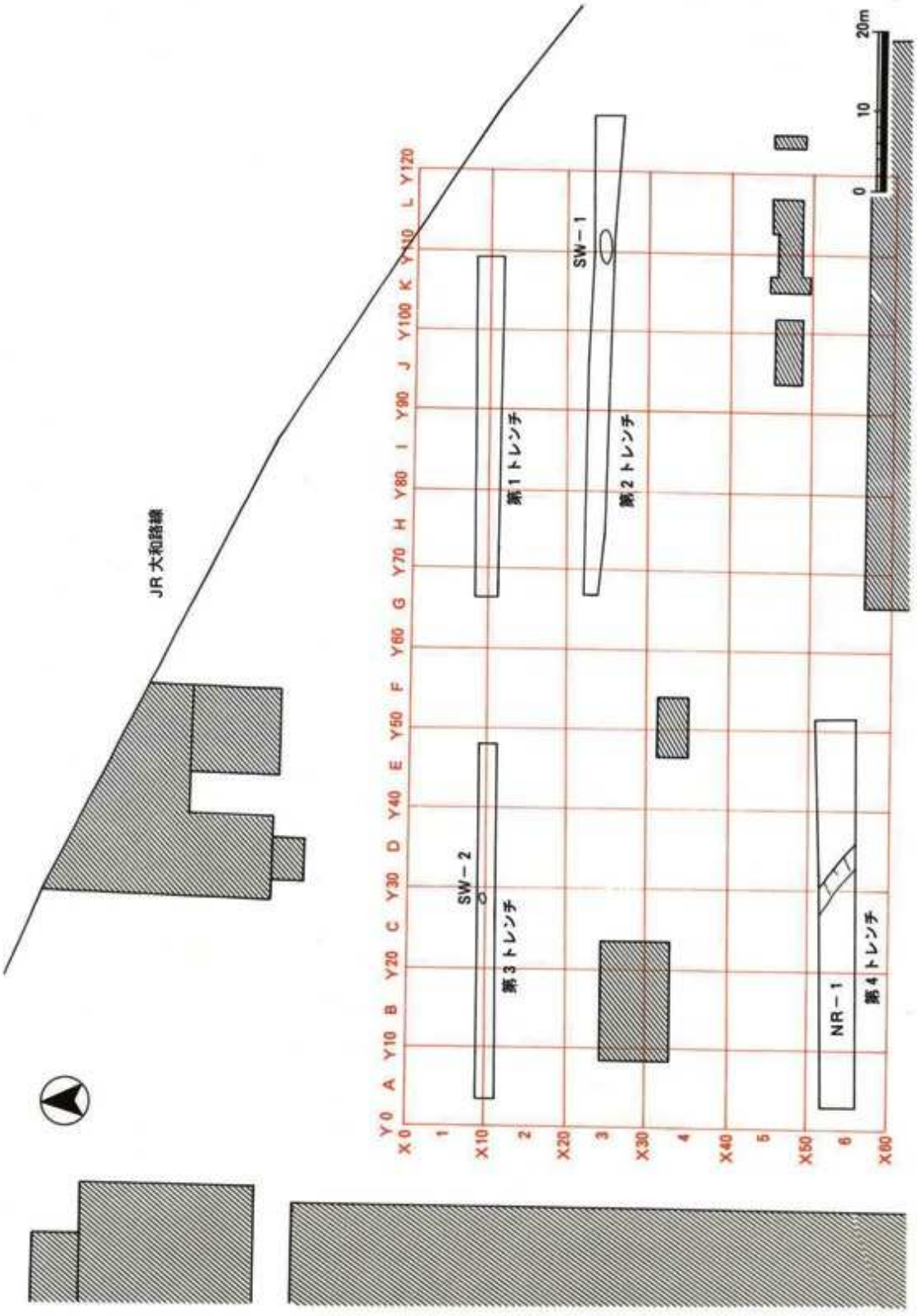
第6層　淡灰～灰青色の色調で、土質にはシルト・粘土の2種がある。層厚20～50cm。西部に行くに従って層厚が漸増している。

第7層　暗灰～灰黒色粘土。層厚10～25cm。調査地全域に広がるもので、東部から西部に向かって傾斜している。古墳時代前期の遺物を包含している。

第8層　灰～灰青色粘土。層厚50cm。基本的には無遺物土層であるが、第2トレンチの東端部では沼沢地状を呈しており、その部分からは遺物が出土した。上面が古墳時代前期の遺構検出面である。



第2図　基本層序模式図（1／40）



第3図　調査区設定図および地区割り図

第3節　検出遺構・出土遺物

1）検出遺構

・第1トレンチ

調査地の北東部に設定したトレンチで、東西幅43m、南北幅4mを測る。調査は当初、試掘調査で確認された古墳時代前期の土層と遺構の関係を追及することを目的とした。試掘結果に従って機械掘削を実施していたところ、現地表下1m前後（標高6.8m前後）付近において奈良時代の遺物を含む第4層が確認されたため、これらの上層に関連した遺構の存在を確認するためこの面において調査を実施した。したがって、結果的には2面にわたる調査を実施し、第5層上面を対象とした調査面を第1調査面とし、第8層上面を対象とした調査面を第2調査面と呼称した。

＜第1調査面＞

現地表下1m前後（標高6.8m前後）付近に存在する第4層及び第5層上面を調査対象とした。奈良時代の遺物を含む第4層はこの付近では、部分的に存在するもので、遺物の出土量も僅少である。第5層上面では、調査区の中央部の北壁で奈良時代～平安時代に比定される土師器椀（2）・鉢（1）、須恵器甕（3・4）、屋瓦片等が集中する部分が認められた以外は顕著な遺構は認められなかった。

＜第2調査面＞

現地表下1.5m前後（標高6.2m前後）に存在する第7層及び第8層上面を調査対象とした。調査の結果、第7層からは古墳時代前期（布留式期古相）に比定される遺物（5～21）が少量出土したのみで、第8層上面においても遺構の存在は認められなかった。

・第2トレンチ

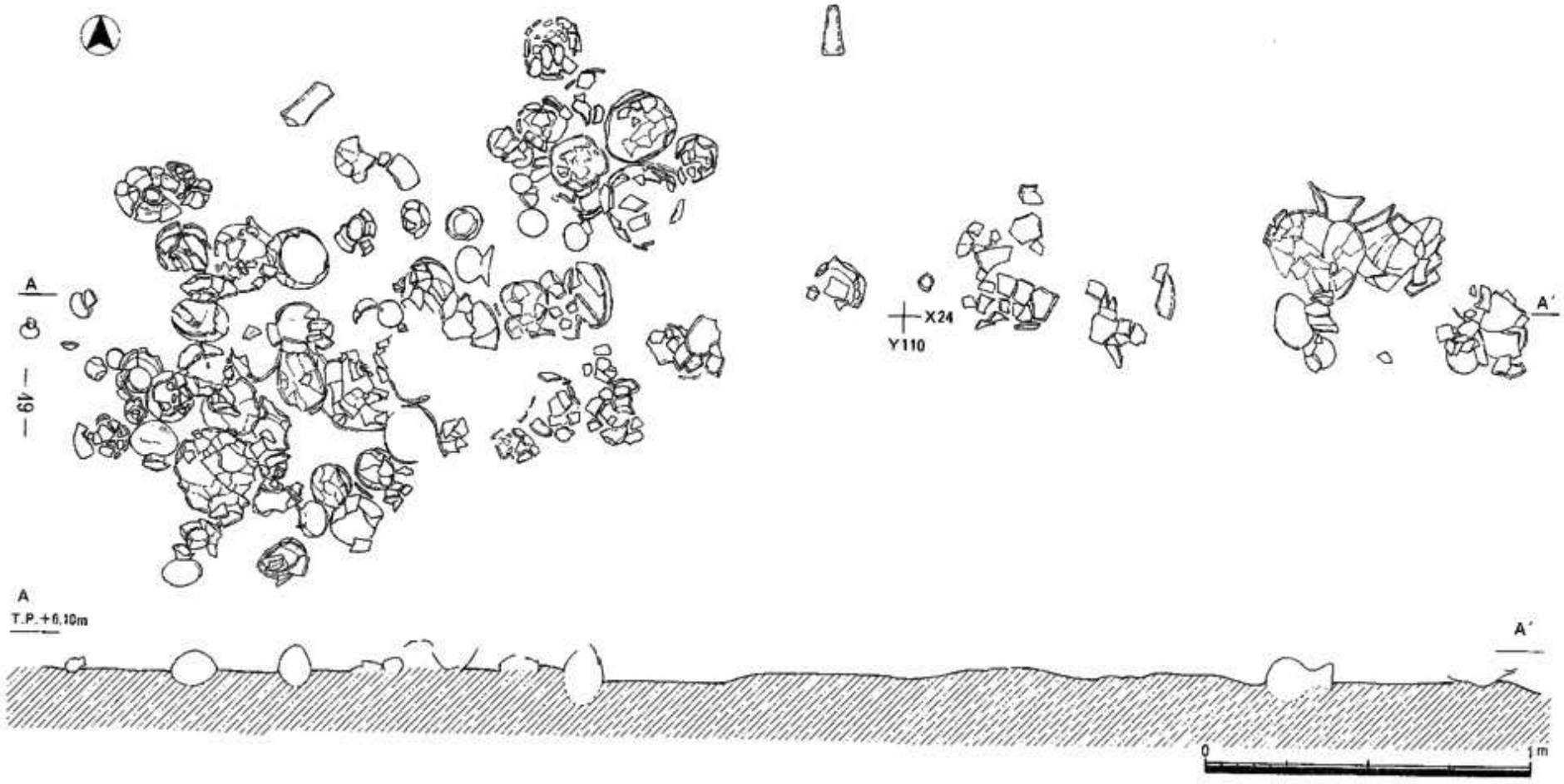
第1トレンチの南側に設定した調査地で東西幅62m、南北幅4mを測る。第1トレンチと同様、第4層及び第5層上面（第1調査面）と第7層及び第8層上面（第2調査面）を調査対象面とした。

＜第1調査面＞

第1トレンチで検出した奈良時代の土器を包含する第4層の広がりを追及する目的で調査を実施した。その結果、第4層が10cm前後の層厚を持って調査地全域に広がっていることが確認されたが、第5層上面においては顕著な遺構は検出されなかった。

＜第2調査面＞

第7層及び第8層上面を調査対象とした。その結果、現地表下1.8m前後（標高6.8m）付近に存在する第7層で古墳時代前期（布留Ⅰ期）の遺物包含層を確認したほか、第8層上面で古墳時代前期（布留Ⅰ期）の土器集積1箇所（SW－1）を検出した。



第4図　第2トレンチSW－1平断面図

土器集積（SW）

SW－1

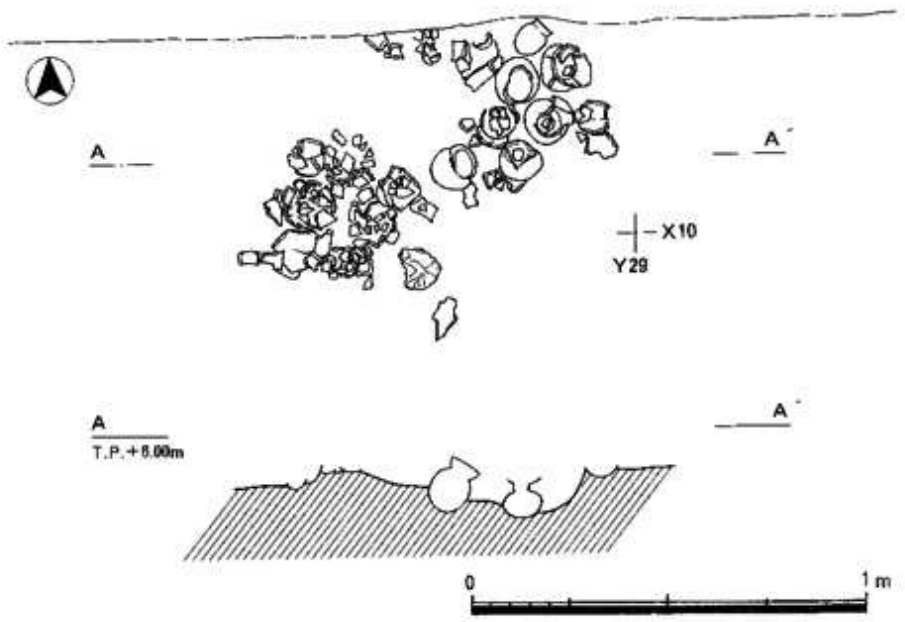
調査区東部の3K・3L区で検出した。東西幅4.6m、南北幅1.7mにわたって広がっている。第8層上面（標高6.0m前後）を構築面とするもので、土器類は第7層中に包含されている。SW－1の下部は、ほぼ平坦な面で、明瞭な掘形は認められない。検出時の状況から、土器類は重なり合うことなく平面的な広がりを持って置かれたことが推定され、しかも半数以上の土器類が正位に置かれていたようである。

SW－1を構成する遺物は、土器類では図化したもので61個体（22～82）のほか石製品として砥石1点（83）、棒状石製品1点（84）、管玉1点（85）が出土している。だだ土器類については、第7層として取り上げたものや、側溝の掘削時に出土したものを含めて本来は約200点余りの土器類が集積していたものと推定される。

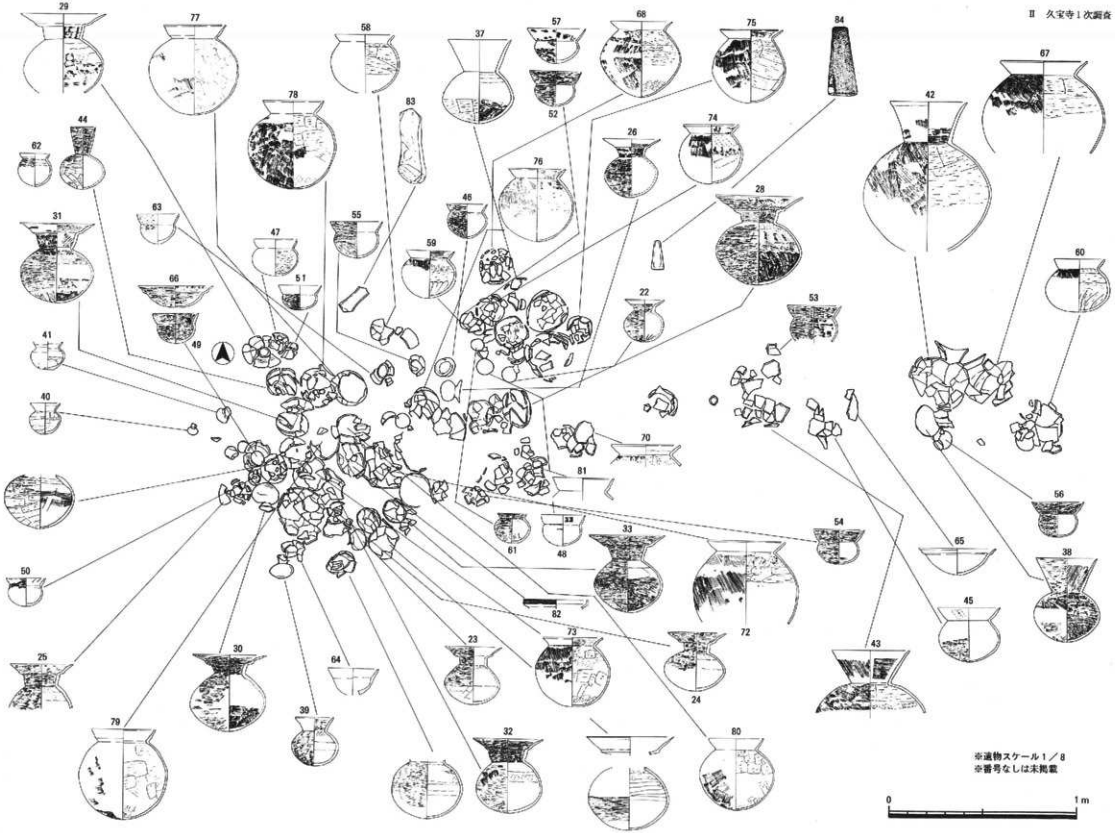
掲載した土器の内訳は、直口壺4点・複合口縁壺15点・細頸壺1点・小型壺21点・小型鉢5点・甕15点である。なお、管玉（85）は小型壺（52）から出土している。

・第3トレンチ

第1トレンチの西端から180m隔てた延長線に設定した調査区で、東西幅62m、南北幅4mを測る。このトレンチでは、第1・第2トレンチで確認された奈良時代の遺物を含む第4層の存在が認められないことから、第7層及び第8層上面を調査対象とした。その結果、現地表下2.3m前後（標高5.8m前後）に存在する第8層上面で、古墳時代前期（布留Ⅰ期）の土器集積1箇所（SW－2）を検出した。



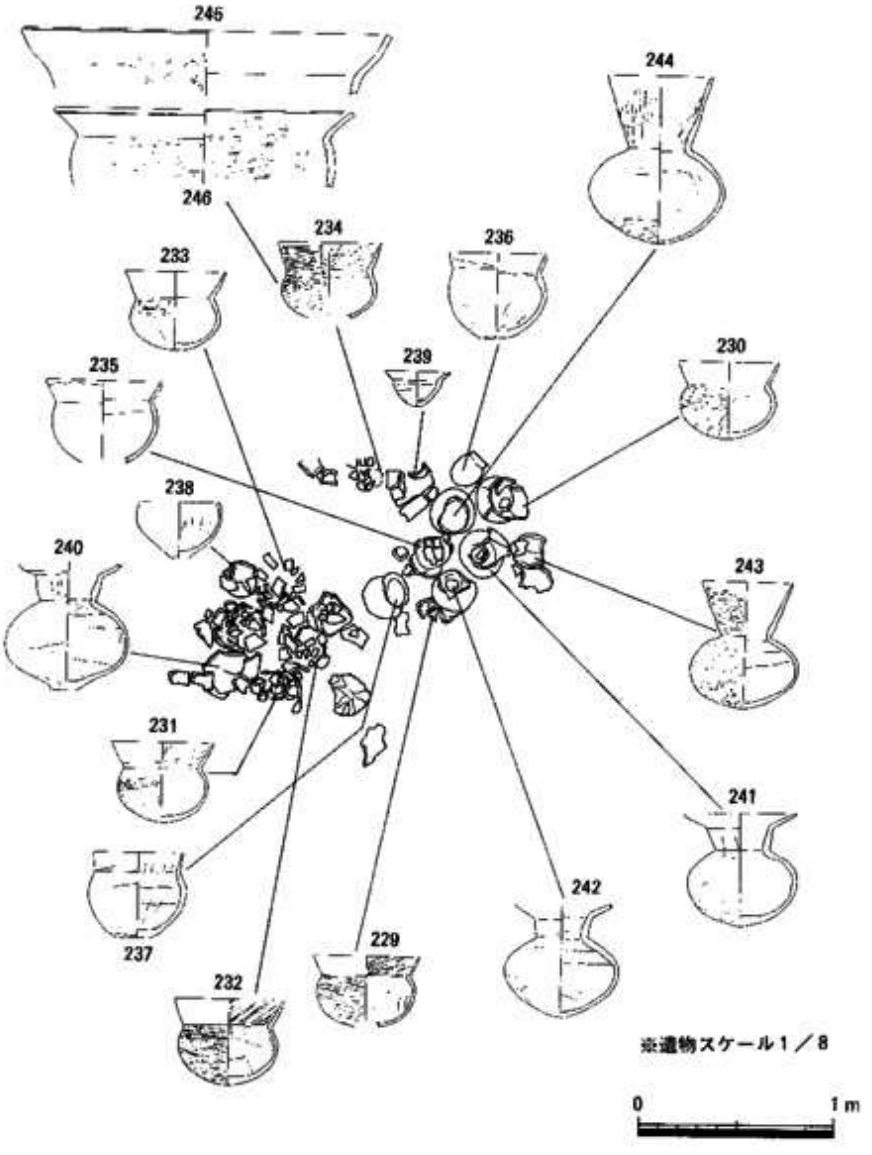
第5図　第3トレンチSW－2平断面図



第6図　第2トレンチSW－1出土遺物位置図

SW－2

1・2C区で検出した。東西幅1.0m、南北幅0.8mの範囲に広がっている。土器集積は18個（229～246）の土器類で構成されており、完存している土器で見る限りでは正位に置かれたものが多い。掘形は認められず第2トレンチで検出したSW－1と共通した特徴を示している。土器類の器種別の内訳は直口壺2点・複合口縁壺3点・小型壺9点・小型鉢2点・大型鉢2点で、壺類の割合が高く甕・高杯類の出土は皆無である。土器組成からみて、古墳時代前期（布留1期）に比定されよう。



第7図　第3トレンチSW－2出土遺物位置図

・第４トレンチ

調査地の南西部に設定した調査地で、東西幅49m、南北幅４mを測る。第３トレンチと同様、奈良時代の遺物を含む第４層が認められなかったことから、第７層及び第８層上面を調査対象とした。調査の結果、現地表下２m前後（標高6.1m前後）に存在する第８層上面で自然河川１条（NR－１）を検出した。

自然河川（NR）

NR－１

調査地の東端から約17m地点でNR－１の東岸を検出した。第８層上面で検出したが、本来の構築面は第６層上面である。検出した東岸の形状からみて、南東－北西方向に伸びるもので、検出部で幅30m以上、深さ1.4m以上を測る。埋土は細粒砂～粗粒砂で充填されており、水量が豊かで水流が速い河川であったことが窺われる。なお、調査地点から西約100m地点で大阪文化財センターが実施した『亀井北（その１）』の第６遺構面（古墳時代後期）で検出された自然河川２と同一の自然河川と考えられる。また、上流部分においては同敷地内の南部で当調査研究会が実施した調査（KH91－９）で確認されている。それらによれば、幅10～15m程度であることから、調査では幅30m以上を検出しているが、これらを考慮すれば調査地点が自然河川の屈曲部ないしは河川と調査地がほぼ平行する可能性が高い。遺物は『亀井北（その１）』の自然河川２およびKH91－９調査の河川においては、古墳時代前期の遺物が大半を占めるようであるが、一部古墳時代後期の遺物が出土している。本遺構からは、弥生時代中期から古墳時代前期（布留式期古相）に比定される土器類がコンテナ箱に２箱程度出土しているが、大半の遺物は古墳時代前期（布留式期古相）に比定されるもので、古墳時代後期に比定されるものは出土していない。以上からみて、この自然河川は古墳時代前期を中心としたもので、古墳時代後期に完全に埋没しその機能が停止したようである。図化した土器類は32点（269～300）である。

２）出土遺物

１．器種分類について

八尾市域が含まれる中河内地域においては、最近の発掘調査の増加に伴って庄内式期から布留式期に比定される土器類が天文学的な勢いで増えている。一部の器種については分類が行われており、編年案が示されているが各器種をすべて細分したうえで実施されたものでなく、一部の器種を中心とした概念的な位置付けが先行したかたちとなっている。しかしながら、土器組成から時空的な尺度となる土器編年を導くにあたっては、共通した土器分類を認識したうえで実施されることか必要不可欠である。従来のような個々の報告書ごとの土器分類では、共通した方向性を求めるうえで障害になることは言うまでもない。これらを踏まえて、本書では中

河内地域で概ね弥生時代後期末から布留式新相（須恵器出現期）に存在する土器類を分類対象とした。なお、搬入土器類についても、各地域との交流時期や新出性土器の出自にかかわる問題を内包しており、出土量が微量であっても敢えて分類対象とした。土器の分類に際しては、基本的には形態と技法を主な要素に決定したが、一部の土器については口縁部のみで分類したものも含まれている。

分類では、大別をABCD……、形態差による細分を1234……、細分の中での形態差および調整による細分をabcd……、器形の大小関係をⅠⅡⅢ（小→大）とした。但し、器形の大小関係については、出土した資料のなかで比較できるものがある場合のみ使用した。表記については、広口壺A_1－a－Ⅲ（凡例）のように示した。

それぞれの器種は形態上の系譜を重要視したつもりであるが、かならずしも整合性を持つものではない。如何せん、器種分類においては、恣意的な要素が内在する危険性を含んでおり、極めて不安定であることは言うまでもない、今後も補正が必要と考えられる。

2．器種分類

〔広口壺A〕　口頸部が短く外反するもの。

〔広口壺B〕　頸部が直上に伸びた後、口縁部が大きく外反する大型の壺。

〔広口壺C〕　口頸部が外反気味に大きく伸びる小型・中型品の壺。一部に紀伊系のものが含まれる。

〔広口壺D〕　頸部が直上に伸びた後、口縁部が屈曲ないしは外反する壺。

D_1　口縁端部に面を持つもの。

D_2　口縁端部が上下に拡張されるもの。

D_3　口縁端部が三角形を呈するもの。四国東部を中心に分布する壺。

〔広口壺E〕　拡張口縁部に棒状浮文や擬凹線文を加飾する。東海・近江地方を中心に分布する壺。

〔短頸壺A〕　体部に比して短めの口頸部が付く。

〔短頸壺B〕　口頸部が直上ないしは内彎気味に短く伸びる小型の壺。

〔長胴壺A〕　細長い体部に上外方へ伸びる口頸部を持つ。

〔短頸直口壺A〕　偏球形ないしは球形の体部にやや短めの口縁部が付く。

A_1　平底かそれに近い形をとる小型品。

A_2　A_1に比して大型品。

〔大型直口壺A〕　球形の体部に斜上方に外反ないしは直線的に伸びる口縁部が付く。器高が30cmを越える大型品。

〔直口壺A〕　球形の体部に上外方に直線的に伸びる口縁部が付く精製品の壺。

A₁ 体部に比してやや大きめの口縁部が付く。

A₂ A₁に比して長めの体部を持つ。

〔直口壺B〕 口頸部が内彎する小型・中型の壺。

〔直口壺C〕 口頸部が直上に短く内彎する小型・中型の壺。

〔細頸壺A〕 球形の体部に上外方へ長く直線的に伸びる口頸部が付く

〔複合口縁壺A〕 口縁部に粘土帯を垂下させる複合口縁壺。加飾を加えるものが多い。

A₁ 頸部と口縁部の境を肥厚させて段を強調するもの。

A₂ 粘土帯を垂下させ複合口縁とするもの。

〔複合口縁壺B〕 いわゆる二重口縁壺。

B₁ 頸部が直上へ伸びるもの。

B₂ 頸部が外反するもの。

B₃ 頸部が上外方へ直線的ないしはやや内彎気味に伸びるもの。

〔複合口縁壺C〕 吉備地方を中心に分布するもの。

〔複合口縁壺D〕 山陰・北陸地方を中心に分布するもの。

〔複合口縁壺E〕 二段に屈曲して上方へ直線的に伸びる口縁部を持つ大型・中型の壺。

E₁ 口縁部が直上方向ないしは内傾して大きく直線的に伸びるもので、厚手の大型品が多い。

E₂ E₁が小型化したもので、中型品が多い。口縁端部が肥厚するものもある。

〔複合口縁壺F〕 口縁部が直上に伸びる小型の壺。吉備地方を中心に分布する。

〔小型壺A〕 球形の体部に外反ないしは内彎気味に伸びる口縁部が付く。底部は平底である。

〔小型壺B〕 いわゆる小型丸底壺。

B₁ 口径と体部最大径がほぼ等しい。外面調整はヘラミガキ。布留Ⅳ期以降のものはハケナデ。

B₂ 口径が体部最大径を凌駕する。外面調整はヘラミガキ。

B₃ 半球形の体部に大きく開く口縁部が付くもの。外面調整はヘラミガキ。

B₄ B₃に比して体部高が増大したもの。外面調整はヘラケズりまたはハケナデ。

B₅ 体部が球形化し、体部最大径が口径を凌駕したもの。外面調整はハケナデ。

〔小型壺C〕 球形の体部に斜上方に短く伸びる口縁部が付く。

〔小型壺D〕 やや偏平な体部に上外方へ伸びる短く伸びる口縁部が付く。底部は小さな平底ないしは丸底である。

〔高杯A〕 弥生V様式の系譜を引く高杯。

A₁ 杯部下半が内彎気味に伸びた後、口縁部が大きく外反する。

A₂　水平な杯底部から口縁部が大きく外反する。

A₃　口縁部が外反せず直線的に伸びる。

A₄　A₃に比して杯部が深い。

A₅　A₄に比して小型化したもの。

A₆　杯部の屈曲部が丸味を帯びたもの。

A₇　杯部が半球形を呈するもの。

A₈　杯部が椀形を呈するもの。

A₉　口縁部が外半するもので、屈曲部に段や稜を有するもの。

A₁₀　A₉に比して大型の口縁部を持つ。

〔高杯B〕　二段に屈曲する杯部を持つ。

B₁　杯部上位で外折する口縁部を持つ。加飾を加えるものが多い。

B₂　杯部中位で外折し、口縁部が大きく広がるもの。

〔高杯C〕　椀形の杯部に低い脚部が付く。

C₁　深めの杯部を持つ。脚部径と口径がほぼ等しい。

C₂　浅めの杯部を持つ。脚部は大きく広がる。大半が精製品である。

〔高杯D〕　「ハ」の字形の脚部に逆三角形の杯部が付く。

D₁　脚部が低いもの。

D₂　D₁に比して脚部が高いもの。

〔高杯E〕　吉備地方を中心に分布する高杯。

E₁　二段に屈曲する杯部を持つ。

E₂　深めの杯部にやや低めの脚部が付く。

〔器台A〕　皿状の受部を持つもので、受部と脚部が貫通する小型の器台。

A₁　受部が斜上方に伸びるもので、端部は面を持つ。

A₂　受部端が直上に伸びる。

A₃　A₁・A₂に比して脚部が長い。

〔器台B〕　皿状の受部を持つもので、受部と脚部が貫通しない小型の器台。

B₁　やや深めの受部を持つ。

B₂　浅い皿状の受部を持つ。

B₃　B₂よりやや深めの受部を持つ。

〔器台C〕　いわゆる鼓形器台。

C₁　屈曲部に段を有する。山陰地方を中心に分布する。

C₂　屈曲部に段を持たないもの。

〔器台D〕　二段に屈曲する受部を持つ大型の器台。脚部は中空。加飾を加えるものが多い。

〔甕A〕　弥生V様式の系譜を引く甕

A_1　胴長の体部に突出する平底が付く。体部は二分割成形。

A_2　体部上位に最大径を持つ。底部は突出気味の平底。体部は二分ないしは三分割成形。

A_3　球形の体部に小さな平底が付く。体部は二分ないしは三分割成形。一部体部外面にヘラケズリを行うものがある。

〔甕B〕　いわゆる河内型庄内式甕。

B_1　体部上位に最大径を持つ。体部外面は三分割成形に沿ったタタキ（太めのタタキ1cm3／4）の後、縦方向に上位と下位を中心にハケナデを粗く施す。体部内面はヘラケズリ。底部は尖り底ないしは小さな平底。

B_2　体部中位よりやや上部に最大径を持つ。体部外面は右上がりの連続ラセンタタキ（中細のタタキメ1cm4／5本）。体部外面のハケナデは中位以下に粗く施される。底部は尖り底ないしは小さな平底。

B_3　体部中位に最大径を持つ。B_2に比してタタキメの幅がやや細く（1cm5／6）なると共に、体部外面の中位以下は密なハケナデによりタタキメが消されている。底部は尖り底ないしは丸底である。

B_4　体部はほぼ球形にちかくなる。体部外面のタタキメは極細（1cm7／8）になり、中以上ないしは上位のみに施される。ハケナデもタタキメが施されている部分のみで、中位以下には施されなくなる。底部は丸底である。

〔甕C〕　いわゆる大和型庄内式甕。

〔甕D〕　布留式影響の庄内式甕。形態は甕B_4と同様であるが、体部外面がハケナデによる調整が行われるもの。内底面に指頭圧成形を行うものがある。

〔甕E〕　布留式傾向甕。布留式甕の属性の一部を持つ甕を総称した。他地域からの搬入品も多く、形態はバラエティーに富む。

〔甕F〕　いわゆる布留式甕。

F_1　口縁屈曲部の彎曲化と口縁端部が丸味を持って肥厚するほか、体部外面上位の水平方向のハケナデを特徴とする。内底面に指頭圧痕を残し、ケズリが屈曲部に及ばない。

F_2　口縁端部の内部肥厚が内傾し面を持つ。

F_3　口縁部が上外方に伸びる。体部外面全体に不整方向のハケナデが行われるものが多くなる。

〔甕G〕　甕F_3と形態は同様であるが、口縁端部が肥厚せず直口のもの。

〔甕H〕　体部外面に粗いタタキを施すもので、底部は平底ないしは尖り底である。淀川北部を中心に分布する。摂津系の甕。

〔甕I〕　口縁部は屈曲外反する。体部は最大径が上位にあるもので、体部外面には縦方向のハケナデを多用する。底部は突出しない平底である。吉備地方を中心に分布する。

〔甕J〕　口縁部が直上に伸びる甕。吉備地方を中心に分布する。

J₁　口縁端部外面が無文のもの。底部は平底である。

J₂　口縁端部外面に擬凹線を巡らす。体部上位に最大径を持つ。底部は平底である。

J₃　口縁端部外面に櫛描直線文を施す。体部の上位に最大径を持つ。底部は平底である。

J₄　口縁端部外面に櫛描直線文を施す。体部の中位に最大径を持つ。底部は丸底である。

〔甕K〕　山陰地方を中心に分布する甕。

〔甕L〕　北陸地方を中心に分布する甕。

〔甕M〕　四国東部地方を中心に分布する甕。

M₁　讃岐系の甕。

M₂　阿波系の甕

〔甕N〕　東海地方を中心に分布する甕。

〔甕O〕　近江地方を中心に分布する甕。

〔鉢A〕　弥生V様式の系譜を引く鉢。

A₁　体部が斜上方に大きく開く。底部は突出した平底。

A₂　体部が上外方に伸びる。A₁に比して小型である。

〔鉢B〕　直口の口縁部を有する。体部は内彎気味に伸びる。底部は突出平底。

〔鉢C〕　突出気味の底部から体部が斜上方に伸びる。口縁部は直口のものとわずかに外反するものがある。

〔鉢D〕　吉備地方を中心に分布する小型の鉢。

〔鉢E〕　半球形の体部に直口ないしは小さく屈曲する口縁部が付く小型の鉢。

E₁　直口の口縁部を持つ。

E₂　口縁部が小さく屈曲するもの。

〔鉢F〕　口縁部は斜上方に直線的に伸びる。体部は半球形で底部は尖り気味の小型鉢である。

〔鉢G〕　半球形の体部に小さく上外方ないしは斜上方に伸びる口縁部が付く小型鉢である。

G₁　口縁部が斜上方に伸びる。体部の上位から底部にかけて鱗状にヘラケズリを施す。

G₂　口縁部が内彎気味に伸びる。

〔鉢H〕　半球形の底部に短く斜上方に伸びる口縁部が付く、精製品の小型鉢。

H₁　口縁部が内彎気味に伸びるもの。

H_2　口縁部が二段に屈曲するもの。

〔鉢I〕　口縁部が二段に屈曲する鉢。山陰地方を中心に分布する。

I_1　口径20cm前後の中型品。

I_2　口径30cm以上の大型品。

〔鉢J〕　直口の口縁部が斜上方に伸びる大型の鉢。

J_1　底部がわずかに突出した平底を呈するもの。

J_2　底部が水平なもの。

〔鉢K〕　口縁部が直上に伸びる鉢。小型品・大型品がある。吉備地方を中心に分布する。

〔鉢L〕　四国系の小型鉢。

〔台付き鉢A〕　逆円錐状の体部に高台が付くもの。

A_1　口縁部が屈曲するもの。

A_2　直口の口縁部を持つもの。

〔台付き鉢B〕　半球形ないしは皿状の受部に小さい高台が付く。山陰地方を中心に分布する。

B_1　受部が浅い椀形を呈するもの。

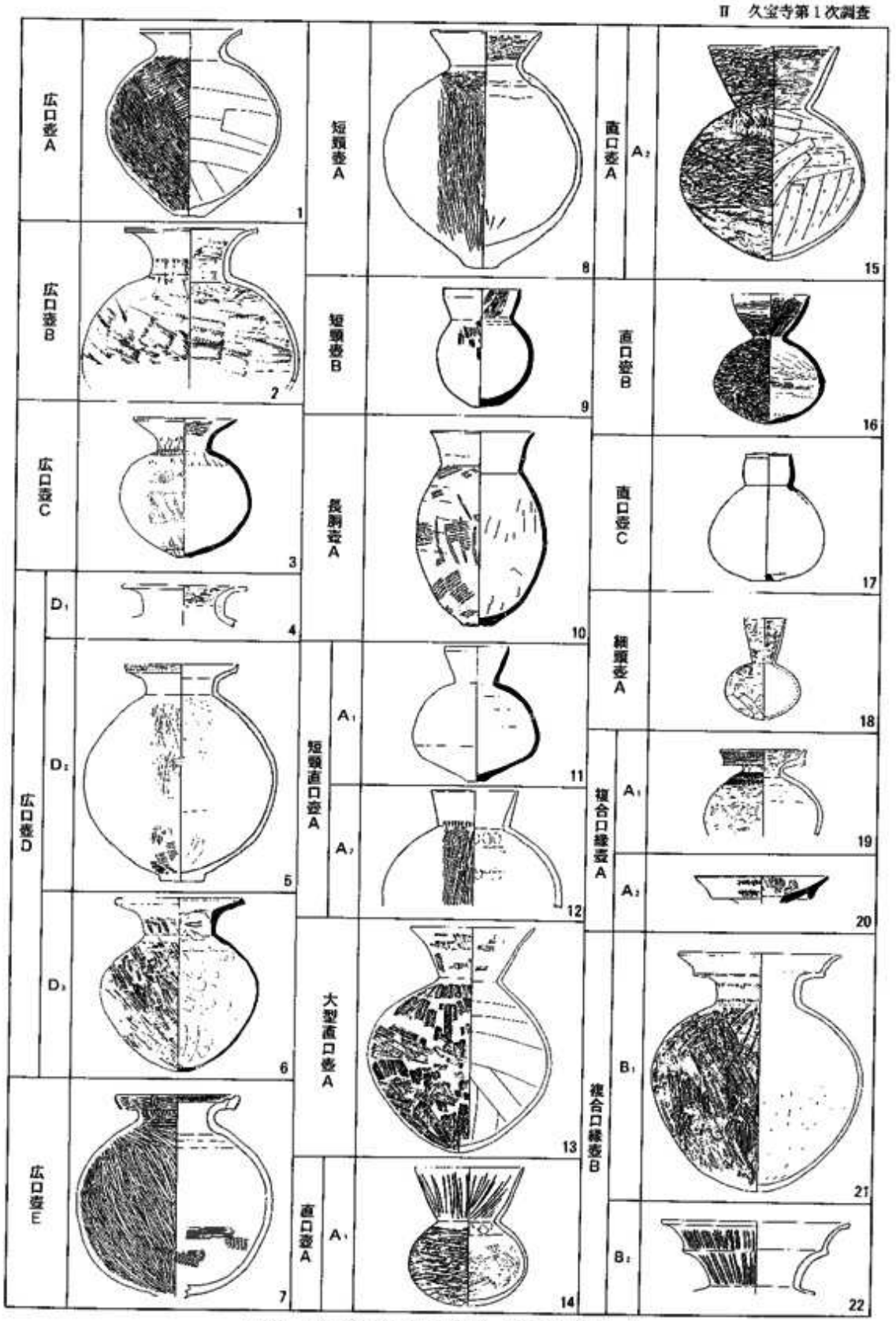
B_2　受部が皿状を呈するもの。

〔有孔鉢A〕　突出した底部を有するもの。

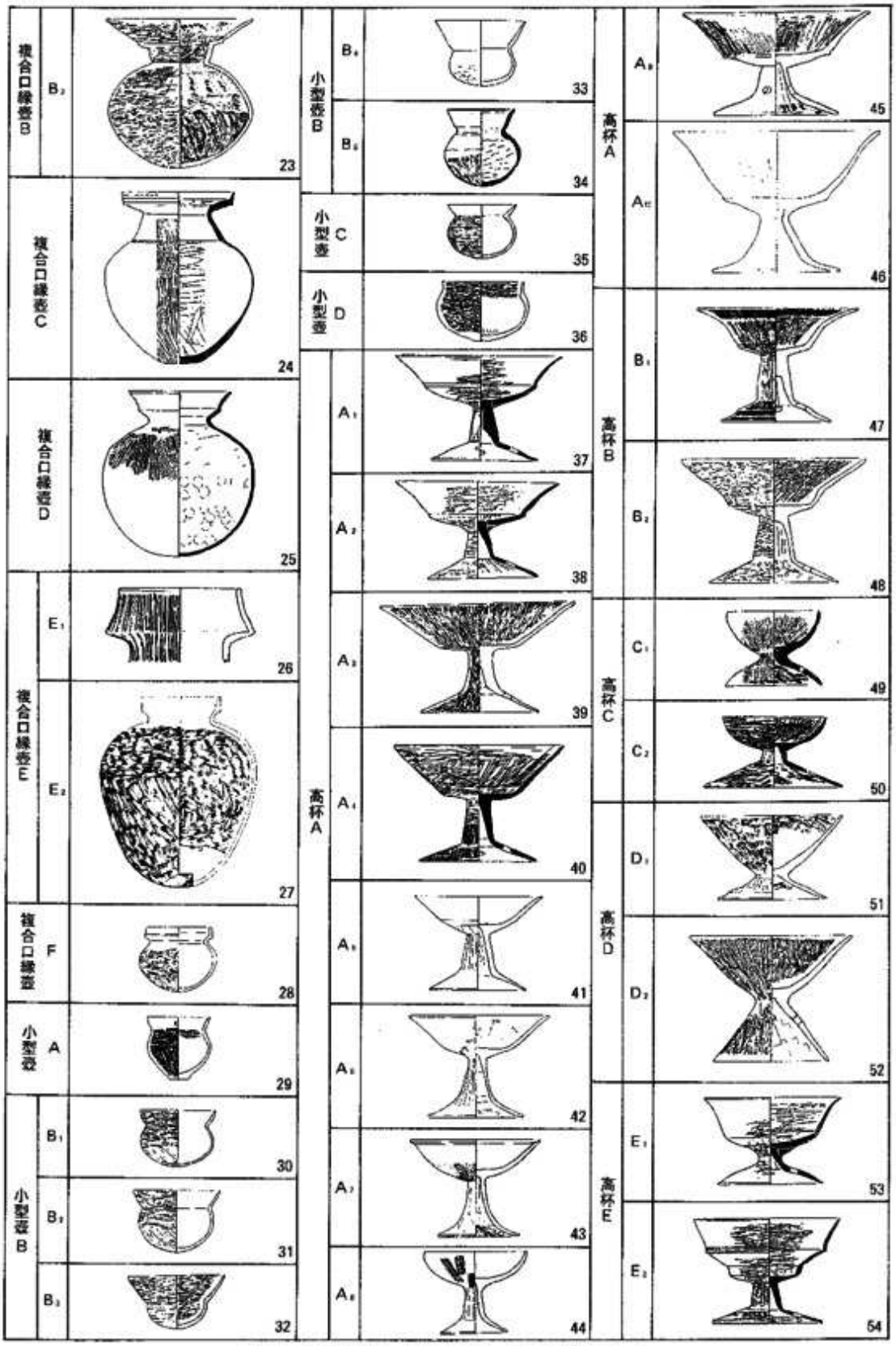
〔有孔鉢B〕　丸底の底部を有するもの。

〔手焙形土器A〕　覆部と体部の境に補強粘土を貼り付け突帯とするもの。

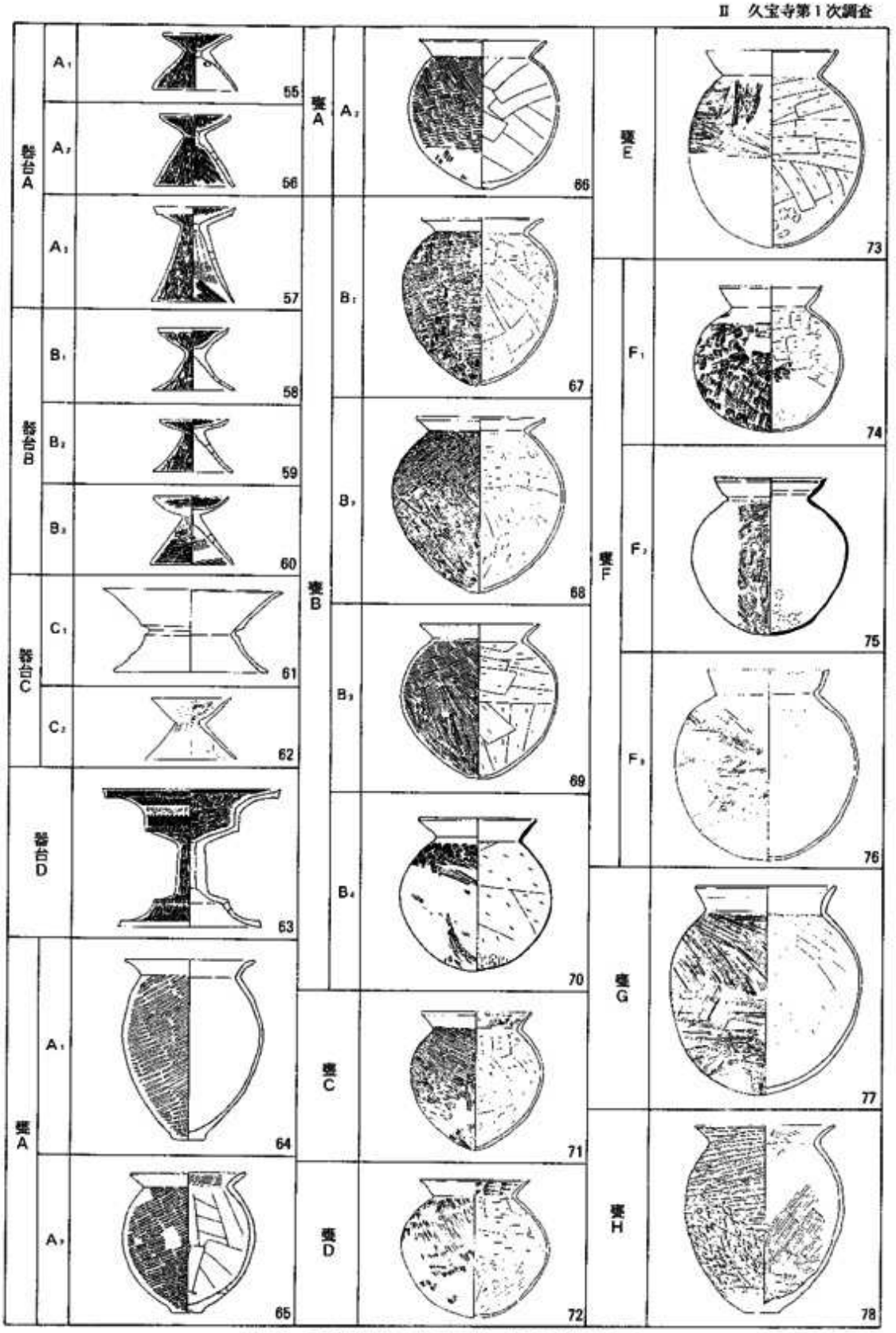
〔手焙形土器B〕　覆部と体部が一体化したもの。



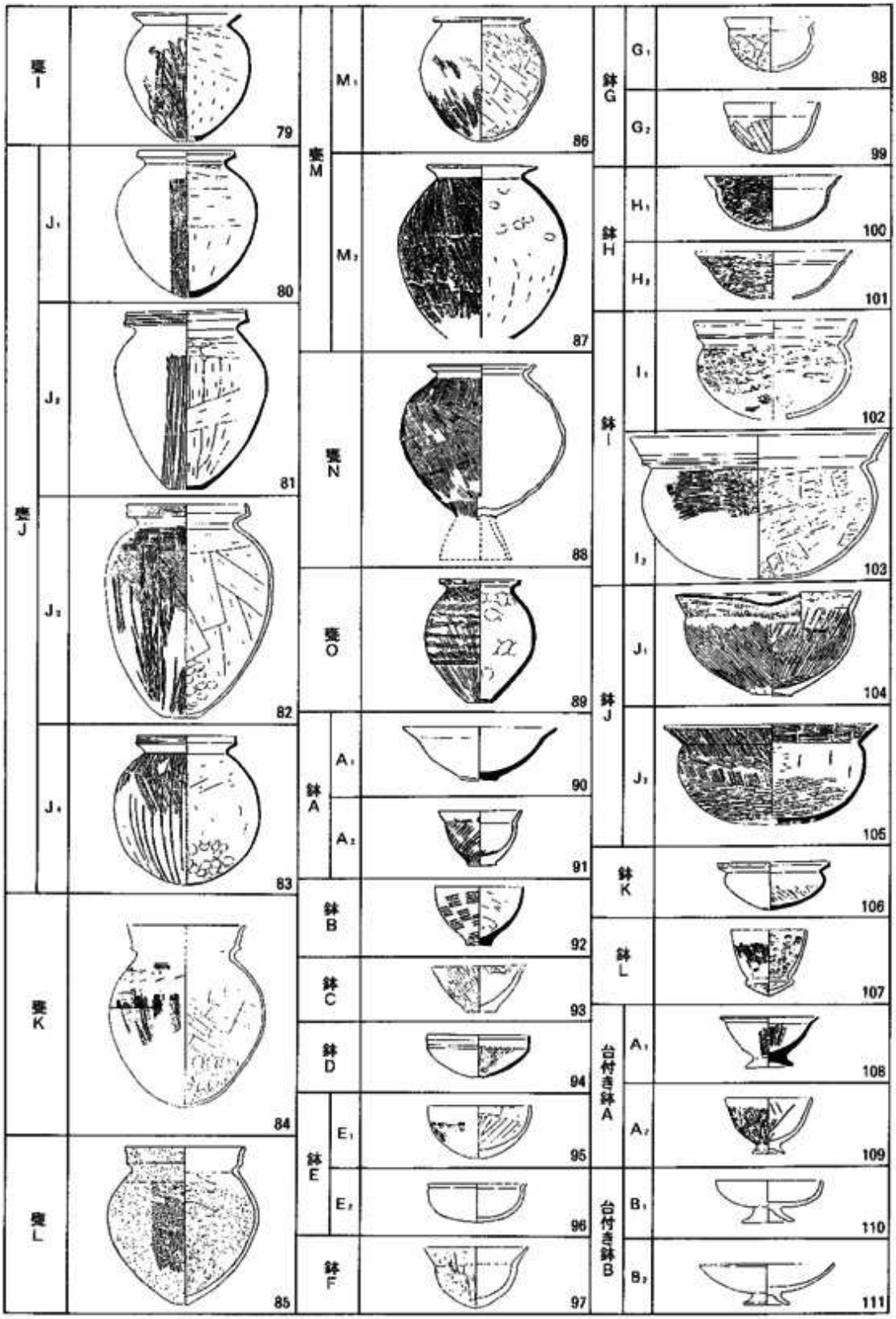
第1表　中河内地域における庄内式・布留式土器分類－1



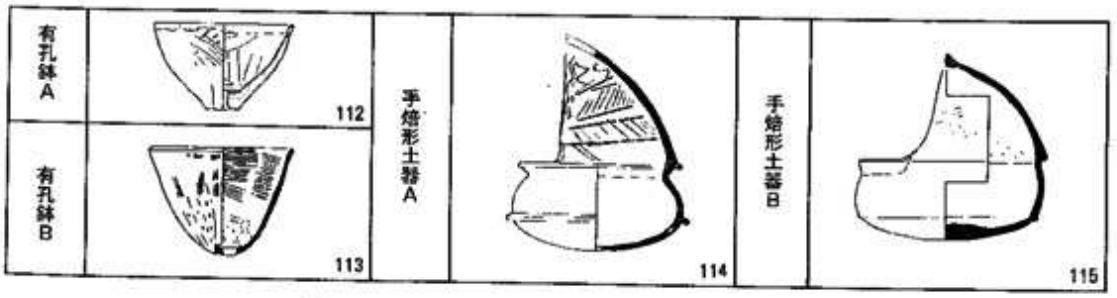
第2表　中河内地域における庄内式・布留式土器分類－2



第3表　中河内地域における庄内式・布留式土器分類－3



第4表　中河内地域における庄内式・布留式土器分類－4



第5表　中河内地域における庄内式・布留式土器分類－5

分類土器一覧

小阪合遺跡　㈱八尾市文化財調査研究会『小阪合遺跡＜昭和57年度　第1次調査報告書＞』㈱八尾市文化財調査研究会報告10　1987
SK－14　(44)
落ち込み7（61・100）

〃　㈱八尾市文化財調査研究会『小阪合遺跡＜昭和58年度　第2次調査・第3次調査報告書＞』㈱八尾市文化財調査研究会報告11　1987
SD－314　（7・13）
SD－316　（36・39・47・55・56・57・58・59・60・63・65・66・69・82）
SD－321　（1・29・64）
落ち込み26（22・41）

〃　㈱八尾市文化財調査研究会『小阪合遺跡＜昭和59年度　第4次調査報告書＞』㈱八尾市文化財調査研究会報告15　1988
SD－1　（14・15・30・32・35・42・48・52・73・95・96・97・99・101・110・111）

〃　㈱八尾市文化財調査研究会『小阪合遺跡＜昭和61年度第8次　昭和62年度第10・13次昭和63年度第16次調査報告＞』八尾市文化財調査研究会報告26　1990
SK－5（第8次）　(27)

中田遺跡　八尾市教育委員会『昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報』　1981
土坑　（3・24・37・38・53・54・79・80・81・94・106）

〃　八尾市教育委員会『八尾市文化財紀要2』　1986
土坑2　(21)

〃　八尾市教育委員会『八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ』1988
C・Eグリッド　(26)

成法寺遺跡　八尾市教育委員会『成法寺遺跡』－八尾市光南町1丁目29番地の調査－　1983
SW－1　（2）

〃　大阪府教育委員会『成法寺遺跡発掘調査概要Ⅰ』－八尾市南本町所在－　1986
SE－2　（12・85）

東弓削遺跡　本書掲載
SD－1　（4・19・51・67・68・71・78・98）

美園遺跡　㈱大阪文化財センター　『美園』　1985
BSD345　(33)
CSD319　（5）
DSK306　（8・107・112）
DSD304　(93)

庄内包含層　(91)

亀井北遺跡　㈱大阪文化財センター　『亀井北（その1）』　1986
SD8021　(20・50)
2号墓北西周溝　(6)
3号墓　(9・16)
土器群Ⅳ　(40)

萱振遺跡　大阪府教育委員会　『萱振遺跡発掘調査概要Ⅰ』　1983
SE－3　(10・25・83・87)
〃　㈱八尾市文化財調査研究会『萱振遺跡発掘調査概要報告』㈱八尾市文化財調査研究会報告20　1990
SD－101　(45)

久宝寺遺跡　本書掲載
SW－1　(18・23・31・74)
第2トレンチ7層　(62・72・102・103)
第2トレンチ8層　(28)

八尾南遺跡　八尾南遺跡調査会『八尾南遺跡』　1981
SE－1　(46)
SE－5　(77)
SE－23　(104・109)
SE－26　(43・76)
〃　大阪府教育委員会『八尾南遺跡発掘調査概要・Ⅱ』　1991
井戸6　(88)
井戸9　(86)

東郷遺跡　八尾市教育委員会『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981』　1983
第5次調査　SE－5　(70)
第9次調査　SK－2　(105・113)
〃　SE－1上層　(92・108)

瓜生堂遺跡　㈱大阪文化財センター『瓜生堂』　1980
古墳時代前期下層　(49・90・114)
溝224　(115)

恩智遺跡　瓜生堂遺跡調査会『恩智遺跡Ⅲ』　1981
SD－25　(34)
SD－27　(75)

北鳥池遺跡　芋本隆裕「北鳥池遺跡出土土器の再整理」『東大阪市遺跡保護調査会年報1979年度』　1980
下層　(11)

加美遺跡　田中清美「加美遺跡1号方形周溝墓出土庄内式土器」『八尾市文化財紀要3』1988
1号方形周溝墓　(17)

西岩田遺跡　㈱大阪文化財センター　『西岩田』　1983
Bトレンチ河川Ⅰ　(84)

崇禅寺遺跡　大阪府教育委員会　『崇禅寺遺跡発掘調査概要Ⅰ』
Ⅱ区土器溜　(89)

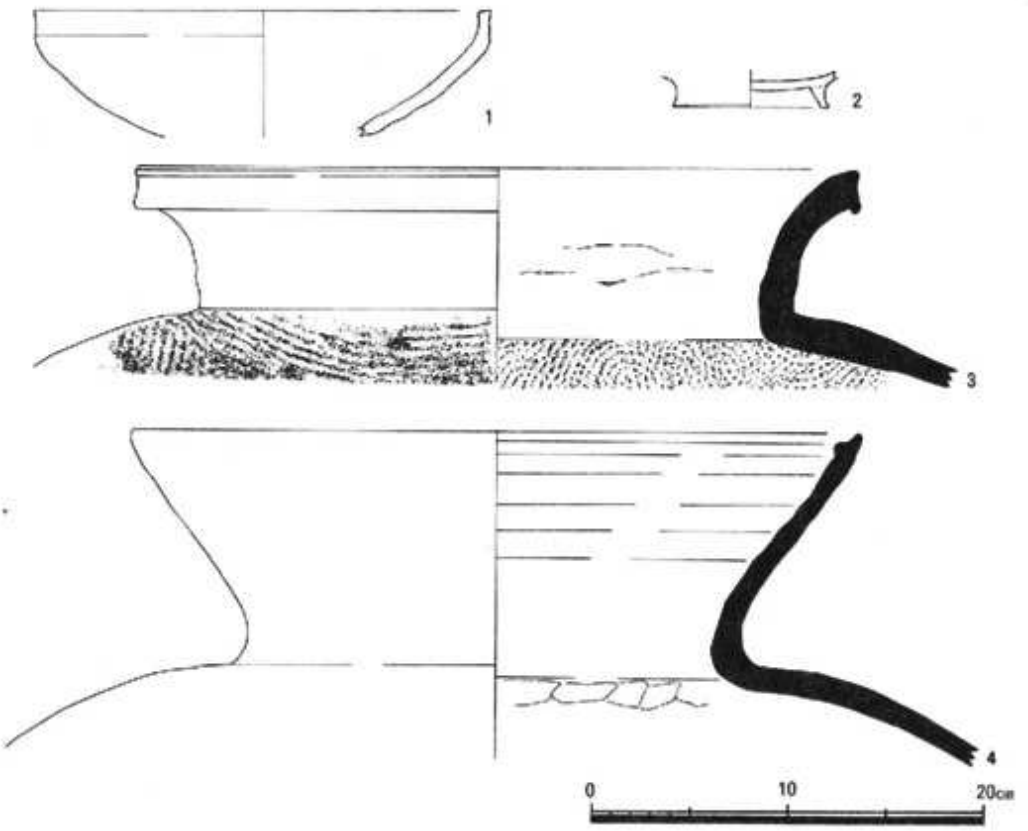
3）各トレンチの出土遺物

第1トレンチ　第4層出土遺物

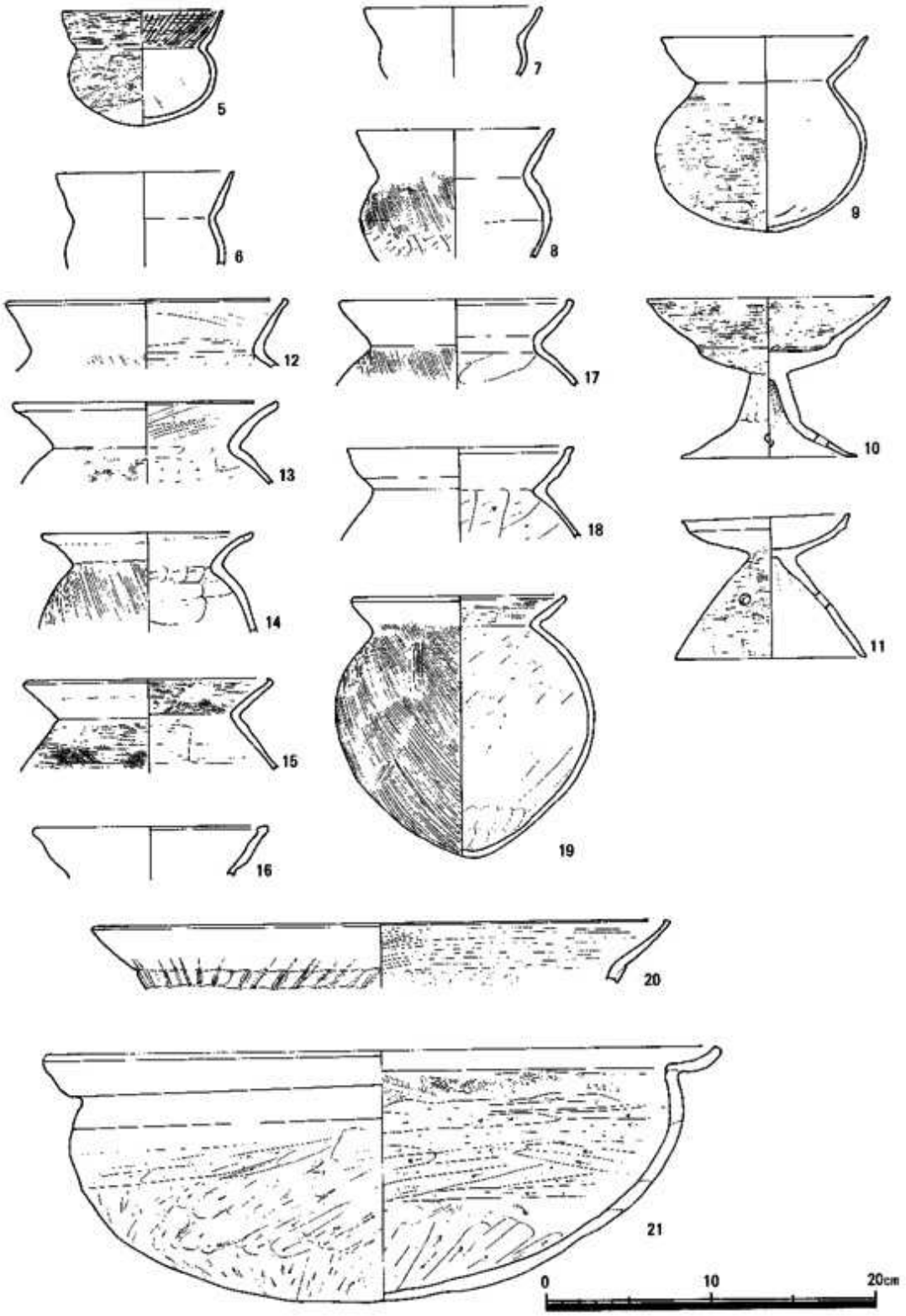
図化した土器類の総数は4点（1～4）である。その内訳は、土師器－鉢1点（1）、椀1点（2）、須恵器－甕2点（3・4）である。いずれも、破片であるため全容を知り得たものはない。（1・3・4）は奈良時代に、（2）平安時代に比定されよう。

第1トレンチ　第7層出土遺物

図化した土器類の総数は17点（5～21）である。小型壷B_1は口径10.0～12.0cm、器高7.0～9.0cmを測る（5～8）を小型壷B_1－Ⅰに、口径12.5cm、器高11.9cmを測る（9）を小型壷B_1－Ⅰとした。甕D（12～15・19）は布留式影響庄内甕である。（17・18）布留式傾向甕で、（17）を甕E_1に（18）を甕E_2に分類した。（16）は口縁部のみの資料であるが、布留式甕Fと推定される。（10）は小型高杯で高杯A_1－Ⅰとした。（11）は小型器台で器台B_2である。（20・21）は大型の鉢である。（20）は口縁部のみの資料で、口縁部と体部の境に粘土紐を貼り付けた後、櫛状工具による刻み目を施す。（21）は丸底の底部を有するもので、鉢J_2に分類した。



第8図　第1トレンチ第4層出土遺物実測図



第9図　第1トレンチ第7層出土遺物実測図

第2トレンチSW－1出土遺物

図化した土器類および石器類の総数は64点（22～85）である。

・複合口縁壷B　B_1（36）、B_2（35・41）、B_3（22～34）

（36）は頸部が直上に短く伸びた後、二段に屈曲する口縁部を持つものである。体部外面にハケナデ調整が行われている。（35）は頸部から口縁部が外反して伸びる複合口縁壷B_3で、口縁部下半に明瞭な稜を有する。（41）はミニチュアの壷で底部は平底を呈する。複合口縁壷B_3（22～34）は偏球形ないしは球形の体部から、頸部が直上ないしは上外方へ伸びた後、二段に屈曲する口縁部が付くもので、頸部高が高いほど頸部の立ち上がり角度が大きくなる特徴を持っている。茶色～赤茶色系の明るい色調を呈する精製品が大半で、外面には横方向にヘラミガキを密に施しているものが多い。器形の大きさから、口径8.5cm前後、器高9.0cm前後の小型品をⅠ類（22）、口径12cm前後、器高12cm前後の中型品をⅡ類（23～26）、口径14～18cm、器高16～19cmの大型品をⅢ類（27～34）に区別した。

・直口壷A_1（37・38）

球形の体部に上外方へ直線的に伸びる口頸部が付く直口壷である。（37・38）は共に外面の体部に密なヘラミガキを施す精製品である。

・直口壷A_2（39・40）

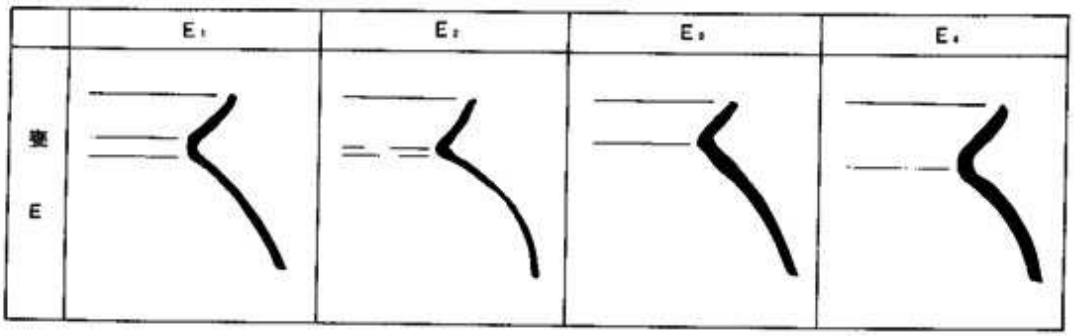
球形の体部にやや短めの口頸部を持つ直口壷である。口径6.4cm、器高6.7cmを測る小型品の（40）をA_2－Ⅰに、口径8.0cm、器高10.3cmを測る中型品の（25）をA_2－Ⅱに区別した。

・大型直口壷A（42・43）

中位の最大径を持つ球形の体部に、上外方に外反ないしは直線的に伸びる口頸部が付く大型の直口壷である。（42・43）は共に生駒西麓（恩智）の胎土を有する。

・細頸壷A（44）

球形の体部に上外方に長く直線的に伸びる口頸部が付く。明るい色調を呈する精製品である。他に類例が少ない器種である。



第6表　甕E分類表

・小型壷B_1（45～47）

球形の体部に上外方へ伸びる口縁部が付くもので、口径と体部最大径がほぼ等しい小型の壷である。口径8～9㎝、器高7.5㎝前後を測る（46・47）を小型壷B_1－Ⅰに、口径13.2㎝、器高11.9㎝を測る（45）を小型壷B_1－Ⅱとした。

・小型壷B_2（48～57）

半球形の体部に上外方に内彎ないしは直線的に伸びる口縁部が付くもので、口径が体部を凌駕する小型の壷である。明るい色調を呈し、外面にヘラミガキを密に施す精製品が大半を占めるが（48・50・57）のようにやや粗い胎土で、外面にハケナデを多用するものもある。

・小型壷C（58～62）

球形の体部に斜上方へ短く伸びる口縁部が付くもので、体部の最大径が口径を凌駕する小型の壷である。口径6.0㎝前後、器高6～7㎝を測る小型のもの（61・62）を小型壷C－Ⅰに口径10～13㎝、器高10～12㎝を測る（58～60）を小型壷C－Ⅱとした。小型壷C－Ⅰ類は明るい色調を呈する精製品で、体部外面はヘラミガキが施されている。小型壷C－Ⅱの（59・60）は体部外面の上位にハケナデ調整が施されているもので、胎土はやや粗い。

・鉢F（63・64）

尖り底を呈する体部に、上外方ないしは斜上方にやや内彎気味に伸びる口縁部が付く小型の鉢。精製品の（63）とやや粗製品の（64）がある。

・鉢H_1（65・66）

椀形を呈する体部に二段に屈曲する口縁部が付く小型で精製品の鉢である。

・甕B_1（67）

ほぼ球形の体部に、「く」の字に鋭く屈曲する口縁部が付くもので、体部外面の上半に右上がりの極細のタタキを施した後、ハケナデ調整を行う甕である。河内型庄内式甕のなかで最も新しいタイプの甕にあたる。

・甕D（68～76）

形態的には庄内式甕の系譜を引くものであるが、体部外面を縦位方向にハケナデ調整を行う点や（68）のように底部内面に指頭圧成形の圧痕が遺存するなどの新出技法の萌芽が認められる甕である。

・甕F_1（77～81）

口縁屈曲部の彎曲化、口縁端部の内部肥厚、体部外面上半における横方向のハケナデ調整への指向変化や底部内面に指頭圧成形の圧痕を残す等の特徴を具備した布留式最古の甕である。

・甕J_1（82）

口縁部がほぼ直上に伸びるもので、口縁端部に櫛描直線文施す吉備系の甕である。

・砥石（83）

幅4.6～6.0cm、長さ16.1cm、重さ245ｇを測るもので、4面に使用面がある。乳白色の色調で材質は泥岩である。

・棒状石製品（84）

一部の欠損箇所を除いてほぼ全容を知ることができる資料である。上部径3.2cm、下部径6.2cm、長さ14.9cm、重さ760ｇを測る円筒形の石製品である。上下面及び側面は丁寧に研磨されており、全体に精美な作りである。材質は淡緑色を呈する砂岩である。財大阪文化財センターが実施した久宝寺南（その2）でも類似した石器が出土している。その資料には底面に赤色顔料が付着していることから、底面を擦り面とする乳棒状の擦り石と推定されている。材質は緑泥片岩で本資料とは異なる。

・管玉（85）

小型壷（52）内から出土した。全長1.5cm、直径0.4cm、重さ500ｇを測るもので、全面が丁寧に研磨されている。穿孔は一方から穿たれている。材質は淡緑色を呈する緑色凝灰岩である。

第2トレンチ　第7層出土遺物

図化した土器類の総数は126点（86～211）である。第7層の出土遺物とした土器群はSW－1を上器集積と認識する以前に取り上げてしまったものや、SW－1の北側と南側の側溝掘削時に出土したもので、本来はSW－1を構成する土器群である。

・直口壷A_1（86～89）、A_2（90）

（86～89）は全容を知り得たものはないが、いずれも球形の体部に上外方へ直線的に伸びる直口壷A_1と推定される。（90）は口頸部高に比して長めの体部を持つ直口壷A_2である。

・小型壷A（96）

底部が突出した平底を呈するもので、口縁部は直上に伸びる。手づくねの小型品である。

・小型壷B_1（91～95・97～103）

球形の体部に上外方へ伸びる口頸部を持つもので、口径8～10cm、器高7.5cm前後を測るものを小型壷B_1－Ⅰ（97～103）に、口径13cm前後、器高12cm前後のものを小型壷B_1－Ⅱ（91～95）とした。概ね明るい色調を呈し、体部外面に密なヘラミガキを施す精製品であるが、（95）は体部外面にハケナデを施すもので胎土もやや粗い。

・小型壷B_2（104～108）

半球形の体部に上外方へ内彎ないしは直線的に伸びる口縁部を持つもので、口径が体部径を凌駕する小型の壷である。

・小型壷D（109）

球形でやや深めの体部にゆるゆかに外反する口縁部が付くもので、口縁端部外面に沈線状が巡る。体部外面の中位の相対する位置に刺の圧痕が遺存している。

・複合口縁壺B_3（110～129）

いずれも明るい色調を呈する精製品で、体部外面は下半がケズリ、中位以上は横方向のヘラミガキを密に施すものが大半を占める。体部内面はナデ、ハケナデ、ケズリの3種の調整方法が認められる。器形の大きさから口径13～14cm、器高12～14cmの中型品をⅡ類（110～113・122・124）、口径15～17cm、器高17cm前後の大型品をⅢ類（114～121・123・125～129）に区別した。

・大型直口壺A（130～138）

全容を知り得るものはないが、球形の体部から上外方へ直線的に長く伸びる口頸部が付く大型の直口壺である。いずれも、褐色系の色調を呈するもので生駒西麓産である。

・高杯A_4（139・140）

（139）は杯部で、杯部外面に密なヘラミガキが施されている。（140）は脚部で、柱状部外面に横方向のヘラミガキ、裾部外面にハケナデが施されている。

・器台B_3（141～143）

3点が出土したが、全容を知り得たものはない。（141）は受部、（142・143）は脚部である。

・器台C_2（154・155）

いわゆる鼓形器台と呼ばれるものである。布留式古相に出現する器種の一つである。

・鉢F（150）

底部が尖り気味になる小型の鉢である。やや粗製である。

・鉢H_1（148・149）、H_2（144～147）

鉢H_1（148・149）は半球形の体部に内彎気味に伸びる口縁部が付く中型の鉢である。口径17.6～23.5cm、器高10cm前後を測るもので、小型鉢と区別するため鉢H_1－Ⅱとした。鉢H_2（144～147）は椀形の底部に二段に屈曲する口縁部が付く小型鉢である。いずれも明るい色調を呈する精製品で、体部外面に密なヘラミガキが施されている。

・鉢I_1（151）、I_2（152・153）

（151）は口縁部が二段に屈曲するもので、口径20cm、器高12cm 前後を測る中型の鉢。（152・153）は口径30～40cm、器高22cm前後を測る大型の鉢で、山陰地方からの搬入品である。

・甕A_3（156）

体部外面に左上がりのタタキを施すV様式系甕と推定されるが、小破片であるため詳細はは不明である。

・甕B_4（157～176）

体部の中位に最大径を持つもので、底部は丸底である。口縁部は鋭く屈曲し端部が上方へつまみ上げられている。体部外面上位に右上がりの極細のタタキを施した後、上位から中位にかけてハケナデを施こす。(173) は左上がりのタタキが施されている。

・甕D (177～182)

形態的には甕B₄と同様であるが、外面体部の上位から中位にかけてハケナデを行うものである。(179・181) 底部内面に指頭圧痕が遺存する。

・甕E₂ (183・184)、E₃ (185・186)、E₄ (187)

いわゆる布留式傾向甕である。甕E₂ (183・184) は球形の体部に丸味を持って屈曲する口縁部が付く。口縁部は内彎気味に伸びた後、口縁端部が外反し尖り気味で終わる。甕E₃ (185・186) は丸味を持って屈曲する口縁部が付くもので、端部は外傾する面を持つ。甕E₄は丸味を持つて屈曲する口縁部が内彎気味に伸びるもので、端部上方へつまみ上げられる。

・甕F₁ (188～205)

いわゆる布留式甕で18点を図化した。球形の体部に丸味を持って屈曲する口縁部が付くもので、口縁端部は内側に肥厚する。外面体部は上位が横方向のハケナデ、以下は縦方向のハケナデを施す。内面は底部に指頭圧痕が遺存するもので、中位から屈曲部近くまでヘラケズリが行われている。

・甕K (206・207)

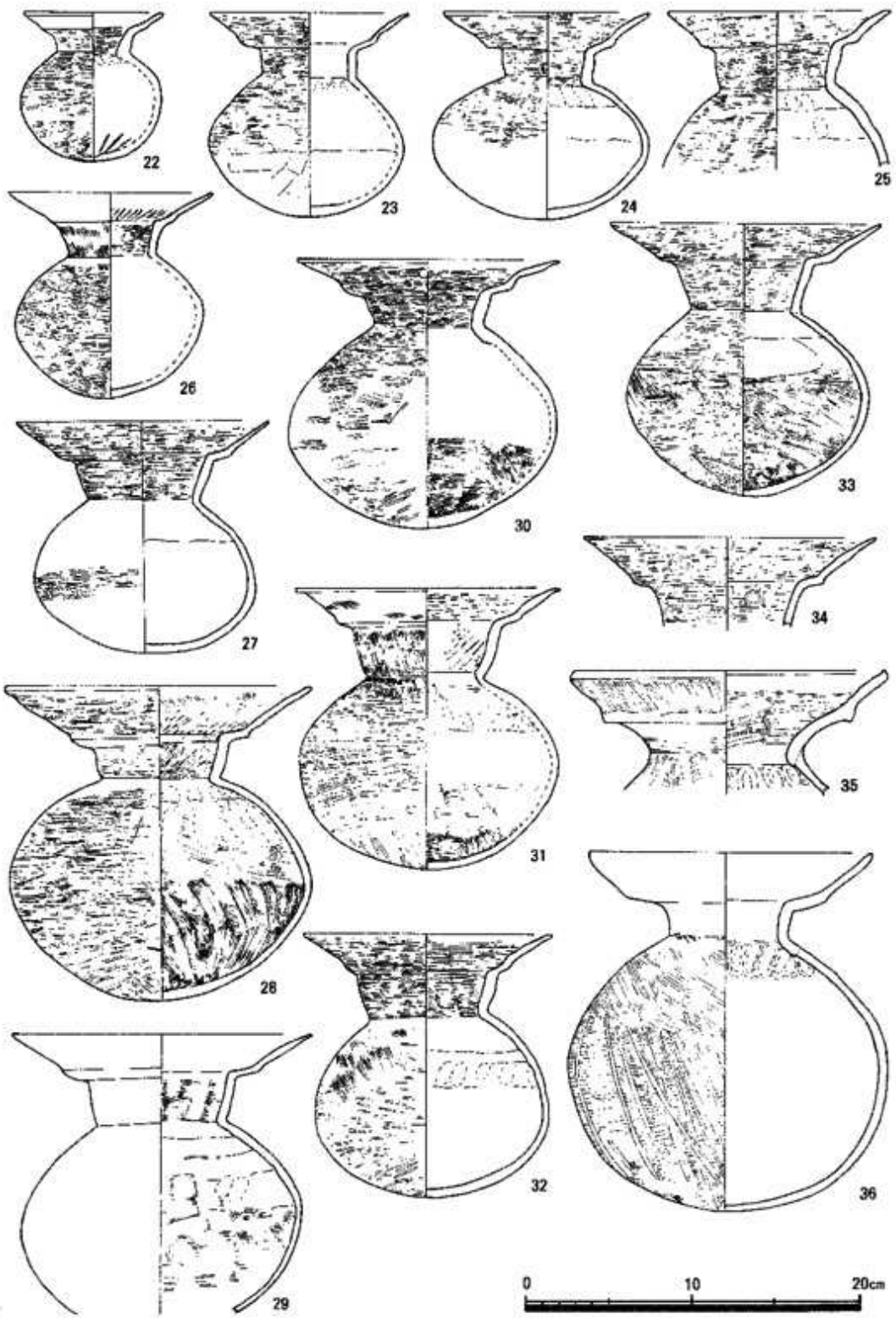
口縁部が二段に屈曲するもので、山陰地方からの搬入品である。

・甕J₄ (208～211)

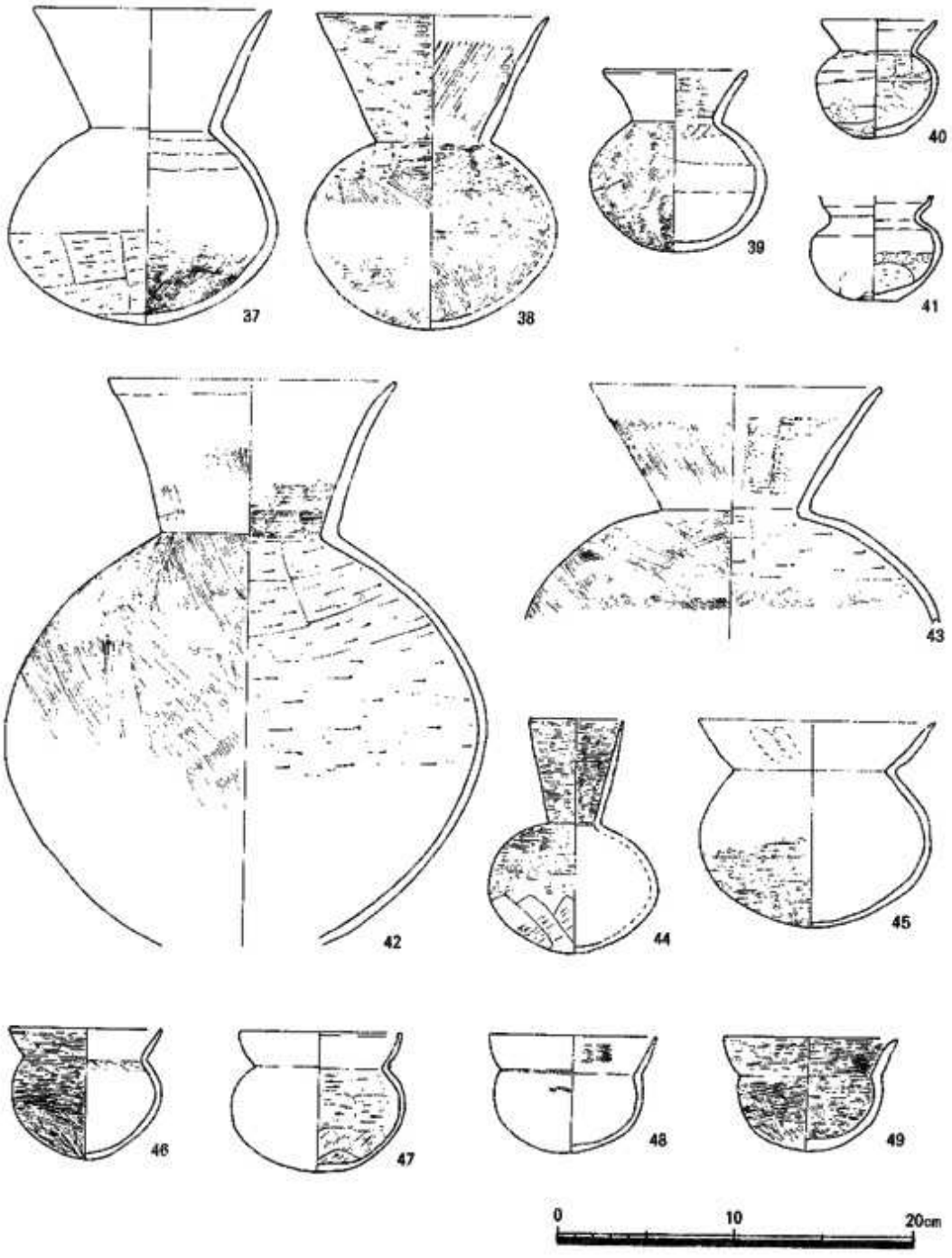
(208・209) は直立する口縁部外面に櫛描直線文を施すが、(210・211) は無文である。吉備地方を中心に分布する甕であるが、胎土分析の結果では (208・209) は在地産である。

第7表　SW－1・第7層出土遺物一覧表

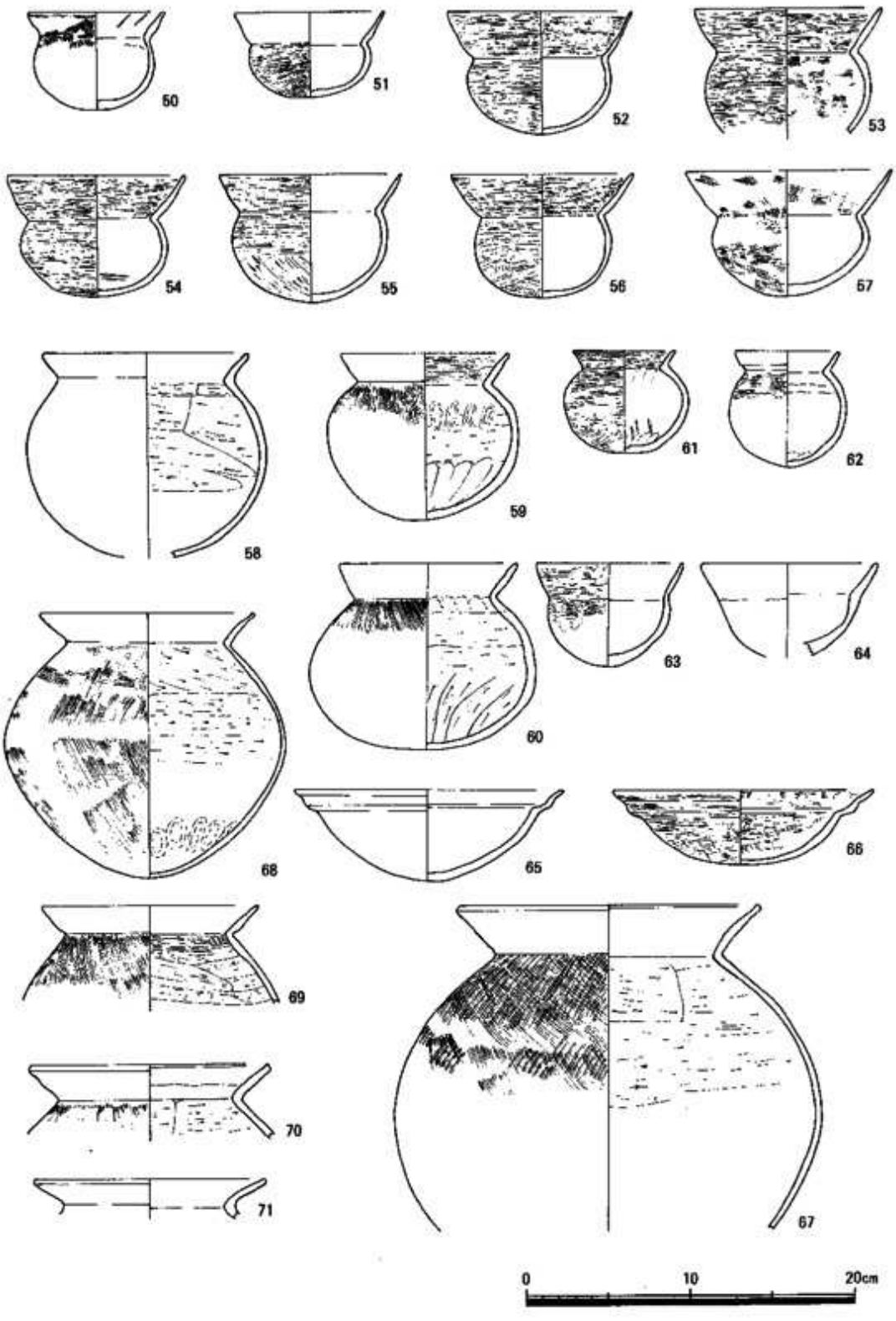
器種	直口壺		丈長壺	細頸	複合口縁壺			小型壺					直口	器台		甕										鉢					石製	計
形式	A_1	A_2	A	A	B_1	B_2	B_3	A_1	B_1	B_2	C	D	A_4	B_3	C_2	A_3	B_4	D	E_2	E_3	E_4	F	J_4	K	P	H_1	H_2	I_1	I_2		
数量	7	3	11	1	1	2	33	1	15	15	5	1	2	3	2	1	21	15	2	2	1	23	5	2	3	2	6	1	2	3	191
形式別比率	10点		11点	1点	36点			37点								1	21	15	5			23	5	2	3	8	3				
	(10.5%)		(11.6%)	(1%)	(37.8%)			(39%)								(1%)	(22%)	(16%)	(7%)			(24%)	(5%)	(2%)	(21.4%)	(57.1%)	(21.4%)				
全体比率	95点 (50%)												2点 (1%)	5点 (2%)		72点 (38%)									14点 (7%)					3点 (1%)	191点 (99%)



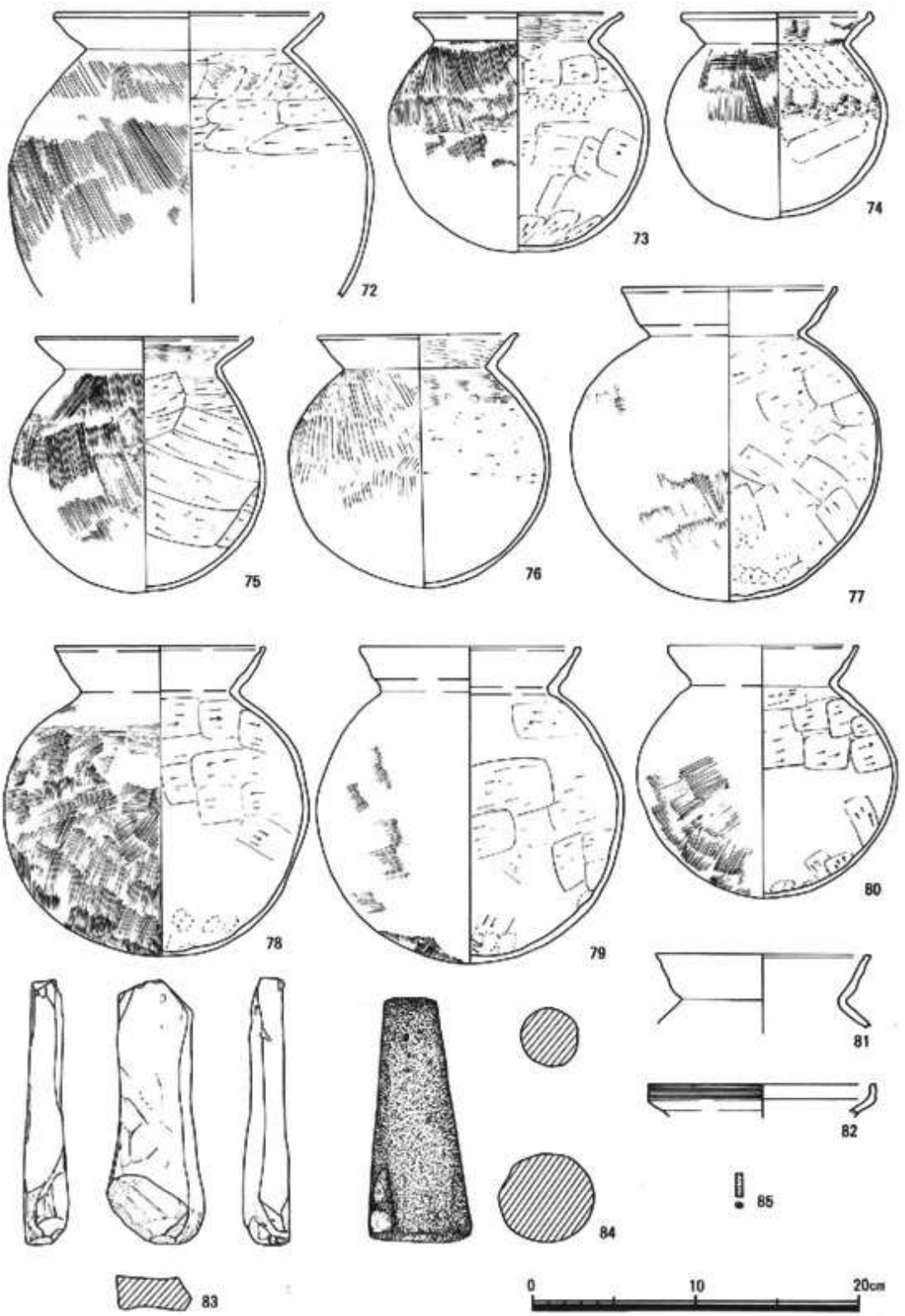
第10図　第２トレンチＳＷ－１出土遺物実測図１



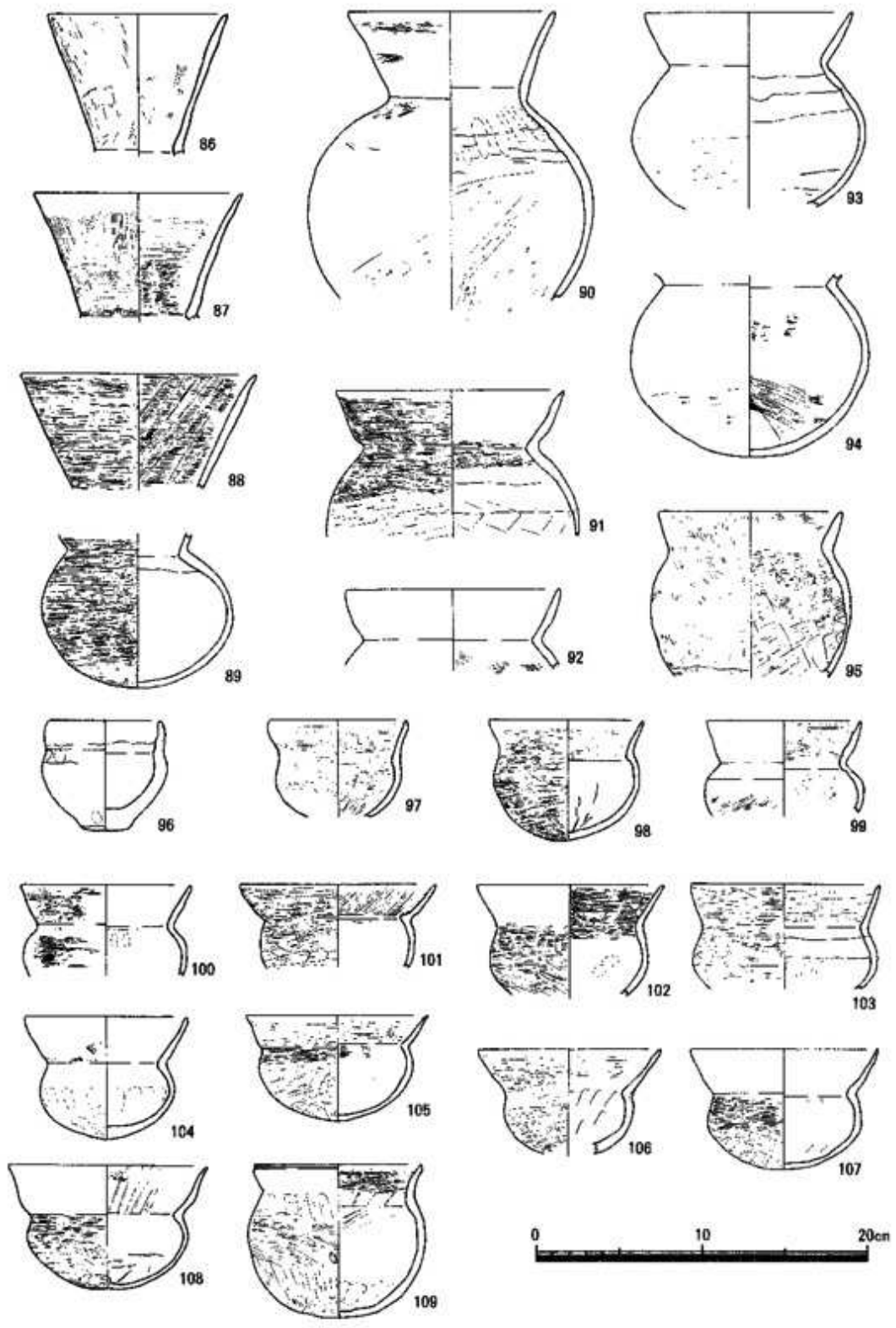
第11図　第２トレンチＳＷ－１出土遺物実測図２



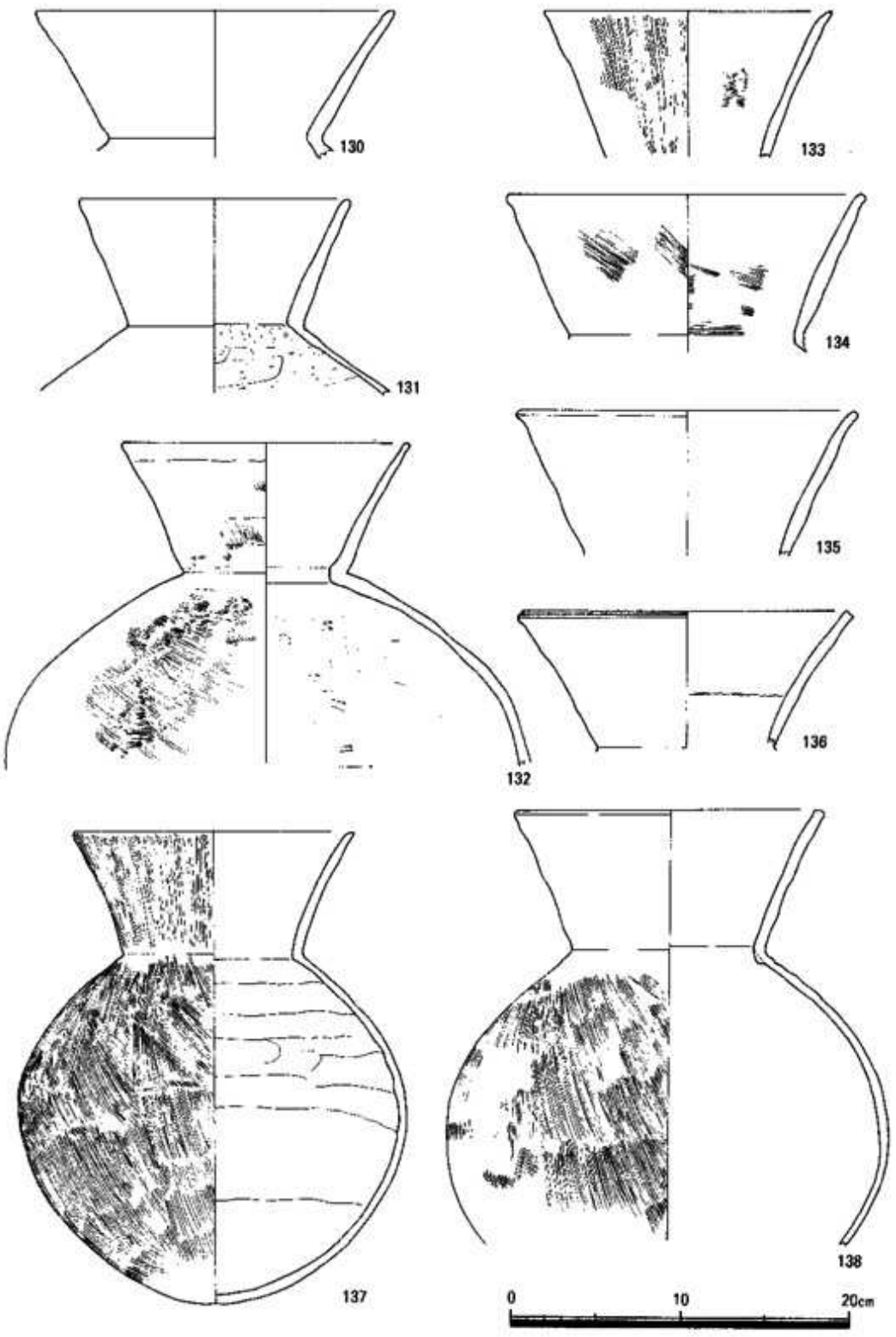
第12図　第２トレンチＳＷ－１出土遺物実測図３



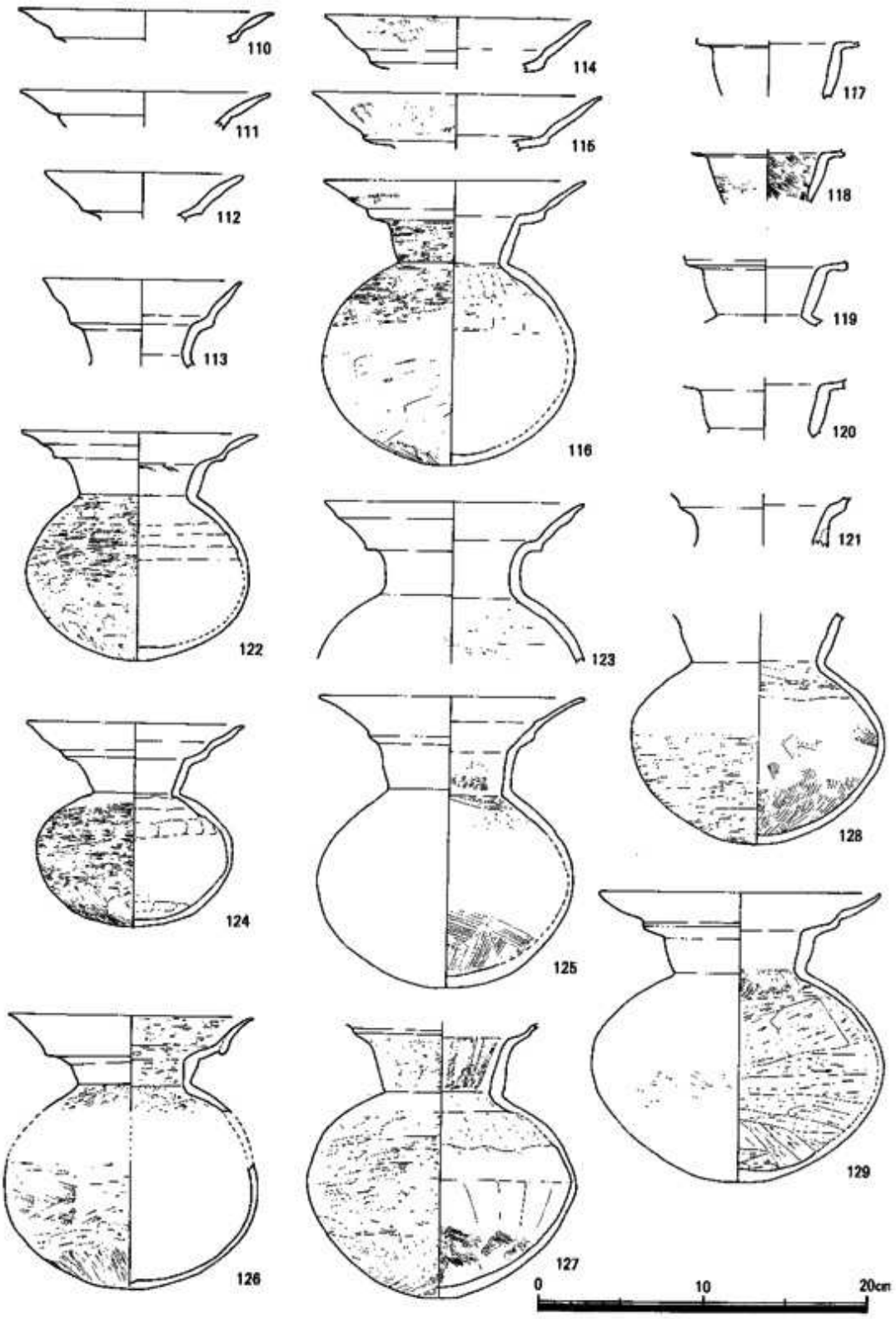
第13図　第2トレンチSW－1出土遺物実測図4



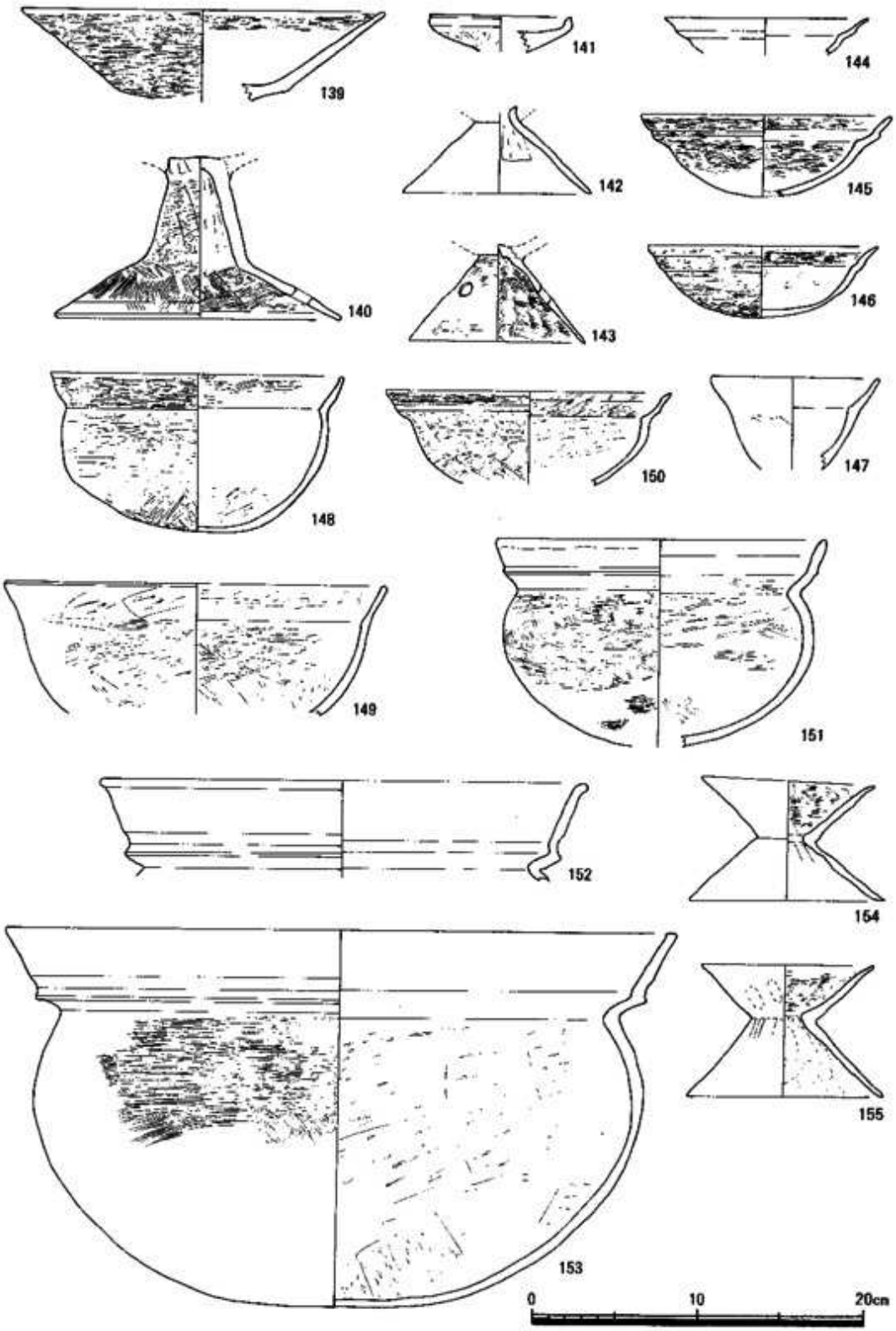
第14図　第２トレンチ第７層出土遺物実測図１



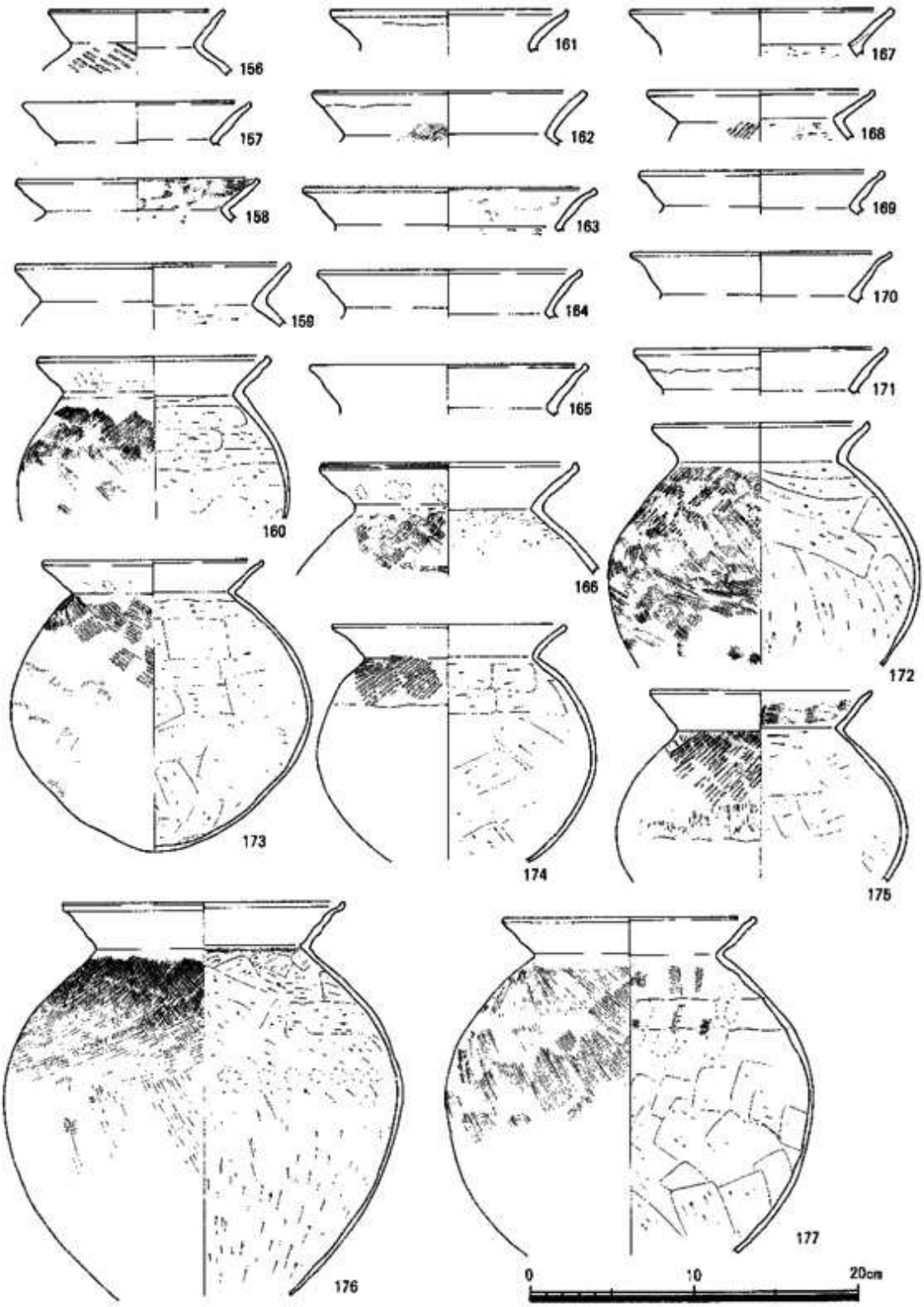
第15図　第2トレンチ第7層出土遺物実測図2



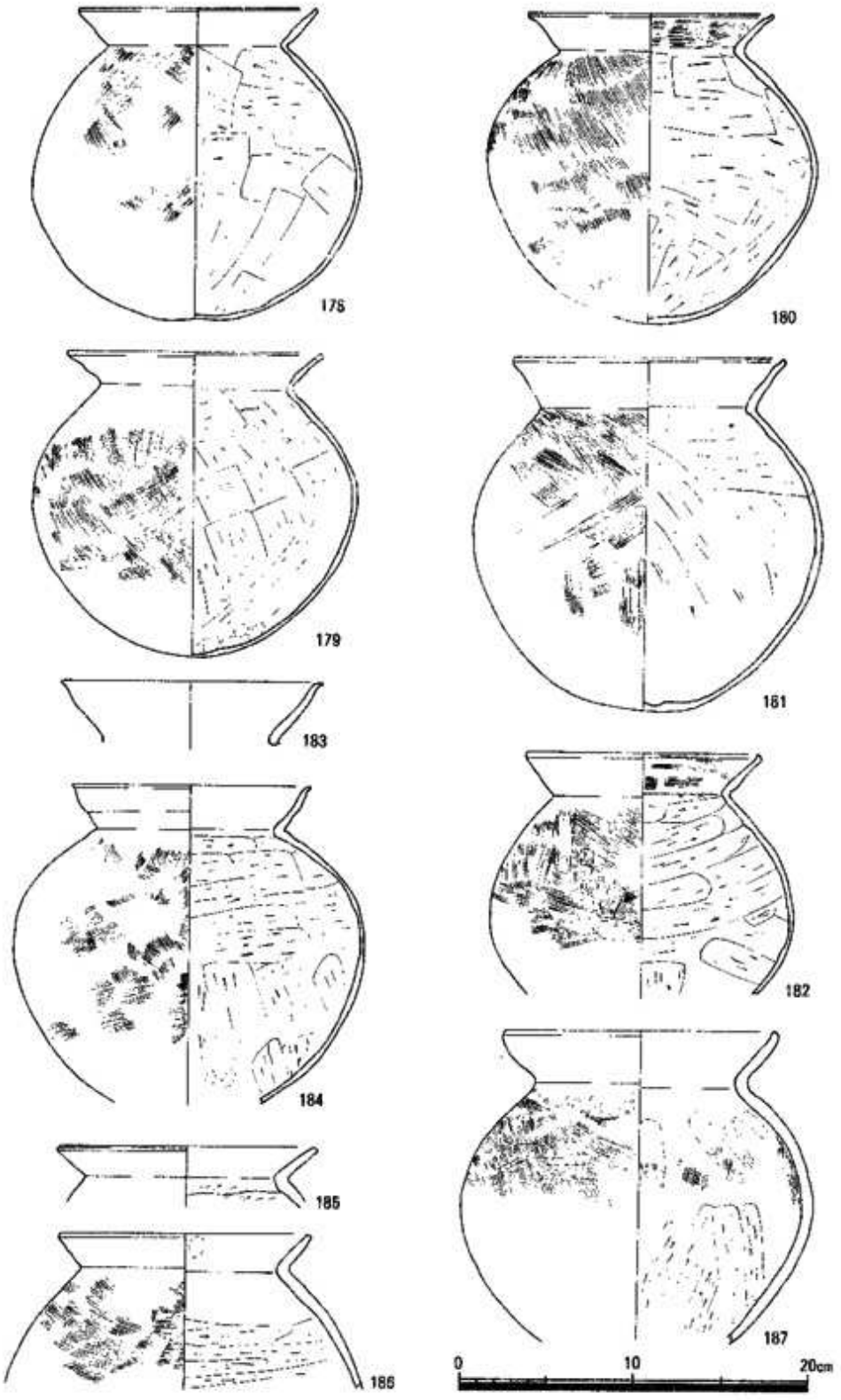
第16図　第２トレンチ第７層出土遺物実測図３



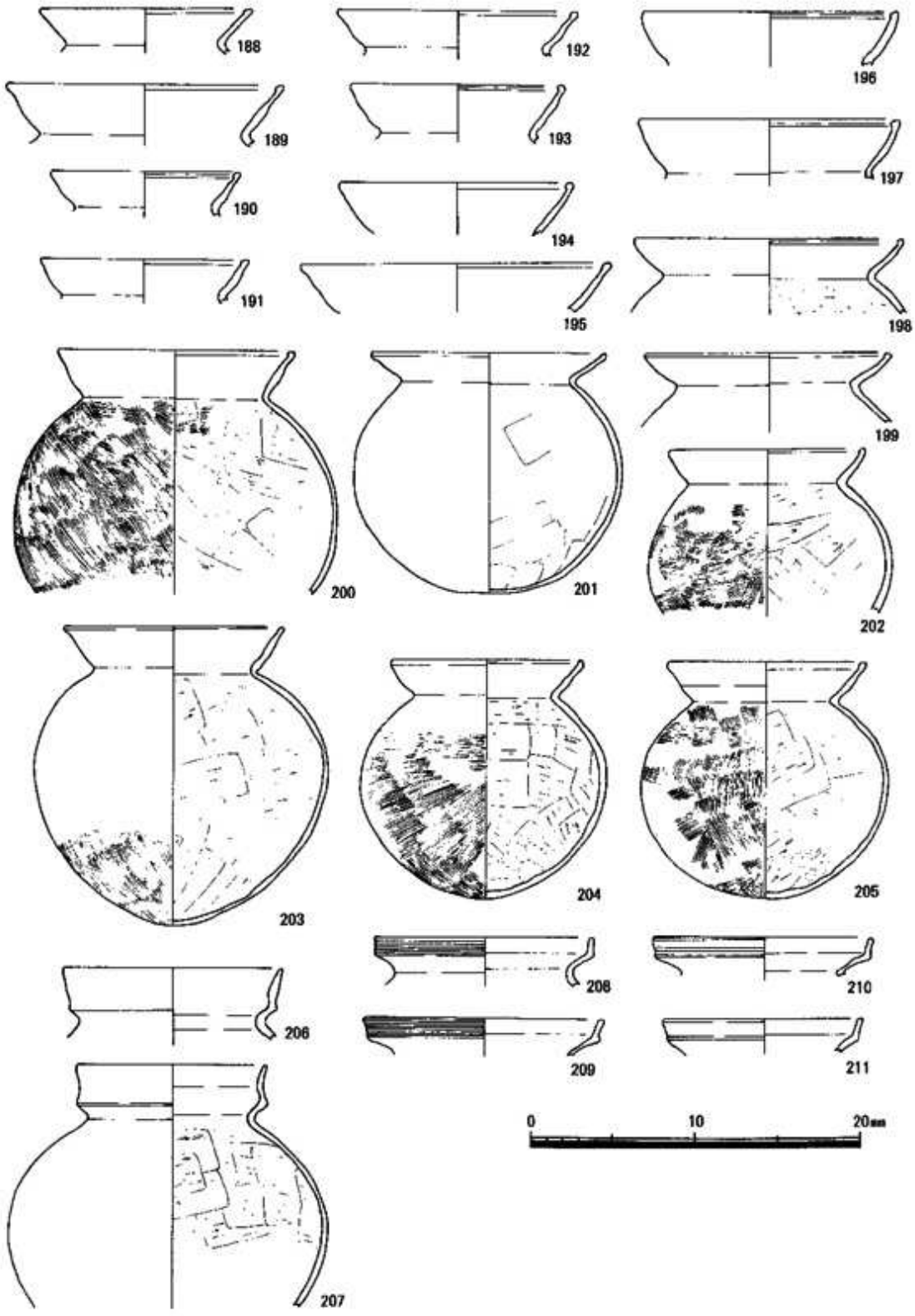
第17図　第2トレンチ第7層出土遺物実測図4



第18図　第２トレンチ第７層出土遺物実測図５



第19図　第2トレンチ第7層出土遺物実測図6



第20図　第２トレンチ第７層出土遺物実測図７

第2トレンチ　第8層出土遺物

図化した土器類の総数は17点（212～228）である。その内訳は、複合口縁壺$B_3$1点（212）、大型直口壺A1点（213）、複合口縁壺F2点（214・215）、甕$F_1$1点（216）、甕D3点（217～219）、高杯A2点（220・222）、高杯$C_2$1点（221）、器台B2点（223・224）、鉢$H_1$1点（225）、鉢$H_2$2点（226・227）、鉢$I_1$1点（228）である。

第3トレンチSW－2出土遺物

図化した土器類の総数は18点（229～246）である。

・小型壺A（236・237）

球形の体部に直立ないしはわずかに外傾して短く伸びる口縁部が付く小型壺である。底部にはともに薄い円盤状の粘土板を貼り付けることにより、わずかに突出する底部が作られているが、底部本来の機能は果たしていない。

・小型壺B_1（229～235）

半球形の体部に上外方に伸びる口縁部が付くもので、口径と体部最大径がほぼ等しいものと、口径が体部最大径やや上回るものがある。

・複合口縁壺B_3（240～242）

器形の大きさから（240）が大型品であるⅢ類に、（241・242）が中型品であるⅡ類に区別される。（240）は平底を呈するもので、複合口縁壺B_3類の中では古相に位置付けられる。（241・242）は、SW－1出土の複合口縁壺B_3類と比べて、底部が尖り底を呈していることや、体部外面の上位から中位にかけてナデ調整が行われている点で違いが認められ、SW－1の資料にやや先行する形態と考えられる。

・直口壺A_1（243・244）

球形の体部に上外方へ直線的に伸びるI1頸部が付く直口壺である。

・鉢A_2（239）

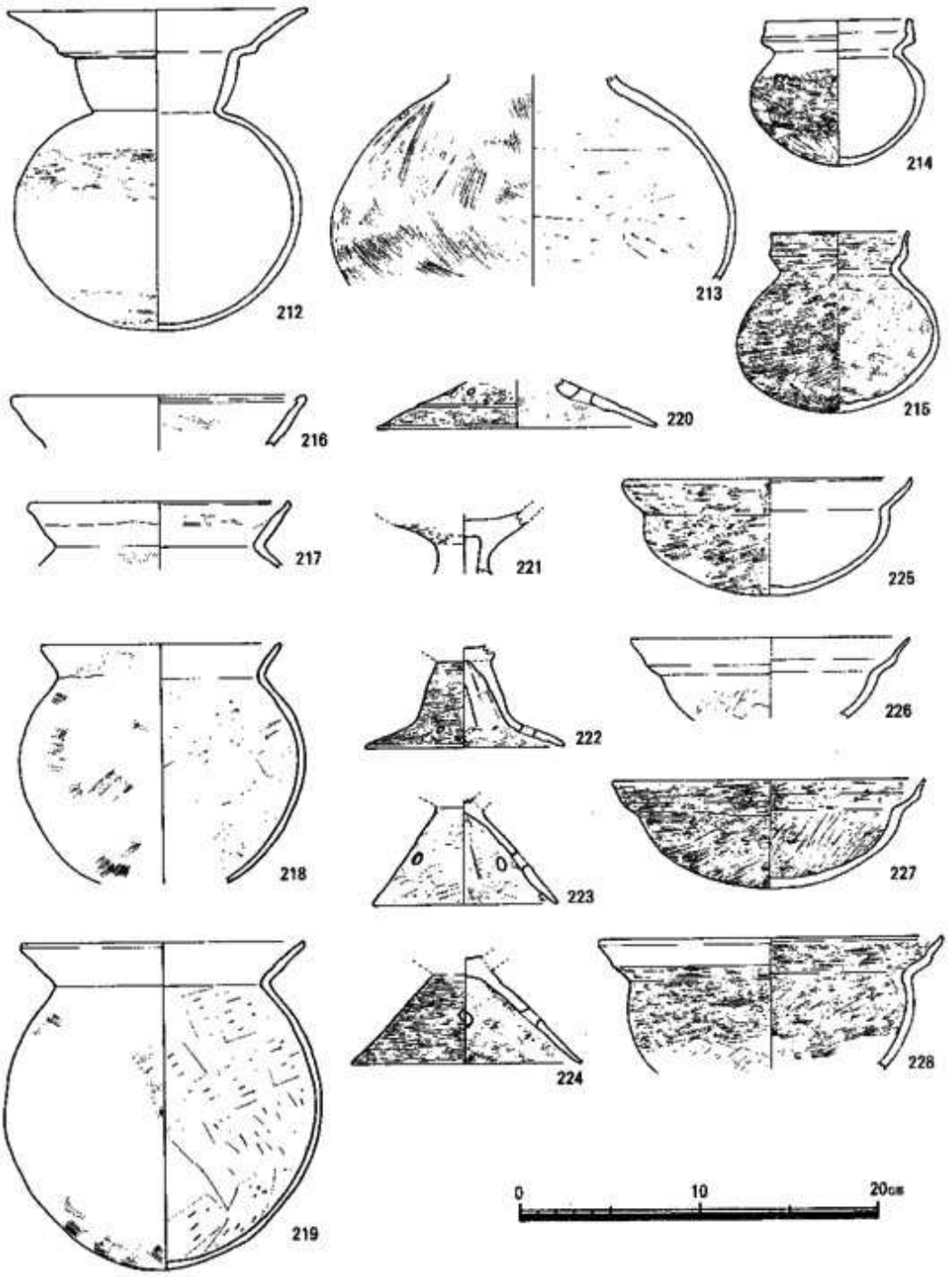
内彎気味に立ち上がる体部から口縁部が屈曲して斜上方に小さく伸びる小型の鉢である。底部は小さな平底である。

・鉢B（238）

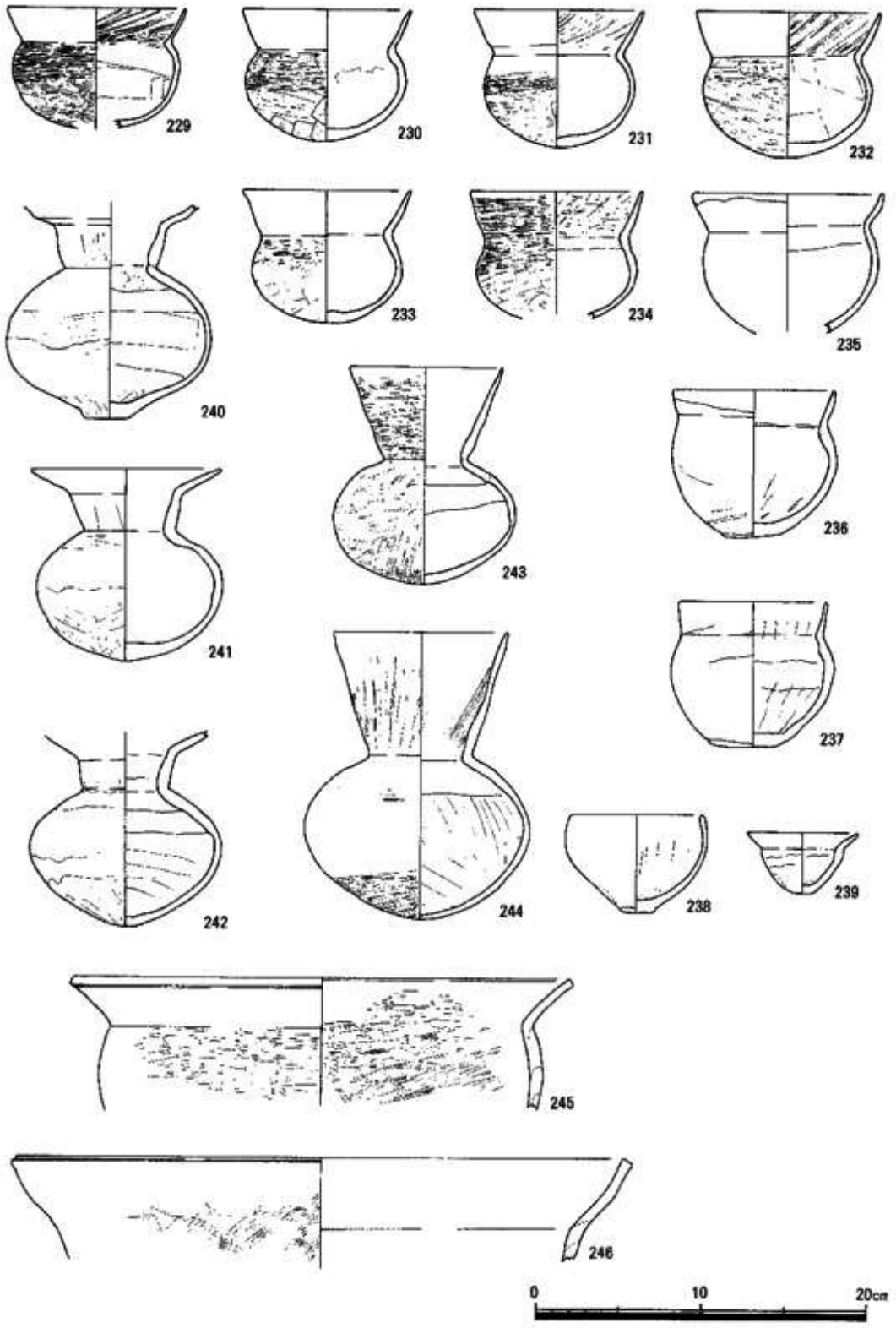
半球形の体部にわずかに突出する平底が付く小型の鉢である。

・鉢J（245・246）

I1縁部のみの資料である。口縁部が斜上方に直線的に伸びる（245）と口縁部が内彎気味に伸びる（246）がある。



第21図　第２トレンチ第８層出土遺物実測図



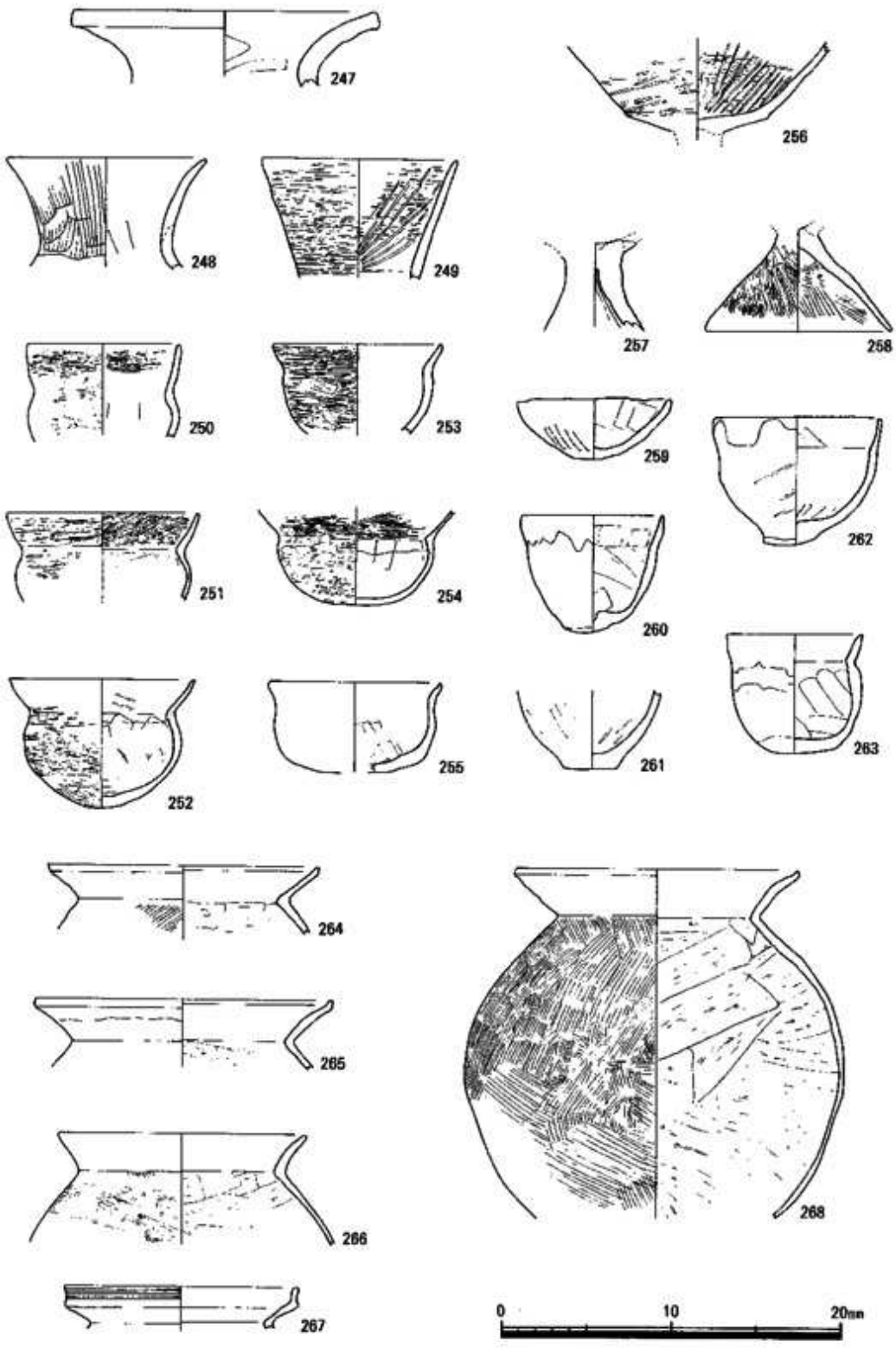
第22図　第3トレンチSW－2出土遺物実測図

第3トレンチ　第7層出土遺物

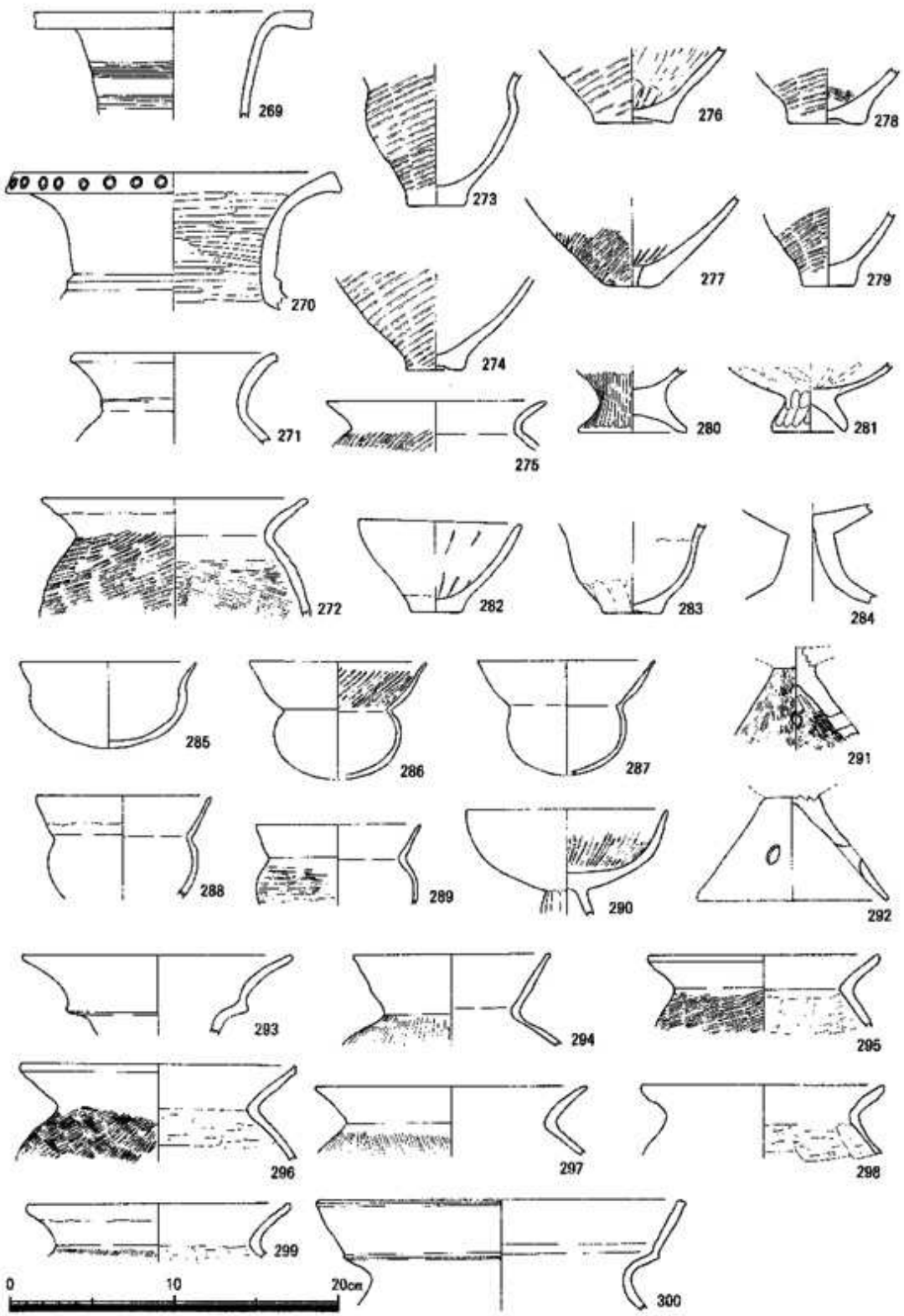
図化した土器類の総数は22点（247～268）である。広口壺A（247）は口縁部のみの資料で、灰白色の色調である。直口壺A（248・249）は共に口頸部のみが遺存するもので、（248）は口頸部外面に粗いハケナデを施す。（249）は赤褐色系の明るい色調を呈する精製品である。小型壺B_1（250・251・253）の体部外面には横方向の密なヘラミガキが施されている。小型壺B_1（255）は体部外面はナデ、体部内面は板状工具によるナデが施されているもので、やや粗製品である。小型壺B_2（252）は小型壺B_1に比して口縁部の立ち上がり角度が大きくなるものである。（254）は口縁部を欠損するものであるが、小型壺B_2と推定される。（256）は高杯A_4で脚部は欠損している。（257）は高杯A類の脚部片である。（258）は器台B類の脚部である。鉢E_1（259）は椀状を呈する手づくねの小型鉢である。鉢A_2に分類した（260・262・263）の3点はいずれも手づくね品で、全体に作りは雑である。（260・262）は突出した平底を有するが、底部面が水平でなく底部としての機能を果たしていない。（263）は突出しない平底である。（264・265）は河内型庄内式甕の最も新しい段階の甕B_4に分類される。（266・268）は体部外面にハケナデを施すもので、布留式影響庄内甕の甕Dに分類される。甕J_4（267）は吉備地方を中心に分布する甕である。

第4トレンチ　NR－1出土遺物

図化した土器の総数は32点（269～300）である。その内訳は、弥生土器－広口壺（Ⅱ様式）1点（269）、広口壺（V様式）2点（270・271）、甕（V様式）7点（272～276・278・279）、底部有孔土器（V様式）1点（274）、土師器－台付き鉢A2点（280・281）、鉢B1点（282）、鉢$A_2$1点（283）、高杯A1点（284）、高杯$C_2$1点（290）、小型壺$B_2$3点（285・288・289）、小型壺$B_3$2点（286・287）、器台B2点（291・292）、複合口縁壺B1点（293）、短頸壺A1点（294）、甕$B_4$2点（295・296）、甕D2点（297・299）、甕E1点（298）、鉢$I_2$1点（300）である。



第23図　第3トレンチ第7層出土遺物実測図



第24図　第４トレンチＮＲ－１出土遺物実測図

第4章　出土遺物観察表

第1トレンチ第4層

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師器 鉢		23.3 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面指頭圧痕成形後弱いナデ。	淡茶色	やや粗 長石・石英（0.1～0.5㎜）を含む。	良好	
2	土師器 椀	高台径 高台高	— — 8.0 1.0	底部内外面および高台部周辺ナデ。	淡赤褐色	やや粗 長石（0.1～0.5㎜）を含む。	良好	底部
3 八	須恵器 甕		36.8 —	口縁部および頸部内外面回転ナデ。体部内面同心円タタキ。体部外面格子状タタキ。頸部内面に粘土紐接合痕遺存。体部外面および口頸部内面に自然釉および灰かぶり。	暗灰色～灰色 断面 紫灰色	密 長石・石英（0.5～1㎜）を含む。	堅緻	口縁部½
4 八	須恵器 甕		37.3 —	口縁部および頸部内外面回転ナデ。体部内面の上位にヘラケズリの痕跡が遺存する。以下は静止ナデ。体部外面格子状タタキの後ナデ。体部外面上位に灰かぶり。	暗灰色～淡灰色	密 長石（0.5～0.5㎜）を含む。	堅緻	口縁部½

第1トレンチ第7層

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
5	土師器 小型壺B₁		9.8 7.0	口縁部内面横方向への細線状のヘラミガキの後、放射状のヘラミガキ。口縁部外面および体部外面ヘラミガキ。底部外面ナデ。体部および底部内面板状工具によるナデ。体部内面に工具痕遺存。	淡茶褐色～茶褐色	精良	良好	½以上
6	土師器 小型壺B₁		10.8 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	淡茶灰色～淡灰褐色	精良	良好	¼以上
7	土師器 小型壺B₁		11.0 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面粗いナデ。	乳赤茶色～乳灰橙色	精良	良好	⅓
8 八	土師器 小型壺B₁		12.0 —	口縁部内外面密なヨコナデ。体部内面やや粗いナデ。体部外面中位まではハケナデ（6本／cm）。下位は斜方向ヘラケズリ。体部外面に粘土紐接合痕遺存。	乳灰橙色～乳灰茶色	密 長石（0.1㎜）をわずかに含む。	良好	¼
9 八	土師器 小型壺 B₁－Ⅱ		12.5 11.9	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外面ヘラミガキ。底部内面の一部に板状工具による圧痕が遺存する。	乳灰橙色～淡灰茶色	精良	良好	ほぼ完形

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
10 八	土師器 高杯 A₄－I	14.8 9.8 裾径 10.8	口縁部内面ヨコナデ。口縁部外面ヘラミガキ。柱状部内面にシボリ目および指頭圧痕遺存。柱状部外面は縦方向のナデ。裾部内外面ナデ。裾部の四方に円孔を穿つ。	淡灰茶色～乳灰橙色	密 長石・石英(0.1mm)を含む。	良好	½
11 八	土師器 器台B₂	10.2 8.7 裾径 11.8	口縁部内外面ヨコナデ。受部内外面ナデ。脚台部内面ナデ。上位に指頭圧痕および爪跡状の圧痕が遺存。脚台部外面はヘラミガキ。脚台部中位の二方に円孔を穿つ。	淡赤茶色～乳灰橙色	密 長石（0.1mm）を含む。	良好	ほぼ完形
12	土師器 甕D	16.8 —	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部内面粗いハケ目が遺存。口縁部外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面の一部に細かいハケ目が遺存。	淡茶褐色～淡灰褐色	やや粗 長石・石英・角閃石（0.1～0.5mm）を含む。	良好	生駒西麓産 口縁部¼
13	土師器 甕D	15.8 —	口縁端部内外面ヨコナデ。口縁部内面粗いハケナデ（8本／cm）。口縁部外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面細かい縦方向のハケナデ（13本／cm）を施した後に横方向のやや粗いハケナデ（9本／cm）を施す。	乳灰褐色～乳灰色	密 長石・石英（0.1～0.5mm）をわずかに含む。	良好	口縁部⅛
14	土師器 甕D	12.8 —	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部内面の一部にハケ目が認められる。体部内面上位はヘラケズリ。以下は弱い指ナデ。体部外面は斜方向のやや粗いハケナデ（6本／cm）。口縁部外面に粘土紐接合痕が遺存する。	淡茶褐色～暗灰褐色	密 長石・石英(0.1mm) 赤色酸化粒を含む。	良好	口縁部¼
15	土師器 甕D	14.7 —	口縁部内面細かい横方向のハケナデ（11本／cm）。口縁部外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面横方向のハケナデ（9本／cm）を施した後に、一部に斜方向のハケナデ（10本／cm）を施す。口縁部外面に粘土紐接合痕遺存。	淡灰褐色～乳灰茶色	密 長石・雲母(0.1mm)をわずかに含む。	良好	口縁部⅜
16	土師器 甕F	14.2 —	口縁部外面ヨコナデ。口縁部内面はヨコナデと思われるが調整不明瞭。	乳灰褐色	やや粗 長石・石英（0.1～0.5mm）をやや多く含む。	良好	口縁部¼
17	土師器 甕E	13.8 —	口縁部内外面および頸部内面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面縦方向のハケナデ（10本／cm）を施すが、一部を撫り消している。口縁部外面に煤付着。	乳灰褐色～乳灰色	やや粗 長石・石英（0.1～0.5mm） 赤色酸化粒を含む。	良好	口縁部¼
18	土師器 甕E₂	13.8 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面ナデ。一部に弱いヨコナデが認められる。	乳褐灰色～灰赤茶色	やや粗 長石・石英(0.1mm)をわずかに含む。	良好	口縁部¼
19 八	土師器 甕D	13.0 16.1	口縁部内面ハケナデ（7本／cm）。口縁部外面ヨコナデ。体部内面上位ヘラケズリ。中位以下指ナデ。底部内面に指頭圧痕が遺存。体部外面は斜方向のハケナデ（7本／cm）。底部外面はやや粗い斜方向のハケナデ（5本／cm）。	暗茶褐色～淡茶褐色	やや粗 長石・石英 角閃石（0.1～1mm）を含む。	良好	外面に煤付着 生駒西麓産 ほぼ完形
20 八	土師器 鉢J	34.8 —	口縁部内面やや粗い横方向のハケナデ（6本／cm）。頸部内面はナデ。指頭圧痕が遺存する。口縁部外面やや粗いヨコナデ。頸部外面に幅1.2cmの粘土紐を貼り付けた後、櫛状工具による刻み目を施す。	淡赤茶色～淡茶灰色	やや粗 長石・石英・角閃石（0.1mm）をやや多く含む。	良好	口縁部½以下
21 八	土師器 鉢J₂	40.8 15.3	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面上位指頭圧成形後ハケナデ（10本／cm）。中位は横方向のヘラケズリ。下位以下はハケナデ後斜方向のヘラケズリ。体部外面上位ヨコナデ。中位ヘラケズリ後ナデ。下位以下斜方向のヘラケズリ。	淡赤褐色～淡茶灰色	やや粗 長石・石英（0.1～0.5mm）をやや多く含む。	良好	½以上

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
22 九	土師器 複合口縁壺 B₂	8.4 9.1	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面中位までヘラミガキ、以下はやや粗いヘラミガキ。体部内面上位に指頭圧痕。底部内面にヘラ状工具による圧痕が遺存する。	淡茶色～淡灰褐色	密 長石・石英・チャート・角閃石（0.1㎜）をわずかに含む。	良好	完形
23 九	土師器 複合口縁壺 B₂	12.0 12.5	口縁部および頸部内面ヨコナデ。口縁部および頸部外面ヘラミガキ。体部および底部内面ナデ。体部外面中位まではヘラミガキ。以下はヘラケズリの後弱いナデ。体部内面上位に指頭圧痕が遺存。	淡茶色～淡灰茶色	精良	良好	ほぼ完形
24 九	土師器 複合口縁壺 B₂	12.4 12.7	口縁部および頸部内外面ヘラミガキ。体部内面ナデ。体部外面中位まではヘラミガキ。以下はヘラケズリの後ナデ。体部内面上位に指頭圧痕。底部内面に板状工具による圧痕が遺存する。	淡灰茶色	精良	良好	½以上
25 九	土師器 複合口縁壺 B₂	13.2 —	口縁部および頸部内外面ヘラミガキ。体部内面ナデ。体部外面ヘラミガキ。体部内面に指頭圧痕および粘土紐接合痕遺存。	乳赤茶色～乳灰茶色	やや粗 長石・石英・チャート・角閃石（0.1～0.5㎜）赤色酸化土粒を含む。	良好	½
26 九	土師器 複合口縁壺 B₂	12.2 12.5	口縁部内外面ヨコナデ。受部内面放射状ヘラミガキ。頸部内面横方向のハケナデ（13本／㎝）。頸部外面縦方向のハケナデ（13本／㎝）の後一部ナデ。体部内面ナデ。体部外面中位まではヘラミガキ。以下はやや粗いヘラミガキ。	淡灰茶色	精良 長石・石英・チャート・角閃石を少量含む。	良好	ほぼ完形
27 九	土師器 複合口縁壺 B₂	15.4 14.1	口縁部および頸部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。一部にハケ目が認められる。体部外面中位付近の一部にヘラミガキが認められるが、他はナデと思われる。体部内面上位付近に粘土紐接合痕遺存。	淡茶灰色～淡灰色	精良	良好	ほぼ完形
28 九	土師器 複合口縁壺 B₂	18.3 19.1	口頸部および体部外面横方向の密なヘラミガキ。口頸部内面ヘラミガキの後、放射状ヘラミガキ。体部内面中位まではやや粗いハケナデ（7本／㎝）、以下は細いハケナデ（14本／㎝）。体部内面上位に指頭圧痕遺存。	淡赤茶色～淡灰茶色	精良 長石・石英・雲母・角閃石少量含む	良好	ほぼ完形
29 九	土師器 複合口縁壺 B₂	18.0 —	口縁部内外面および頸部外面ヨコナデ。頸部内面ハケナデ（12本／㎝）。体部内面上位はナデ。以下ハケナデ（8～12本／㎝）。体部外面の一部にヘラミガキおよびヘラケズリが認められるが、他はナデと思われる。	淡赤茶色～淡茶灰色	密 長石（0.1㎜） 赤色酸化土粒をわずかに含む。	良好	½以上
30 九	土師器 複合口縁壺 B₂	15.6 16.3	口縁部および頸部内外面ヘラミガキ。体部内面中位まではナデ。以下はハケナデ（15本／㎝）。体部外面中位まではヘラミガキ、以下はヘラケズリ後やや粗いヘラミガキ。	乳赤茶色～淡茶灰色	精良	良好	ほぼ完形
31 一〇	土師器 複合口縁壺 B₂	15.6 17.0	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面の一部に左上りのハケナデ。頸部内面放射状ヘラミガキ。頸部外面横位のハケナデ後ヨコナデ。体部内面および下位はハケナデ。体部外面横位の密なヘラミガキ。	淡赤茶色～淡茶灰色	密 長石（0.1㎜） 赤色酸化土粒を含む。	良好	ほぼ完形
32 一〇	土師器 複合口縁壺 B₂	14.8 16.1	口縁部および頸部内外面ヘラミガキ。体部および底部内面ナデ。体部外面中位まではハケナデ（8本／㎝）後ヘラミガキ、以下はヘラケズリ後粗いヘラミガキ。体部内面中位付近に指頭圧痕および粘土紐接合痕遺存。	淡茶灰色～乳灰茶色	精良	良好	½以上

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
33 —○	土師器 複合口縁壺 B₃	16.3 16.6	口縁部および頸部内外面ヘラミガキ。体部内面上位指ナデ。以下はハケナデ（8～13本／cm）。体部外面中位まではハケナデ（13本／cm）の後ヘラミガキ、以下はヘラケズリの後密なヘラミガキ。体部内面の一部に指頭圧痕が遺存。	淡灰茶色～淡赤茶色	精良	良好	ほぼ完形
34 —○	土師器 複合口縁壺 B₁	17.6 —	口縁部および頸部内外面ヘラミガキ。	淡茶灰色～乳灰橙色	やや粗 長石・石英・チャート（0.1～0.5mm）をやや多く含む。	良好	口頸部のみ
35 —○	土師器 複合口縁壺 B₂	18.4 —	口縁端部内外面ヨコナデ。口頸部内縁面横方向の単位幅の広いヘラミガキ。口縁部外面縦方向のヘラミガキ。頸部外縁横方向のハケナデ（8本／cm）。体部内面ナデ。体部外面縦方向のハケナデ（11本／cm）。一部をナデ消している。	淡灰茶色～乳灰褐色	密 石英を含む。	良好	口頸部のみ
36 —○	土師器 複合口縁壺 B₁	16.7 21.9	口縁部内面ヨコナデ。体部外面上位は左上りのハケナデ（8本／cm）。中位以下は水平方向のハケナデ（8本／cm）。後に左上りのヘラミガキを施す。頸部および体部内面上位に指頭圧痕および粘土紐せ遺存。接合痕が遺存。	乳灰茶色～淡灰白色	やや粗 長石・石英・チャート・（0.1～1mm）を含む。	良好	½以上
37 —○	土師器 直口壺A	12.6 17.9	口縁部および頸部内外面板状工具による弱いヨコナデ。体部内面上位は指頭圧成形後ナデ。中位以下はハケナデ（10本／cm）。体部外面上位は横方向の密なヘラミガキ。中位付近は弱いヘラケズリ。下位以下は粗いヘラミガキ。	乳灰色～乳灰褐色	密 長石・石英・雲母・角閃石を含む。	良好	½以上
38 —○	土師器 直口壺A₁	12.8 18.0	口縁部および頸部外面横方向の密なヘラミガキ。頸部内面に放射状のヘラミガキを加える。体部および底部内面は横方向の密なハケナデ。体部外面上位は密な横方向のヘラミガキ。中位は斜方向のハケナデ（9本／cm）。底部の一部にヘラミガキがあるが、他はナデと思われる。	淡灰茶色～乳赤茶色	密 長石・石英（0.1～0.5mm） 雲母・角閃石を含む。	良好	完形
39 —○	土師器 直口壺A₂	8.0 10.3	口縁部内面板状工具によるヨコナデの後ヘラミガキ。外面は板状工具によるヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外面ヘラミガキ。体部外面中位付近の一部にヘラケズリが認められる。	淡灰茶色	やや粗 長石・石英（0.1～0.5mm） チャート・角閃石を含む。	良好	ほぼ完形
40 ——	土師器 直口壺A₂	6.4 6.7	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面上位はヨコナデ。以下はナデ。体部外面下位に指頭圧痕および粘土紐接合痕が遺存、外底面に板状工具の圧痕遺存。	内面 黒灰色 外面 黒灰色～淡茶灰色	精良	良好	口縁部¾欠損
41 ——	土師器 複合口縁壺 B₂	— — 頸部径5.0 体部最大径 7.3	口縁部および体部上位内外面ヨコナデ。体部内外面中位以下はナデ。体部内面中位付近に指頭圧痕が、また、体部外面下位および体部内面上位に粘土紐接合痕が遺存。外底面に板状工具の圧痕遺存。	内面 暗灰色 外面 暗灰色～淡灰茶色	精良	良好	口縁部½欠損
42 ——	土師器 大型直口壺 A	16.3 —	口縁部内外面ハケナデ（9本／cm）後ヨコナデ。体部内面中位まではヘラケズリ。以下はナデ。体部外面中位まではハケナデ（8本／cm）。以下はナデ。頸部内面および口縁端部外面に粘土紐接合痕が遺存する。	乳灰褐色～淡灰褐色	やや粗 長石・石英・雲母・角閃石（0.1～1mm）をやや多く含む。	良好	½
43 ——	土師器 大型直口壺 A	16.6 —	口縁部内外面ハケナデ（9本／cm）。一部にヨコナデを施す。体部内面ヘラケズリ。上位付近に指頭圧痕が遺存する。頸部外面ヨコナデ。体部外面ハケナデ（11本／cm）。	乳灰褐色～淡灰褐色	やや粗 長石・石英・雲母・角閃石（0.5～1mm）を含む。	良好	口縁部のみ
44 ——	土師器 細頸壺A	5.4 13.5	口縁部内外面および体部外面中位まではヘラミガキ。体部外面中位以下はヘラケズリ。体部内面はナデ。	淡赤茶色～淡茶色	密 長石（0.1mm） 石英・チャート・角閃石を含む。	良好	ほぼ完形

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
45	土師器 小型壺B₁－Ⅱ	13.2 11.9	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部外面中位まではナデ。以下はヘラミガキ。口縁部外面の一部に指頭圧痕が遺存する。	赤茶色	精良	良好	½
46 一一	土師器 小型壺B₁－Ⅰ	8.4 7.5	口縁部内面ヨコナデ。口縁部および体部外面ヘラミガキ。体部下位以下はやや粗いヘラミガキ。体部内面ナデ。体部内面上位に指頭圧痕が遺存。	淡茶灰色	密 長石（0.1㎜）をわずかに含む。	良好	ほぼ完形
47 一一	土師器 小型壺B₁－Ⅰ	9.0 7.9	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ヘラケズリ。体部および底部外面はナデと思われる。	乳灰茶色	やや粗 長石・石英・雲母・チャート（0.1㎜）赤色酸化土粒を多量に含む。	良好	ほぼ完形
48 一一	土師器 小型壺B₁	9.2 6.7	口縁部内面ハケナデ（15本／cm）。口縁部外面ヨコナデ。体部内面一部に板状工具による圧痕が認められるが、ナデと思われる。体部外面上位にハケナデ（15本／cm）が認められるが、他はナデと思われる。	淡赤茶色～淡灰茶色	やや粗 長石・石英（0.1～0.5㎜）をやや多く含む。	良好	完形
49 一一	土師器 小型壺B₁	9.6 6.4	口縁部内外面ヘラミガキ。体部および底部内面ヘラミガキ。体部外面中位まではヘラミガキ。下位はヘラケズリの後ナデ。	乳灰茶色～淡灰褐色	やや粗 石英・長石・赤色酸化土粒（0.1～0.5㎜）を含む。	良好	完形
50 一二	土師器 小型壺B₁	8.2 6.0	口縁部内面ナデ。板状工具による圧痕が遺存。口縁部外面および体部外面上位ハケナデ（12本／cm）、以下はナデ。体部および底部内面ナデ。体部内面上位の一部に粘土紐接合痕が遺存。	淡灰茶色～乳灰黄色	密 長石・石英（0.1㎜）をわずかに含む。	良好	ほぼ完形
51 一二	土師器 小型壺B₁	9.1 5.3	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部外面ヘラミガキ。底部外面やや粗いヘラミガキ。	乳灰茶色～淡赤茶色	精良	良好	ほぼ完形
52 一二	土師器 小型壺B₁	11.2 7.7	口縁部内外面および体部外面ヘラミガキ。体部内面ナデ。口縁部外面中位付近に粘土紐接合痕が遺存。	乳赤茶色～淡灰茶色	やや粗 長石・石英（0.1～0.5㎜） 赤色酸化土粒を含む。	良好	完形
53 一二	土師器 小型壺B₁	11.4	口縁部内外面ヘラミガキ。体部内面上位粗いハケナデ（5本／cm）、以下は細かいハケナデ（14本／cm）。体部外面ヘラミガキ。	淡茶灰色～乳灰褐色	精良	良好	底部欠損
54 一二	土師器 小型壺B₁	10.8 7.5	口縁部内外面ヘラミガキ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外面ヘラミガキ。口縁部外面中位に粘土紐接合痕が、また、底部内面に板状工具による圧痕が遺存。	淡灰褐色～淡灰茶色	精良	良好	口縁部¼欠損
55 一二	土師器 小型壺B₁	11.0 7.9	口縁部内面ヨコナデ。口縁部外面ヘラミガキ。体部および底部内面ナデ。体部外面中位まではヘラミガキ、以下はヘラケズリの後ナデと思われる。	乳赤茶色～乳茶色	やや粗 長石・石英・角閃石（0.1㎜） 赤色酸化土粒を含む。	良好	ほぼ完形
56 一二	土師器 小型壺B₁	11.0 7.5	口縁部内外面ヘラミガキ。体部および底部内面ナデ。体部外面中位までは密なヘラミガキ、以下はやや粗いヘラミガキ。	淡茶色	密 長石・石英（0.1～0.5㎜）をわずかに含む。	良好	½以上

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
57 一二	土師器 小型壺B₂	12.4 7.8	口縁部内外面ハケナデ（12本／cm）の後ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面ハケナデ（12本／cm）を施すが、一部をナデによって消している。体部内面下位に指頭圧痕が遺存。	淡黒灰色～乳灰茶色	密 長石・石英・チャート（0.1～0.5mm）を含む。	良好	ほぼ完形
58 一二	土師器 小型壺C II	12.4 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面中位まではヘラケズリ。下位は指頭圧成形後弱いナデ。体部外面はタタキ後密なナデ。体部外面中位以下に煤付着。	乳灰褐色～灰褐色	密 長石・石英・チャート・角閃石（0.1～0.5mm）を含む。	良好	½
59 一二	土師器 小型壺C－ II	10.0 10.3	口縁部内面ハケナデ（8本／cm）。口縁部外面ヨコナデ。体部内面中位まではヘラケズリ。以下は指ナデ。体部内面中位付近に指頭圧痕および粘土紐接合痕が遺存。体部外面上位はハケナデ（11本／cm）。以下はナデ。	乳灰色～乳灰茶色	やや粗 長石・石英・チャート・角閃石（0.1～1mm）を含む。	良好	ほぼ完形
60 一三	土師器 小型壺C－ II	10.7 11.4	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ヘラケズリ。体部外面上位ハケナデ（9本／cm）。以下はナデ。体部内面上位に指頭圧痕および粘土紐接合痕が遺存する。体部外面中位の一部に煤付着。	淡茶色～淡赤茶色	やや粗 長石・石英・雲母・角閃石・チャート（0.1～1mm）を多く含む。	良好	完形
61 一三	土師器 小型壺 C－I	6.1 6.3	口縁部内外面ヘラミガキ。体部および底部内面ナデ。体部外面ヘラミガキ。底部外面粗いヘラミガキ。口縁部外面に粘土紐接合痕。また、体部および底部内面に指頭圧痕および板状工具による圧痕が遺存。	淡茶灰色～乳灰茶色	精良 長石（0.1～1mm）雲母を含む。	良好	完形
62 一三	土師器 小型壺 C－I	6.3 7.2	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部外面中位付近まではヘラミガキ。以下はヘラケズリの後ナデ。体部内面上位付近に粘土紐接合痕が、また底部内面に指頭圧痕が遺存。	淡灰茶色～淡茶色	精良	良好	ほぼ完形
63 一三	土師器 鉢F	8.8 6.4	口縁部内面ヨコナデ。口縁部外面ヘラミガキ。体部および底部内面ナデ。体部外面中位付近まではヘラミガキ。以下は指頭圧成形後ナデ。体部外面中位付近に指頭圧痕が遺存。	乳赤茶色	やや粗 長石・石英（0.1～0.5mm）赤色酸化土粒をやや多量に含む。	良好	ほぼ完形
64 一三	土師器 鉢F	10.5 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面の一部にヘラミガキが認められるが、調整不明瞭。	淡灰茶色～暗灰色	やや粗 長石・石英（0.1～1mm）を含む。	良好	½
65 一三	土師器 鉢H₁	16.4 5.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面中位付近までは、やや粗いヘラミガキ。底部内面ナデ。体部および底部外面はヘラケズリの後ナデ。体部外面の一部に板状工具による圧痕が遺存する。	淡赤茶色～淡茶灰色	精良	良好	口縁部¼欠損
66 一三	土師器 鉢H₁	16.0 4.5	口縁部内面ハケナデ（9本／cm）。口縁部外面ヨコナデ後一部にヘラミガキを施す。体部内面中位まではヘラミガキ。以下はナデ。体部外面中位まではヘラミガキ以下はヘラケズリ。	淡赤茶色～淡茶灰色	精良	良好	ほぼ完形
67 一三	土師器 甕B₁	18.3 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面中位まではヘラケズリ。以下はヘラケズリの後ナデ。体部外面中位までは右上りのタタキ（8条／cm）の後左上りのハケナデ（9本／cm）、以下はナデ。	淡灰褐色～茶褐色	やや粗 長石・石英・雲母・角閃石（0.1～0.5mm）を含む。	良好	⅓
68 一三	土師器 甕D	12.8 16.4	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面中位まではヘラケズリ。以下は指頭圧成形後ナデ。体部外面上位は右上りのハケナデ、以下は左上りのハケナデ（12本／cm）。底部内面に指頭圧痕が遺存。	淡灰褐色～淡灰色	やや粗 長石・石英・チャート・角閃石・雲母（0.1～1mm）を含む。	良好	½以上

遺物番号 図版番号	器　種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
69 一三	土師器 甕D	13.1 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面上位は粗いハケナデ（5本／cm）、以下はヘラケズリ。体部外面はハケナデ（9本／cm）。	淡灰茶色～乳赤茶色	やや粗 長石・石英（0.1～0.5mm）を含む。	良好	口縁部⅓
70	土師器 甕D	14.4 —	口縁部内外面ヨコナデであるが、口縁部内面下位にハケナデ（6本／cm）が認められる。体部内面ヘラケズリ。体部外面ハケナデ（10本／cm）。口縁部内面に粘土紐接合痕が遺存。口縁部および体部外面に煤付着。	淡茶褐色	やや粗 長石・石英・雲母（0.1～0.5mm）を含む。	良好	口縁部⅓
71	土師器 甕D	14.1 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面はヘラケズリと思われるが、他は調整不明瞭。	淡灰褐色	やや粗 長石・石英・角閃石・雲母（0.1～0.5mm）を含む。	良好	口縁部¼
72	土師器 甕D	16.2 …	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面中位まではヘラケズリであるが、一部に指頭圧成形後ハケナデ（8本／cm）を施す、以下はナデ。体部外面はハケナデ（9本／cm）。体部外面下位はナデ。	淡茶色	やや粗 長石・石英・角閃石（0.1～1mm）を含む。	良好	½
73 一四	土師器 甕D	12.5 14.8	口縁部内外面ハケナデ（8本／cm）。口縁部外面ヨコナデ。体部および底部内面ヘラケズリ。一部にナデを施す。体部外面中位まではハケナデ（10本／cm）、以下はナデ。	淡灰褐色～乳灰茶色	やや粗 長石・石英・雲母（0.1～1mm）を含む。	良好	½以上
74 一四	土師器 甕D	11.4 12.7	口縁部内面ハケナデ（9本／cm）。一部にナデを施す。口縁部外面ヨコナデ。体部内面中位までは指頭圧成形後ハケナデ（9本／cm）。以下は摘ナデ。体部外面中位までハケナデ（9本／cm）。以下はナデ。体部内面中位に指頭圧痕が遺存。	乳灰茶色～淡赤茶色	やや粗 長石・石英（0.1～0.5mm）を含む。	良好	ほぼ完形
75 一四	土師器 甕D	13.2 15.8	口縁部内面ハケナデ（8本／cm）。口縁部外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。底部内面指頭圧成形の後ナデ。体部外面ハケナデ（10本／cm）。底部外面ナデ。底部内面の一部に指頭圧痕が遺存。	淡茶色～淡灰色	やや粗 長石・石英・角閃石（0.1～1mm）を含む。	良好	½以上
76 一四	土師器 甕D	12.4 15.7	口縁部内面粗いハケナデ（5本／cm）。口縁部外面ヨコナデ。体部内面上位指頭圧成形後粗いハケナデ（5本／cm）。以下はヘラケズリ。底部内面弱いナデ。体部外面中位まで粗いハケナデ（6本／cm）、以下はナデ。頸部内面指頭圧痕遺存。	淡茶灰色～乳灰茶色	密 長石・石英・雲母を含む。	良好	体部外面煤付着。 ほぼ完形
77	土師器 甕F1	13.2 19.3	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。底部内面指頭圧成形後ナデ（9本／cm）。以下は縦方向のハケナデ（9本／cm）。底部外面はナデ。底部内面に指頭圧痕が遺存。	明茶灰色～乳灰茶色	やや粗 石英・長石・角閃石（0.1～0.5mm） 赤色酸化土粒を含む。	良好	½以上
78 一四	土師器 甕F1	12.8 19.1	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。底部内面指頭圧成形後弱いナデ。体部外面上位横方向のハケナデ（9本／cm）。中位以下は縦方向のハケナデ（10本／cm）。一部にナデを施す。底部内面に指頭圧痕が遺存。	乳灰茶色～淡灰茶色	やや粗 長石・石英・雲母（0.1～1mm） 赤色酸化土粒を含む。	良好	½以上
79 一四	土師器 甕F1	13.4 19.5	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。底部内面指頭圧成形後ナデ。体部外面は一部にハケナデが認められるが調整不明瞭。底部内面に指頭圧痕が遺存。	乳灰茶色～暗灰色	やや粗 長石・石英（0.1～0.5mm） 赤色酸化土粒を含む。	良好	½
80 一四	土師器 甕F1	11.4 15.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。底部内面指頭圧成形後ナデ。体部外面ハケナデ（8本／cm）。上半部は不明瞭。底部外面ハケナデ（8本／cm）。一部にナデを施す。	乳灰白色～乳灰茶色	やや粗 長石・石英（0.1～0.5mm）を含む。	良好	ほぼ完形

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
81	土師器 甕F₁		13.2 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラミガキ。体部外面ナデと思われるが不明瞭。	乳灰橙色～ 乳赤茶色	やや粗 石英・長石（0.1～0.5㎜）を含む。	良好	口縁部のみ
82	土師器 甕J₁		13.6 —	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面に櫛描直線文（6本）を施す。	乳灰褐色～ 乳灰白色	やや粗 石英・長石・角閃石（0.1～0.5㎜）を含む。	良好	煤付着 吉備系 口縁部⅙

第2トレンチ第7層

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
86 一五	土師器 直口壺A₁		10.6 —	口縁部内面ヨコナデ。口縁部外面弱いヘラケズリ。頸部内外面の一部にヘラミガキが認められるが、調整不明瞭。	乳灰褐色～ 乳灰橙色	やや粗 長石・石英・チャート（0.1～1㎜）を含む。	良好	口頸部⅓
87	土師器 直口壺A₁		12.4 —	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面横方向のハケナデ（10本／cm）。下半は（18本／cm）と細い。頸部外面縦方向のハケナデ（12本／cm）の後、横方向のヘラミガキ。	淡茶灰色～ 乳灰茶色	密 長石（0.1㎜）をわずかに含む。	良好	口頸部¼
88	土師器 直口壺A₁		14.0 —	口縁部内外面横方向のヘラミガキ。口頸部内面には放射状のヘラミガキ。	乳灰茶色～ 淡茶赤色	密 長石・チャート（0.1㎜）をわずかに含む。	良好	口頸部⅓
89	土師器 直口壺A		— — 胴部最大径 11.4	頸部内面ヨコナデ。頸部外面ヘラミガキ。体部および底部内面ナデ。体部外面ヘラミガキ。底部外面ヘラミガキ。体部内面に粘土紐接合痕が遺存。また一部に指頭圧痕が遺存。	乳茶灰色～ 乳灰橙色	密 石英・長石を含む。	良好	体部½
90 一五	土師器 広口壺A₁		12.2 —	口縁部内外面ヨコナデ後一部にヘラミガキを施す。体部内面上位に指頭圧痕および粘土紐接合痕が遺存し、また、口頸部および体部外面の一部に工具痕が遺存。	淡灰黄色～ 淡茶色	やや粗 長石・石英（0.1～0.5㎜）を含む。	良好	口縁体部½
91 一五	土師器 小型壺B₁－Ⅱ		13.8 —	口縁部内面ヨコナデ。下位および頸部内面ヘラミガキ。口縁部外面ヘラミガキ。体部内面上位ナデ。中位板状工具によるナデ。体部外面上位ヘラミガキ、以下ヘラケズリ。体部内面粘土紐接合痕遺存。	乳灰橙色～ 乳灰茶色	やや粗 長石・石英（0.1㎜）赤色酸化土粒を含む。	良好	口縁体部½
92	土師器 小型壺 B₁－Ⅱ		12.8 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面弱いハケナデ（9本／cm）。体部外面はナデ。	乳灰褐色	密 長石・石英・雲母（0.1㎜）を含む。	良好	口縁部¼
93 一五	土師器 小型壺 B₁－Ⅱ		12.6 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面中位まではヨコナデ。以下は弱いヘラケズリ。体部内面中位に粘土紐接合痕が、また、底部内面付近に板状工具による圧痕が遺存。	乳灰茶色～ 乳灰橙色	密 長石・石英（0.1㎜）をわずかに含む。	良好	口縁体部⅓
94	土師器 小型壺 B₁－Ⅱ		— — 胴部最大径 14.4	頸部内外面ヨコナデ。体部内面の一部にハケ目が認められるが調整不明瞭。底部内面ハケナデ（16本／cm）。体部外面中位まではナデ、以下は弱いヘラケズリ。	乳灰褐色～ 淡茶灰色	密 長石・石英を含む。	良好	頸体部½

遺物番号 図版番号	器種	口径 器高 (cm) 法量	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
95 一五	土師器 小型壺 B_1-II	11.0 —	口縁部内面横方向のハケナデ（10本／cm）。口縁部外面縦方向のハケナデ（10本／cm）。体部内面中位までは横方向のハケナデ（7本／cm）。以下はヘラケズリ。体部外面は縦方向のハケナデ（8本／cm）。体部外面は横方向のハケナデ（8本／cm）。体部外面の一部に粘土紐接合痕が遺存。	淡灰褐色	やや粗 石英・長石・チャート（0.1～2mm）を含む。	良好	口縁体部½
96 一五	土師器 小型壺 A	6.6 6.8	口縁部および底部内外面ナデ。口縁部内外面に粘土紐接合痕が、また体部外面に指頭圧痕が遺存。	乳灰黄色～乳灰褐色	密 長石・石英（0.1mm）をわずかに含む。	良好	½以上
97 一五	土師器 小型壺B_1-I	8.3 —	口縁部および体部内外面横方向のヘラミガキ。体部外面中位以下は調整不明瞭。口縁部内外面の一部に指頭圧痕が遺存。	乳灰褐色～[illegible]	密 赤色酸化土粒を含む。	良好	底部欠損
98 一五	土師器 小型壺 B_1-I	9.2 7.4	口縁部内外面ヘラミガキ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外面ヘラミガキ。底部内面にヘラ状工具による圧痕が、また、体部外面中位に指頭圧痕およびヘラケズリの痕跡が遺存する。	乳灰褐色～乳灰白色	密 長石・チャート（0.1mm）をわずかに含む。	良好	½
99 一五	土師器 小型壺 B_1-I	9.4 —	口縁部内面ハケナデ（10本／cm）。口縁部外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面上位ヨコナデ。以下ハケナデ（10本／cm）。	乳灰褐色	やや粗 長石・チャート・石英（0.1～0.5mm）を含む。	良好	口縁体部½
100 一六	土師器 小型壺 B_1-I	10.4 —	口縁部内外面ヘラミガキ。体部内面指頭圧成形後ナデ。体部外面ヘラミガキ。頸部内面に粘土紐接合痕が、また、体部内面上位付近に指頭圧痕が遺存する。	乳灰白色～乳赤茶色	精良	良好	口縁体部½
101 一六	土師器 小型壺 B_1-I	11.8 —	口縁部内外面ヘラミガキ。口縁部内面に放射状のヘラミガキを加える。体部内面ナデ。体部外面上位ヘラミガキ。中位以下はヘラケズリ。	乳灰褐色	精良	良好	口縁体部½
102 一六	土師器 小型壺 B_1-I	11.2 —	口縁部内面ヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部内面上位ヘラミガキ。以下指頭圧成形後ナデ。体部外面ヘラミガキ。体部内面に指頭圧痕が遺存。口縁部外面および体部外面中位以下に煤付着。	乳赤茶色～乳灰茶色	精良	良好	口縁体部½
103 一六	土師器 小型壺 B_1-I	11.4 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面中位まではハケナデ（13本／cm）後ナデ、以下は弱いヘラケズリ。口縁部外面および体部内面に粘土紐接合痕が、また、体部内外面および口縁部外面に指頭圧痕が遺存。	乳灰橙色～乳灰茶色	精良	良好	口縁体部½
104 一六	土師器 小型壺 B_2	9.8 7.6	口縁部内面ヨコナデ。口縁部外面は一部にハケナデ（10本／cm）が認められるが、他はナデと思われる。体部内外面および底部内面ナデ。底部外面弱いナデ。体部内外面に指頭圧痕が遺存。	乳灰褐色～乳赤茶色	密 長石・石英・チャート（0.1mm）をわずかに含む。	良好	½以上
105 一六	土師器 小型壺B_2	10.8 6.4	口縁部内外面ヘラミガキ。体部内面上位ハケナデ（12本／cm）。以下はナデ。体部外面上位ヘラミガキ。以下はヘラケズリの後一部にヘラミガキを施す。底部外面弱いヘラケズリ。底部外面の一部に指頭圧痕が遺存。	乳灰褐色	密 長石・チャート（0.1mm）赤色酸化土粒を含む。	良好	½以上
106	土師器 小型壺B_2	11.2 -	口縁部内外面ヘラミガキ。体部内面ナデと思われる。体部外面ヘラミガキ。体部内面に板状工具による圧痕が、また頸部内外面に粘土紐接合痕および指頭圧痕が遺存する。	乳赤茶色～乳灰白色	密 長石・石英（0.1mm）赤色酸化土粒を含む。	良好	口縁体部½

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
107 一六	土師器 小型壺B₁	11.2 7.4	口縁部内外面および体部内面中位までヨコナデ。体部内面下位および底部内面ナデ。体部外面中位まではヘラミガキ、以下は弱いヘラケズリの後ヘラミガキ。体部および底部内面にヘラ状工具による圧痕が遺存。	乳赤茶色～乳灰褐色	精良	良好	½以上
108 一六	土師器 小型壺B₁	11.8 7.6	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部内面に放射状ヘラミガキを加える。体部および底部内面ナデ。体部外面上位ヘラミガキ、以下はヘラケズリの後ヘラミガキ。底部内面にヘラ状工具による圧痕が遺存。	乳赤茶色～乳灰茶色	密 石英・長石を含む。	良好	ほぼ完形
109 一六	土師器 小型壺D	10.0 9.3	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面全体に弱いヘラケズリを施した後、中位にヘラミガキを施す。口縁端部外面に沈線状の凹線が廻る。体部外面中位の相対する二箇所に紐圧痕が遺存。	淡灰黄色～乳赤茶色	密 長石（0.1mm）をわずかに含む。	良好	ほぼ完形
110	土師器 複合口縁壺 B₂－Ⅱ	15.6 —	口縁部および受部内外面ともにヨコナデ。	淡灰茶色～乳灰褐色	やや粗 長石・石英・チャート（0.1mm）赤色酸化土粒を含む。	良好	口縁部⅛
111	土師器 複合口縁壺 B₂－Ⅱ	15.2 —	口縁部および受部内外面ともにヨコナデ。	乳灰茶色～乳赤茶色	密 長石・石英（0.1mm）赤色酸化土粒をわずかに含む。	良好	口縁部⅛
112	土師器 複合口縁壺 B₂－Ⅱ	12.0 —	口縁部および受部内外面ともにヨコナデ。	乳赤茶色～乳灰茶色	密 長石・チャート（0.1mm）をわずかに含む。	良好	口縁部⅛
113	土師器 複合口縁壺 B₂－Ⅱ	12.2 —	口縁部内外面ともにヨコナデと思われるが、調整不明瞭。	乳灰褐色	密 チャート・雲母（0.1mm）をわずかに含む。	良好	口頸部½以上
114	土師器 複合口縁壺 B₂－Ⅲ	16.4 —	口縁部および受部内外面の一部にヘラミガキが認められるが調整不明瞭。口縁部外面ハケナデ（11本／cm）。受部外面ヨコナデ。	乳灰褐色	やや粗 長石・チャート・石英（0.1mm）を含む。	良好	口縁部⅛
115	土師器 複合口縁壺 B₂－Ⅲ	17.8 —	口縁部および受部内面ヨコナデ。口縁部外面ハケナデ（12本／cm）の後ヨコナデ。受部外面ヨコナデ。	乳灰褐色	やや粗 長石・石英・チャート（0.1mm）を含む。	良好	口縁部¼
116 一六	土師器 複合口縁壺 B₂－Ⅲ	16.0 17.6	口縁部および頸部内面ヘラミガキ。口縁部外面ハケナデ（11本／cm）の後ヨコナデ。頸部外面ヘラミガキ。体部内面上位は板状工具によるナデ。以下はナデ。体部外面中位まではヘラミガキ。以下はヘラケズリの後ヘラミガキ。	乳灰褐色～乳赤茶色	精良	良好	ほぼ完形
117	土師器 複合口縁壺 B₂－Ⅲ	— — 頸部径6.7	受部および頸部内外面ともにヨコナデと思われる。	乳灰褐色～淡茶灰色	密 長石・石英（0.1mm）赤色酸化土粒をわずかに含む。	良好	頸部¼
118	土師器 複合口縁壺 B₂－Ⅲ	— — 頸部径5.3	受部内外面ヘラミガキ。頸部内面ハケナデ（11本／cm）。頸部外面の一部にヘラミガキが認められるが調整不明瞭。	乳赤茶色～乳灰褐色	精良	良好	頸部½

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
119	土師器 複合口縁壺 B₃－Ⅲ	- - 頸部径5.8	頸部内面の一部にハケ目が認められるが、内外面ともに調整不明瞭。	乳茶灰色	密 長石（0.1㎜） 赤色酸化土粒を含む。	良好	頸部½以上
120	土師器 複合口縁壺 B₃－Ⅲ	— - 頸部径6.8	頸部内外面ともにナデ。	乳灰褐色	精良	良好	頸部¼
121	土師器 複合口縁壺 B₃－Ⅲ	— — 頸部径8.1	頸部内外面ともにナデ。	乳赤茶色～ 乳灰褐色	精良 石英を含む。	良好	頸部¼
122 一六	土師器 複合口縁壺 B₃－Ⅱ	14.4 14.2	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面ナデ。頸部外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部外面中位まではヘラミガキ、以下はヘラケズリの後ナデ。体部内面上位に粘土紐接合痕が遺存。	乳灰褐色～ 乳赤茶色	やや粗 長石・石英・チャート（0.1～0.5㎜） 赤色酸化土粒を含む。	良好	口縁部欠損
123 一六	土師器 複合口縁壺 B₃－Ⅲ	16.0 —	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面はナデと思われる。頸部外面の一部にヘラミガキが認められるが調整不明瞭。体部内面ヘラケズリ。体部外面調整不明瞭。	淡赤茶色～ 乳赤茶色	やや粗 長石・石英（0.1～0.5㎜）をやや多量に含む。	良好	口頸部½
124 一七	土師器 複合口縁壺 B₃－Ⅱ	13.5 12.7	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内外面ヨコナデ。体部外面中位まではヘラミガキ、以下はヘラケズリの後ナデ。体部内面ナデ。体部内面上位に粘土紐による接合痕および指頭圧痕が遺存。	淡黄褐色	精良 石英・角閃石・チャートを含む。	良好	½以上
125 一七	土師器 複合口縁壺 B₃－Ⅲ	16.4 17.8	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面ハケナデ。頸部外面ナデ。体部内面中位までナデ、下位は放射状のハケナデ。体部外面ナデ。体部内面上位に指頭圧痕が遺存。	乳淡茶色	密 赤色酸化土粒・長石・雲母（1～3㎜）を少量含む。	良好	ほぼ完形
126 一七	土師器 複合口縁壺 B₃－Ⅲ	14.9 (18.0)	口縁部および頸部内面ヘラミガキ。口縁部および頸部外面ヨコナデ。体部内面上位ヘラケズリ後ナデ。以下はナデと思われる。体部外面上位ヘラミガキ、中位はヘラケズリの後一部ハケ目が残る。下位はヘラミガキ。	淡橙茶色	密 長石・石英（0.1㎜）を少量含む。	良好	口縁部 体部¾
127	土師器 複合口縁壺 B₃－Ⅲ	— — 頸部径7.0	頸部内面横方向のハケナデ（10本／cm）。頸部外面ヘラミガキ。一部ハケ目が遺存。体部内面上位指ナデ。中位ナデ。下位はハケナデ。体部外面上位ナデ、以下はヘラミガキ。中位下半にヘラケズリが遺存。	淡褐色	精良 長石・石英・雲母・赤色酸化土粒（1～3㎜）を少量含む。	良好	頸部体部のみ
128	土師器 複合口縁壺 B₃－Ⅲ	— — 頸部径8.4	頸部内外面ナデ。体部内面中位までナデ。部分的にハケナデが残る。下位はハケナデ（6本／cm）。体部外面上位ナデ。以下はヘラミガキ。体部内面上位に粘土紐による接合痕が遺存。	淡乳赤色	精良 長石・石英を含む。	良好	頸部 体部
129 一七	土師器 複合口縁壺 B₃－Ⅲ	17.1 17.8	口縁部および頸部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。上位にハケ目が遺存。体部外面ヘラケズリ後ナデ。下位に黒斑。	黄褐色	密 長石・石英・角閃石を含む。	良好	完形
130 一七	土師器 大型直口壺 A	21.0 -	口縁部内外面ヨコナデ。口頸部内面ナデ。口頸部外面剥離のため不明。	暗褐色	精良	良好	口縁部

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
131	土師器 大型直口壺 A	15.6 —	口縁部および口頸部内外面ヨコナデ。体部内面上位ナデ。以下はヘラケズリ。体部外面ナデ。体部内面上位に指頭圧痕が遺存。	淡茶褐色	精良	良好	口縁部½ 体部½
132 一七	土師器 大型直口壺 A	16.3 — 体部最大径 31.2	口縁部内外面ヨコナデ。口頸部内外面ハケナデ後ナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面ハケナデと思われる。体部外面黒斑。	茶褐色	精良	良好	口縁部½ 体部½
133	土師器 大型直口壺 A	16.9 —	口縁部および口頸部内面ハケナデ後ナデ。口縁部および口頸部外面縦方向のヘラミガキ。	赤褐色	精良	良好	口縁部½
134	土師器 大型直口壺 A	21.1 —	口縁部内外面ヨコナデ。口頸部内面ハケナデ。口頸部外面ナデ。一部ハケ目が遺存。	淡褐色	精良 長石・石英・チャート(2～5㎜)を少量含む。	良好	口縁部⅙
135 一七	土師器 大型直口壺 A	19.8 —	口縁部および口頸部内外面ヨコナデ。	淡褐色	精良	良好	口縁部⅙
136	土師器 大型直口壺 A	19.2 —	口縁部および口頸部内外面ヨコナデ。	茶褐色	密 チャート・雲母を少量含む。	良好	口縁部¾
137	土師器 大型直口壺 A	16.4 28.3 体部最大径 23.0	口縁部および口頸部内面ヨコナデ。口縁部および口頸部外面縦方向のヘラミガキ。体部内面ナデ。体部外面左上りのハケナデ(18本/㎝)の後中位までヘラミガキを施す。	淡乳橙色	精良	良好	ほぼ完形
138 一七	土師器 大型直口壺 A	18.2 — 体部最大径 26.4	口縁部および口頸部内外面ヨコナデ。体部内面中位までナデ。以下はヘラケズリ。体部外面左上りのハケナデ(11本/㎝)。	暗褐色	精良	良好	口縁部 体部¾
139	土師器 高杯A₁	22.0 —	口縁部内外面ヘラミガキ。杯部内面ナデ。杯部外面ヘラミガキ。	淡褐灰色～暗褐色	やや粗 長石・石英・チャート(0.1～0.5㎝)を含む。	良好	杯部¼
140 一七	土師器 高杯A₁	— — 裾径 17.1	裾端部内外面ヨコナデ。裾部内面ハケナデ(11本/㎝)。柱状部内面ナデ。柱状部および裾部外面ハケナデ(6本/㎝)の後ヘラミガキ。裾部中位の四方に焼成前の円孔を穿つ。柱状部内面にシボリ目。杯部との接合面に刻み目遺存。	淡黄灰色～灰白色	やや粗 長石・石英・チャート(0.1～0.5㎜)を含む。	良好	柱状裾部½
141	土師器 器台B₂	8.5 —	口縁部内外面および受部内面ヨコナデ。受部外面ヘラケズリ。	乳灰褐色～暗灰褐色	やや粗 長石・石英・チャート(0.1～0.5㎜)を含む。	良好	受部½
142	土師器 器台B₂	— — 裾径 11.4	裾部内面の一部に板状工具による圧痕が認められるが、内外面ともに調整不明瞭。	乳橙色	密 長石・石英(0.1～0.5㎜)をわずかに含む。	良好	裾部⅙

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
143	土師器 器台B₃	— — 裾径 10.6	裾部内面ハケナデ（13本／cm）。裾部外面ヘラミガキ。裾部上位の二方に焼成前の穿孔を表から裏へ穿つ。裾部内面上位の一部に指頭圧痕が、また、裾部外面の一部に板状工具による圧痕が認められる。	乳赤茶色～淡茶灰色	密 長石・石英（0.1mm）をわずかに含む。	良好	裾部¼
144	土師器 鉢I₁	12.4 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヨコナデ。体部外面ナデ。	淡赤茶色	やや粗 長石・石英（0.1～0.5mm）を含む。	良好	口縁部⅙
145	土師器 鉢H₂	15.2 —	口縁部および体部内外面ともにヘラミガキ。体部外面中位以下はナデ。	乳赤茶色～淡赤茶色	精良	良好	口縁体部⅙
146 一七	土師器 鉢H₇	13.8 4.5	口縁部内外面ヘラミガキ。体部内面中位まではヘラミガキ、以下はナデ。体部外面ヘラミガキ。底部外面ナデ。	淡灰黄色～乳赤茶色	密 長石・石英・チャート（0.1～2mm）をわずかに含む。	良好	ほぼ完形
147 一八	土師器 鉢H₂	17.2	口縁部内外面ヘラミガキ。口縁部内面に放射状ヘラミガキを加える。体部内面ヨコナデ。体部外面上位指頭圧成形後ヘラミガキ、以下はヘラケズリの後ヘラミガキ。体部外面上位に指頭圧痕が遺存。	乳赤茶色～乳灰茶色	精良	良好	口縁・体部½以上
148 一八	土師器 鉢H₁	17.6 9.8	口縁部内面ヨコナデ。口縁部外面ヘラミガキ。体部内面上位ナデ。以下は弱いヘラケズリの後一部にナデを施す。体部外面中位まではヘラミガキ、以下はナデ。口縁部外面の一部に指頭圧痕が遺存。	淡灰橙色～乳赤茶色	密 長石・石英（0.1mm）をわずかに含む。	良好	½以上
149 一八	土師器 鉢H₁	23.0	口縁部内面ヨコナデ後ヘラミガキ。口縁部外面ヘラケズリの後斜いナデ。体部内面ヘラケズリの後ヘラミガキ。体部外面上位ヘラミガキ、以下は弱いヘラケズリ。頸部内面に粘土紐接合痕遺存。外面に煤付着。	淡灰茶色～乳赤茶色	密 長石・石英（0.1mm）を含む。	良好	口縁・体部⅓
150 一八	土師器 鉢F	10.0 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面は板状工具によるナデと思われる。体部外面に板状工具の圧痕が遺存。	淡灰褐色	やや粗 長石・チャート・石英・[illegible]（0.1～1mm）をやや多量に含む。	良好	底部のみ欠損
151 一八	土師器 鉢I₁	20.0 —	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部内面の一部にヘラミガキが認められる。体部内面板状工具によるナデ後ヘラミガキ。体部外面ハケナデ（12本／cm）後ヘラケズリを施し、後にヘラミガキ。口縁部外面に粘土紐接合痕が遺存。	淡灰褐色～茶褐色	精良	良好	底部欠損
152 一八	土師器 鉢I₁	29.4 —	口縁部内外面ヨコナデと思われるが、調整不明瞭。	乳灰茶色	やや粗 長石・石英・チャート（0.1～0.5mm）を含む。	良好	口縁部¼
153 一八	土師器 鉢I₁	40.8 22.9	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ヘラケズリ。体部外面中位まではハケナデ（9本／cm）、以下はナデ。	乳灰橙色～淡赤茶色	やや粗 長石・石英・チャート（0.1～1mm）をやや多量に含む。	良好	⅓
154 一八	土師器 器台C₂	10.6 7.3 裾径 11.8	受部内面ヘラミガキ。受部外面ヨコナデ。脚台部内面弱いナデ。脚台部外面ナデと思われる。脚台部内面上位にシボリ目が遺存。	淡茶黄色	精良	良好	½以上

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
155 一八	土師器 器台C₂	10.5 8.1 裾径 11.8		受部内面ヘラミガキ。受部外面ヨコナデ。脚台部内面弱いナデ。一部に板状工具によるナデを施す。脚台部外面ヨコナデ。受部外面と脚台部外面に指頭圧痕および工具痕が遺存。	淡赤茶色	精良	良好	½以上
156	土師器 甕A₂	10.8 —		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面左上りのタタキ（3本／cm）。	淡橙茶色～灰黒色	密 長石・石英（0.1～0.5mm）をわずかに含む。	良好	口縁部¼
157	土師器 甕B₁	13.7 —		口縁部内外面ヨコナデ。	暗褐色	密 長石・角閃石（0.1～0.5mm）をわずかに含む。	良好	口縁部¼
158	土師器 甕B₁	14.6 —		口縁部内面ハケナデ（7本／cm）。口縁部外面ヨコナデ。体部内面上位ヘラケズリ。	乳淡茶色	精良 長石（0.1mm位）を散見する。	良好	口縁部⅓ 煤付着
159	土師器 甕B2 0 4	16.6		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。外面風化の為不明。	暗褐色	やや粗 長石・角閃石・ 黒雲母を多量に含む。	良好	口縁部¼
160 一八	土師器 甕B₁	14.0		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面上位は右上りのタタキ、中位以下はハケナデ（12本／cm）。	暗茶褐色	やや粗 長石・雲母を少量含む。	良好	口縁体部½
161	土師器 甕B₁	14.4 —		口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面に粘土紐接合痕が遺存。	暗褐色～茶褐色	密 長石・雲母（0.1～0.4mm）を少量含む。	良好	口縁部⅓
162	土師器 甕B₁	16.4 —		口縁部内面ヨコナデ。口縁部外面ハケナデ（7本／cm）後ナデ。口縁部外面に粘土紐接合痕が遺存。	暗褐色	やや粗 石英・長石・雲母（0.1～0.5mm）を多量に含む。	良好	口縁部⅓
163	土師器 甕B₁	17.8 —		口縁部内面ハケナデ（7本／cm）。体部内面ヘラケズリ。口縁部外面ヨコナデ。	淡灰褐色	密 石英・長石（0.1mm位）をわずかに含む。	良好	口縁部⅙
164	土師器 甕B₁	16.0 —		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。	暗褐色	密 長石・石英・角閃石を少量含む。	良好	口縁部⅙
165	土師器 甕B₁	16.6 —		口縁部内外面ヨコナデ。	暗褐色	精良	良好	口縁部¼
166	土師器 甕B₁	15.6 —		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面右上りのタタキ（6本／cm）後ハケナデ。口縁部外面端部には1条の沈線が廻る。口縁部外面に指頭圧痕が遺存。	茶灰黒色	やや粗 長石・雲母を多量に含む。	良好	口縁部½ 体部¼ 煤付着

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
167	土師器 甕B₄		15.8 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。	淡灰茶色	密 長石・雲母を少量含む。	良好	口縁部¼
168	土師器 甕B₄		13.8 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面右上りのタタキ（6本／cm）。	暗茶褐色	密 長石・雲母を少量含む。	良好	口縁部¼
169	土師器 甕B₄		14.8 —	口縁部内外面ヨコナデ。	暗茶褐色	密 長石・雲母（0.1mm）を少量含む。	良好	口縁部½
170	土師器 甕B₄		15.7 —	口縁部内面ハケナデ（6本／cm）後ナデ。口縁部外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。	乳茶褐色	密 長石・石英（0.1mm）を少量含む。	良好	口縁部½
171	土師器 甕B₄		15.3 —	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面中位に粘土紐接合痕が遺存。	茶褐色	やや粗 長石・石英（4mm位）雲母を多量に含み、くさり礫を含む。	良好	口縁部のみ
172 一八	土師器 甕B₄		13.2 — 体部最大径 19.2	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面上位に右上りのタタキ（8本／cm）の後中位までハケナデ、下位はハケナデ後ナデ。	灰褐色～暗茶褐色	密 雲母・長石・石英を含む。	良好	口縁部⅔ 体部½ 煤付着
173 一九	土師器 甕B₄		13.4 17.8 体部最大径 18.4	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面上位左上りのタタキ（6本／cm）。中位に一部ハケ目が認められる。他はナデ。口縁部外面に指頭圧痕が遺存。	淡茶褐色	精良 長石・石英を少量含む。	良好	ほぼ完形
174	土師器 甕B₄		14.0 — 体部最大径 17.1	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面上位右上りのタタキ（5本／cm）。他はナデ。	淡茶褐色	密 長石・石英・雲母を少量含む。	良好	口縁部½ 体部½
175 一九	土師器 甕B₄		13.6 — 体部最大径 17.6	口縁部内面ハケナデ（13本／cm）。口縁部外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面上位右上りのタタキ（3本／cm）後ハケナデ、中位縦方向のハケナデ（12本／cm）。	淡灰茶色	精良 長石（0.1～0.5mm）雲母を少量含む。	良好	口縁部⅓ 体部¼
176	土師器 甕B₄		17.2 — 体部最大径 24.5	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面上位にタタキ（6本／cm）が遺存。体部内面ヘラケズリ。体部外面上位右上りのタタキ（6本／cm）後左上りのハケナデ（4本／cm）をし、さらに中位のみ右上りのハケナデが認められるが、他はナデ。	淡褐色	精良 石英・長石を少量含む。	良好	ほぼ完形
177 一九	土師器 甕D		15.4 — 体部最大径 22.2	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面上位は指頭圧成形後ハケナデ。中位以下ヘラケズリ。体部外面中位までハケナデ。以下はナデ。	淡茶褐色	やや粗 長石（0.1mm位）チャート・赤色酸化土粒を多量に含む。	良好	口縁部½ 体部½
178	土師器 甕D		13.6 18.0 体部最大径 18.8	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面上位右上りのハケナデ（13本／cm）。中位左上りのハケナデ（13本／cm）、以下はナデ。	淡灰茶色	やや粗 長石・石英・角閃石・雲母を多量に含む。	良好	口縁部½ 体部½

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
179 一九	土師器 甕D	14.5 17.7 体部最大径 18.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。底部内面指頭圧痕遺存。体部外面左上りのハケナデ（7本／cm）後部分的に右上りのハケナデ（7本／cm）を施す。底部外面はナデ。	乳灰茶色	やや粗 長石・チャート（5㎜）を多量に含む。	良好	完形 煤付着
180 一九	土師器 甕D	14.0 18.0 体部最大径 19.0	口縁部内面ハケナデ（8本／cm）。口縁部外面ヨコナデ。体部内面下位までヘラケズリ。体部外面左上りのハケナデ（7本／cm）。底部外面はハケナデ後ナデ。	淡茶褐色	精良 石英・長石（1㎜）を散見する。	良好	完形 体部外面に黒斑 未使用か？
181	土師器 甕D	15.4 20.4 体部最大径 20.2	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。底部内面指頭圧成形後ナデ。体部外面上位左上りのハケナデ（10本／cm）。中位右上りののハケナデの後部分的に縦方向のハケナデが認められる。	暗褐色	密 長石・石英・雲母・角閃石（2㎜）を少量含む。	良好	ほぼ完形
182 一九	土師器 甕D	13.2 — 体部最大径 17.4	口縁部内面ハケナデ（10本／cm）口縁部外面ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ体部外面縦方向のハケナデ（10本／cm）の後部分的に左上りのハケナデ（10本／cm）を施す。	暗茶褐色	密 長石・石英・雲母・角閃石・赤色酸化土粒を多量に含む。	良好	底部欠損
183	土師器 甕E₂	14.8 —	口縁部内外面ヨコナデ。	淡赤茶色	精良 長石・石英・雲母・1～2㎜位の粗砂粒を含む。	良好	口縁部½
184 一九	土師器 甕E₂	13.8 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。底部内面指頭圧成形後ナデ。体部外面上位から中位にかけて乱方向のハケナデ。体部外面はナデ。	淡灰色	密 雲母・長石・石英を含む。	良好	底部欠損
185	土師器 甕E₂	14.4 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面ナデ、一部ハケ目が遺存。	暗褐色	精良 長石・石英・雲母を少量含む。	良好	口縁部½
186	土師器 甕E₃	14.4 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面左上りのハケナデ（9本／cm）。	灰褐色～黄灰色	密 長石・石英を含む。	良好	口縁部½ 体部½
187 一九	土師器 甕E₄	15.5 — 体部最大径 20.2	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面上位指ナデ。一部指頭圧痕遺存。他はヘラケズリ。体部外面上位縦位のハケナデ（11本／cm）の後左上りのハケナデ。部分的にヘラ先による圧痕有り。	淡茶褐色	密 長石・石英・雲母を含む。	良好	底部欠損
188	土師器 甕F	12.8 —	口縁部内外面ヨコナデ。	茶褐色	精良 長石・雲母・角閃石を少量含む。	良好	口縁部¼
189	土師器 甕F	16.7 —	口縁部内外面ヨコナデ。	乳褐色	やや粗 長石・石英・雲母 1㎜位の砂粒を含む。	良好	口縁部⅛
190	土師器 甕F	11.4 —	口縁部内外面ヨコナデ。	暗褐色	やや粗 長石・石英・角閃石（1㎜位）を多量に含む。	良好	口縁部⅝

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
191	土師器 甕F	12.6 —		口縁部内外面ヨコナデ。	乳淡茶色	やや粗 長石・石英・ 粗砂粒を多量に含む。	良好	口縁部¼
192	土師器 甕F	14.6 —		口縁部内外面ヨコナデ。	茶褐色	やや粗 長石（1㎜位）を多量に含む。	良好	口縁部¼
193	土師器 甕F	12.8 —		口縁部内外面ヨコナデ。	乳淡色	精良 雲母・長石・ 石英・ チャートを少量含む。	良好	口縁部¼
194	土師器 甕F	14.2 —		口縁部内外面ヨコナデ。	暗褐色	やや密 長石・石英・ 雲母（3㎜位）を含む。	良好	口縁部¼ 煤付着
195	土師器 甕F	18.8 —		口縁部内外面ヨコナデ。	乳橙色	やや粗 長石・石英・ 雲母・ 赤色酸化土粒を多量に含む。	良好	口縁部¼
196	土師器 甕F	15.4 —		口縁部内外面ヨコナデ。	淡黄褐色	密 石英・チャートを散見する。	良好	口縁部¼
197	土師器 甕F	15.8 —		口縁部内外面ヨコナデ。	淡褐色	精良 雲母 1㎜以下を含む。	良好	口縁部¼ 煤付着
198	土師器 甕F	16.2 —		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面上位ナデ。	淡乳茶色	密 石英を含む。	良好	口縁部¼
199	土師器 甕F	14.4 —		口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面は風化が著しく調整不明瞭。	淡乳褐色	粗 長石・石英・ チャート・ 赤色酸化土粒を多量に含む。	良好	口縁部½
200	土師器 甕F	14.2 — 体部最大径 19.6		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面上半はハケナデ（13本／cm）の後ヘラケズリ。一部指頭圧痕を遺存。中位上半まではヘラケズリ。体部外面左上りのハケナデ（13本／cm）上位はハケナデの後ヨコナデ。	淡橙茶色	やや粗 石英・チャート・ 赤色酸化土粒を多量に含む。	良好	口縁部½ 体部½ 煤付着
201	土師器 甕F	14.2 14.9 体部最大径 16.4		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面風化が著しく不明。	茶褐色	やや粗 長石（5㎜） 角閃石・赤色酸化粒・ チャートを多量に含む。	良好	口縁部½ 体部½ 牛胸西鰭座
202 二〇	土師器 甕F	11.6 — 体部最大径 14.2		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面上位左上りのハケナデ（8本／cm）。部分的に縦位のハケナデ。中位上半左上りのハケナデ（8本／cm）。中位下半縦位のハケナデ（8本／cm）。	暗茶褐色	やや粗 長石・石英（5㎜） 雲母・角閃石・ 赤色酸化土粒を含む。	良好	底部欠損

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
203	土師器 甕ド	13.4 18.4 体部最大径 18.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面底部にハケナデ（10本／cm）があるが他は風化が著しく不明。	乳淡茶色	やや粗 角閃石・長石・チャート・赤色酸化土粒（1mm）を多量に含む。	良好	口縁部½欠損
204 二〇	土師器 甕ド	11.6 14.7 体部最大径 15.3	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。底部内面指頭圧成形後ナデ。体部外面上位ナデ。中位上半横方向のハケナデ（11本／cm）。下半は右上りのハケナデ。下位は左上りのハケナデ。	淡茶色	密 長石・角閃石・石英・雲母・チャート（1mm）を含む。	良好	口縁部½ 体部¾ 煤付着
205 二〇	土師器 甕ド	12.2 14.5 体部最大径 15.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。底部内面指頭圧成形後ヘラケズリ。体部外面上位左上りのハケナデ（11本／cm）。上位下半は横方向のハケナデ。中位縦位のハケナデ。一部右上りのハケナデが認められる。下位は乱方向のハケナデ。	暗茶黒色～茶褐色	密 長石・石英・雲母・チャートを少量含む。	良好	ほぼ完形 煤付着
206 二〇	土師器 甕K	13.4 —	口縁部内外面ヨコナデ。	茶褐色	精良 長石・チャートを少量含む。	良好	口縁部¼ 山陰系
207	土師器 甕K	11.6 — 体部最大径 19.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面ナデ。	淡茶褐色	やや粗 長石・石英・チャート・雲母・赤色酸化土粒を少量含む。	良好	底部欠損 山陰系
208 二〇	土師器 甕J₁	13.4 —	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面に6本の櫛描直線文を施す。	淡茶褐色	精良 長石・赤色酸化土粒と石英（1mm）角閃石を含む。	良好	口縁部⅓ 吉備系
209	土師器 甕J₁	14.6 —	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面に11本の櫛描直線文を施す。	暗褐色～灰褐色	やや粗 長石・石英・チャート砂粒を多く含む。	良好	口縁部⅓ 吉備系 煤付着
210	土師器 甕J₁	13.4 —	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面に9本の櫛描直線文を施す。	黄灰褐色	やや粗 長石・石英（1mm）砂粒を多量に含む。	良好	口縁部¼ 吉備系
211	土師器 甕J₁	11.9 —	口縁部内外面ヨコナデ。	淡茶褐色	密	良好	口縁部⅓ 吉備系か？

第2トレンチ第8層

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
212 二〇	土師器 複合口縁壺 B₂	16.8 —	口縁部および頸部内面ヨコナデ。口縁部および頸部外面の一部にヘラミガキが認められるが他は不明瞭。体部および底部内面ナデ。体部外面上位付近と底部外面にヘラミガキが認められる。	乳灰褐色～乳灰橙色	精良	良好	⅓
213	土師器 大型直口壺 A	— — 胴部最大径 22.6	頸部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面ハケナデ（11本／cm）。	淡茶褐色	やや粗 長石・石英・チャート（0.1～1mm）をやや多量に含む。	良好	体部½

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
214 二〇	土師器 複合口縁壺 F		8.0 8.2	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部外面上位ヨコナデ、以下はハケナデ（10～15本／cm）。体部および底部外面に煤付着。	淡赤茶色	やや粗 長石・石英（0.1～0.5mm）を含む。	良好	ほぼ完形
215 二〇	土師器 複合口縁壺 F		7.7 10.1	口縁部および頸部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ハケナデ（11本／cm）。体部外面ハケナデ（9本／cm）の後ヘラミガキ。底部外面ヘラミガキ。体部外面上位に指頭圧痕および粘土紐接合痕が遺存。	淡茶褐色～淡灰茶色	精良	良好	ほぼ完形
216	土師器 甕F		16.4 —	口縁部内面ハケナデ（8本／cm）が認められるが調整不明瞭。口縁部外面ヨコナデ。	淡灰褐色	やや粗 長石・石英（0.1～0.5mm）を含む。	良好	口縁部¼
217	土師器 甕D		14.4 —	口縁部内面ハケナデ（8本／cm）。口縁部外面ヨコナデ。体部内面ナデと思われる。体部外面一部にハケナデ（8本／cm）が認められるが、他は調整不明瞭。口縁部外面に粘土紐接合痕が遺存。口縁部外面に煤付着。	淡灰褐色	やや粗 長石・石英・チャート（0.1～0.5mm）をやや多く含む。	良好	口縁部⅓
218 二〇	土師器 甕D		13.2 —	口縁部内面ヨコナデ。口縁部外面ハケナデ（12本／cm）。体部内面ヘラケズリ。体部外面ハケナデ（10本／cm）。一部はナデによって消されている。	乳灰茶色～乳茶灰色	やや粗 長石・石英（0.1～1mm）を含む。	良好	口縁部・体部¼
219 二一	土師器 甕D		15.7 18.5	口縁部内外面は一部にハケ目が遺存するが調整不明瞭。体部および底部内面ヘラケズリ。体部および底部外面はハケナデ（9本／cm）と思われるが調整不明瞭。口縁部外面の一部に粘土紐接合痕が遺存。	淡褐灰色	やや粗 長石・石英（0.1～1mm）を含む。	良好	⅓
220 二一	土師器 高杯A	— — 裾径 15.5		裾部内面ハケナデ（5本／cm）の後ナデ。裾部外面ハケナデ（5本／cm）の後ヘラミガキ。裾部上位の五方に焼成前の円孔を裏面より表面へ穿つ。裾部中位に沈線状の凹が廻る。	淡茶灰色～乳灰茶色	精良	良好	裾部⅓
221 二一	土師器 高杯C	—	—	杯部内面ナデ。杯部外面ヘラミガキ。柱状部内面弱いナデ。柱状部外面ナデ。	暗灰褐色	やや粗 長石・石英（0.1～0.5mm）をやや多く含む。	良好	杯部下位のみ
222 二一	土師器 高杯A	— — 裾径 11.0		杯部内面ヘラミガキ。柱状部内面弱いナデ。柱状部および裾部外面ヘラミガキ。裾部内面ハケナデ（9本／cm）。柱状部内面にしぼり目が遺存。裾部中位の三方に焼成前の円孔を表面から裏面へ穿つ。	暗灰褐色～淡灰褐色	密 長石（0.1mm）をわずかに含む。	良好	柱状部裾部½以上
223 二一	土師器 器台B	— — 裾径 10.4		脚台部内面上位弱いナデ。以下はハケナデ（9本／cm）の後、一部にナデを施す。脚台部外面上位弱いヘラケズリ、以下はヘラミガキ。脚台部内面上位しぼり目が遺存。脚台部中位の三方に焼成前の円孔を表面から裏面へ穿つ。	淡茶灰色～乳灰茶色	やや粗 長石・石英・角閃石・雲母（0.1～0.5mm）をやや多く含む。	良好	脚台部のみ
224 二一	土師器 器台B	— — 裾径 12.9		脚台部内面上位弱いナデ。以下はハケナデ（11本／cm）。脚台部外面ヘラミガキ。脚台部中位の四方に焼成前の円孔を表面から裏面へ穿つ。	淡赤茶色	精良	良好	脚台部¼
225 二一	土師器 鉢H₁		16.1 6.6	口縁部内面ヨコナデと思われる。口縁部外面ヘラミガキ。体部および底部内面ナデ。体部外面ヘラミガキ。底部外面弱いヘラケズリ。	乳灰褐色～乳赤茶色	やや粗 長石・石英（0.1～0.5mm）・赤色酸化土粒を含む。	良好	完形

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
226 二一	土師器 鉢Ⅱ₁		15.6 …	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面上位ヨコナデ、以下は弱いヘラケズリ。	乳赤茶色	やや粗 長石・石英(0.1～0.5mm)・赤色酸化土粒をやや多く含む。	良好	口縁部・体部¼
227 二一	土師器 鉢Ⅱ₁	17.4 6.1		口縁部内外面ヘラミガキ。体部および底部内面ハケナデ（9本/cm）の後ヘラミガキを施し、後に放射状ヘラミガキを施す。体部内面上位ヘラミガキ。以下は弱いヘラケズリの後ヘラミガキ。	乳灰褐色	密 長石・石英(0.1mm)をわずかに含む。	良好	ほぼ完形
228 二一	土師器 鉢Ⅰ₁	19.2 —		口縁部内面ヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。受部内外面ヘラミガキ。体部内面ヘラミガキ。体部外面上位ヘラミガキ。以下ヘラケズリ。	淡灰褐色～乳灰茶色	やや粗 長石・石英(0.1～0.5mm)を含む。	良好	口縁部・体部¼

第3トレンチSW－2

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
229 二二	土師器 小型壺B₁		10.6 —	口縁部内面ヨコナデの後放射状ヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部内面板状工具によるナデ。体部外面中位まではヘラミガキ、以下はヘラケズリの後粗いヘラミガキ。	淡灰黄色	精良	良好	⅓
230 二二	土師器 小型壺B₁	10.2 8.1		口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面板状工具によるナデ。体部外面中位まではヘラミガキ、以下はヘラケズリ。	乳灰白色～淡灰橙色	密 長石・石英・チャートを含む。	良好	口縁部⅓欠損
231 二二	土師器 小型壺B₁	10.3 8.4		口縁部内面ヨコナデの後放射ヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部および底部内面弱いナデ。体部外面中位まではヘラミガキ。以下はヘラケズリの後ナデ。	淡灰褐色～淡橙灰色	やや粗 長石・チャート・石英(0.1～0.5mm)を含む。	良好	口縁部¾欠損
232 二二	土師器 小型壺B₁	11.1 8.9		口縁部内面ヨコナデの後放射ヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部および底部内面板状工具によるナデ。体部外面中位から底部まではヘラミガキ。	乳灰褐色～暗灰色	密 長石・石英・チャート(0.1mm)をわずかに含む。	良好	口縁部¼欠損
233 二二	土師器 小型壺B₁	10.2 8.1		口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部外面上位ヘラミガキ、以下はヘラケズリの後弱いヨコナデ。	乳灰茶色	密 長石・チャート（0.1mm）をわずかに含む。	良好	½以上
234 二二	土師器 小型壺B₁	10.4 …		口縁部内外面ヘラミガキの後口縁部内面に放射状ヘラミガキを加える。体部内面ナデ。体部外面上位ヘラミガキ。以下はヘラケズリの後弱いナデ。体部内面上位に粘土紐接合痕が遺存。	暗灰褐色～淡灰茶色	精良 長石・石英(0.1～0.5mm以下)を含む。	良好	⅓
235 二二	土師器 小型壺B₁	11.4 …		口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ともに一部に板状工具の痕跡が認められるがナデと思われる。体部内面上位および口縁部外面に粘土紐接合痕が遺存。	淡灰茶色～淡褐灰色	精良 長石・石英(0.5mm以下)を含む。	良好	½
236 二二	土師器 小型壺A	9.8 9.0		口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面板状工具による弱いナデ。体部および底部外面ナデ。体部内面上位および口縁部外面に粘土紐接合痕が、また、体部および底部内外面に板状工具による圧痕が遺存。	乳灰茶色～乳灰橙色	密 長石・石英(0.1mm)をわずかに含む。	良好	完形

遺物番号 図版番号	器　種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
237 二二	土師器 小型壺A		8.8 8.9	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面弱いナデ。体部および底部外面ナデ。体部内面および口縁部外面に粘土紐接合痕が、また、口縁部および体部内面に板状工具による圧痕が遺存。外底面指頭圧成形。	淡灰茶色	密 長石・石英(0.1㎜)を含む。	良好	完形
238 二二	土師器 鉢B		8.0 6.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内外面ナデ。体部内面に板状工具による圧痕が遺存する。	乳灰茶色～淡灰褐色	やや粗 長石・石英・チャート(0.1～0.5㎜)を含む。	良好	½
239 二三	土師器 鉢A₂		6.7 3.6	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内外面ナデ。体部内外面に粘土紐接合痕が遺存し、また、口縁部および体部内面の一部に板状工具による圧痕が遺存する。	暗灰色～暗灰褐色	密 長石・石英(0.1㎜)をわずかに含む。	良好	½
240 二三	土師器 複合口縁壺 B₃－Ⅲ		— — 胴部最大径 12.4	口頸部内外面ヨコナデ。体部および底部内外面板状工具によるナデ。体部外面中位ヘラケズリ。他はナデ。底部外面弱いヘラケズリ。	淡灰茶色	やや粗 長石・石英・チャート(0.1～0.5㎜)を含む。	良好	⅓
241 二三	土師器 複合口縁壺 B₃－Ⅱ		11.5 11.7	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面ナデ。頸部外面板状工具によるヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部外面中位まではナデ、以下はヘラケズリ。頸部および体部外面に板状工具の痕跡が、また粘土紐接合痕が遺存する。	淡灰茶色～淡灰黄色	密 長石・石英(0.1㎜)をわずかに含む。	良好	口縁部½欠損
242 二三	土師器 複合口縁壺 B₃－Ⅱ		— — 胴部最大径 11.6	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面ナデ。頸部外面板状工具によるヨコナデ。体部内面中位まではナデ、以下は板状工具によるナデ。体部外面中位まではナデ。以下はヘラケズリ。	淡灰黄色～淡茶灰色	密 長石・石英(0.1㎜)をわずかに含む。	良好	口縁部欠損
243 二三	土師器 直口壺A₁		9.3 13.3	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内外面ヘラミガキ。体部および底部内面ナデ。体部外面中位まではヘラミガキ、以下はヘラケズリの後粗いヘラミガキ。体部内面に粘土紐接合痕が遺存。	淡灰茶色	精良 長石・石英(0.1～0.5㎜)を含む。	良好	⅓
244 二三	土師器 直口壺A₁		10.4 17.5	口頸部内外面ヨコナデ後放射状ヘラミガキ。体部内面上位ナデ。以下は板状工具によるナデ。体部外面中位までは一部にヘラミガキが認められるが調整不明瞭。底部外面ヘラミガキ。	淡灰茶色～淡赤茶色	やや粗 長石・石英・チャート(0.1～0.5㎜)を含む。	良好	口縁部½欠損
245 二三	土師器 鉢J		30.0 〃	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部内面ヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部内面ヘラミガキ。体部外面ヘラミガキ。	淡灰茶色～淡赤茶色	密 長石・石英(0.1㎜)を含む。	良好	口縁部・体部⅓
246	土師器 鉢J		36.8 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面ハケナデ（9本／cm）の後一部にヨコナデを施す。	淡灰黄色～淡茶灰色	密 長石・石英・チャート(0.1㎜)を含む。	良好	口縁部・体部⅓

第3レンチ第7層

遺物番号 図版番号	器　種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
247	土師器 広口壺A		17.6 —	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面に板状工具による圧痕が遺存する。	灰白色	精良	良好	口縁部¼

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
248	土師器 直口壺A	11.6 —	口頸部内面ナデ。口頸部外面粗いハケナデ（4本／cm）。頸部内面に板状工具による圧痕が遺存する。	乳灰白色～乳赤茶色	やや粗 石英・長石・チャート（0.1～0.5mm）・赤色酸化土粒を含む。	良好	口縁部¼
249	土師器 直口壺A	11.4 〃	口頸部内外面ヘラミガキ。口頸部内面には放射状ヘラミガキを加える。	淡赤茶色～淡灰茶色	精良	良好	口縁部¼
250	土師器 小型壺B	8.9 —	口縁部内外面ヘラミガキ。体部内面ナデ。体部外面ヘラミガキ。体部内面に板状工具による圧痕が遺存。	淡灰褐色	やや粗 長石・石英・チャート（0.1～0.5mm）を含む。	良好	口縁部・体部¼
251	土師器 小型壺B_1	11.3 —	口縁部内外面ヘラミガキ。口縁部内面には放射状ヘラミガキを加える。体部内面ナデ。体部外面は一部にヘラミガキが認められるが調整不明瞭。頸部内外面に板状工具による圧痕が、また粘土紐接合痕が遺存。	淡灰褐色	精良	良好	口縁部・体部¼
252	土師器 小型壺B_2	11.0 7.7	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面板状工具によるナデ。体部外面ヘラミガキ。底部外面ヘラミガキ。体部および底部外面の一部に板状ないしはヘラ状工具による圧痕が、また頸部内面に粘土紐接合痕が遺存。	淡赤茶色～淡灰茶色	密 長石・石英（0.1mm）をわずかに含む。	良好	½
253	土師器 小型壺B_3	9.8 〃	口縁部内外面ヘラミガキ。体部内面板状工具によるナデ。体部外面はヘラケズリの後ヘラミガキ。	乳灰茶色	精良	良好	口縁部・体部¼
254	土師器 小型壺B_3	— — 胴部最大径 9.3	口縁部内外面ヘラミガキ。体部内面上位板状工具によるナデ、以下はナデ。体部外面ヘラミガキ。体部内面上位に粘土紐接合痕が遺存。	乳赤茶色～淡灰茶色	精良	良好	体部½
255	土師器 小型壺B_1	10.0 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面板状工具によるナデ。体部および底部外面ナデ。体部および底部内面に板状工具による圧痕が遺存する。	淡灰茶色	やや粗 長石・石英（0.1～0.5mm）を含む。	良好	口縁部・体部½
256	土師器 高杯A_1	— —	杯部内外面ヘラミガキ。杯部内面に放射状ヘラミガキを加える。杯底部内面ナデ。杯底部外面弱いナデ。		精良	良好	杯部¼
257	土師器 高杯A	— —	柱状部内外面板状工具による弱いナデ。柱状部内外面の一部に板状工具による圧痕が認められる。	乳灰褐色～淡灰橙色	やや粗 長石・石英・チャート（0.1～0.5mm）を含む。	良好	柱状部のみ
258	土師器 器台B	— — 裾径 11.1	裾端部内外面ヨコナデ。裾部内面ハケナデ（7本／cm）。裾部外面ハケナデ（8本／cm）の後斜方向のヘラミガキ。	淡灰褐色	やや粗 長石・石英・チャート・雲母（0.1～0.5mm）を含む。	良好	裾部½
259 二三	土師器 鉢E	9.1 3.6	口縁部内外面弱いヨコナデ。体部および底部内面板ナデ。体部および底部外面板状工具による弱いナデ。体部および底部内面に板状工具の痕跡が、また、体部および底部外面に板状工具による圧痕が遺存。	乳赤茶色～淡灰褐色	密	良好	外面に亀裂完形

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
260 二四	土師器 鉢A₂		8.4 7.0 底径 2.8	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面板状工具によるナデ。体部および底部外面弱いナデ。口縁部および底部外面に粘土紐接合痕が、また体部内面および底部内外面に板状工具の痕跡が遺存。	淡茶灰色～淡褐灰色	密 長石・石英(0.1㎜)をわずかに含む。	良好	完形
261	土師器 鉢		— — 底径 3.2	口縁部付近内外面ヨコナデ。体部および底部内外面板状工具による弱いナデ。体部内外面に板状工具の痕跡が遺存。	淡灰褐色	密 長石・石英(0.1㎜)を含む。	良好	体底部½
262 二四	土師器 鉢A₂		9.8 7.7	口縁部内面板ナデの後ヨコナデ。口縁部外面ヨコナデ。体部および底部内外面板状工具によるナデ。口縁部内面と体部および底部内外面に板状工具による圧痕が遺存。口縁部外面に粘土紐接合痕が遺存。	淡茶灰色～淡灰茶色	密 長石・石英(0.1㎜)を含む。	良好	ほぼ完形
263 二四	土師器 鉢A₂		8.0 7.1	手づくね成形、口縁部内面板ナデ。口縁部外面弱いナデ。体部および底部内面ユビナデ。体部および底部外面ナデ。口縁部および底部内面に板状工具による圧痕が、また、体部外面に粘土紐接合痕が遺存。	淡灰茶色	密 長石・石英(0.1㎜)をわずかに含む。	良好	½以上
264 二四	土師器 甕B₁		16.0 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面タタキ（7条／cm）。	淡褐色～淡灰褐色	やや粗 長石・石英・角閃石・チャート（0.1～0.5㎜）を含む。	良好	口縁部⅙
265	土師器 甕B₁		17.4 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面は調整不明。口縁部外面に粘土紐接合痕が遺存。	乳灰褐色～淡褐灰色	やや粗 長石・石英・角閃石・雲母（0.1～0.6㎜）・赤色酸化土粒を含む。	良好	口縁部⅙
266	土師器 甕D		14.6 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面タタキ（6条／cm）の後ハケナデ（10本／cm）。口縁部および体部外面に煤付着。	乳灰茶色	やや粗 長石・石英・チャート(0.1～1㎜)を含む。	良好	口縁部⅙
267	土師器 甕J₁		13.7 —	口縁部および受部内外面ヨコナデ。体部内面の一部にヘラケズリが認められるが、他は調整不明瞭。口縁部外面に8本／0.9cmの櫛描き直線文を施す。	乳灰茶色～乳灰褐色	やや粗 長石・石英・チャート（0.1～0.5㎜）を含む。	良好	吉備系 口縁部½
268 二四	土師器 甕D		16.6 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面ハケナデ（6本／cm）。	淡灰褐色～淡茶褐色	やや粗 長石・石英・雲母・角閃石・チャート（0.1～1㎜）を含む。	良好	口縁部・体部½

第4トレンチNR－1

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
269	弥生土器 広口壺		17.1 —	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面中位に櫛描き直線文を（7本／1.1cm）を2段廻らす。頸部内面ナデ。	茶褐色	粗 長石・石英・チャートを少量含む。	良好	口縁部½
270	弥生土器 広口壺		19.6 —	口縁部内面上半ナデ。下半ヘラミガキ。口縁部外面ナデの後32個（推定）の竹管文を施す。頸部内面ヘラミガキ。頸部外面ナデ。頸部と体部の境に段を有する。頸部上半に指頭圧痕が遺存する。	茶褐色	粗 角閃石・長石（1㎜）を多量に含む。	良好	口縁部¾

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
271	弥生土器 広口壺	12.2 —	口縁部内外面ナデ。体部内外面ナデ。頸部外面上位にヘラ先による一条の沈線が廻る。	淡灰色	密	良好	口縁部½
272	弥生土器 甕	16.2 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面横方向のハケナデ（6本／cm）。体部外面右上りのタタキ（3本／cm）、口縁部外面上位に指頭圧痕が、中位に粘土紐による接合痕が遺存する。	茶褐色	密 石英・長石・角閃石を含む。	良好	口縁部½
273 二四	弥生土器 甕	— — 底径 3.5	突出する平底の底部。体部内面ナデ。体部外面は右上りのタタキ（3本／cm）。底部内外面ナデ。体部内面上位に粘土紐による接合痕が遺存する。	茶色～赤茶色	密	良好	体部のみ ローリングを受ける。
274	弥生土器 甕	— — 底径 3.5	突出するドーナツ底。体部内面ナデ。体部外面右上りのタタキ（3本／cm）。底部内外面ナデ。	淡茶褐色～淡灰色	密	良好	体部½ 底部
275	弥生土器 甕	13.6 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面右上りのタタキ（4本／cm）。	淡灰色	密	良好	口縁部½
276	弥生土器 甕	- -- 底径 4.7	やや突出するあげ底。体部内面ヘラケズリ。体部外面右上りのタタキ（3本／cm）。底部内外面にヘラ先による圧痕が遺存。	淡灰赤色	やや粗 長石・チャート・角閃石を多量に含む。	良好	体部½ 底部
277	弥生土器 有孔土器	— 底径 3.0	平底。体部内面ナデ。体部外面右上りのタタキ。体部内面ナデ。底部内外面底部内面にヘラ先による圧痕が遺存。底面には表から裏に焼成前の孔を穿つ。	淡茶灰色	良 角閃石・チャートを少量含む。	良好	体部½ 底部 煤付着 ローリングを受ける。
278	弥生土器 甕	— — 底径 4.7	突出するドーナツ底。体部外面右上りのタタキ。体部内面ハケナデ。底部外面ナデ。底部内面は調整不明。	淡灰赤色	やや粗 角閃石・長石・石英を多量に含む。	良好	体部¼ 底部 炭化物付着
279	弥生土器 甕	— — 底径 3.2	突出する平底。体部内面ナデ。体部外面右上りのタタキ（2本／cm）。底部内外面ナデ。底部内面にヘラ先による圧痕が遺存。	淡茶灰色	密 長石（3～5mm）を多量に含む。	良好	体部½ 底部
280	上師器 台付き鉢A	— — 底径 6.6	脚台部外面ヘラミガキ。脚台部裏面ヘラケズリ後ナデ。底部内面ナデ。	乳淡茶色	密	良好	脚台部のみ
281	上師器 台付き鉢A	— — 底径 4.4	脚台部外面指頭圧成形後ナデ。脚台部裏面ナデ。体部内面ナデ。体部外面指頭圧成形後ナデ。	淡灰色	粗 長石・赤色酸化土粒・角閃石（0.1mm）を含む。	良好	杯部½ 脚台部
282 二四	弥生土器 鉢B	10.0 5.5 底径 3.0	やや突出した平底。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部内外面ナデ。体部内面上位にハケ目が、中位にヘラ先による圧痕が遺存する。	明茶褐色	密 長石（5mm）石英・角閃石を含む。	良好	ほぼ完形

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
283	弥生土器 鉢A₂	底径	— — 3.6	突出するドーナツ底。外面に顕著な指頭圧痕を有する。口縁部付近ナデ。体部内外面ナデ。底部内外面ナデ。体部内面上位に粘土紐による接合痕が遺存。	淡赤褐色	密	良好	体部のみ
284	弥生土器 高杯A		— —	杯部内外面ナデ。柱状部および裾部内外面ナデ。	茶褐色	密	良好	杯部½ 脚部½
285 二四	土師器 小型壺B₂		10.8 5.3	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面ヘラケズリの後ナデ。	橙色	粗 長石・チャート・石英を多量に含む。	良好	ほぼ完形
286 二四	土師器 小型壺B₂		9.85 (7.3)	口縁部内面ヨコナデの後、放射状のヘラミガキ。体部内面ナデ。体部外面ヨコナデ。	乳灰色	精良	良好	ほぼ完形
287	土師器 小型壺B₂		10.7 (7.1)	口縁部および体部内外面ヨコナデ。内面の口縁部と体部の境の粘土紐接合が不完全なため一部明瞭な段を有する。体部下半に黒斑。	淡灰茶色	精良	良好	口縁部½ 体部½
288	土師器 小型壺B₂		10.7 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面剥離がひどく不明。口縁部外面下半に粘土紐による接合痕が遺存する。	橙色	密	良好	口縁部½ 体部½
289	土師器 小型壺B₂		10.2 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面上位ヨコナデ。他はヘラミガキ。	淡茶灰色	精良	良好	口縁部½ 体部½
290	土師器 高杯C₂		12.4 —	口縁部内外面ヨコナデ。杯部内面ヨコナデの後、放射状のヘラミガキ。柱状部内面ナデ。柱状部外面縦位のヘラナデの後ナデ。	淡灰黄色	良 長石・雲母・チャートを多量に含む。	良好	杯部 柱状部½
291	土師器 器台B		— —	脚部内面ハケナデ。脚部外面ヘラミガキ。脚部外面中位の四方に透孔を穿つ。	灰黒色	良	良好	脚部のみ
292	土師器 器台B	推径	— 11.6	脚部内外面ヨコナデ。脚部外面中位の二方に焼成後に穿ったと思われる透孔がある。	明赤茶色	精良	良好	脚部のみ
293	土師器 複合口縁壺B		16.6 —	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内外面ヨコナデ。	乳灰色	粗 砂粒を多量に含む。	良好	口縁部¼
294	土師器 短頸壺A		12.0 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面縦位のハケナデ（4本／cm）の後、部分的にナデ。	灰茶色	密 長石・雲母を少量含む。	良好	口縁部½

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
295	土師器 甕B,	14.2 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面右上りのタタキ（5本／cm）。	茶褐色	やや粗 長石・チャート・雲母を多量に含む。	良好	口縁部⅓
296	土師器 甕B,	17.0 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面右上りのタタキ（10本／cm）。一部にハケ目が認められる。口縁部外面中位に指頭圧痕が遺存する。	淡灰色	密 角閃石・長石を含む。	良好	口縁部⅓
297	土師器 甕D	16.8 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面ハケナデ（6本／cm）。	淡灰茶色	密 角閃石を多く含む。	良好	口縁部¼
298	土師器 甕E,	15.0 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面ナデ。	淡茶色	粗 長石・チャートを多量に含む。	良好	口縁部⅓ 煤付着
299	土師器 甕D	16.2 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面右上りのハケナデ（6本／cm）。	淡灰茶色	粗 長石・雲母・チャートを多量に含む。	良好	口縁部⅓
300 二四	土師器 鉢I,	22.2 —	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内外面ナデ。	乳灰色	やや粗 長石を多量に含む。	良好	口縁部¼

第5章　ま　と　め

はじめに

本調査で出土した土器類の大半は古墳時代前期（布留式古相）に位置づけられるもので、中河内地域のこの時期の土器様相を考えるうえで貴重な資料といえよう。なかでも、第2トレンチのSW－1および第7層の出土遺物は数量および器種が豊富であり、中河内地域のこの時期の土器組成を考えるうえで示唆に富む資料を提供している。

ここでは、今回検出した資料と既往調査の資料を中心として中河内地域の古墳時代前期（布留式古相）の土器組成を明確にするとともに、布留式甕の出自のありかたや消長時期を明確にするなかで、布留式の範囲を考えてみたい。また、最後には本書に掲載した資料を中心に中河内地域における古墳時代初頭～前期（庄内式～布留式）を通しての土器組成の変遷をたどってみたい。

1）中河内地域における布留式古相の甕形土器について

第2トレンチのSW－1および第7層からは、甕A_3、B_4、D、E、F_1、J_4、K_1の7型式に分類した甕形土器が出土している。なかでも、河内型庄内式甕の最終形態である甕B_4と庄内式から布留式への過渡期の形態様相を示す甕D・甕Eおよび布留式甕F_1の共存関係は中河内地域の布留式古相における甕形土器組成の一端を可視的に示すものとして注目される。

ここでは、庄内式甕と布留式甕の中間的な形態をとる甕D、甕Eに注目し中河内地域に於ける布留式古相の甕型土器の様相を考えてみたい。甕Dは布留式影響庄内式甕としたもので、形態的には甕B_4と大差はないが、体部外面にハケナデ調整を施すことや底部内面に指頭圧痕が残存する等の特徴を持つもので、布留式甕を指向した甕である。甕Eは布留式傾向甕で布留式甕の属性の一部を具備したもので、形態的にはバラエティーに富んでいる。奈良県桜井市の纒向遺跡の形式分類ではこれらの甕を甕Cに分類されており、纒向2式（庄内1式）後半に出現し纒向3式（庄内2式）に盛行するものとされている。[註1]

この2型式の甕形土器については、庄内式から布留式の過渡期的な様相を示すものであるため、成立に至る経過や帰属時期をめぐって多くの論争がかわされてきた。小山田宏一氏は「布留式成立に関する覚書」の中で、纒向遺跡の形式分類で「甕C」とされた甕をC－a類とC－b類に区別し、これらの甕の分布範囲が汎西日本的に広がることに注目し、これらの甕の成立過程の広汎な連動が古墳文化発生の共通性を示しているものとされた。[註2]布留式甕の成立については、甕C－b類は庄内式甕の成形原理と山陰・山陽系技法の複合化の結果誕生したものとされ

た。氏の分類に従えば甕DがC－a類に甕EがC－b類に該当するもので、後者においては布留式の概念で捉えることが可能であるとされた。米田敏幸は氏の分類した布留系甕Bの倒卵形の体部形状や肩部に横ハケ調整や波状文を施す特徴は山陰系の影響によるもので、この布留系甕Bがその後、布留系甕（布留系甕D）の基本形になるものとし、その淵源を山陰地方にもとめている。寺沢薫氏はこれらの甕を0式布留形甕としたうえで、これらの甕の形成は庄内大和形甕を母胎として、これに山陰・山陽地方（とりわけ山陰地方）の土器製作技術が導入されたことによって成立したものとされた。一方、奥田尚氏は胎土分析の結果から布留式傾向甕の発祥地として凶幡地方が推定され、布留式甕の発祥地として加賀南部が推定されるとしたうえで、庄内式甕、布留式傾向甕、布留式甕の形態については、漸移的な変化のなかで形態が変化したものではなく、これらの甕が発祥した僅かの時間と場所の違いであるとし、これらの甕が持ち運ばれた結果として、同時期に庄内式甕、布留式傾向甕、布留式甕が存在する現象を生み出したものとされた。

このように、甕D．Eの存在は汎西日本的なスケールで布留式期に移行する過程を土器相から検証するうえで、小型精製三種土器と共に常に注目されてきた器種のひとつである。中河内地域の布留Ⅰ期の甕形土器の組成をみれば甕D．Eのほか、甕A類．B_1．F_1．F_2．J_1．H．K．M_1．M_2．Nがあり、甕形土器の多様化が顕著である。しかし、布留Ⅱ期には甕形土器が甕D．E類．F類の3型式に激減するとともに、存続する型式のなかでも数多くのバリエーションが認められた甕E類が激減し、甕F類に斎一化されていることから、布留Ⅰ期の中で甕E類から甕F_1への早急な変化が認められた。これらの変化は、庄内式甕にみられたような漸移的な型式変化の範囲では理解されないものである。したがって、布留式甕の成立においては、内在的な型式変化のほかに外的な要因を含めて考える必要があろう。胎土分析の結果では、甕Dの13点中、八尾市恩智8点、八尾市久宝寺1点、加賀南1点、播磨1点、その他2点で、甕Eでは4点中、加賀南部2点、八尾市久宝寺1点、その他1点であり搬入比率が高いことが窺える。布留式甕である甕F_1についても、22点中、加賀南部12点、八尾市恩智3点、八尾市久宝寺2点、その他5点であり、布留式甕成立段階においても搬入品が在地産を凌駕していることが指摘できる。特に加賀南部系の甕については甕D．E．F_1の3型式が搬入されていることが確認された。なお、同時期に比定される萱振遺跡SE03からも加賀南部系の布留式甕が出土しており、これらの搬入関係が中河内地域ではこの時期に確立していたことが明らかになった。これらの結果をみる限りでは、布留式甕の成立にあたっては奥田尚氏が指摘されているように、中河内地域に先行して加賀南部で布留式甕が成立していた可能性が高いように思われる。以上のことから甕F_1の成立にあたっては、甕Eからの形態変化のなかで成立したものではなく、加賀南部地域から直接布留式甕が持ち込まれ、それらに触発されて在地産の布留式甕が製作さ

れたものと推定される。一方、これらの甕の搬入先である北陸地方では、当該期の土器編年案が数多く示されている。なかでも、胎土分析の結果、これらの甕の製作地とされた加賀南部地域を中心として土器編年が試みられている漆町遺跡編年[註6]に従えば、甕E類に類似した甕（甕I_1）が漆・7群土器（Ⅲ型式）段階に出現し、盛行するものとされており、続く漆・8群土器（Ⅳ型式）の段階で布留系甕（甕I_2）に定着するものとされている。これらの編年案と今回試みた中河内地域の編年案で併行関係を示せば、甕Eの出現をみた庄内Ⅲ期が漆町・7群土器（Ⅲ型式）に、甕E．F_1が共存する布留Ⅰ期が漆町8群土器（Ⅳ型式）と共通した内容を示している。

以上が胎土分析の結果を中心とした中河内地域の布留式甕成立期の様相である。ただ、漆町遺跡出土の土器群と本資料を実見し[註7]比較・検討した結果では、流紋岩の砂粒の含有量や色調等に相違点が認められ、さらには、当該期に河内地方から搬入された土器が皆無であるとの指摘もあり、必ずしも加賀南部に限定することには首肯できない点もあるが、いずれにしても、胎土に流紋岩の砂粒を含む甕に影響されて中河内地域の布留式甕が出現した事実に変わることはない。今後も流紋岩を起源とする砂礫が分布する地域で、これらの甕の産地を限定していく必要があるとともに、中河内地域で確認された布留式甕成立期の状況が畿内の各地域でも普遍的であったかを確認していく必要があろう。

2）中河内地域における布留式古相の土器組成

昭和13年(1938)に末永雅雄・小林行雄・中村春寿氏により提唱された[註8]「布留式」の設定以降、先学諸氏による数多くの研究が提示されており、「布留式」が畿内の古墳時代前期を代表する土器様式であることが認識されている。ただ、布留式の範囲の概念に関しては一定ではなく、開始期を布留式甕の出現におくものと小型精製三種土器の出現をもって布留式とする考え方があり、終焉についても布留式甕の消長とするものと須恵器出現期とする考え方もある。このように、編年的研究が飛躍的に進歩したにも拘わらず、その根本である「布留式」の範囲概念が個々の研究者により齟齬を来しているのが現状である。ここでは、甕F_1の出現をもって布留式の成立と規定したうえで、中河内地域の布留式古相の土器組成を考えてみたい。なお、これらの事柄を検証するにあたっては、先行する庄内式新相（庄内Ⅲ期）および後出の布留式古相（布留Ⅱ期）に比定される資料を比較資料とした。

・壺

広口壺類は庄内Ⅲ期および布留Ⅰ期を通して広口壺A．B．C．D_2の4型式が存続するものの減少傾向は顕著で、布留Ⅰ期の段階で広口壺の大半の型式が消長をとげている。四国の阿波東部を中心に分布をみる広口壺D_3は布留Ⅰ期に搬入されている。短頸壺はA．Bともに布留

1期に激減しており、広口壺と同様の傾向を示している。長胴壺は庄内Ⅲ期に出現するもので、布留Ⅰ期に盛行するが布留Ⅱ期には継続しない器種である。短頸直口壺A類はA_2が庄内Ⅲ期に消長をとげており布留Ⅰ期に継続するものはない。大型直口壺Aは庄内Ⅲ期に増加する傾向をみせるもので、布留Ⅰ期には量的に確立するが布留Ⅱ期には減少している。大型直口壺Aの布留Ⅰ期の盛行はこの時期に激減する大型の広口壺とは対称的であり、布留Ⅰ期に存在する大型壺としてはこの型式に斉一化されている。直口壺A_1は庄内Ⅲ期に増加がみられ、布留Ⅰ期に盛行するが布留Ⅱ期以降は激減している。直口壺A_2は布留Ⅰ期に成立するが量的には僅少である。直口壺Bは庄内Ⅲ期には存在するが、布留1期には消長している。東海系の特徴を示す直口壺Cは庄内Ⅲ期から布留Ⅰ期に存在するが量的には僅少である。細頸壺Aは現時点では本調査資料のみである。複合口縁壺は庄内Ⅲ期においては複合口縁壺A_1、A_2、B_1、B_2、Eの5型式があり、布留Ⅰ期には新たに複合口縁壺B_2、D、Fが出現しているがA_1は激減している。特に複合口縁壺B_1、B_2、D、Eはこの時期に盛行するが大半の型式はこの段階をもって激減し、布留Ⅱ期では吉備系の大型の複合口縁壺のD型式のみが量的に確立している。布留式の指標とされる小型丸底壺は庄内Ⅲ期に出現した小型壺B_1が布留Ⅰ期に盛行するとともに小型壺B_2の出現と量的増加、さらには小型壺B_3への移行が認められる。なお、この時期の小型丸底壺B類については、煮振遺跡SE03出土[注9]のものが胎土分析の結果、吉備系とされている。本資料の小型壺B類中にも、播磨・因幡・加賀南部のいずれかと推定されるⅣe類型が大半をしめており、小型精製二種土器の一画を占める小型丸底壺のなかに多くの搬入品が含まれていることが確認された。小型壺Cはこの時期に出現するが量的に確立しない段階で消滅している。小型壺Dは庄内Ⅲ期に出現しこの時期に継続するが小型壺Cと同様出土量は僅少である。

・高杯

この時期量的に確立しているものは高杯A_1で庄内Ⅲ期から布留Ⅱ期をとおして高杯の主流となる。庄内Ⅲ期に盛行した高杯A_3、B_1、C_2はこの時期激減している。新たに高杯A_2が出現するが増加をみるのは布留Ⅱ期以降である。

・器台

器台は山陰系の特徴を示す器台C_1と器台C_1の退化形態である器台C_2の出現が特徴的である。大型の器台C_1は布留Ⅱ期以降減少している。小型の器台C_2はこの時期においては大半が精製品であるが、以後は形状や調整等に変化を持ちながら布留Ⅳ期まで存続している。布留式土器の指標とされた小型器台はB_3がこの時期盛行するが、布留Ⅱ期以降は減少傾向が顕著である。

・甕

甕形土器においてはこの時期型式の多様化が顕著で、搬入品の占める割合が高い。V様式系の特徴を持つA類は甕A_2が僅少であるのに対して、甕A_3は一定量の出土がみられるが、この

段階を境に激減している。庄内式甕では甕B_1の量的増加をみるが庄内Ⅲ期に盛行した甕B_2は激減している。大和型庄内式甕の特徴を示す甕Cはこの時期中田遺跡（中田1丁目39－土坑2）[註10]で僅かに1点が確認されている程度で、中河内地域では庄内式期から布留式期を通しても甕Cの出土量は微量である。布留式影響庄内式甕とした甕Dは庄内Ⅲ期に出現し、布留Ⅰ期に盛行するもので布留Ⅱ期にも減少傾向を示しながらも存続する。布留式傾向甕とした甕E類は甕Dと同様庄内Ⅲ期に出現し、布留Ⅰ期に盛行するが布留Ⅱ期には激減している。布留式を象徴する布留式甕F類は甕F_1．F_2が布留Ⅰ期に出現するが盛行するのは甕F_1である。甕F_1は布留Ⅱ期以降も数量を減じながらも存続している。搬入された甕形土器の中では、この時期甕J_1．K_1が量的に増加する。甕H．M_1．M_2この時期存在するが量的には少量である。

・鉢

甕形土器と同様布留Ⅰ期の段階で型式の多様化と各型式の量的増加がみられる。この時期庄内Ⅲ期から継続して量的に増加するものは、鉢E_1．H_1．H_2．J_1．J_2である。この時期出現するものは鉢F．I_1．I_2があるが鉢I_2以外は出土量は僅少である。

・台付き鉢

台付き鉢A類については、プレ庄内期から布留Ⅰ期まで継続した型式であるが、この段階で消長をとげている。台付き鉢B類は山陰系を中心に分布するもので、布留Ⅰ期のみに存在を認める。また、微量ではあるが台付きの鉢H_2が存在するのもこの期の特徴である。

・手焙形土器

手焙形土器は、八尾市太子堂遺跡SD－1下層[註11]で東海系の特徴を示す手焙形土器B類が1点出土している程度で、在地産のものはこの段階で消長をとげている。

3）中河内地域における庄内式から布留式土器の編年試案

1938年に末永雅雄・小林行雄・中村春寿氏ら[註12]により提唱された「布留式」の土器様式はその後、土器を編年的に細分しようとする動きのなかで、先学諸氏に多くの論争の場を提供してきた。中河内地域に限定しても、1956年に坪井清足氏が[註13]「最も純粋な形」の布留式土器の資料として布施市（現東大阪市）小若江北遺跡出土土器群を紹介したものが編年的研究の端矢である。その後、1958年に藤井寺市船橋遺跡（O地区）[註14]および1964年には松原市上田町遺跡[註15]の調査が実施され、畿内Ⅴ様式と小若江北遺跡出土土器群の間を埋める資料の存在が明らかになった。そのような混沌とした状況下、1965年には田中琢氏により畿内Ⅴ様式と布留式間を埋める土器様式として「庄内式」[註16]が提唱されるに至り、畿内の古式土師器は庄内式・布留式の土器様式が確立され編年的研究が新たな局面を迎える結果となった。1979年に都出比呂志氏は「前方後円墳出現期の社会」[註17]の中で河内地方の布留式土器の細分案を示され、古相の資料として藤井寺市船

橋遺跡H1・東大阪市馬場川遺跡T地点、中相の資料として小若江北遺跡出土土器群、新相の資料として奈良県上ノ井手遺跡SE030下層の土器群とする3相に区分する編年案が示されている。1980年代になると大規模な発掘調査に伴い、遺跡単位毎に編年案が示されるようになる。1981年に刊行された八尾南遺跡はそれらの先駆的なもので、米田敏幸氏は河内型庄内式甕を5型式に分類したうえで庄内式土器の細分が試みられている。また、近畿自動車道に関連した一連の調査報告書においては、1984年に渡辺昌宏氏が「美園」で、阪田育功氏が「佐堂（その2）－I」で、1987年に一瀬和夫氏が「久宝寺南（その2）」で、金子正裕氏が「久宝寺北（その1～3）」でそれぞれ庄内式ならび布留式土器の編年案を示されている。さらに、1986年には鳴村友子氏は「河内における庄内式の甕形土器」の中で河内型庄内式甕の変遷から庄内式が4期に細分することが可能であるとされた。1991年に米田敏幸氏は「古墳時代の研究6－土師器の編年　1近畿」で庄内式～布留式土器を9期に区分する編年案を示されている。一方、寺沢薫氏は大和地方の古式土師器を11期様相に区分する編年試案を提示し、各地方との併行関係の中で河内地方の編年的序列を明らかにされた。このように、多くの編年案が示されており、大概的な推移は整った感があるが、一部を除けばいずれも遺跡毎に実施されたもので、部分的に欠損した部分が生じたものや、限定された資料の中で過度な細分を実施したものも見受けられた。

今回、これら多くの編年案が示されているにも拘わらず、結果的には新たな編年試案を提示する形になってしまった。これは、本書に掲載した古式土師器の形式分類を実施して編年的序列を付与する過程で、既存の編年案の中には庄内式から布留式を通して実施されたものが少ない点や限定された器種のみで編年的な位置付けが行われている事などによる。しかしながら、先学諸氏によって提示された編年的序列の有効性が失われたものではなく、基本的にはそれらを踏襲して羅列したものであることは言うまでもない。

庄内1期

この期の特徴としては、河内型庄内式甕B_1の成立をはじめとして、加飾化した器種の出現および新出性土器の増加に伴って形式が多様化することにある。このように、新出性の土器の増加に伴う土器組成の急激な変化は変革期の社会相を反映した内容を示している。

広口壺ではA．B．C．D_1．D_2があり、型式数ではプレ庄内期と変わることがない。短頸壺Aは存続するが出土量は微量である。大型直口壺Aはこの期に出自をみるが、成法寺遺跡SK28（1）のように体部が長胴形で平底の底部を有しており、定形化する以前の大型直口壺Aの祖形と考えることができる。直口壺では成法寺遺跡SK－28（2）のような平底の底部を有する直口壺Bの出自をみるが、定形化した直口壺B（精製品で底部は丸底）が顕在化するのは

庄内Ⅱ期以降である。複合口縁壺はA_1、B_1、B_2、Cがあり吉備系の複合口縁壺Cを除けばプレ庄内期と型式数は変わることがない。複合口縁壺はB_1、B_2が主流で、複合口縁壺A_1、Cは微量である。小型壺は小型壺Aがプレ庄内期から存続するが減少傾向にある。高杯はA類ではA_1からA_2、A_3への移行がみとめられA_2型式がA類の主流となる。高杯B類ではB_1の出自をみるが量的には確立しない型式である。高杯C類では高杯C_2が精製化と定形化を計り量的に増加するが、C_1は減少傾向が顕著である。吉備系の高杯E_1、E_2はこの時期搬入されているが出土量は微量である。小型器台のA類・B類もこの期に出自をもつ。中空のA類ではA_1、中実のB類ではB_1、B_2が存在するがいずれも出土量は微量である。大型の器台Dは庄内式の特徴とされる加飾化を受けたもので、この期のみ存在する。甕では河内型庄内式甕の最古形態を示す甕B_1の出現が特徴的で、これに影響されて成立したと考えられる弥生Ⅴ様式系甕の甕A_3もこの期に出現をみる。甕A類の中では甕A_1が激減しているが甕A_2は量的には一定量を保っており、甕B_1とともにこの期の甕の主流となっている。甕I、J_1、J_2の型式も存在しているが量的には微量である。鉢はプレ庄内期に盛行したA類、B類は激減しており、A類はこの段階で消滅している。鉢Cはこの時期やや増加している。鉢Dは吉備系の鉢と推定されるもので、この期まで存続するが本期をもって消滅する。プレ庄内期から存続する鉢E_1は量的な増加はみないものの存続する。鉢G_1はこの期に出現し量的にも確立するもので小型鉢の主流をなす。大型鉢ではJ類が量的に確立しており大型鉢の主流となっている。鉢Kは吉備系の鉢で、大型のものと小型のものがある。鉢Lは四国東部系の小型の鉢で美園遺跡DSK306で出土例がある程度である。[註28] 台付き鉢はA類が存続するが出土量は微量である。有孔鉢A類・B類も存続するが出土量は微量である。手焙形土器はA類・B類が存在している。

この期の資料としては、東大阪市馬場川遺跡井戸1、[註29] 八尾市中田遺跡刑部土坑、[註30] 成法寺遺跡SW－1・SK－28、[註31] 成法寺遺跡SE－3、[註32] 美園CSD－320（下層）・DSD－304、[註33] 東郷遺跡9次SE－1・SE－2、[註34] 東郷遺跡19次SX－1[註35]などがある。（P－25　第2表参照）

庄内Ⅱ期

この期の指標とされるものは、甕B_2の盛行、直口壺A_1・高杯B_2の出現と小型器台のB_3型式への斉一化があげられ、小型・中型器種の丸底化と精製化への移行が進行している。

壺類では広口壺A、Bが存続しており、広口壺Bは増加傾向にあるがC、D_1、D_2は微量出土する程度である。短頸壺は短頸壺Aが存続する。短頸壺Bはこの期に出現している。短頸直口壺A_2もこの期に出現をみるが量的には確立しない。庄内Ⅰ期に出現した大型直口壺Aはこの期に体部の球形化と底部の丸底化が進行し定形化が計られており、量的にも増加する傾向である。直口壺A_1はこの期に出現しており、庄内式土器の特徴でもある精製化が計られてい

る。庄内Ⅰ期に成立した直口壺Bはこの期に存続するが量的な増加は認められない。複合口縁壺は前代に引き続き複合口縁壺B_1．B_2が主流である。山陰地方を中心に分布する複合口縁壺Dはこの期に搬入されている。高杯A類では高杯A_3が主流で高杯A_2は減少、高杯A_1は消滅している。高杯B類では新たに高杯B_2が出現し、この期の高杯の主流の一画を占めるようになる。高杯C類では高杯C_1が減少しており高杯C_2の増加がみられる。器台では器台A類が存続するが微量で、この期に出現した器台B_3が主流となる。甕A類では甕A_1がこの期に消滅するが甕A_2．A_3は存続している。甕B類では甕B_2が盛行しており甕B_1は減少するものの依然として一定量を保っている。大和型庄内式甕の特徴を有する甕Cはこの期微量ではあるが存在している。摂津系ないしは近江系の甕Hは微量ではあるがこの期に搬入されている。甕Iもこの期に存在するが出土量は微量である。山陰系ないしは北陸系の甕Lおよび近江系の甕Oもこの期に搬入されているが、いずれも量的には微量である。鉢では小型鉢が前代に比して型式数を減じており、鉢B．G_1の2型式のみが存在している。大型鉢は鉢J類がその主流となる。台付き鉢はA類が存続している。有孔鉢はB類が消滅しておりA類のみが存在している。手焙形土器はA類・B類が存在している。

この期の資料としては、本書掲載の東弓削遺跡4次SD－1、美園遺跡CSD－305・CSD－319・DSX－304、西岩田遺跡溝2[註36]、成法寺遺跡SE－2[註37]、東郷遺跡4次SE－2[註38]、東郷遺跡13次SK－2[註39]などがある。（P－25　第2表参照）[註40]

庄内Ⅲ期

この期の特徴としては、小型壺B_1、鉢H_2のような布留式の土器組成のなかで主要な位置を占める形式の出現や庄内式甕と布留式甕の中間的な形態である甕D．Eの出現にあるといえる。

壺類では長胴壺A、直口壺A_2の出現があるほか、短頸直口壺A_3、直口壺A_1が量的に確立している。広口壺は型式の減少が顕著で量的に確立しているのは広口壺Bのみになる。短頸壺類、大型直口壺は存続するが量的には少量である。直口壺Bはこの期に消長している。複合口縁壺はA_1．B_1．B_2の型式が存続するほか、複合口縁壺A_2．B_3が出現するがいずれも量的には確立していない。吉備系の大型の複合口縁壺E_1もこの期以降に搬入されている。小型壺B_1はこの時期に出現するもので、いわゆる小型丸底壺の最古の形態にあたり、器台B_3とのセット関係が推定される。ただ、この期に量的に確立していないのは、鉢G_2の盛行期と一致したことによるものと推定される。小型壺Dもこの時期に出現する。高杯ではA_4．B_2．C_2が盛行しており型式の多様化がみられる。器台は器台B_3への斉一化が計られており、量的にも増加傾向が顕著である。器台A_2．A_3．B_1は消長している。甕は甕B_4型式の出現をみるが、主流は甕B_3である。甕A類はこの期においても甕A_2．A_3が存続している。甕D．Eはこの期に出現

するが出土量は微量である。吉備系の甕J類は搬入量が増加傾向である。庄内Ⅱ期に盛行した鉢G_1はこの期にはG_2に変化しており量的にも増加傾向が顕著である。形態に多くのバリエーションをもつ鉢E_1は量的に増加する傾向である。大型鉢の主流をなす鉢J類は増加傾向にある。有孔鉢類はこの期に消滅している。台付き鉢A類は存続している。手焙型土器はB類が存続しているが量的には微量である。

この期の資料としては、東大阪市瓜生堂遺跡土器溜1・土器溜3・溝224[註41]、八尾市美園遺跡CSK－303・BSK－304[註42]、亀井北（その1）SD－8455・落ち込み8006[註43]、東郷遺跡5次SD－9上層[註44]、小阪合遺跡3次SD－316[註45]、八尾南SW－4[註46]、山賀遺跡SK－02[註47]などがある。

布留Ⅰ期

この期を特徴づけるものは、布留式甕（甕F_1）の出現と小型精製三種土器を構成する小型丸底壺（小型壺B_1．B_2）、小型器台（器台B_3）、小型鉢（鉢H_2）の盛行および外来系土器の比率増加による形式増加にあるといえる。その反面、この期で消長をとげる形式が多いことも外来系土器や新出土器の多様化のなかで生じた現象と捉えることができる。このように、新旧の土器形式が共存し、外来系土器に代表される系統性のない土器形式の台頭はまさに画期にふさわしい内容を示している。

壺類では、広口壺全型式と短頸壺類の激減と短頸直口壺の消長が特徴的である。長胴壺Aと大型直口壺Aはこの期に増加傾向が顕著で、大型直口壺Aは激減した広口壺類にかわって大型壺の主流となっている。精製品である直口壺A_1は盛行するが直口壺A_2は量的には確立しない。複合口縁壺はA・B類に行われていた加飾化が一掃され無紋のものが大半を占める。なお、複合口縁壺B類については、B_1．B_3がこの期に精製化と定形化が計られており、量的にも確立しているが、B_2はこの期に消滅している。外来系である複合口縁壺D．E_1もこの期に搬入量が増大している。同じく外来系の小型の複合口縁壺であるFはこの期以降に搬入されている。小型壺B類は布留式の指標とされた小型丸底壺に該当するもので、この期に庄内Ⅲ期に出自をとげた小型壺B_1から小型壺B_2型式への早急な変化が認められ、小型壺B_1．B_2の2型式がこの期の小型壺の主流となる。小型壺B_3もこの期に出現しているが、量的に確立するのは布留Ⅱ期以降である。小型壺Cはこの期に出自をみるが、量的には確立せずこの期で消長をとげている。小型壺Dは前代に出自を見たもので、この期まで存続するがこの期で消長をとげている。高杯は前代に引き続き高杯A_1が主流で高杯A_2はこの期で消滅している。高杯B_2．C_2は存続するがこの期で消滅する。高杯D_2は存続するが量的には少ない。小型精製三種土器の一画をなす小型器台は庄内Ⅲ期に引き続き器台B_3が主流である。山陰系の特徴をもつ器台C類はC_1．C_2ともにこの期に出現し、量的な増加が顕著である。甕類はこの期にみられ

る形式の多様化を一番顕著に受けた器種である。甕A類ではA_2が減少から消滅へ移行している反面、A_3はこの期においても存続している。甕B類ではB_1が盛行しておりB_2は激減している。甕Cは存続を認めるが量的には微量である。甕D．Eは量的な増加が顕著である。布留式甕である甕F_1はこの期に出口をみるもので量的にも確立している。甕F_2も出現をみるが量的に確立するのは布留Ⅱ期以降である。搬入品の中では、甕J_1．K_1．M_1が量的に増加を計るとともに甕H．M_2．Nも少量ながら存在している。鉢類も型式の増加と量的な確立が計られている。この期に出現するものには鉢I_1がある。前代から引き続き盛行するものとしては鉢E_1．H_1．H_2．I_2．J_1．J_2がある。減少傾向を示すものには鉢G_2がある。なお、台付きの鉢H_2は微量ではあるがこの期に存在している。台付き鉢A・B類は存続しているが微量で、この期に消長をとげている。手焙形土器類はこの期に消長をとげている。

この期の資料は中河内地域の庄内式から布留式期を通じて最も豊富である。以前から良好な一括資料とされていた堂振遺跡SE－3・SK－3[註48]を始めとして、本書掲載の久宝寺遺跡第2トレンチSW－1・第7層、久宝寺南（その1）3号墓周溝外上器集積・3号墓上層・3号墓周溝内下層[註49]、久宝寺南（その2）溝SD－60上層・SK－45・SE－601[註50]、美園遺跡SE－1[註51]、美園遺跡CSD－313[註52]、東郷遺跡5次SE－5[註53]、小阪合遺跡1次落ち込み7[註54]・4次7調査区SD－1[註55]、中田遺跡1丁目39番地土坑1・土坑2[註56]、亀井北（その1）上器群Ⅲ・SD－8021[註57]、八尾南遺跡SE－9・SK－74[註58]などがある。

布留Ⅱ期

布留Ⅱ期の特徴としては、河内型庄内式甕の最終形態である甕B_1の消長と、主要器種の形式の斉一化に伴う各形式の減少と消長にあると言える。主要器種の斉一化については、布留Ⅰ期にみられた土器形式の多様化が一掃された結果生じた現象と考えられ、布留式成立期の錯綜した状況から安定期への移行を土器相からも読み取ることが可能である。また、小型器台（器台B_3）の消長により小型精製三種土器の崩壊がみられるのもこの期の特徴である。

壺類では長胴壺、細頸壺の各型式が消長をとげている。短頸壺A・B類は存続するが量的には微量である。大型直口壺A、直口壺A_1は存続するが減少傾向にある。大型直口壺Aの中には布留式甕に影響され口縁端部が肥厚するものがこの期に存在している。複合口縁壺類では複合口縁壺B_1．B_2．D．E_1が存続するが量的には激減している。なお、複合口縁壺B_2はこの期以降大型化が顕在化している。小型壺はB_2．B_3．B_4の3型式があるが主流はB_2である。なお、小型壺B_4型式を境に小型壺B類は粗製化へ移行している。高杯ではA_4からA_5への型式変化が急激に進行しており、高杯A_5がこの期の高杯の主流を占めている。器台ではB_2．C_1が激減しており、小型精製三種土器の一画を占めた小型器台B_3はこの期で消長をむかえている。代わっ

て器台C_2が小型器台の主流になるが量的には減少傾向である。甕類は甕F_1．F_2が盛行している。甕D．Eも一定量を保ちつつ存続するが減少傾向にある。外来系の甕の搬入はこの時期希である。鉢類は前代に比して型式数の減少が顕著である。この期に鉢E_1．H_1．H_2．I_2が存続するが主流は引き続き鉢H_2である。大型鉢類はこの期を最後に消長をとげている。

この時期の資料としては、古くから知られている東大阪市馬場川遺跡T地点[註59]のほか、久宝寺北（1～3）SK4011・SD4029[註60]、久宝寺南（その2）落ち込みSX303下層・SK－60[註61]などがある。

布留Ⅲ期

この期には、精製土器の粗製化が進行するものの布留Ⅱ期から急激に変化するものや新出性の形式は認められず、主要な土器形式は漸移的な変化のなかで推移している。

壺類では短頸壺B．大型直口壺A．直口壺A_1が存続する。複合口縁壺はB_1．B_3．D．E_1．Fが継続しているが、いずれも僅少で主流になるものはない。小型壺は粗製化が著しいB_4が主流でB_3は激減している。高杯類では高杯A_6がこの期に出現しているが主流は前代と同様高杯A_5である。高杯A_4はこの期に消滅している。器台類は前代に引き続き器台C_2のみが存続するが、形態の退化が著しく量的にも減少している。甕類は前代と同様甕F_1．F_2が主流であるがF_1は減少傾向である。甕D．Eも微量ではあるが出土している。鉢類は鉢H_1．H_2が存続している。

この期の資料としては、早くから布留式の典型とされてきた東大阪市小若江北出土土器群[註62]が標識となろう。そのほかに、美園遺跡BSD345・CSD323[註63]、柏原市川北遺跡溝3[註64]などがある。

布留Ⅳ期

この期の土器組成の特徴としては、複合口縁壺E_2、小型壺B_1－Ⅱ、甕G．高杯A_8．A_9の出現するほか、小型精製三種土器のなかの小型鉢（鉢H_2）の消滅にある。また、韓式系土器・陶質土器・須恵器の出現をこの期のなかで考えている。したがって、これらの新出性の土器の出現をもって様式の細分も可能であるが、新出性の土器の受容については各遺跡間の差異に左右される要素が内在しているため、ここでは土師器の組成変化を中心に編年的な位置付けを行った。

壺類では短頸壺Bが消長をとげる。大型直口壺A・直口壺A_1は微量ながら存続している。広口壺では八尾南遺跡SE－21（7）[註65]のような広口壺D_3は新出性土器に影響されて成立した型式と言える。複合口縁壺では吉備系の大型の複合口縁壺E_2が出現するほか、B_1．D．E_1．Fがこの期に存続しているが、D．E_2以外は出土量は微量である。小型壺は体部外面にハケナデ

を施すB$_5$が盛行しているほか、小型壷B$_1$をやや大きくした形態で体部外面にハケナデ調整を施す中型の壷（小型壷B$_1$－Ⅱ）がこの期に成立している。また、萱振遺跡SD202の小型壷B$_5$（本書P－214（118））の様に体部中位に穿孔されたものがあり、明らかに須恵器甕を模倣したものと推定されるものが散見されるのもこの期の特徴の一つである。高杯類は高杯A$_3$の減少と高杯A$_4$の増加がみられるほか、高杯A$_7$．A$_8$．A$_9$の出現があり型式の多様化がみられる。なかでも高杯A$_8$のように杯部が椀形を呈するものや、高杯A$_9$のように高杯A$_2$を回帰したような型式の出現は一般的な型式変化のなかでは理解されない内容を内包している。甕類では甕G．F$_3$が出現するほか甕F$_2$も量的には依然として主な役割を果たしている。小型鉢H類はこの期で消長をとげている。

この時期の資料としては、藤井寺市船橋遺跡0－Ⅰのほか[註66]本書掲載の萱振遺跡5次SD202が良好な資料である。そのほかに、佐堂遺跡（その2－Ⅰ）SD6003・SD6009・SK6010、[註67]萱振遺跡2次SD101、[註68]恩智遺跡SD27、[註69]八尾南遺跡SE21・SE26、[註70]津堂遺跡2T土器溜[註71]などがある。

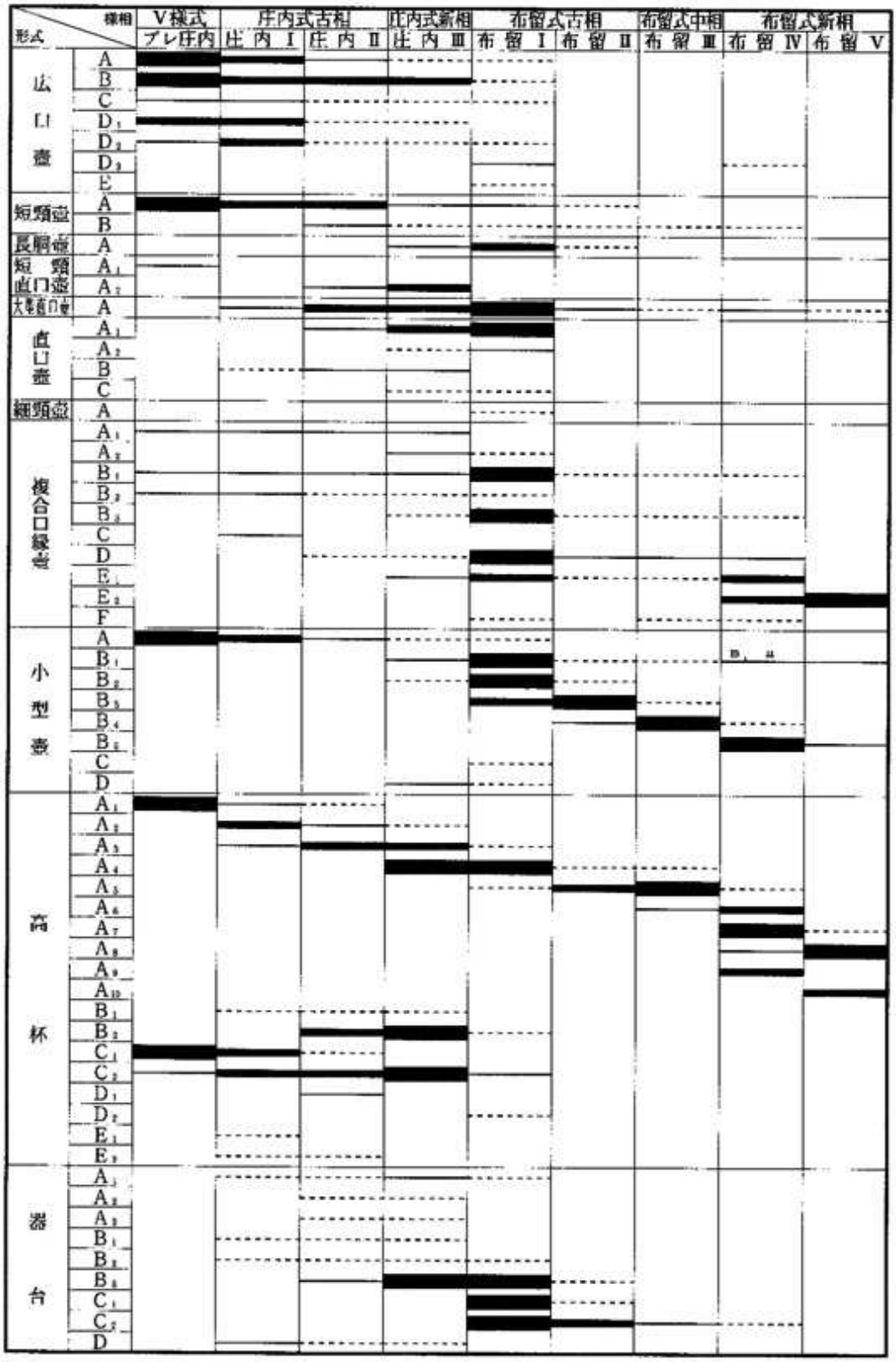
布留Ⅴ期

布留Ⅴ期は初期須恵器の生産時期に符号しているためか、土師器の形式数の減少が顕著である。その反面、韓式系土器は器種・数量ともに増加傾向が顕著である。また、土師器の細部に須恵器の影響を受けた形式が出現するのもこの期の特徴である。

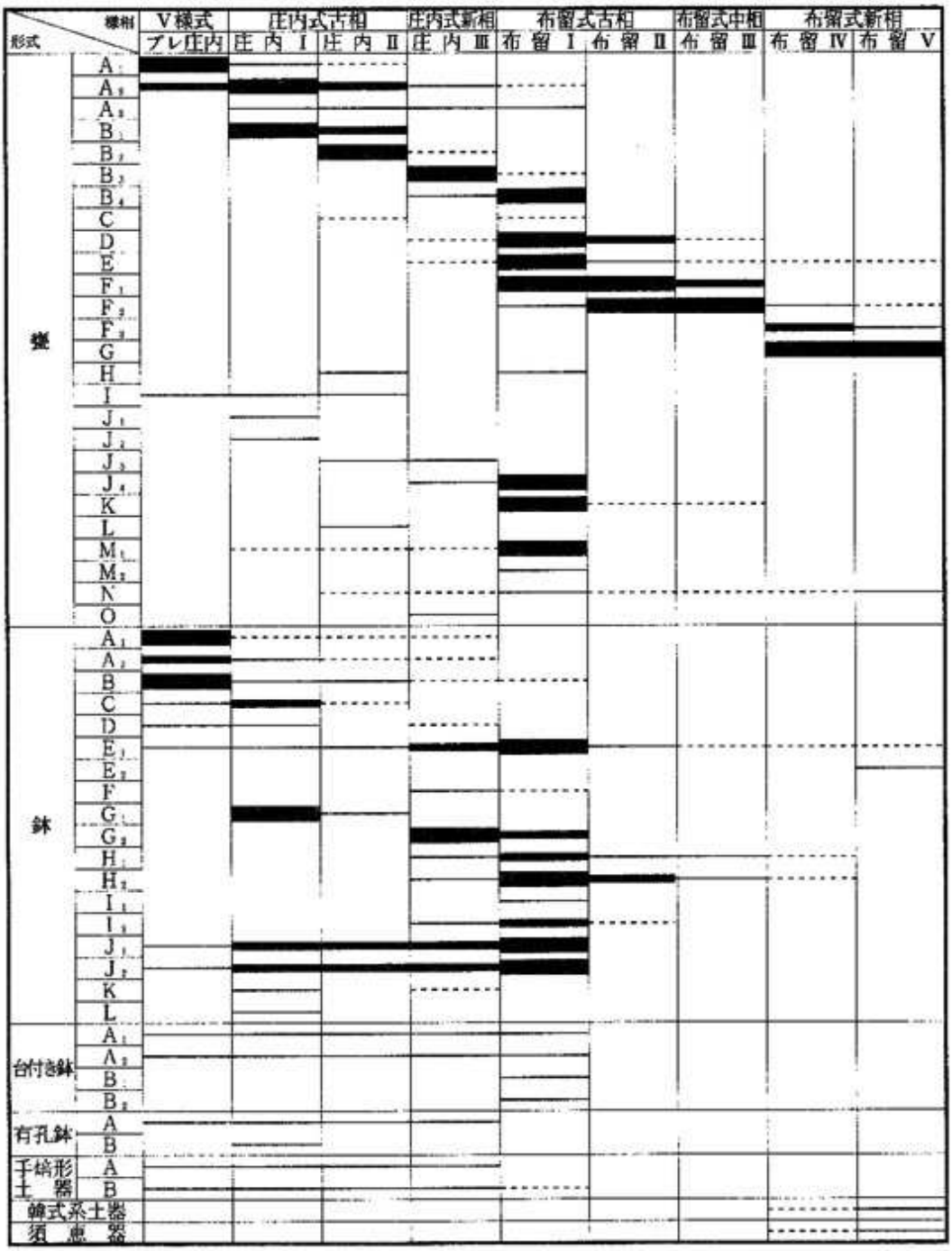
高杯A$_{10}$．鉢E$_2$が出現するとともに、布留Ⅳ期に出現をみた高杯A$_8$の形態の完熟化と量産化が計られている。壷類では、大型直口壷A．直口壷A$_1$．小型壷B$_5$．複合口縁壷E$_2$が存続しているほか、布留Ⅳ期に出現した小型壷B$_1$－Ⅱは形態的には定形化しないものの数量の増加は顕著である。甕類では甕F$_3$．Gの2型式が存続するが、甕F$_3$は減少傾向で甕Gが当該期の甕の主流となる。この期をもって布留式甕の系譜を引く甕F$_3$が消滅しており、布留式範囲の概念を布留式甕の出自と消長とした場合この期をもって終焉とすることが可能である。

この時期の資料としては、早くから知られている船橋遺跡O－Ⅱ・H－Ⅱのほか、[註72]八尾南遺跡SE－1・SE－5、[註73]久宝寺南（その1）落ち込み－1、[註74]小阪合遺跡4次SK－14・SD－1（A層）[註75]などがある。

第8表　中河内地域のおける庄内式～布留式土器組成推移表1



第9表　中河内地域のおける庄内式～布留式土器組成推移表2



第10表　庄内Ⅲ期・布留Ⅰ期・布留Ⅱ期資料一覧表

※Ⓢ装飾

庄内Ⅲ期

	広口壺				短頸壺		長頸壺	短頸直口壺	大型直口壺	直口壺			細頸壺	複合口縁壺					小型壺				高杯				器台		
	A	B	C	D	A	B	A	A_1	A	A	B	C	A	A	B	C	D	E	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C
瓜生堂土器溜1														A										B	C			B	
〃 土器溜3																							A					B	
〃 溝224				D	○			○						A Ⓢ				E Ⓢ					A	B	C				
美園CSK-303																							A		C				
〃 BSK 304		○							○														A		C				
亀井北SD-8455		○		D			○		○	A													A A		C			B	
〃 落ち込み8006	○				○			○		A													A					B	
東郷5次SD 9上層										A	○												A A					B B	
小阪合3次SD-316		○					○	○						A Ⓢ	B Ⓢ					B B		○	A A A	B B Ⓢ	C C		A A A	B B B	
八尾南SW-4						○				A				A Ⓢ					○					B				B	
山賀SK-02			○					○															A		C			B	

	甕											鉢							台付き鉢		有孔鉢		手焙形		その他
	A	B	C	D	E	F	H	J	K	M	N	D	E_1	F	G	H	I	J	A	B	A	B	A	B	
瓜生堂土器溜1		B		○											G										器台D
〃 土器溜3		B																							
〃 溝224	A	B B B			○										G	H								○	
美園CSK-303		B																○							
〃 BSK 304		B													G	H									
亀井北SD-8455		B													G										
〃 落ち込み8006	○	B B						J							G										
東郷5次SD 9上層	○	B						J				○	○		G			○							
小阪合3次SD-316	A A	B B		○	○			J		M		○	○	○	G		I	J			○				器台DⓈ 鉢A, K
八尾南SW-4		B											○	○	G		I		○						
山賀SK-02		B B			○										G										

布留Ⅰ期

	広口壺				短頸壺		長頸壺	短頸直口壺	大型直口壺	直口壺			細頸壺	複合口縁壺					小型壺				高杯				器台		
	A	B	C	D	A	B	A	A_1	A	A	B	C	A	A	B	C	D	E	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C
久宝寺第2トレンチSW-1・第7層									○	A A			○		B B B				A	B B	○	○	A					B	C
久宝寺南3号墓周溝外土器K-SX-3集積	○						○		○	A										B B B			A						C
〃 3号墓上層		○					○			A					B			E		B B			A					B	
〃 3号周溝内下層						○	○		○	A A					B					B B B			A					B	C
久宝寺南SD-60上層															B			E		B B			A		C				C
〃 SK-45										A										B		○	A					○	
〃 SE-601									○	A					B					B					C				C
美園田SE-1					○															B								B	
〃 CSD-313									○	A										B								B	
亀井北土器群Ⅲ							○			A					B					B				B				B	
〃 SD-8021				D		○			○	A				A	B		○			B			A A		C			B B	
萱振SE-3	○		○		○	○	○			A A					B		○			B								B	
〃 SK-3									○	A							○			B B								B	C C
小阪合1次落ち込み7				D	○									A	B					B B			A		C	D		B B	C
〃 4次7調査区SD-1	○	○		D	○				○	A A				A	B B		○		A	B B B	○		A	B	C	D		B B	
中田土坑1									○											B			A		C			B	
〃 土坑2				D					○	A					B		○	E		B B			A					B	
東郷5次SE-5									○																			B	
八尾南SE-9									○	A										B B			A						
〃 SK-74																				B								B	

	甕											鉢							台付き鉢		有孔鉢		手焙形		その他
	A	B	C	D	E	F	H	J	K	M	N	D	E_1	F	G	H	I	J	A	B	A	B	A	B	
久宝寺第2トレンチSW-1・第7層	○	B		○	○	F		J	○					○		H H	I I								
久宝寺南3号墓周溝外土器K-SX-3集積				○	○								○			H		J							
〃 3号墓上層	○			○	○								○			H	I	J							
〃 3号周溝内下層	A	B		○	○	F		J					○			H	I	J							
久宝寺南SD-60上層		B		○	○	F		J	○							H									
〃 SK-45		B				F										H H									
〃 SE-601				○	○	F										H									台付小型壺
美園田SE-1		B			○											H									
〃 CSD-313		B			○										G				○						
亀井北土器群Ⅲ	A	B				F							○		G										鉢B
〃 SD-8021		B B			○			J			○				G	H H	I								
萱振SE-3		B		○	○	F		J		M						H									
〃 SK-3	A	B		○		F		J					○			H	I	○							
小阪合1次落ち込み7	A	B B		○	○	F		J	○	M	○	○	○		G	H		J							製塩土器
〃 4次7調査区SD-1	A	B B		○	○	F	○	J	○	M	○	○	○		G	H		○		B B					台付鉢H, 製塩土器
中田土坑1		B		○	○			J	○				○						○						
〃 土坑2		B B	○		○		○	J	○	M					G										
東郷5次SE-5		B				F			○							H		○							
八尾南SE-9		B		○		F										H		○							
〃 SK-74		B			○	F							○			H									

布留Ⅱ期

	広口壺				短頸壺		長頸壺	短頸直口壺	大型直口壺	直口壺			細頸壺	複合口縁壺					小型壺				高杯				器台		
	A	B	C	D	A	B	A	A_1	A	A	B	C	A	A	B	C	D	E	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C
久宝寺北SK-4011																				B			A A						
〃 SD-4029					○		○										○			B B			A						C
久宝寺南落ち込みSX-303下層									○											B B			A						C
〃 SK-60																				B									
馬場川T地点																				B B			A						

	甕											鉢							台付き鉢		有孔鉢		手焙形		その他
	A	B	C	D	E	F	H	J	K	M	N	D	E_1	F	G	H	I	J	A	B	A	B	A	B	
久宝寺北SK-4011						F							○												
〃 SD-4029				○	○	F F										H	I								台付鉢H
久宝寺南落ち込みSX-303下層				○	○	F										H H									
〃 SK-60						F F																			
馬場川T地点						F F										H									

第11表 布留Ⅲ期・布留Ⅳ期・布留Ⅴ期資料一覧表

布留Ⅲ期

※㊙混入

	広口壺				短頸壺		鋳壺	短頸壺	大型鉢	直口壺			鋳壺	複合口縁壺					小型壺				高杯				器台			甕														鉢								台付き鉢		有孔鉢		手焙形		その他
	A	B	C	D	A	B	A	A₁	A	A	B	C	A	A	B	C	D	E	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	B	C	D	E	F	G	H	J	K	M	N	D	E	F	G	H	I	J	A	B	A	B	A	B	
小若江北出土土器群						○			○	○							○			B₁ B₂				A₁ A₂					C₁				○	F₁ F₂											H₁ H₂											
美園BSD345														A₁	B₁ B₂		○			B₁				A₁ A₂		C₁							○	F₁					K₁							H₁											
美園CSD323																				B₁				A₁ A₂																																	
川北溝3																				B₁ B₂				A₁ A₂																																	

布留Ⅳ期

	広口壺				短頸壺		鋳壺	短頸壺	大型鉢	直口壺			鋳壺	複合口縁壺					小型壺				高杯				器台			甕														鉢								台付き鉢		有孔鉢		手焙形		その他
	A	B	C	D	A	B	A	A₁	A	A	B	C	A	A	B	C	D	E	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	B	C	D	E	F	G	H	J	K	M	N	D	E	F	G	H	I	J	A	B	A	B	A	B	
船橋0－Ⅰ						○			○									E₁		3-Ⅱ				A₁ A₂											F₁ F₂																							
佐堂SD6003																	○	E₁		B₁				A₁ A₂					C₁																													
佐堂SD6009																																																											
佐堂SK6010																				B₁				A₁ A₂																																		
思智SD27								○	○								○	E₁		B₁ B₂				A₁ A₂																																	
堂振5次SD202									○								○	E₁		B₁				A₁ A₂																																	
堂振2次SD101																				Ⅱ-Ⅱ				A₁ A₂																																		
津堂2T土器層										A₁										B₁				A₁ A₂																																	
八尾南SE21									○									E₁ E₂		B₁				A₁ A₂																																	
八尾南SE26				D₁					○									E₁		3-Ⅱ				A₁					㊙																													

布留Ⅴ期

	広口壺				短頸壺		鋳壺	短頸壺	大型鉢	直口壺			鋳壺	複合口縁壺					小型壺				高杯				器台			甕														鉢								台付き鉢		有孔鉢		手焙形		その他
	A	B	C	D	A	B	A	A₁	A	A	B	C	A	A	B	C	D	E	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	B	C	D	E	F	G	H	J	K	M	N	D	E	F	G	H	I	J	A	B	A	B	A	B	
八尾南SE－Ⅰ																		E₁		Ⅱ-Ⅱ				A₁ A₂																																		
八尾南SE－5																		E₁		Ⅱ-Ⅱ				A₁																																		
久宝寺南溝込－1																				Ⅱ-Ⅱ				A₁																																		
船橋0－Ⅲ									○									E₁ E₂		Ⅱ-Ⅱ				A₁ A₂									○	F₁	○				K₁																				
船橋H－Ⅱ																		E₁		3-Ⅱ				A₁ A₂																																		
小阪台4次SK－14										○														A₁																																		
小阪台4次SD－1（A層）								○										E₁		3-Ⅱ				A₁ A₂																																		

註記

註１　石野博信・関川尚功編『纒向』桜井市教育委員会　1977
註２　小山田宏一「布留式成立に関する覚え書」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズⅠ　1982
註３　米田敏幸「中河内の庄内式と搬入土器について」『考古学論集　第１集』考古学を学ぶ会 1985
註４　寺沢薫「布留０式土器拡散論」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ 1987
註５　奥田尚「河内型庄内甕と大和型庄内甕－土器の砂礫観察を通して－」『庄内式土器研究Ⅰ』庄内式土器研究会 1992
註６　田島明人「七師器よりみた古墳時代土器群の変遷」『湊町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター 1986
註７　田島明人・北野博司・栃木英道・安英樹の御教示で石川県立埋蔵文化財センターにおいて実見。
註８　末永雅雄・小林行雄・中村春寿「大和における土師器住居の新例」『考古学』第９巻４号 1938
註９　大野薫編『萱振遺跡発掘調査概要・Ⅰ』大阪府教育委員会　1983
註10　米田敏幸「中田１丁目39山土土器について」『八尾市文化財紀要２』八尾市教育委員会　1987
註11　坪田真一・岡田清一「太子堂遺跡＜第１次調査・第２次調査報告書＞」『八尾市文化財調査研究会報告36　(財)八尾市文化財調査研究会　1993
註12　前掲註８
註13　坪井清足編『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』笠岡市教育委員会1956
註14　原口正三・田辺昭三『船橋Ⅱ』平安学園考古学クラブ 1962
註15　原口正三「大阪府松原市上田町遺跡の調査」『大阪府立島上高校研究紀要　復刊３号』1968
註16　田中琢「布留式以前」『考古学研究』21－１　1965
註17　都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻３号
註18　米田敏幸「庄内式土器の細分試案」『八尾南遺跡』八尾南遺跡調査会　1981
註19　渡辺昌宏「第５節　美園遺跡出土の弥生時代後期末から古墳時代前期の土器」『美園』大阪府教育委員会・大阪文化財センター1984
註20　阪田育功「河内における布留式土器の一様相」『佐堂（その２）－Ⅰ』(財)大阪文化財センター 1984
註21　一瀬和夫「久宝寺・加美遺跡の古式土師器」『八尾市文化財紀要３』八尾市教育委員会　1988
註22　金子正裕「久宝寺遺跡出土の布留式土器」『久宝寺北（その１～３）』(財)大阪文化財センター　1987
註23　嶋村友子「河内における庄内式の甕形土器」『古代』第82号　1986
註24　米田敏幸「土師器の編年　１近畿」『古墳時代の研究６土師器と須恵器』雄山閣出版 1991
註25　寺沢薫『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊　奈良県立橿原考古学研究所　1986
註26　高萩千秋ほか『成法寺遺跡』八尾市教育委員会　1983
註27　前掲註26
註28　渡辺昌宏・井藤暁子ほか『美園』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984
註29　下村晴文ほか『馬場川遺跡発掘調査報告』東大阪市遺跡保護調査会　1977
註30　高木真光『昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報』八尾市教育委員会　1981
註31　前掲註26
註32　福田英人・嶋村友子『成法寺遺跡発掘調査概要Ⅰ』大阪府教育委員会　1986
註33　前掲註28
註34　高萩千秋ほか『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要1980・1981』八尾市教育委員会1983
註35　嶋村友子『八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書』八尾市文化財報告12　八尾市教育委員会　1986
註36　前掲註28
註37　村上年生・小山田宏一『西岩田』(財)大阪文化財センター 1983
註38　前掲註32
註39　前掲註33

註40　高萩千秋『八尾市埋蔵文化財発掘調査　昭和63年度』㈶八尾市文化財調査研究会報告17　㈶八尾市文化財調査研究会　1989
註41　堀江門也ほか『瓜生堂』大阪府教育委員会・㈶大阪文化財センター　1980
註42　前掲註28
註43　小野久隆・服部文章『亀井北（その1）』㈶大阪文化財センター　1986
註44　前掲註34
註45　高萩千秋『小阪合遺跡<昭和58年度第2次・3次調査>』㈶八尾市文化財調査研究会報告11　八尾市文化財調査研究会　1987
註46　前掲註18
註47　米田敏幸「16. 山賀遺跡（89－213）の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告20　八尾市教育委員会　1990
註48　前掲註9
註49　赤木克視ほか『久宝寺南（その1）』大阪府教育委員会・㈶大阪文化財センター　1987
註50　赤木克視・一瀬和夫『久宝寺南（その2）』㈶大阪文化財センター　1987
註51　前掲註34
註52　前掲註28
註53　前掲註34
註54　高萩千秋『小阪合遺跡<昭和57年度　第1次調査報告書>』㈶八尾市文化財調査研究会報告10　㈶八尾市文化財調査研究会　1987
註55　高萩千秋『小阪合遺跡<第4次調査報告書>』㈶八尾市文化財調査研究会報告15　㈶八尾市文化財調査研究会　1988
註56　前掲註10
註57　前掲註43
註58　前掲註18
註59　下村晴文編『馬場川遺跡発掘調査概要・Ⅳ』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報16　1976
註60　寺川史郎・金光正裕ほか『久宝寺北（その1～3）』㈶大阪文化財センター　1987
註61　前掲註50
註62　前掲註13
註63　前掲註28
註64　岩崎二郎『川北遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会　1981
註65　前掲註18
註66　前掲註14
註67　前掲註20
註68　西村公助『竜振遺跡発掘調査概要報告』㈶八尾市文化財調査研究会報告20　㈶八尾市文化財調査研究会　1990
註69　曽我恭子・成海佳子・毛利光用子『恩智遺跡Ⅲ』瓜生堂遺跡調査会　1981
註70　前掲註18
註71　阿部幸一・岩崎二郎『津堂遺跡』大阪府教育委員会　1992
註72　前掲註14
註73　前掲註18
註74　前掲註49
註75　前掲註55

付章　土器表面に見られる砂礫

奥田　尚

1．はじめに

大阪府八尾市久宝寺遺跡から出土した古墳時代初頭の甕、壷等の土器に含まれる砂礫の観察をした。観察資料は完形品、口縁部の破片である。最初に裸眼で土器片全体に見られる砂礫を観察し、次に倍率30倍の実体鏡で観察良好な部分を観察した。

観察は石種・鉱物種・生物片の色、形、大きさ、量について行った。砂粒を識別する目安としては、石種として花崗岩、閃緑岩、斑糲岩、流紋岩、安山岩、玄武岩、火山ガラス、砂岩、泥岩、チャート、片岩、蛇紋岩、変輝緑岩、鉱物種として石英、長石、黒雲母、白雲母、角閃石、輝石、橄欖石、柘榴石、磁鉄鉱、生物片として海綿の骨片、ウニの刺、貝殻、有孔虫、炭質物質等があげられる。また、火山岩と深成岩とを区別するために、鉱物が結晶面で囲まれている自形か結晶面が認められない他形かの判断もした。特に、石英、角閃石、輝石について注意をはらった。形については、角、亜角、亜円、円の4段階に区分した。粒径については㎜単位で目測した。量については、非常に多い、多い、中、僅か、ごく僅か、ごくごく僅かの6段階とした。

岩石片の同定については、鉱物構成で名称が変わり、粒が小さいため判断しにくい場合が多い。そのために、石英・長石、石英・長石・黒雲母、長石・黒雲母が噛み合っていれば花崗岩とし、角閃石が噛み合っていれば閃緑岩、輝石や橄欖石が噛み合っていれば斑糲岩とした。また、自形の石英が見られれば流紋岩に、自形の角閃石、輝石が見られれば安山岩とした。片理があれば片岩とした。このような岩石区分は岩石全体が判れば名称が異なる場合もある。

2．砂礫の特徴

識別できた砂礫種は、岩石片として花崗岩、閃緑岩、斑糲岩、流紋岩、砂岩、泥岩、チャート、片岩、火山ガラス、鉱物片として、石英、長石、黒雲母、角閃石、輝石、生物片として海綿の骨片である。それぞれの特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色、粒形が角、粒径が最大8㎜である。石英・長石、石英・長石・黒雲母が噛み合っている。

閃緑岩：色は灰色、粒形が角、粒径が最大1㎜である。長石・角閃石、石英・角閃石が噛み合っている。

斑糲岩：色は灰白色、粒形が角、粒径が最大６㎜である。長石・角閃石が噛み合っている。

流紋岩：色は白色、灰白色、灰色、暗灰色、黒色、褐色、赤褐色、茶褐色とさまざまで、粒形が角、亜角、亜円、粒径が最大８㎜である。石英の斑晶がみられるものもあり、石基はガラス質である。

砂岩：色は灰色、粒形が亜円、円、粒径が最大10㎜である。

泥岩：色は灰色、粒形が亜円、粒径が最大0.2㎜である。

チャート：色は灰白色、灰色、暗灰色、黒色、褐色、赤褐色とさまざまで、粒形が角、亜角、亜円、粒径が最大８㎜である。

片岩：色は黒色、灰色、粒形が亜角、粒径が１㎜である。泥質片岩である。

火山ガラス：無色透明、褐色透明で、粒径が最大0.5㎜である。貝殻状、フジツボ状、 束状である。

石英：無色透明、粒形が角、粒径が最大５㎜である。複六角錐あるいはその一部がみられるものもある。

長石：無色透明、灰色透明、白色透明、灰白色で、粒形が角、粒径が最大６㎜である。

黒雲母：黒色、金色の金属光沢があり、粒径が最大４㎜である。板状、粒状をなす。

角閃石：黒色、粒形が角、粒径が最大６㎜である。粒状、柱状をなす。柱状で自形をなすもの、あるいは一部に結晶面がみられるものがある。

輝石：青銅色透明、褐色透明、黒色透明で、粒形が角、粒径が最大0.5㎜である。柱状、短柱状で自形をなすものが多い。

海綿の骨片：色は白色、粒形が棒状で、粒径が最大0.5㎜である。

３．砂礫種構成

観察した砂礫種構成は、花崗岩と他形の石英・長石からなる花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とするグループ、角閃石が多く含まれる閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とするグループ、流紋岩質岩と自形の石英からなる流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とするグループがある。これらの砂礫種構成と他の砂礫種を組み合わせて類型区分をした。砂礫が少量の場合、細粒の場合、表面に付着物が多く観察が不良の場合は類型区分不能とした。

１類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる ――――Ⅰb類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる ――――――――――――Ⅰbd類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫、チャートが僅かに含まれる ―――――――――――― Ⅰ bdg 類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫、チャート、片岩が僅かに含まれる ―――――――――――― Ⅰ bdgh 類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫、チャートが僅かに含まれる ―――――――――――― Ⅰ bg 類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる ―――――――――――― Ⅰ d 類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源・安山岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる ―――――――――――― Ⅰ de 類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源・安山岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩・泥岩やチャートが僅かに含まれる ―――――――――――― Ⅰ deg 類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる ―――――――――――― Ⅰ e 類型

Ⅱ類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる ―――――――――――― Ⅱ a 類型

閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫が含まれる ―――――――――――― Ⅱ ad 類型

閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫、チャートが含まれる ―――――――――――― Ⅱ adg 類型

Ⅳ類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・安山岩質岩起源と推定される砂礫、泥岩がごく僅かに含まれる ―――――――――――― Ⅳ beg 類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫のみからなる ―――――――――――― Ⅳ d 類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる ―――――――――――― Ⅳ e 類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、チャートがごく僅かに含まれる ―― Ⅳ g 類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫、チャートがごく僅かに含まれる ―――――――――――― Ⅳ eg 類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫、片岩がごく僅かに含まれる ―――――――――――― Ⅳ eh 類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、角閃石が他形を示すが、安山岩質岩起源か閃緑岩質岩起源が判断できない砂礫、砕屑岩が僅かに含まれる ……——Ⅳn類型

以上のように類型区分をすれば、観察した限りの資料では、第12表に示すようにⅠbdg類型とⅡa類型、Ⅳe類型に集中が見られる。

4．砂礫の採取地

遺跡が位置する河内平野には江戸時代の始めまでは大和川が南から北へ流れていた。西には南北に上町台地、東には生駒山地、金剛山地、南には和泉山脈があり、奈良盆地の水は生駒山地と金剛山地の間にある亀の瀬渓谷から流れ出し、柏原市船橋付近で石川と合流していた。地形と岩石分布の影響により、山地から流れ出す河川の砂礫は岩石分布そのものを示し、多くの谷の水を集めた石川や大和川では多種の岩石片を含んでいる。柏原市玉手山付近の石川では花崗岩質岩起源の砂礫を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫や泥岩・砂岩やチャートが僅かに含まれ、長石が比較的多い。これに比べて、八尾市中田付近の砂礫となれば石英が多くなり、長石が少なくなる。遺跡が位置する久宝寺付近から南にかけては、比較的チャートが多くなる。

河川砂礫の傾向から、久宝寺遺跡から出土した土器に含まれるⅠb類型、Ⅰbd類型、Ⅰbdg類型、Ⅰbg類型の砂礫は久宝寺遺跡付近で採取できる砂礫である。しかし、Ⅰbd類型とした古備系の甕に含まれる砂礫の閃緑岩には細い柱状で結晶面で囲まれた角閃石が含まれることから、岡山市足守川の砂礫と推定される。また、Ⅱad類型の砂礫にも閃緑岩には細い柱状で結晶面で囲まれた角閃石が含まれていることから足守川の砂礫であると推定される。Ⅰbdgh類型の砂礫は岡山市旭川の砂礫、百間川付近の砂礫に酷似する。Ⅱa類型の砂礫は他形を示す角がある角閃石や長石が多いことから、閃緑岩質岩の媒乱砂であると推定される。平地には産しない砂礫である。角閃石が多く含まれる閃緑岩が生駒山地の八尾市楽音寺付近、同市大窪東方の山頂付近、同市恩智付近に小岩体として分布する。恩智付近の岩体の媒乱砂の鉱物構成がⅡa類型の砂礫種構成に酷似する。Ⅳe類型の砂礫は播磨付近、因幡付近、加賀南部付近の砂礫種構成に似ているが、布留甕や布留傾向甕に含まれる砂礫は加賀南部の砂礫に酷似する。壺の砂礫については限定できない。Ⅳbeg類型の砂礫は 播磨付近の砂礫に酷似する。推定出来ないⅠde類型、Ⅰdeg類型、Ⅰe類型、Ⅱadg類型、 Ⅳg類型、Ⅳeg類型、Ⅳch類型の砂礫は、久宝寺遺跡付近では得ることができない砂礫である。

5．おわりに

布留傾向甕（甕E）・布留甕（甕F_1）の砂礫種構成についてみれば、遺跡付近、恩智付近、

加賀南部付近と少なくとも3ヵ所以上の砂礫が使用されている。砂礫の採取地が土器の制作地であるとするならば、布留傾向甕・布留甕は久宝寺遺跡付近でも制作していたものもあり、恩智付近、加賀南部付近から運ばれてきたものもあり、量的には加賀南部付近のものが多い。運ばれてきた甕と同じ形の甕を遺跡で制作していることは、加賀地方から何らかの目的で、河内まで加賀地方の人が来て、甕が足りなくなり、河内付近の砂礫を使用して甕を制作したとも考えられる。

複合口縁壺や直口壺、小型丸底壺についても甕と同じように、多くの類型の砂礫を含み、方々から運ばれてきていることが伺える。

観察した資料の約8割が搬入されている結果となった。このような非常に搬入率が高い遺構は、特殊な遺構としか考えられないだろう。

第12表　砂礫による類型区分と器種

器形 / 型類		甕						印壺	大型印壺	直口壺		鍋壺	複合口縁壺			小型壺					鉢					合計
		B_1	D	E	F_1	J_1	K	A_1	A	A_1	A_2	A	B_1	B_2	B_3	A	B_1	B_2	C	D	A_2	B	F	H_2	J	
I	b			1																				1		2
	bd				1	2									3									1		7
	bdg		1				1			2	1	1			2				3							11
	bgh					1																				1
	bg														1											1
	d		1												1											2
	de																	2			1					3
	deg														1		1					1				3
	e							1			1															2
II	a	1	8		3				2																	14
	ad					1									1											2
	adg														1											1
IV	beg		1																							1
	d													1			1									2
	e		1	2	13					2			1		10	2	13	8	2	1			2		1	58
	g									1							1								1	3
	eg		1	1	3										2		1									8
	eh				1																					1
	n				1										6	1	2	3								13
不能							1			1				1	4		2	2								11
合計		1	13	4	22	4	2	1	2	6	2	1	1	2	32	3	21	15	5	1	1	1	2	2	2	146

第13表　土器胎土の砂礫種（その1～その11）　　その1

試料番号	器種	岩石																鉱物												焼土	類型
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石					
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍				
2TR No.37	直口壺A1																		S 僅		S 僅		S 微 板		S 微				無	砂礫少量区分不能
2TR No.38	直口壺A1	L- 稀 角	M 稀 角			M- 稀 角						L- 僅 角	M 稀 亜 角					M- 中	M- 多		M- 中		S 微 板		S 微				無	I bdg
2TR No.44	細頸壺A	L 稀 角											M 微 亜 角					M- 微	M- 多 E 稀	M- 微	M- 僅				S 稀				無	I bdg
2TR No.39	直口壺A1												M- 微 亜 角				M 稀 ア	M- 僅	M- 多 E 微	M- 僅	M- 中			M- 稀	S 稀				無	I bdg
2TR No.58	小型壺C－II	L- 微 角	L 僅 角									L- 僅 亜 角	L- 微 亜 角					M- 中	L- 多 E 微	L- 中	L- 僅				S 稀				無	I bdg
2TR No.59	小型壺C－II	L 僅 角	L- 微 角									L- 微 亜 角	M 微 角					L- 多	L- 非 E 微	L- 僅	L- 僅				S 稀				無	I bdg
2TR No.60	小型壺C II		L- 稀 角									L- 僅 亜 角	L- 亜 角					M- 中	L- 非 E 稀	M- 中	M- 微		M- 稀 板		S 稀				有 微	I bdg
2TR No.43	大型直口壺A	L- 微 角																	M- 微	L- 中	M- 僅		S 微 板	L- 多	M- 非				無	IIa
2TR No.42	大型直口壺A																	M- 微		L- 僅	L- 僅	M- 微	M 稀 板	L- 僅	L- 中				無	IIa
2TR No.22	複合口縁壺B1				M 稀 角							L 稀 角	M 稀 亜 角					M- 微	L- 多 E 僅	M- 僅	L- 中			M- 微	M 僅 EP 僅				無	I bdg
2TR No.23	複合口縁壺B1																		S 中		S 僅				S 微				無	砂礫少量区分不能
2TR No.25	複合口縁壺B1					L- 僅 亜 角						L- 微 角						M- 僅	L- 中 E 僅		M- 微				M- 僅 E 中				有 微	I bdg
2TR No.26	複合口縁壺B1					L 僅 亜	L- 微 角					L- 微 亜						M- 微	M- 中 E 中	L- 僅					M- 僅 E 僅	S 稀 E 非			有 微	IVcg
2TR No.28	複合口縁壺B1					L- 微 角	L- 微 角									M 稀 貝		M- 微	L- 多 E 僅		M 微		S 稀 板		S 稀				有 僅	I d

その2

試料番号	器種	岩石																鉱物										焼土塊	類型
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石			
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍		
2TR No.30	複合口縁壺B₂						M-稀角												S 微	S 微	L 稀							無	砂礫少量区分不能
2TR No.31	複合口縁壺B₂												M 稀亜角				M 稀員		M-多		M-僅				S 稀			有僅	Ibg
2TR No.32	複合口縁壺B₂		M 稀角																S 中		S 僅				S 稀			無	砂礫少量区分不能
2TR No.33	複合口縁壺B₂					M-微角	L-微角											M-微	M-多 E 中		S 稀				S 微 E 多		S 稀 E 非	無	IVe
2TR No.34	複合口縁壺B₂						L-稀角										S 僅員	S 微	L-多 E 中	L-微	L-中		S 稀板		S 稀			無	IVn
2TR No.35	複合口縁壺B₂																M 中束フ	M-中	M 多 E 僅	S 稀								無	IVd
2TR No.36	複合口縁壺B₂					L-多角	L-中角											M-中	M-中 E 多	M-僅	M 僅				S 稀 E 非			無	IVe
2TR No.41	複合口縁壺B₂																		S 僅		S 僅		S 僅板		S 稀			無	砂礫少量区分不能
2TR No.40	直口壺A₂																		S 中 E 僅		S 僅		S 僅板		S 稀			無	砂礫少量区分不能
2TR No.48	小型壺B₂					L-僅亜角											M 僅フ員	M-僅	M-多 E 中	M-微	L-僅				S 微 E 中			有微	IVe
2TR No.49	小型壺B₂					L-僅角	L-微角										M 多員フ	M-僅	M-中 E 多						S 稀 E 中		S 微 E 非	有微	IVe
2TR No.46	小型壺B₂-1					L-稀角	L-僅亜角											M 稀	M-中 E 中		M 微				S 稀 E 非			無	IVe
2TR No.50	小型壺B₂											M 稀角						微	L-非 E 中	S 微	M-僅				S 微			有稀	IVn
2TR No.51	小型壺B₂						S 微角												S 多 E 中		S 中		SW稀板		S 微 E 中		S 微 E 中	無	IVe

試料番号	器種	岩石																鉱物												焼土	類型
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石					
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍			
2TR No.52	小型壺 B₂					L-微角	M-微角									L-多 貝束		M-僅	M-中 E中	M-僅	M-僅				S 稀		S 微 E非	有多		IVe
2TR No.53	小型壺 B₂					M-微角	L-微角												S 多 E中		S 僅		M-微板		S 稀 E非			無		IVe
2TR No.54	小型壺 B₂																		S 微						S 稀 E非			有微		砂礫少量区分不能
2TR No.55	小型壺 B₂					L-微角	M-稀角									M 僅 貝フ			M-中 E中		M-微			M 稀 E非	M-僅 E僅		M-微 E非	有稀		IVe
2TR No.56	小型壺 B₂					M-僅角	L-微亜角											M-微	L-多 E中	M-稀	M 微				S 微 E僅		L-稀 E非	無		IVe
2TR No.57	小型壺 B₂					L-微亜角	L-微亜角											M-僅	M-多 E中	M-僅	M 微				S 稀			無		IVn
2TR No.61	小型壺 C－I					M-微亜角	L-微角												L-多 E中	M-微	L-僅		M-稀板		S 微 E多			無		IVe
2TR No.62	小型壺 C－I																		M-多 E中		M-僅				S 稀 E僅			無		IVc
2TR No.47	小型壺 B₁－I																	S 中	M-僅 E僅	S 僅	S 微	L-微板	L-微板		M-微 E僅		S 稀 E非	無		IVe
2TR No.63	鉢 F					M-稀角													S 中 E僅		S 僅				S 微 E中		M 稀 E非	有多		IVe
2TR No.64	鉢 F					L-微亜角	M-稀角											L-僅	L-多 E僅		M 微		M-稀板		M-稀 E微			有稀		IVe
2TR No.69	甕D				L-稀角	L-微亜角	L-僅角				L-僅亜角					M 微 貝束		L-多 E僅	L-中 E中	M-微	L-中				M-微		M-稀 E非	無		IVbeg
2TR No.70	甕D																		M-稀	L-稀	L-微	L-微		M 微板		L-非			無		IIa
2TR No.71	甕D																			L 稀	M-僅	L-微		M 稀板	M-微	M-非			無		IIa

試料番号	器種	岩石																鉱物												焼土塊	類型
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石					
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍				
2TR No.65	鉢H₁		M 稀 角																M-多		S 僅		S 稀 板		S 微				有微	Ⅰb
2TR No.66	鉢H₂		M 僅 角														S 稀 束		M-多 E 僅		M-中		M-稀 板		S 僅 EF 僅				有微	Ⅰbd
2TR No.67	甕B₁	L-僅 角																L-稀	M-微	L-僅	M-中	L-微 板	L 稀 板	L-多	M-非				無	Ⅱa
2TR No.68	甕D		M 稀 角																M-僅	M-僅	M-僅		L-中 粒 板	M-僅	L-多				無	Ⅱa
2TR No.73	甕D	M-中 角	L 僅 角									L-稀 亜 円						M-中	L-非 E 微	M-僅	M 微	L-稀 板	L-稀 粒		S 微				有稀	Ⅰbdg
2TR No.74	甕D					L-多 角	M 稀 角											M-僅	L-非 E 中		L-僅				S 微 E 僅				無	Ⅳe
2TR No.75	甕D		L-微 角																M-僅	L-多	L-中			L-中	L 非				無	Ⅱa
2TR No.76	甕D						L-微 角					L-稀 角						M-中	L-多 E 中	M-稀	M 微	L-微 板	M-稀 板		S 微 E 非				無	Ⅳeg
2TR No.77	甕F₁					L-多 亜 角	L-多 角										M 稀 フ	M-多	M-多 E 僅	M-微	M 僅		M 微 板			S 稀 E 非			有稀	Ⅳe
2TR No.78	甕F₂					L-中 角	L-多 角					M-稀 亜 角					M 微 フ	M-中	M-中 E 中		M-僅	S 稀 板	S 微 板			S 微 E 非			有稀	Ⅳeg
2TR No.79	甕F₃					M-中 亜 角	L-多 亜 凹					M-稀 亜 円						M-多	L-多 E 非		L-稀					S 微 E 非			有微	Ⅳeg
2TR No.80	甕F₄					L-中 亜 角	L-中 角										M 稀 フ	L-僅 E 微	L-多 E 中	S 稀						M-稀 E 非			有微	Ⅳe
2TR No.81	甕F₅					M-僅 角	L-多 亜 角											M-多	L-多 E 多	M-微	L-僅		S 微 板			S 稀 E 非			無	Ⅳe
2TR No.82	甕J₁		L-僅 角		L 稀 角												M 稀 フ	M-稀	M-中 E 微	M-微	M-中			S 稀	M-中 EF 多				有稀	Ⅱad

試料番号	器種	岩石																鉱物												焼土	類型
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石					
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍				
2TR No.86	直口壺 A1	L- 稀 角	L- 稀 角									L- 稀 亜角	L- 微 亜角					M-中	L- 非 E 微	M-僅	L- 僅				S 稀					有	稀	I bdg
2TR No.89	直口壺 A1					L- 微 角	I- 微 角										M 稀 束	M-微	M- 僅 E 中		M-微				S 微 E 多		S 稀 E 非			有	僅	IVe
2TR No.90	広口壺 A2																M 稀 フ	L- 僅	I- 多	M-僅	M-多				S 稀 E 非					有	稀	I e
2TR No.91	小型壺 B1-II					L- 微 亜角	M- 微 角												S 僅 E 僅	M 稀	S 微		S 稀 板		S 僅 E 中					有	僅	IVe
2TR No.92	小型壺 B1-II					I- 稀 角	M- 微 角												M- 中 E 僅		M-僅		S 稀 板		M- 僅 E 中		S 稀 E 非			有	稀	IVe
2TR No.93	小型壺 B-II						L- 僅 亜角										M 稀 フ	M-稀	L- 中 E 中	L- 稀	M 微				S 微 E 非		S 稀 E 非			無		IVe
2TR No.94	小型壺 B1-II						I- 僅 亜角										M 稀 フ	M- 微	M- 多 E 中		M-微		S 稀 板		S 稀 E 非					無		IVe
2TR No.95	小型壺 B1-II	L- 稀 角	M 稀 角					L- 僅 亜	僅 円	L- 僅 亜	僅 角	I- 微 亜	円 I- 稀 角					I- 中	M- 中 E 僅		M-僅		S 稀 板		S 稀 E 非					無		I deg
2TR No.96	小型壺A					I- 亜	稀 角 I- 微 角										M- 微 以 フ	L- 稀	I- 多 E 多		S 微						S 稀 E 非			無		IVc
2TR No.97	小型壺 B-I					I- 亜	稀 角 L 僅 角										S 貝 稀 フ		S 中 E 僅		S 微				S 微		S 稀 E 非			有	僅	IVc
2TR No.98	小型壺 B1-I					L- 亜	微 角 M 稀 角										M 貝 稀 フ		M- 多 E 僅		S 僅				S 僅 E 僅		S 稀 E 非			有	微	IVe
2TR No.99	小型壺 B1 I					M- 僅	角 L- 僅 角						M- 稀 角				S 微 板	M-多	L- 多 E 中	S 稀	M 微				S 稀 E 非					無		IVeg
2TR No.100	小型壺 B1-I					I-	稀 角 S 中 角										M- 中 貝		M- 中 E 中		S 稀				S 僅 E 多					有	稀	IVe
2TR No.101	小型壺 B1-I																		M- 僅 E 微		S 微				S 微					無		砂礫少量 区分不能

試料番号	器種	岩石																鉱物										焼土境	類型
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石			
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍		
2TR No.102	小型壺 B₁－I						L-僅角										S稀貝		M-中 E中		M僅		S稀板		S稀 E非			無	IVe
2TR No.103	小型壺 B₁－I						S微角										S中貝		S僅 E僅		S中				S僅			無	砂礫少量区分不能
2TR No.104	小型壺 B₂																S微貝		M-多 E僅		S中				S稀 E非			有稀	Ide
2TR No.105	小型壺 B₂						S僅角			L稀亜角							S僅貝		M-多 E中		S中				S稀			無	IVn
2TR No.106	小型壺 B₃					M稀角	M僅角										M-中貝	L-微	M-多 E中		M微				S僅 E非			有微	IVe
2TR No.107	小型壺 B₂						M-僅角												S中 E僅		S稀				S微 E非			無	砂礫少量区分不能
2TR No.108	小型壺 B₂		M稀角														M-僅貝フ	M-微	M-多 E僅	S微	S僅				S僅 E僅			有稀	Ide
2TR No.109	小型壺 D					L-僅角	M-僅角										S微貝	M-微	M-多 E中		M-僅		S稀板		S微 E非			無	IVe
2TR No.110	複合口縁壺 B₃－II						L-僅角										M-微貝		M-多 E中		M-中						M-僅 E多	有稀	IVe
2TR No.111	複合口縁壺 B₃－II						S微角											M-稀	M-多 E多		M-僅				S微 E中			有稀	IVe
2TR No.112	複合口縁壺 B₃－II						M-稀角										S稀貝		M-非 E多	L稀	S微				S稀			無	IVn
2TR No.113	複合口縁壺 B₃－II		L-微角		M稀角		M稀角										S稀束	L-微	M-多 E稀		M-僅	M-微板	S稀板		S微			無	Ibd
2TR No.114	複合口縁壺 B₃－III						M-中角												S中 E僅		S僅				S微 E非			有微	IVc
2TR No.115	複合口縁壺 B₃－III						M-僅角										M微貝		M-多 E僅		S僅				S稀			無	IVn

試料番号	器種	岩石																鉱物												焼土	類型
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石					
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍				
2TR No.117	複合口縁壺 B3－III		L-稀角										L-微 垂円					M-僅	L-多 E僅	S 稀	M-中				S微 E稀				有稀	I deg
2TR No.118	複合口縁壺 B3－III						M-稀 垂角										S微 フ員		S中 E中		S 中		S 稀 板		S僅 E僅				有稀	IVe
2TR No.119	複合口縁壺 B3－III						M-稀 垂角										S微 フ員		S中 E中		S 中				S 僅		S 稀 E非		無	IVe
2TR No.120	複合口縁壺 B3－III		L-微角																M-多 E稀		M-多				S 微				無	I bd
2TR No.121	複合口縁壺 B3－III		L-稀角															S 微	S多 E僅		S 多		M-稀 板		S微 EF僅				有稀	I bd
2TR No.122	複合口縁壺 B3－II					M-僅 角	M-僅 角			M-稀 亜角							S 稀 フ		M-中 E多	M-稀	M-中		M 稀 板		M-微 E非				無	IVeg
2TR No.123	複合口縁壺 B3－III					L-中 亜円	L-中 角											M-僅	L-中 E中	M-微	L-僅				M-微				無	IVn
2TR No.124	複合口縁壺 B3－II	M-僅 角			M 稀 角							M-稀 角					M-僅 フ員	S 微	M-中 E僅		L-中			M-微	M-中 EF多				有稀	II adg
2TR No.125	複合口縁壺 B3－III						M-稀 角										S 稀 フ		M-微 E微		M-稀				S 稀				有稀	砂礫少量 区分不能
2TR No.126	複合口縁壺 B3－III					L-中 亜角	L-僅 角											M-僅	M-多 E中	M-微	M-中				S稀 E多		S稀非 E		無	IVe
2TR No.127	複合口縁壺 B3－III					L-微 亜角	M-微 角			M 稀 亜角								M-微	M-中 E多	S 微	M-僅	M-稀	L-稀 板				S稀 E多		無	IVc
2TR No.128	複合口縁壺 B3－III					L-中 亜角	L-僅 角											L-僅	M-中 E多	L-稀	M-中				S微 E多				有微	IVe
2TR No.129	複合口縁壺 B3－III	L-僅 亜角	M 微 角															M-僅 E微	M-中 E稀	M-僅	M-中			M-微	S中 EF多				有微	II ad

試料番号	器種	岩石																鉱物												焼土	類型
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石					
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍			境	
2TR No.178	甕D		L-微角															M-稀	L-微	M-微	L-稀	S 稀板	L-稀粒	M-中	L-非					無	IIa
2TR No.179	甕D		M 稀角																M 稀	L-微	M 微				L-中	L-多				無	IIa
2TR No.180	甕D					L-中角	L-優角											M-優	L-中E 中	M-微	L-優									無	IVd
2TR No.181	甕D	L 稀角																	M-微	M-微	M-稀		L-優板	M-中	L-多					無	IIa
2TR No.182	甕D	L 稀角																	M-優	L-優	M-微		S 稀板	L-中	L-多					無	IIa
2TR No.183	甕E1					L-稀亜角	L-中亜角									M 稀貝	M-優	M-多E 多	S 微	M-微	M-微板	L-微板		S 稀E 非						無	IVe
2TR No.184	甕E1					L-優亜角	L-中亜角									M 稀貝	L-優	M-中E 優	M-優	M-優	M-微板	L-板	L-優粒							無	IVe
2TR No.185	甕E1		M-稀亜角															S 優	M-中	M-微	M-中	M-稀板	M-板	稀粒	S 稀					無	Ib
2TR No.187	甕E1					L-優角	L-優亜角					L 稀亜角						L-優	L-中E 多		M-微	M-稀板						S 稀E 非	有微	IVeg
2TR No.188	甕F1																		M-稀	M-微	M-微		M 微板	S 多	M-非					無	IIa
2TR No.189	甕F1						M-優角									M 中貝	フ	M-優	M-多	M-微	M-微				S 稀					無	Ibd
2TR No.190	甕F1					L-微亜角	L-微亜角							L 稀角				M-優	M-多E 多		S 優		S 稀板					S 稀E 非	有稀	IVeh
2TR No.191	甕F1						L-稀亜角											M-優	L-非E 多	M-中	M-優							S 稀E 非	無	IVe
2TR No.192	甕F1					M-微角	L-中亜角									M 稀貝			L-中E 中		L-優							M 稀E 非	無	IVe

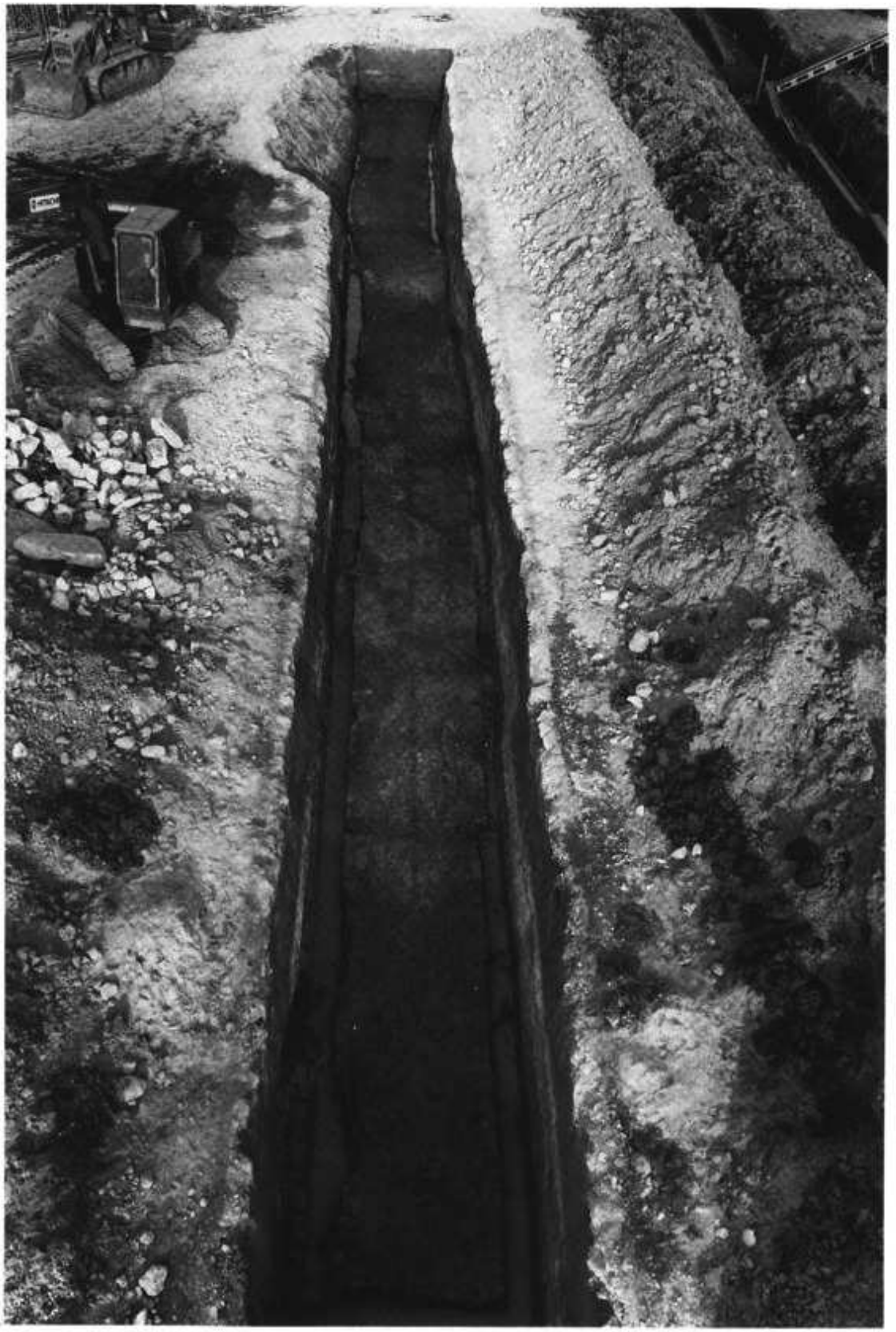
試料番号	器種	岩石																鉱物												焼土	類型
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石					
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍				
2TR No.193	甕F1					L-亜 僅角	L-亜 中角											M-中	M-中 E 中	M-稀	M-微	M-微 板					M-E 稀非	有	稀	IVe
2TR No.194	甕F1					L-亜 微角	L-亜 僅角											M-微	L-中 E 微	L-微	M-微	S 稀板	M 稀粒				M E 稀非	無		IVe
2TR No.195	甕F1					L-亜 僅角	L-亜 多角										M 微フ員	M-中	M-微 E 僅	M-微	L-中	M-微 板	M-微 粒				S E 稀非	有	稀	IVe
2TR No.196	甕F1					L-亜 稀角	M-亜 僅角										S 稀員	S 中	M-多 E 多		M-微						S 稀	無		IVe
2TR No.197	甕F1					M-亜 僅角	L-亜 中角												M-中 E 僅		M-僅	M-稀 板	S 僅粒		S E 微僅			無		IVe
2TR No.198	甕F1					L-亜 僅角	L-亜 中角										M 僅東員	M-僅	L-中 E 中		M-微				S 稀			無		IVn
2TR No.199	甕F1					M-亜 僅角	L-亜 中角										M 僅員	M-僅	L-多 E 非	M-稀	M-微						S E 微非	有	稀	IVe
2TR No.200	甕F1						L-亜 稀角					M 稀亜角							M-多 E 多		M-僅						S E 稀非	有	微	IVcg
2TR No.201	甕F1	L-亜 稀角	L-亜 稀角																M 稀	L-僅	M-僅			L-中	L-非			無		IIa
2TR No.202	甕F1		M 稀角																M 稀	L-中	M-僅		M-微粒	M-中	L-非			有	稀	IIa
2TR No.204	甕F1					L-亜 中角	L-亜 中角											M-中	L-中 E 中	M-僅	M 微	S 稀板			M E 稀非			無		IVe
2TR No.205	甕F1											L-亜 稀角							M-多 E 微	M-稀	M 微	M-稀 板			S 稀			無		I bdg
2TR No.206	甕K					L-亜 稀角	M-亜 微角												M 微	L-微	M 微				S 稀			無		観察不良 区分不能
2TR No.207	甕K					L-亜 僅角	L-亜 中角											M-僅	M-中 E 中	M-僅	M-僅				M-僅		M-E 稀非	無		IVe

試料番号	器種	岩石																鉱物														焼土	類型
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石							
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍						
2TR No.208	甕J1	L-稀角	L-僅角		L-稀角													S 僅	M-中 E 僅	S 微	M-中			S 稀	M-僅 E 僅							有	I bd
2TR No.209	甕J2	M-稀角	L-稀角									S 稀亜円	L-稀亜角		L-稀亜角			S 中	L-中 E 僅	S 中	L-僅				M-微 E 稀							無	I bdgh
2TR No.210	甕J3						L-稀亜角											M-中	M-中	M 稀	M-微				M-稀							有	I bd
2TR No.229	小型壺B1					S 稀角	M-微角												L-中 E 中		M-微				S 稀							無	IVn
2TR No.230	小型壺B2											L-微亜角	L-稀亜角				M 稀員	M-微	L-非 E 微	S 稀	M-稀				M-僅 EP僅							無	I bdg
2TR No.231	小型壺B3																	L-中	L-多 E 僅	M-中	M 中											無	I d
2TR No.232	小型壺B					M-僅角	M-僅角											M-微	M-多 E 中	M 微	S 中											無	IVd
2TR No.233	小型壺B4					L-亜 稀角	S 微亜角					M-稀亜角	S 微亜角				M 稀員		M 非 E 多		M-微				M-微							無	IVg
2TR No.234	小型壺B5					M-微角	L-僅角											M-僅	L-多 E 中	M 微	M 微									S 稀 E 非		無	IVc
2TR No.235	小型壺B6					M-僅亜角	M-僅角											S 稀	M-多 E 中	S 微	M-僅					S E 稀非						無	IVe
2TR No.236	小型壺A						L-僅角										M 稀員	M-微	M 非 E 中	M-僅	M-僅					S 稀						無	IVn
2TR No.237	小型壺A					M-稀角	M-僅角										M 稀員	M 僅	M 非 E 中	M-僅	M-僅					S E 微非						無	IVe
2TR No.238	鉢B		S 微角									M-稀亜角					M 稀員	M-僅	M-多 E 僅	M-僅	M-僅					S E 稀非						無	I deg
2TR No.239	鉢A2																		M-多 E 僅		S 多					S K 稀非						無	I de

試料番号	器種	岩石																鉱物												焼土	類型
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石					
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍			塊	
3TR №240	複合口縁壺 B_3-III					M-微 亜角	M-微 亜角										M 稀 員	S 僅	L-E 非多	M-僅	M-中				S 稀					無	IVn
3TR №241	複合口縁壺 B_3-II					M-微 亜角	M-僅 亜角										S 稀 フ	M-微	M-E 多中	M-微	M-多				S 微					無	IVn
3TR №242	複合口縁壺 B_3-II					L 微 角	M-微 角											L-微	M-E 非中		M-中						S E 稀多			無	IVe
3TR №243	直口壺 A_1					M-稀 亜角	L-微 角										M-稀 員	M-僅	M-E 多中	L-僅	M-中				S E 稀多					有稀	IVe
3TR №244	直口壺 A_1					L-僅 亜角	M-僅 角					L 稀 亜角					M 稀 員	S 僅	M-E 非中		M-微				S 稀					無	IVg
3TR №245	鉢 J					L-僅 角	L-中 角										M 稀 員	L-中	L-E 非中	M-微					S E 稀非					無	IVc
3TR №246	鉢 J					L 稀 角	M-微 亜角					M-微 角					M 稀 員	M-稀	L-E 非中		M-微				S E 稀非					無	IVeg

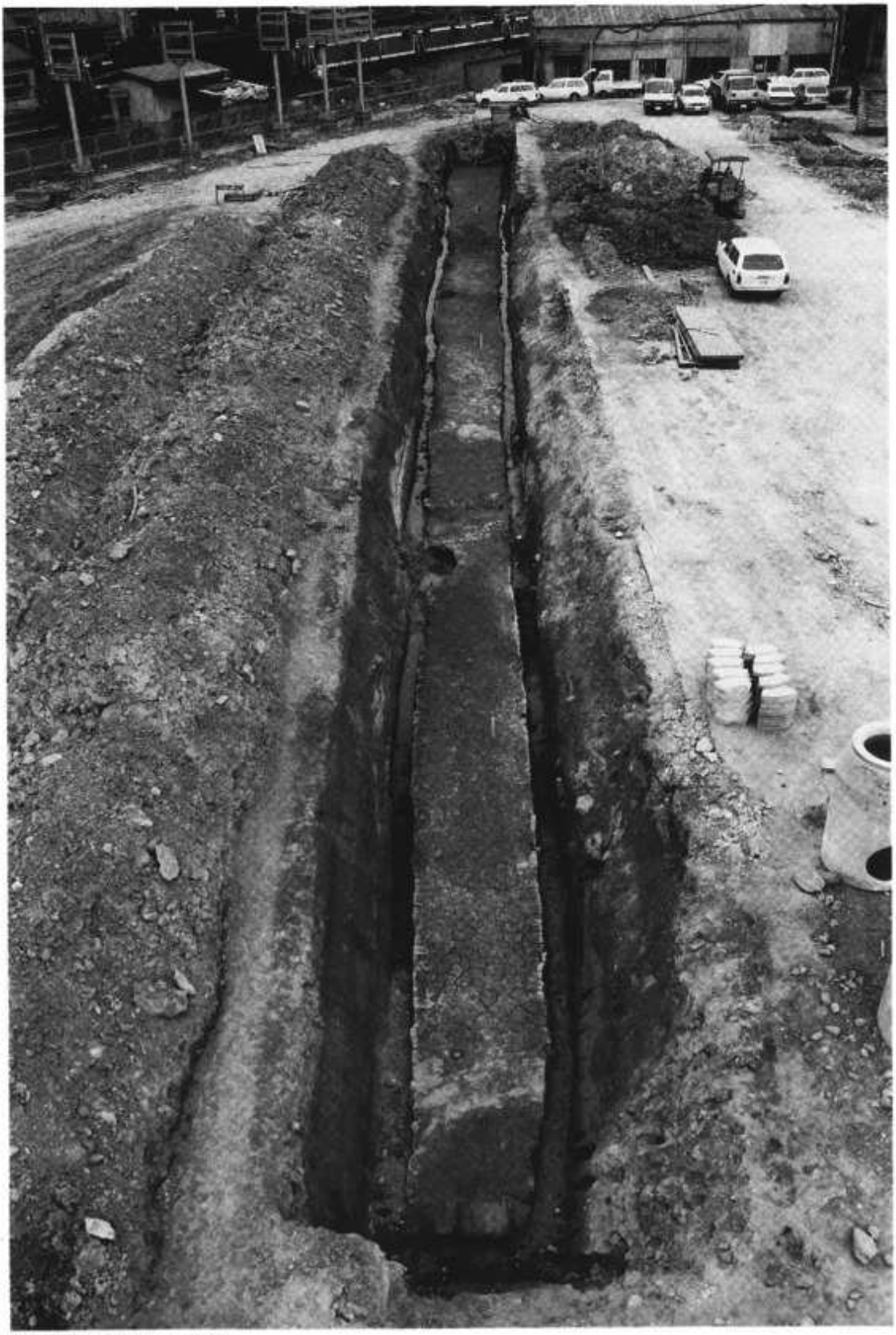
裸眼＝裸眼観察　裸眼による観察：L＝粒径2㎜以上　M＝粒径2㎜未満0.5㎜以上　S＝粒径0.5㎜未満　非＝量が非常に多い　多＝量が多い　中＝量が中　僅＝量が僅か　微＝量がごく僅か　稀＝量がごくごく僅か　30倍＝実体鏡の倍率が30倍　実体鏡による観察：L＝粒径1㎜以上　M＝1㎜未満0.5㎜以上　S＝粒径0.5㎜未満　量は裸眼に同じ　・＝以下の粒径がある　E＝自形　EF＝結晶面がある　W＝白雲母が含まれる　板＝板状　貝＝貝殻状　束＝束状　フ＝フジツボ状　図＝報告書等の図版

図　　版



第1トレンチ全景（西から）

図版二



第2トレンチ全景（西から）

第２トレンチＳＷ－１検出状況（西から）

第２トレンチＳＷ－１検出状況（南から）

図版四

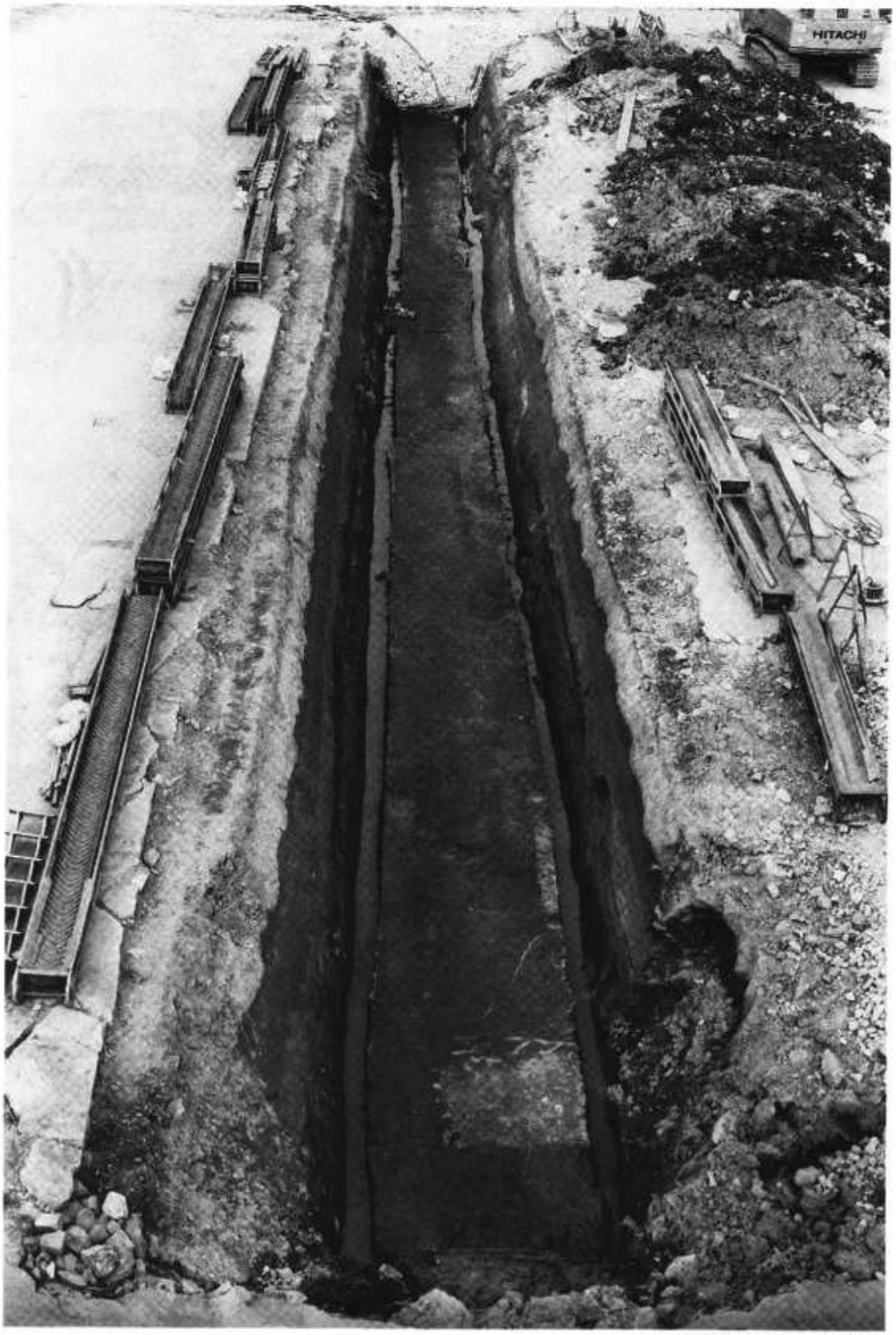
第２トレンチＳＷ－１西部遺物出土状況（西から）

左上　第２トレンチＳＷ－１南西部（東から）

左下　〃　北部　（東から）

右上　第２トレンチＳＷ－１北部（南から）

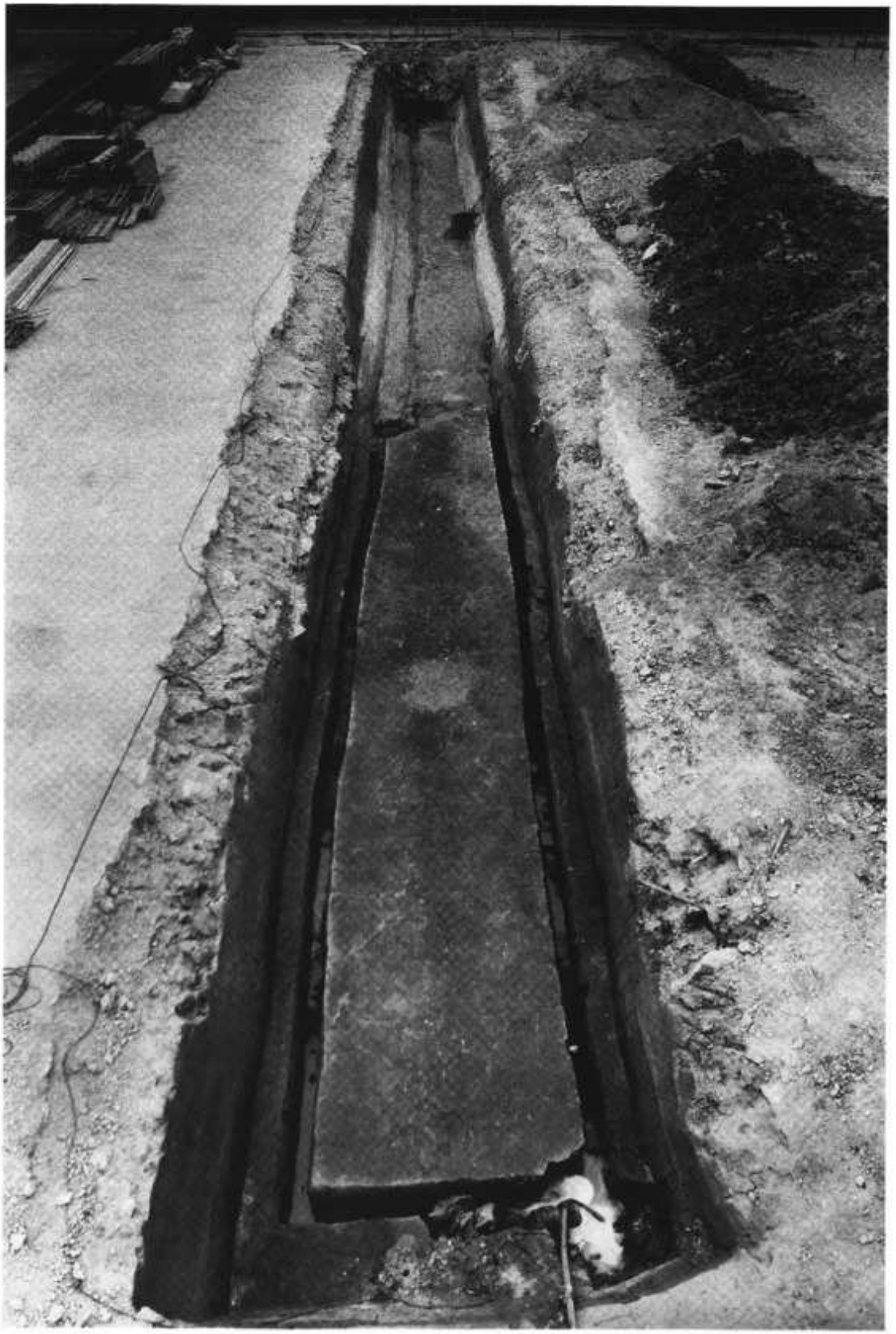
右下　〃　棒状石製品出土状況（南から）



第3トレンチ全景（西から）

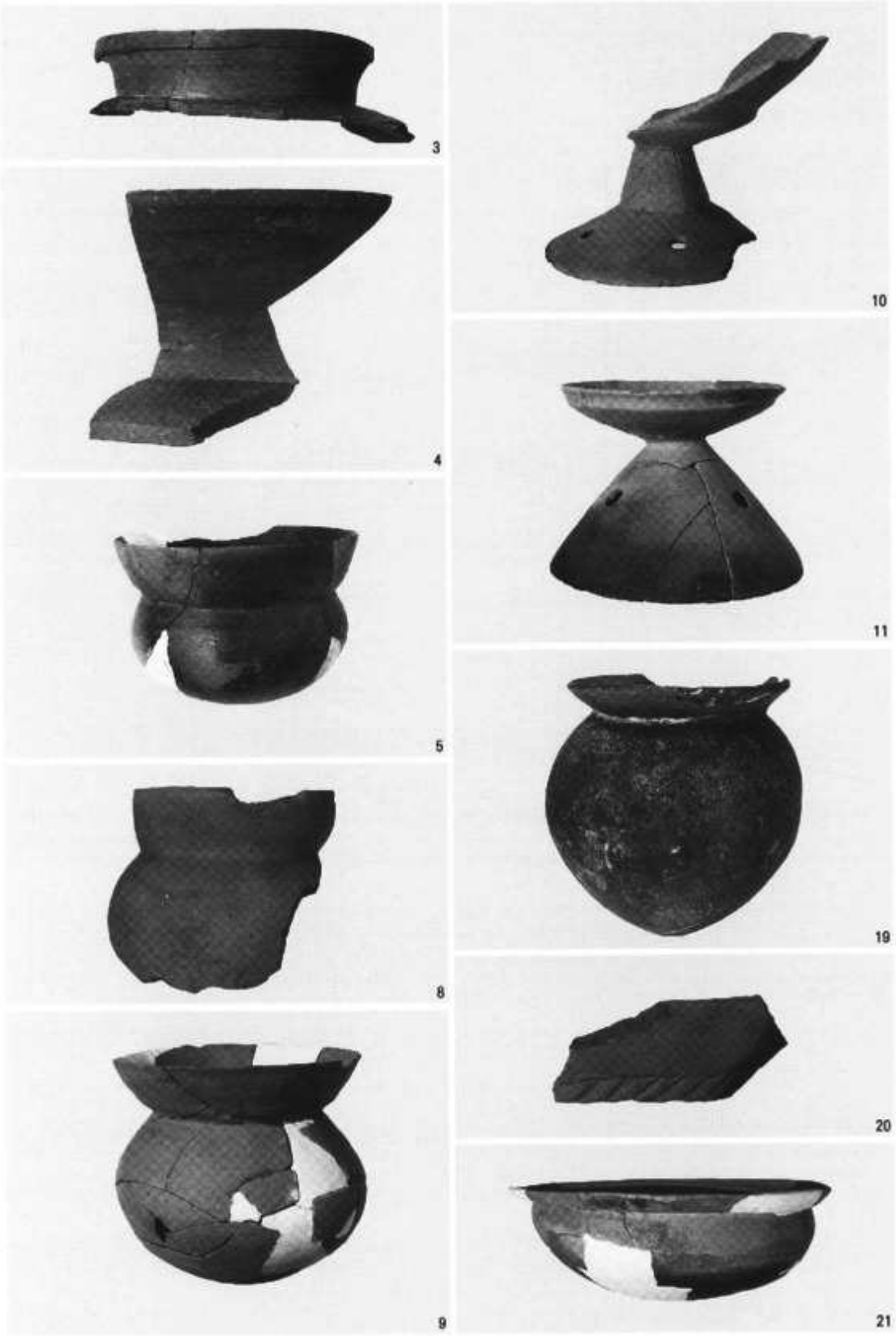
第３トレンチＳＷ－２検出状況（北から）

第３トレンチＳＷ－２細部（南から）



第4トレンチ全景（東から）

図版八



第1トレンチ第4層（3・4）、第7層（5・8・9～11・19～21）出土遺物

22

27

23

28

25

29

26

30

第２トレンチＳＷ－１出土遺物１

31

36

32

37

33

38

34

39

35

第２トレンチＳＷ－１出土遺物２

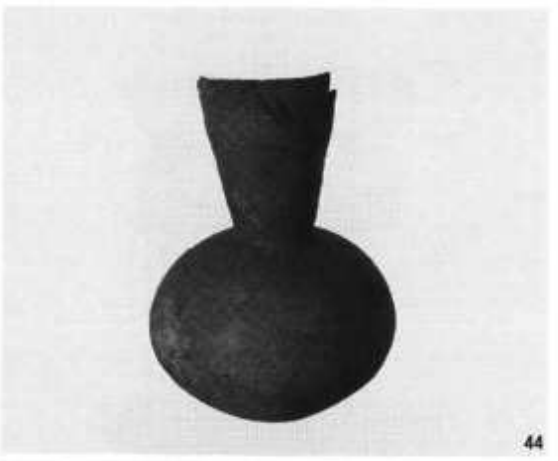
40

41

42

43

46


44

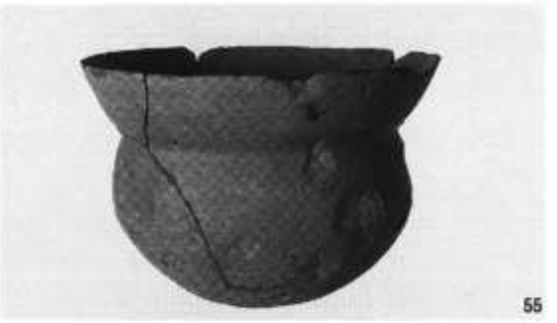
47

48

49

第２トレンチＳＷ－１出土遺物３

50


55

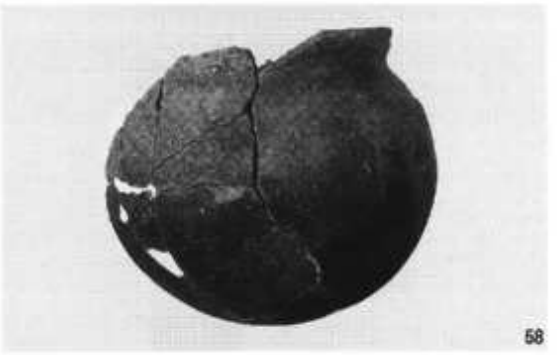
51

56

52

57

53


58

54

59

第２トレンチＳＷ－１出土遺物４

60

61

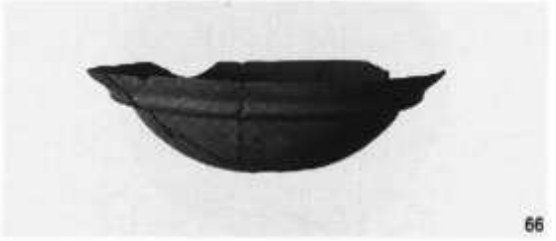
62

63

69

64

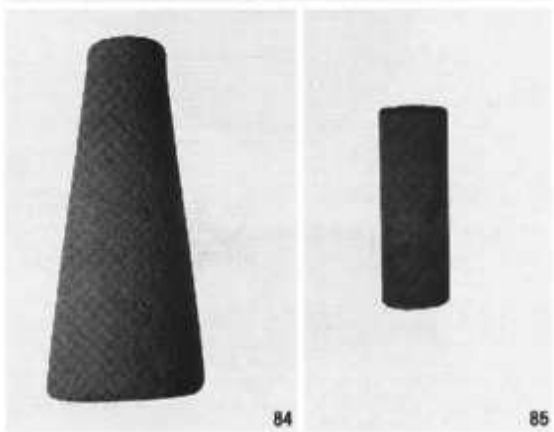
65


66

67

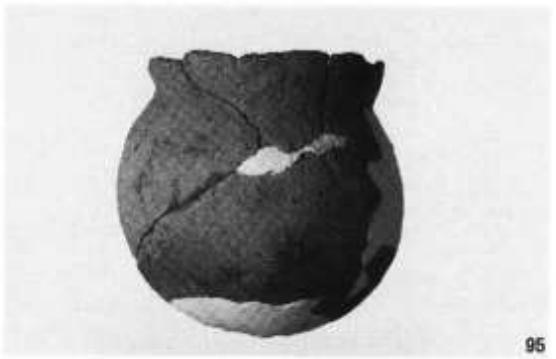
68

第２トレンチＳＷ－１出土遺物５



第２トレンチＳＷ－１出土遺物６

86


95

90

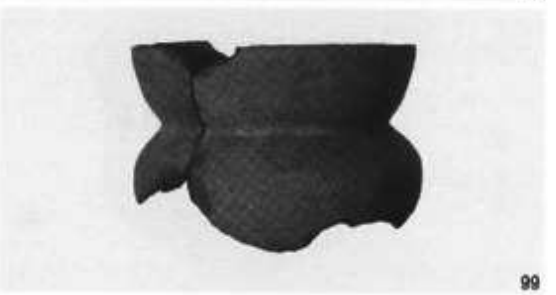
96

91

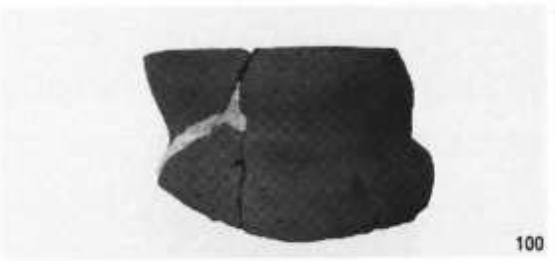
97

93

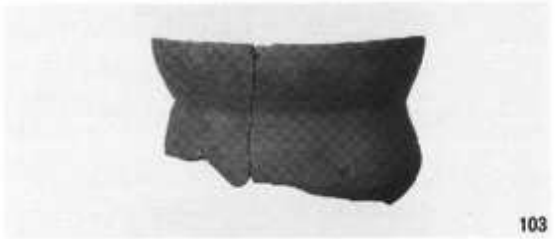
98

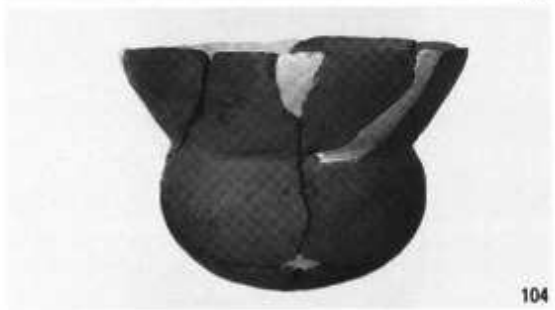

99

第２トレンチ第７層出土遺物１


100

102


103


104

105

107

108

109

116

122

123

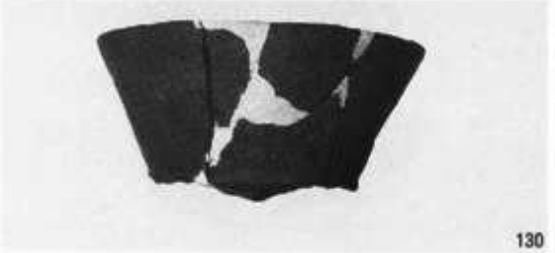
第２トレンチ第７層出土遺物２

124

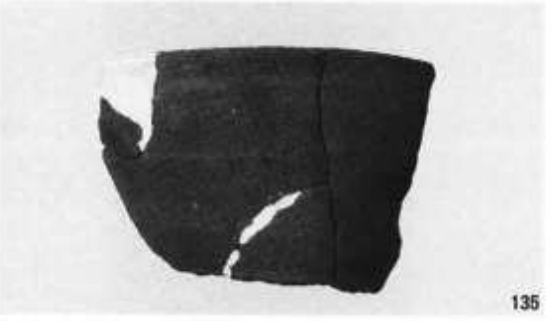
125

126

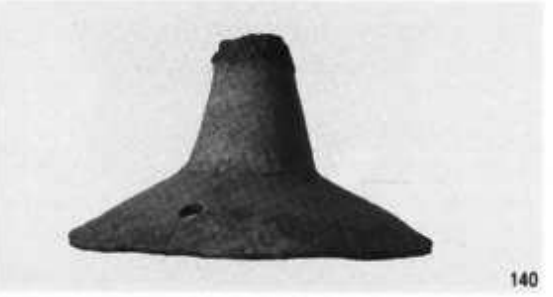
129

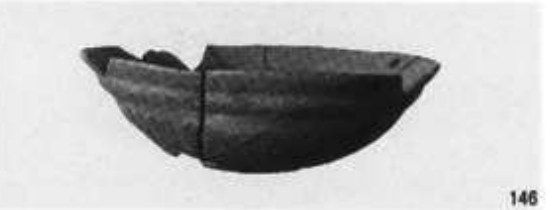

130

132


135

138


140

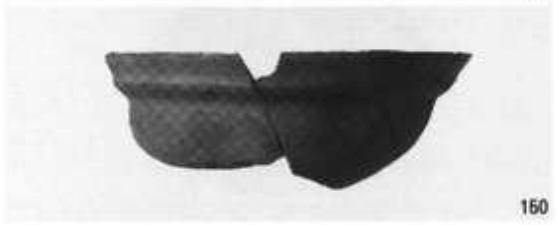

146

第２トレンチ第7層出土遺物３

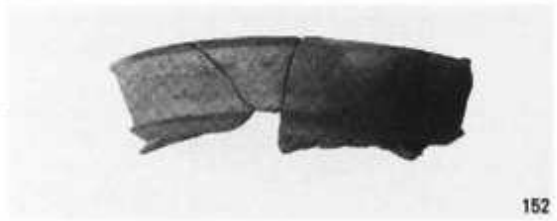
147

148

149


150

151


152

153

154

155

160

172

第２トレンチ第７層出土遺物４

173

180

175

182

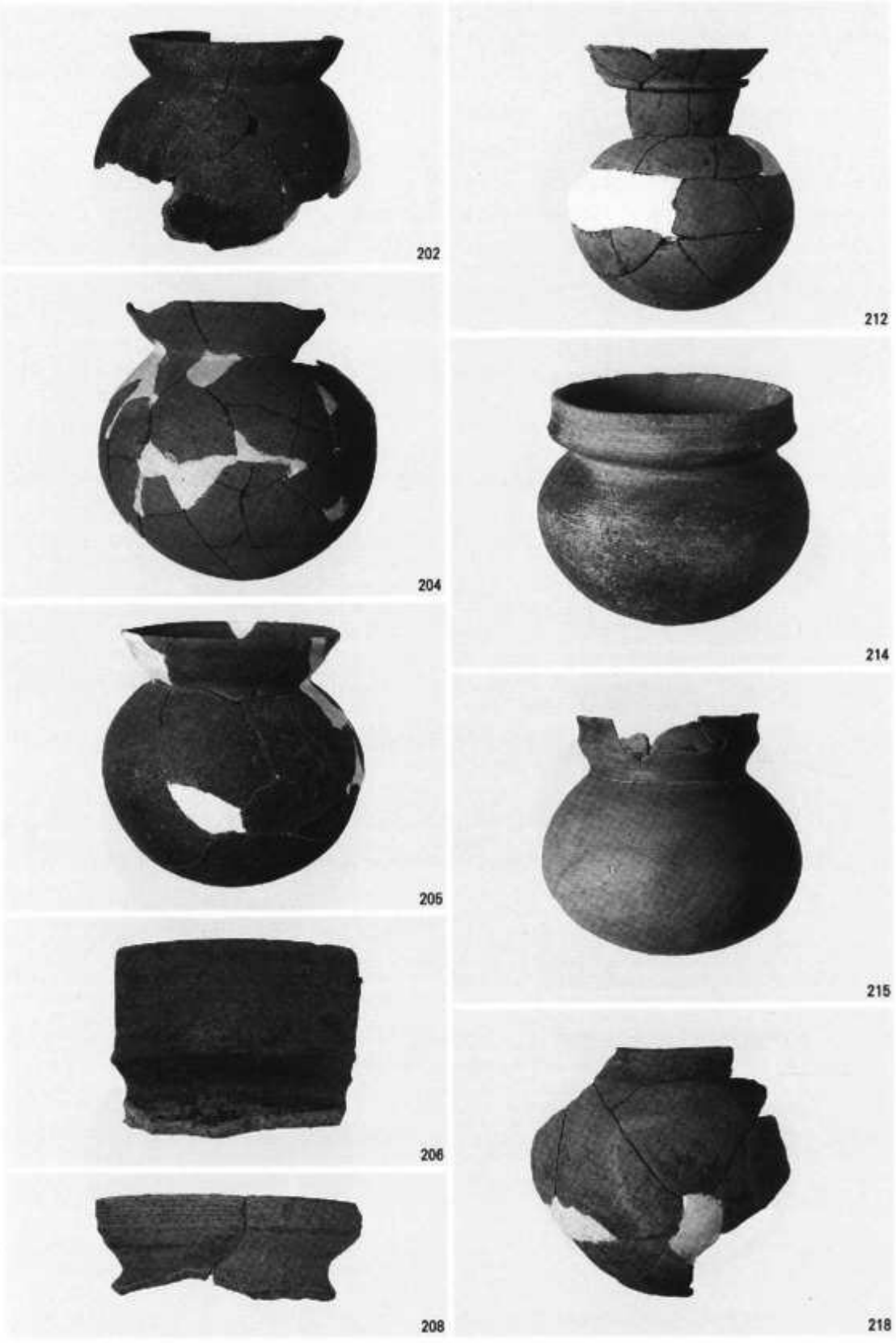
177

184

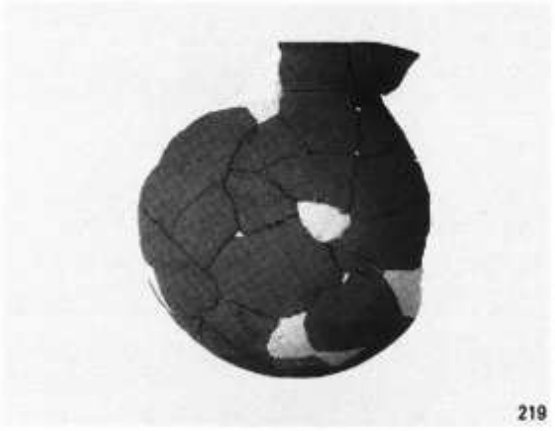
179

187

第2トレンチ第7層出土遺物5



第2トレンチ第7層（202・204・205・206・208）、第8層（212・214・215・218）出土遺物


219

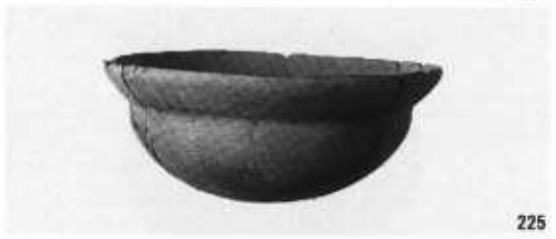
220

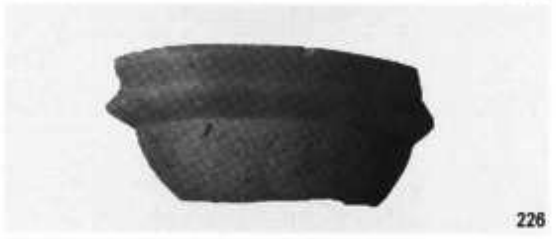
221

222

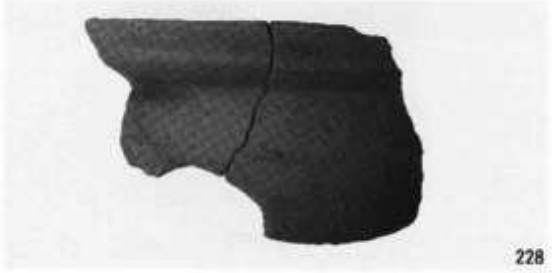
223

224


225


226

227

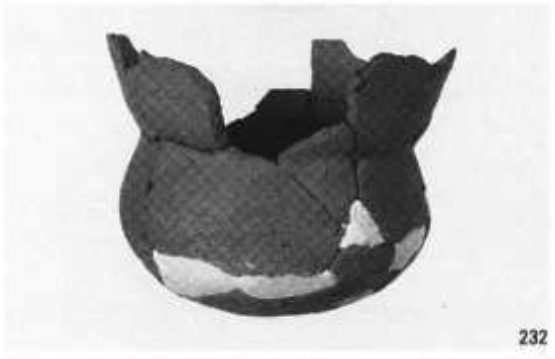

228

第２トレンチ第８層出土遺物

229

230

231


232

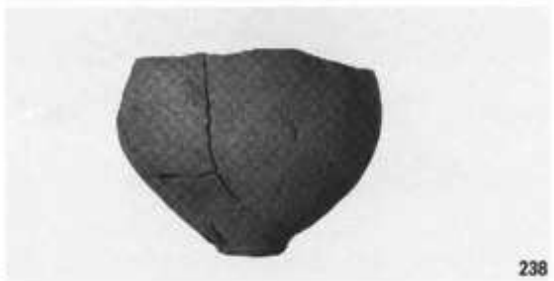
233

234

235

236

237


238

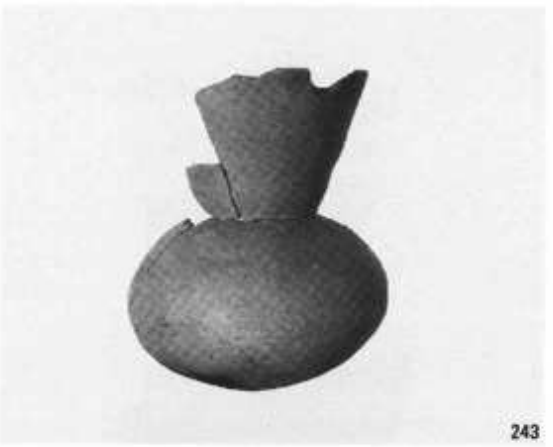
第３トレンチＳＷ－２出土遺物

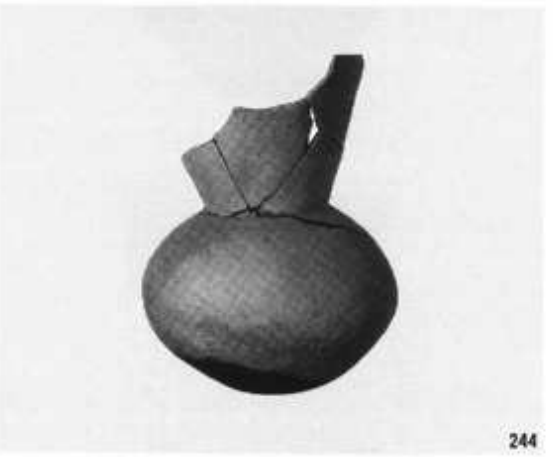
239

240

241

242

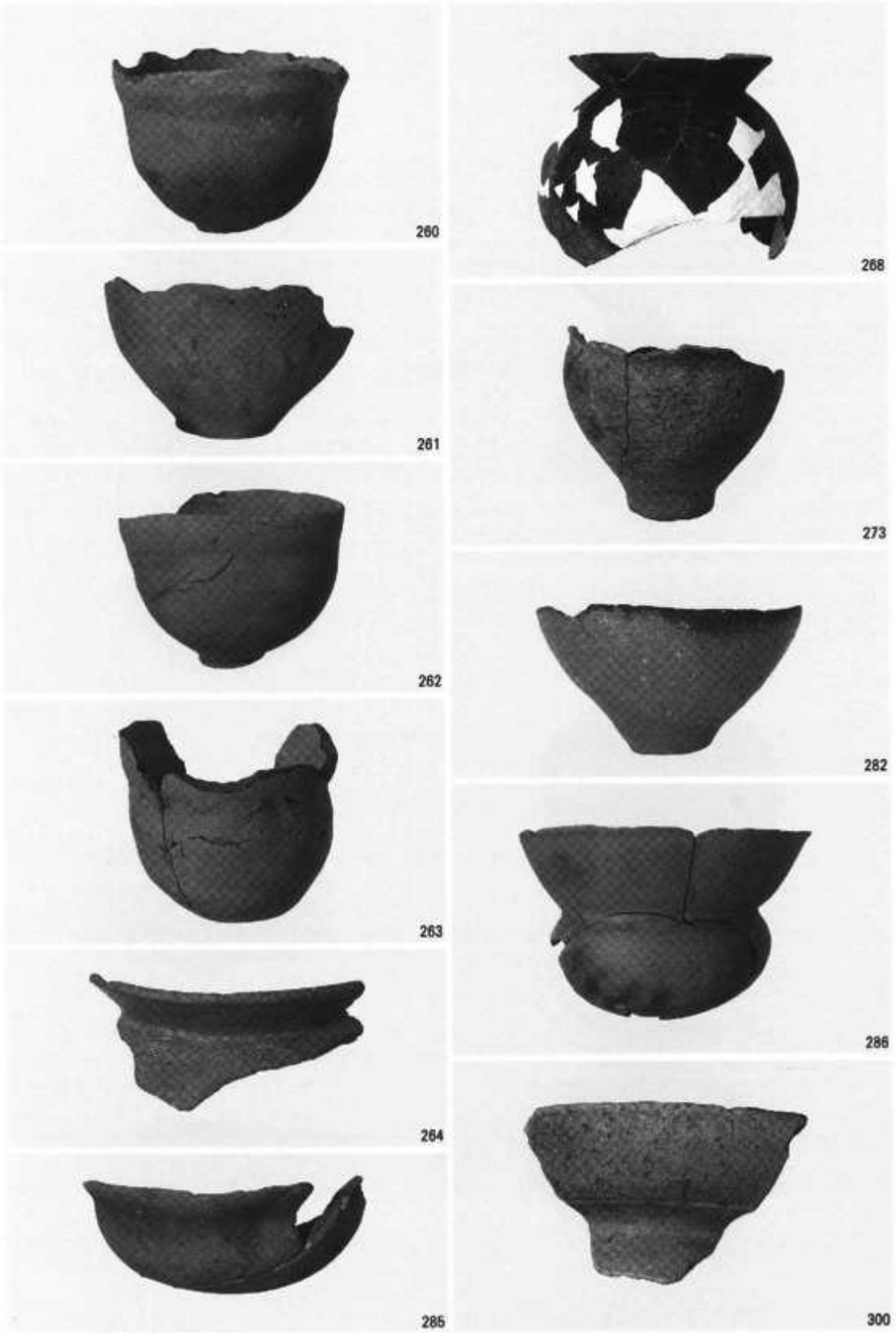

243


244

245

259

第３トレンチＳＷ－２（239～245）、第７層（259）出土遺物



第3トレンチ第7層（260～264・268）、第4トレンチＮＲ－1（273・282・285・286・300）出土遺物

Ⅲ久宝寺遺跡第６次調査（ＫＨ90－６）

例　　言

1．本書は、八尾市神武町17、20、21、22、23、24－2、25－1、26－1、27－1、38、210－1で実施した工場建設工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する久宝寺遺跡第6次調査（KH90－6）の発掘調査の業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が明治乳業株式会社大阪工場から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成2年9月3日から10月12日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。面積は224㎡を測る。調査においては垣内洋平・北尾光男・木村勝・別所秀高（現㈱東大阪市文化財協会）・真柄竜が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成5年3月31日に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－北原清子・沢村妙子、図面レイアウト－原田、図面トレース－北原、遺物観察表－原田、遺物写真撮影－原田が行った。

1．本書の執筆・編集は原田が行った。

1．線刻文字の解読に当たっては、八尾市立歴史民俗資料館の小谷利明・尾崎良史両氏から御教示を受けた。

1．なお、古墳時代初頭～前期（庄内式～布留式）の土器分類および時期設定は、本書掲載「Ⅱ久宝寺遺跡第1次調査」に準ずる。

本　文　目　次

第1章　調査に至る経過…… 153

第2章　調査概要…… 154

　第1節　調査方法と経過…… 154

　第2節　基本層序…… 155

　第3節　検出遺構・出土遺物…… 155

　　1）第6層上面検出遺構…… 155

　　2）第7層上面検出遺構…… 161

　　3）遺構に伴わない出土遺物…… 162

第3章　出土遺物観察表……169～176

第4章　まとめ…… 177

挿 図 目 次

第 1 図　調査地周辺図…… 153
第 2 図　調査区設定図および地区割り図…… 154
第 3 図　検出遺構平断面図…… 156
第 4 図　SI－1 平断面図…… 157
第 5 図　SI－1 出土遺物実測図…… 158
第 6 図　SD－2 平断面図 …… 159
第 7 図　SD－2 出土遺物実測図 1 …… 160
第 8 図　SD－2 出土遺物実測図 2 …… 161
第 9 図　SE－1 平断面図 …… 162
第 10 図　SE－1 出土遺物実測図 …… 163
第 11 図　SE－1 出土板材実測図 …… 164
第 12 図　第 7 層出土遺物実測図 1 …… 165
第 13 図　第 7 層出土遺物実測図 2 …… 166
第 14 図　第 6 層、第 5 層出土遺物実測図…… 167
第 15 図　第 4 層出土遺物実測図…… 168

図 版 目 次

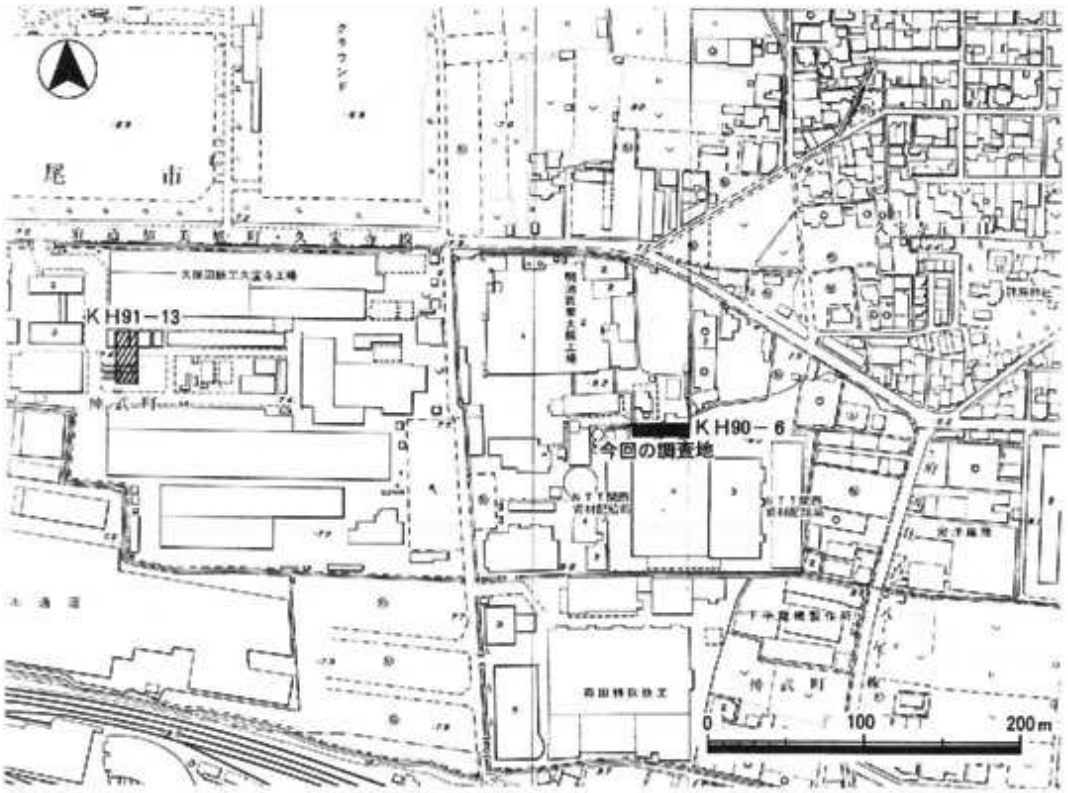
図版 一　南トレンチ全景
　　北トレンチ全景
図版 二　SI－1 南部
　　SI－1 北部
図版 三　SE－1　2 層上面
　　SE－1　3 層下部
図版 四　SI－1・SD－2 出土遺物
図版 五　SE－1 出土遺物
図版 六　第 7 層・第 6 層出土遺物
図版 七　第 4 層出土遺物

第１章　調査に至る経過

久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川左岸の低位沖積地に位置する縄文時代晩期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では八尾市北西部の北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・亀井・北亀井町・渋川町・跡部北の町の東西約1.8㎞南北約1.5㎞がその範囲とされている。

久宝寺遺跡内では、昭和55年～61年にかけて㈱大阪文化財センターにより近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査が実施されたほか、八尾市教育委員会・㈱八尾市文化財調査研究会が昭和54年以降断続的に発掘調査を実施している。その結果、縄文時代晩期から鎌倉時代に至る遺構・遺物が検出されている。

今回の発掘調査は、平成２年８月６日に八尾市教育委員会が八尾市神武町17他で工場建設に先立って実施した遺構確認調査で、古墳時代初頭～前期の遺物を含む土層を検出したことから発掘調査に至ったものである。発掘調査は、事業者と八尾市教育委員会・㈱八尾市文化財調査



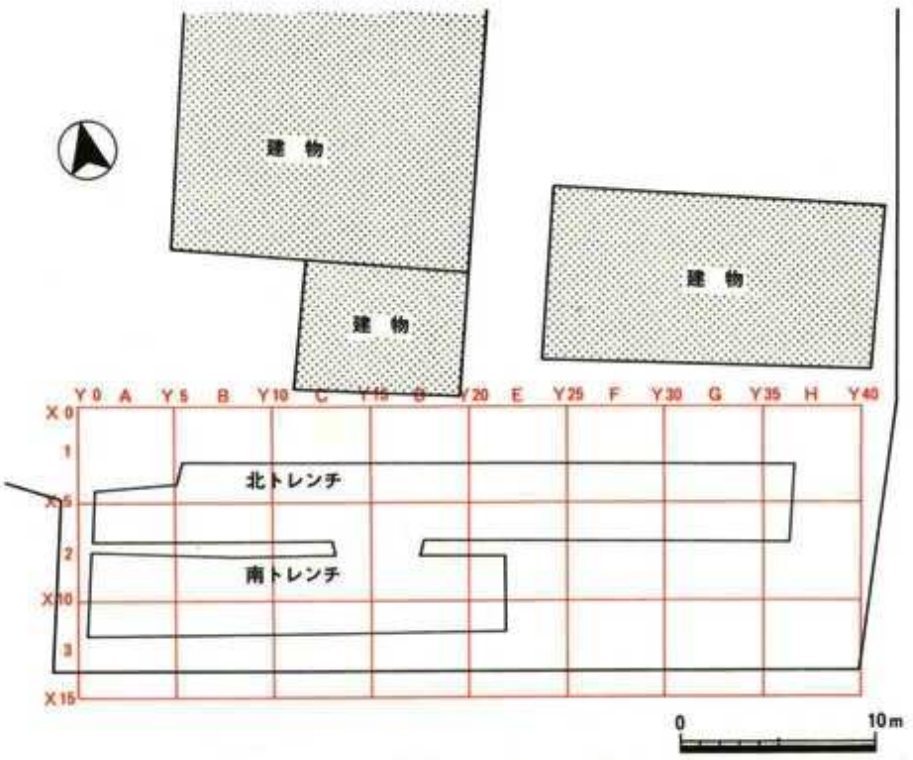
第１図　調査地周辺図

研究会との間で取りかわした三者協定に基づき㈱八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて実施したものである。現地での発掘調査は平成2年9月3日から10月12日までの22日間にわたって実施した。調査面積は224㎡を測る。報告書作成にかかわる業務は、現地発掘調査の終了後平成5年3月31日まで随時実施した。

第2章　調査概要

第1節　調査方法と経過

今回の発掘調査は工場建設に伴うもので、建物の基礎杭部分を調査対象とした。調査では、残土処理の関係から調査区を南北に二分する方法をとり、北側を北トレンチ、南側を南トレンチと呼称した。調査区の地区割りについては、東西40m、南北15mにわたって設定した。設定した一区画の単位は5m四方で、北西隅を基準点として東西方向はアルファベット（西からA～H)、南北方向は算用数字（1～3）で示し、地区の表示は1A区～3H区とした。掘削に際しては、試掘結果に基づいて表土下1.2mまでを機械により掘削した後、以下0.5mについては層理に従って人力掘削を行い遺構・遺物の検出に務めた。南トレンチから調査を開始した。



第2図　調査区設定図および地区割り図

調査が進むにつれて、表土下1.4m前後（標高6.3m前後）付近に存在する第６層青灰色粘質土上面をベース面とする古墳時代前期の遺構が存在していることが明らかになってきた。ただ、調査区全体に地下水位が高く湧水が豊富であるため壁面の崩壊が相次いだ。さらに、台風等の影響で雨が続き、壁面の崩壊が進行し隣家への影響が懸念される事態になったため教育委員会の指導を仰ぎ、特に危険な状態である南トレンチの東端から16mについては埋め戻しする処置を講じた。各調査区の規模は南トレンチ（４×21m）、北トレンチ（４×35m）で調査面積は224㎡を測る。

調査の結果、第６層上面で古墳時代前期［布留式古相］に比定される竪穴住居１棟（SI－１）、土坑１基（SK－１）、溝２条（SD－１・SD－２）、落ち込み状遺構１箇所（落ち込み１）を検出した。第７層上面では古墳時代初頭［庄内式古相］に比定される井戸１基（SE－１）を検出した。また、南トレンチ西部の第７層からは弥生時代中期の土器が比較的まとまって出土したが平面的な広がりは確認できなかった。遺物は遺構および各包含層からコンテナ10箱程度が出土している。

第２節　基本層序

０層　盛土。層厚0.6m前後。上面の標高はT.P.＋7.6m前後。

１層　旧耕土。10BG５／１青灰色砂質土。層厚0.1～0.2m。

２層　10BG６／１青灰色砂質土。層厚0.1～0.2m。

３層　10BG７／１明青灰色微砂～シルト。層厚0.1～0.2m。

４層　2.5Y７／６　明黄褐色微砂～シルト。層厚0.1～0.25m。南トレンチの一部では奈良時代から平安時代の遺物を含む。

５層　7.5YR４／１褐灰色砂質。層厚0.15～0.3m。古墳時代前期の遺物を含む。

６層　５BG５／１青灰色粘質。層厚0.1～0.3m。古墳時代前期［布留式古相］のベース面。

７層　N５／０灰色粘質シルト。層厚0.2～0.4m。古墳時代初頭［庄内式古相］のベース面。南トレンチの西部では弥生時代中期の遺物を含む。

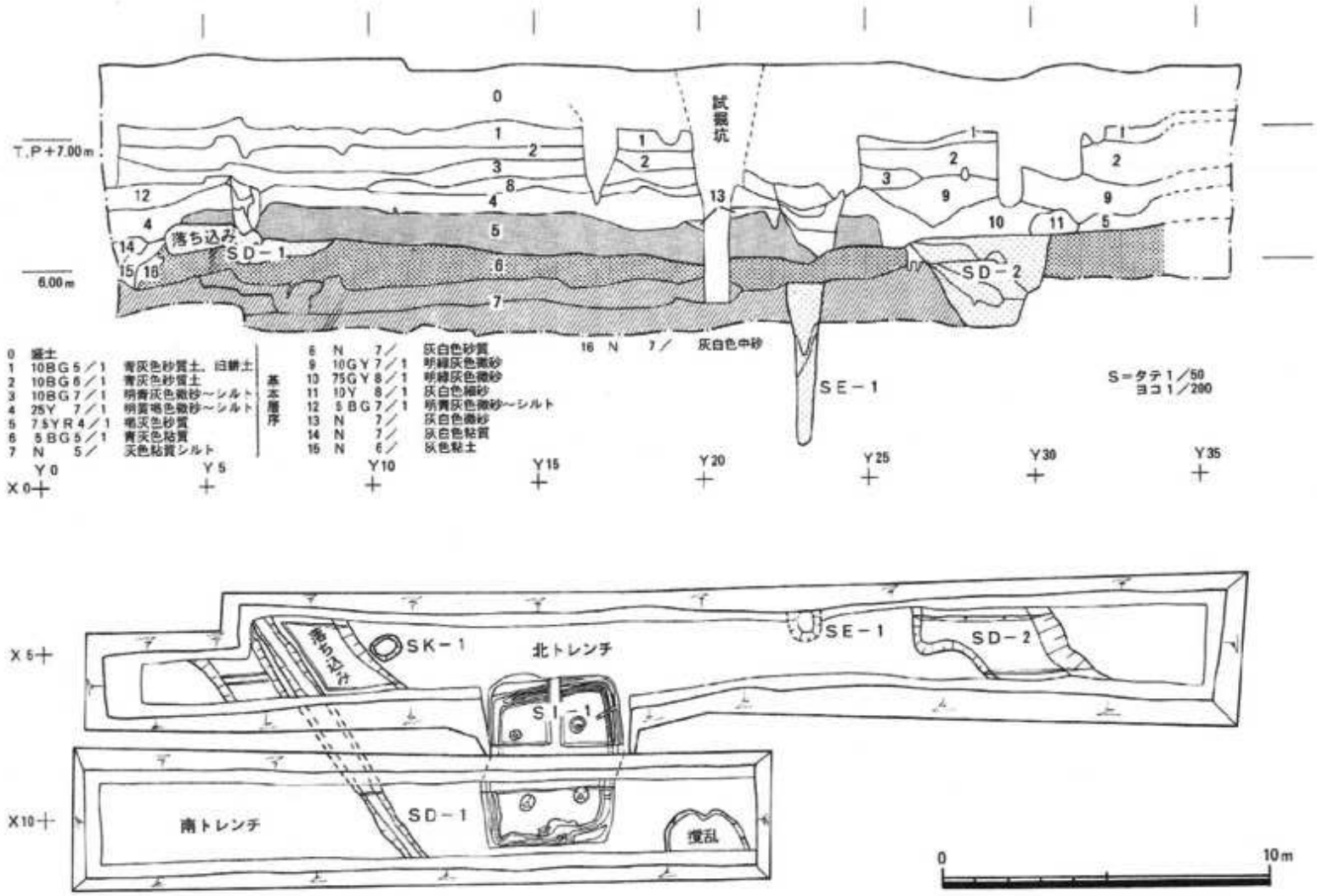
第３節　検出遺構・出土遺物

１）第６層上面検出遺構

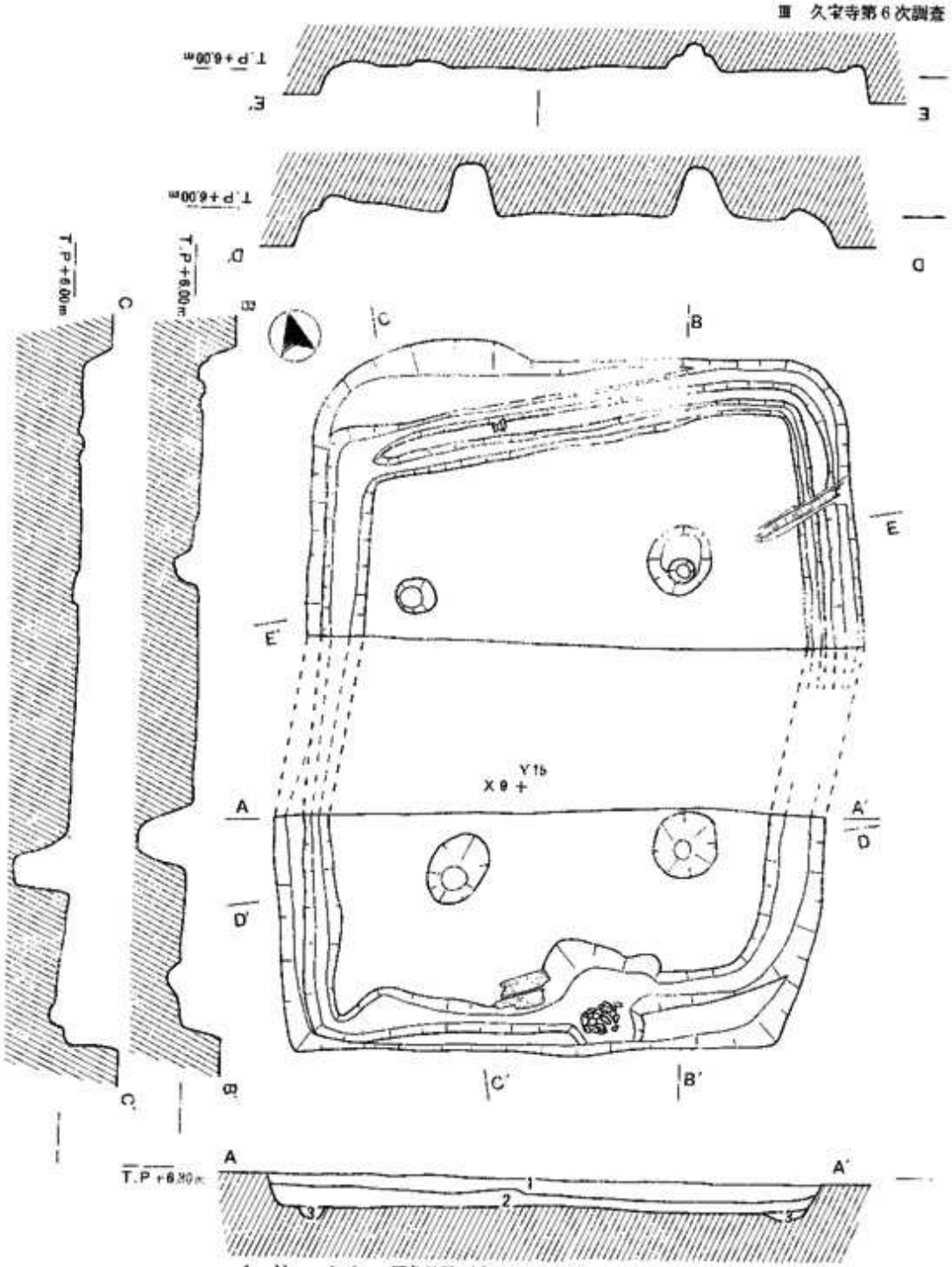
竪穴住居（SI）

SI－１

南トレンチの東部から北トレンチの中央部にかけて検出した。上面の形状が南北方向に長い



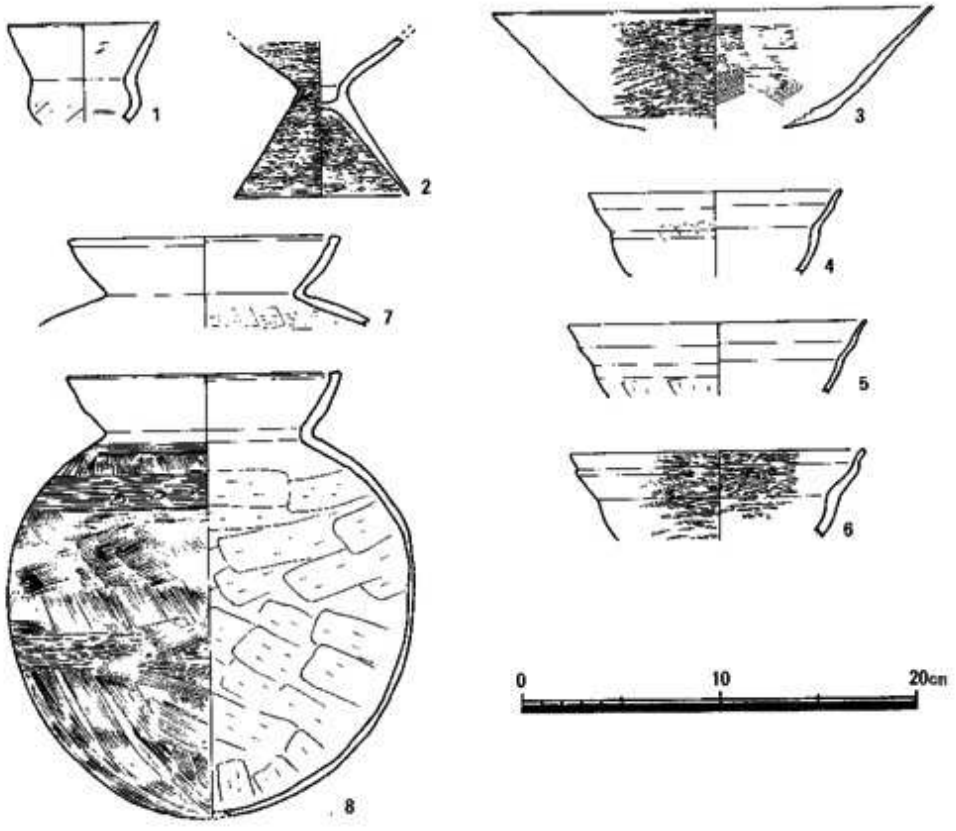
第３図　検出遺構平断面図



第4図　ＳＩ－１平断面図

隅丸方形を呈するもので、東西幅4.1m、南北幅5.0mを測る。住居内に堆積する埋土を検出面から 0.3m程度除去すると、床面を構成する青灰色粘土（南部は青灰色シルト）に達する。この層上面で柱穴・壁溝等を検出した。床面の標高はT.P.＋6.1mを測る。柱穴は4個で柱間

は２ｍ前後を測る。柱穴の上面の形状は円形ないしは楕円形で径0.3～0.45m、深さ0.27～0.38ｍを測る。柱穴内の埋土は、上層は灰色粘土で下層は緑灰色粘土である。壁溝は壁に沿って巡らされており、西部から南東部にかけては１条であるが北部から北東部には２条が巡っている。壁溝は幅0.1～0.3m、深さ0.05～0.1ｍで、断面の形状は逆台形を呈する。埋土は灰色粘質シルトである。なお、北部から北東部にかけて検出した２条の壁溝の状況からみて、建て替えが行われたようで、壁溝が１条巡る部分は、新旧の壁溝が重複したため幅広になったものと推定される。炉は確認できなかった。また、南辺中央部には東西幅0.85m、南北幅0.8m、深さ0.2ｍを測る不定形の土坑が存在しており、内部からは炭・灰が多量に検出されたほか甕が１個体分（８）出土した。検出した地点や内容からみて竈のような性格を有するものと考えられるが、南部への広がりが認められないことや、周辺の土壌が焼土化されていないことなど不明な点も多い。遺物は埋土および床面直上から古墳時代前期［布留式古相］に比定される土器類が少量出土したが、一部を除いて大半が小片であった。そのうち、図化したものは８点（１～８）である。内訳は小型壺$B_4$１点（１）、器台$B_3$１点（２）、高杯$A_4$１点（３）、鉢$H_2$３点（４～６）、甕Ｅ２点（７・８）である。土器組成からみれば、小型壺B_4（１）がやや新しい様相を示す以外は概ね布留Ⅰ期の資料である。



第５図　ＳＩ－１出土遺物実測図

土坑（SK）

SK－1

北トレンチの西部で検出した。東西方向に長い楕円形を呈するもので、長径1.0m、短径0.8m、深さ0.15mを測る。埋土は暗青灰色砂質と暗灰色砂質の二層である。遺物は出土しなかった。

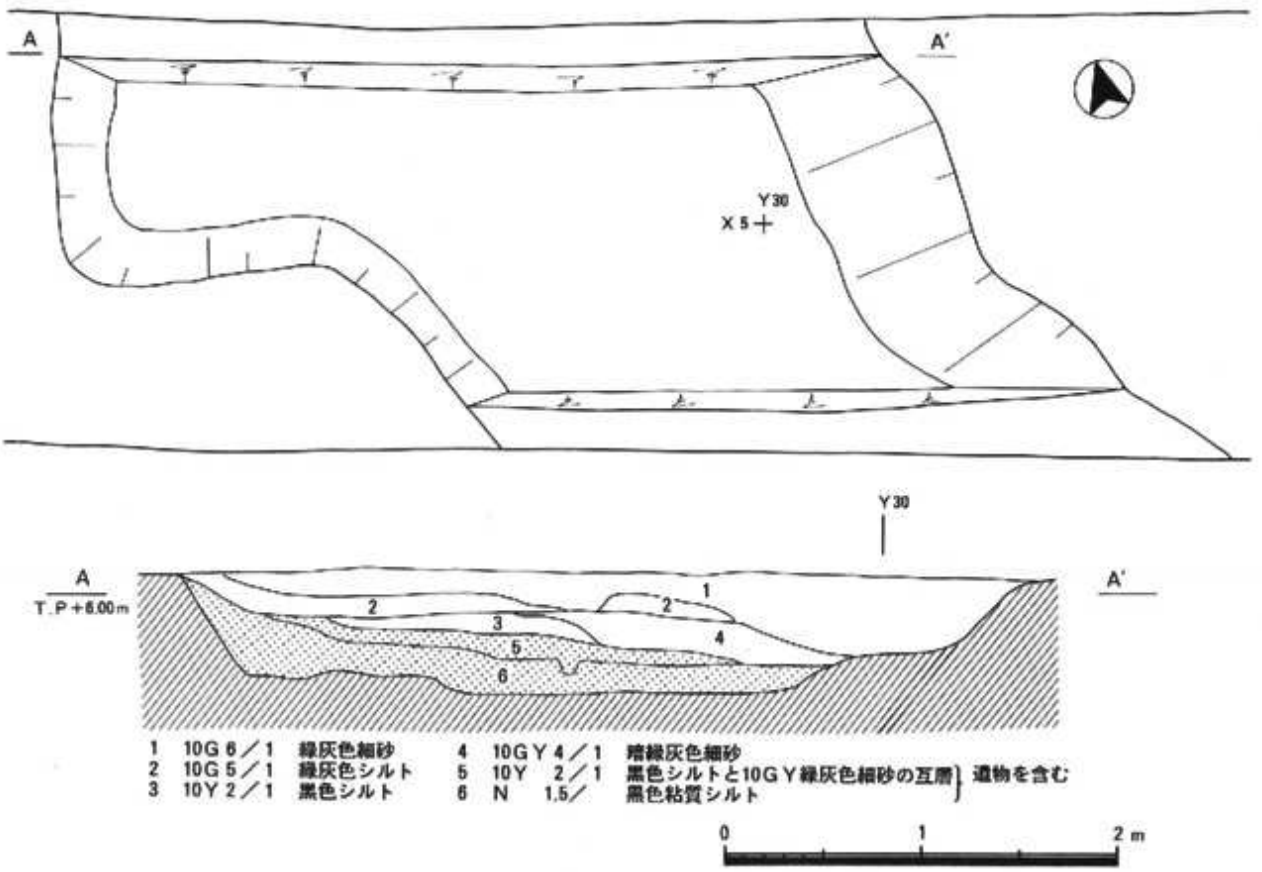
溝（SD）

SD－1

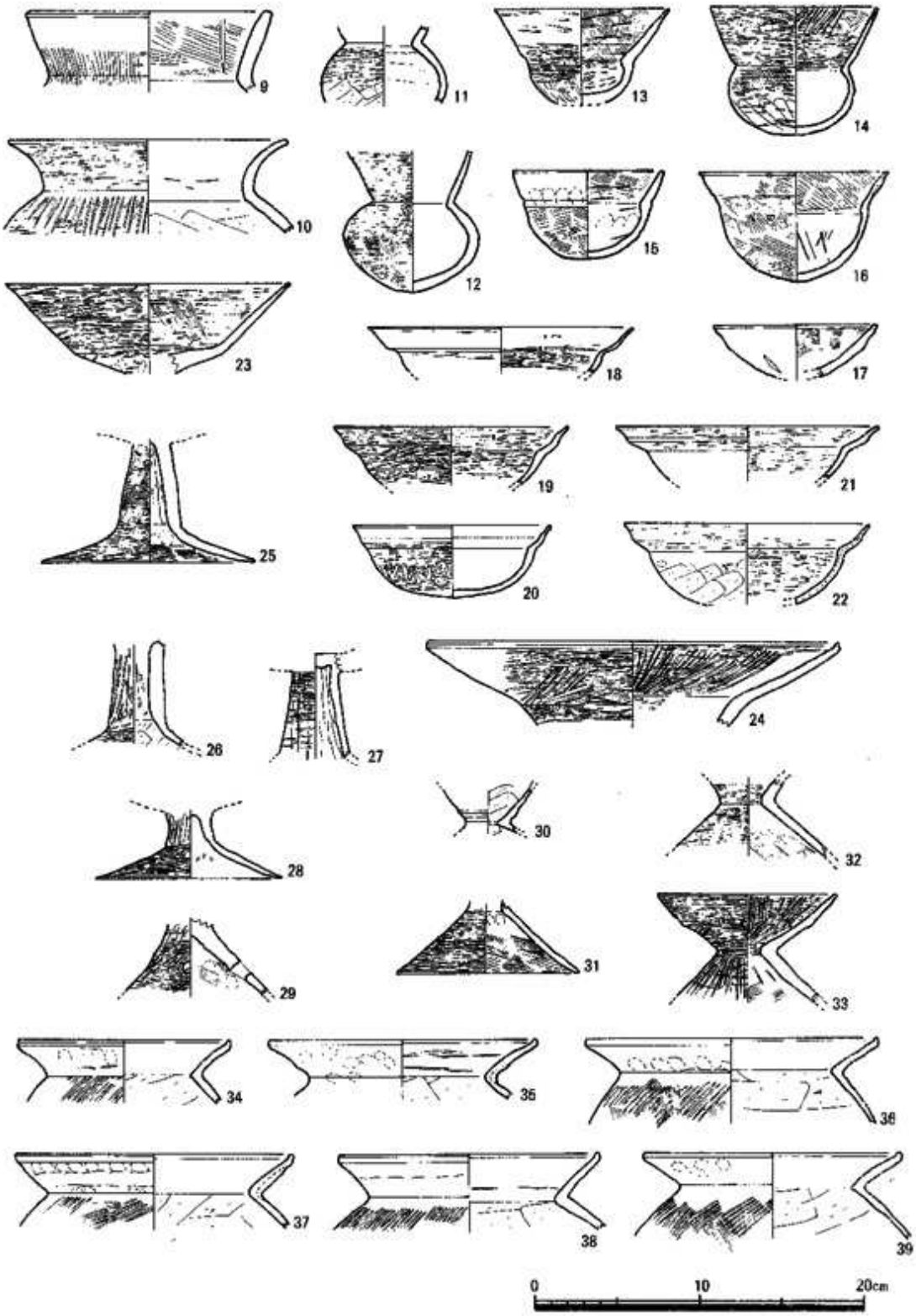
南トレンチの中央部から北トレンチの西部で検出した。北西－南東方向に伸びるもので、北トレンチでは落ち込み1を切っている。検出長は8.5m、東西幅0.5～0.7m、深さ0.22～0.38mを測る。埋土は上層の明青灰色微砂と下層の灰色微砂の二層である。遺物は下層から古墳時代前期に比定される甕の小片が極少量出土した。

SD－2

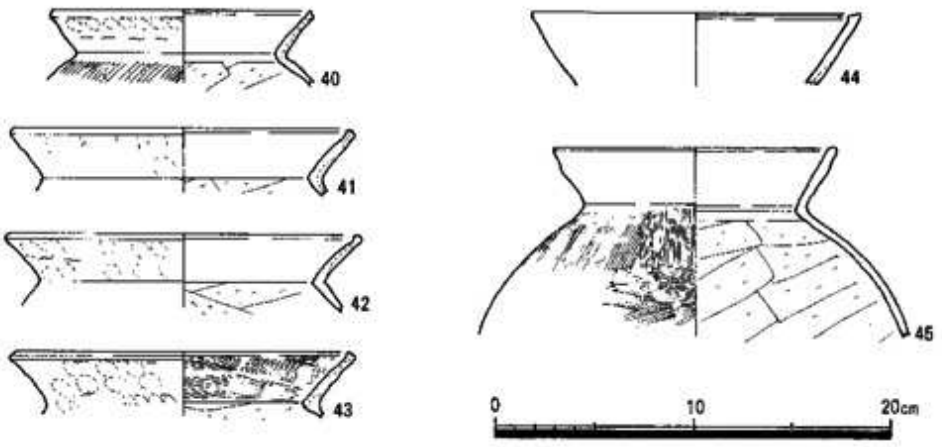
北トレンチの東部で検出した。北西－南東方向に伸びるもので、検出長2.4m、東西幅3.7～



第6図　SD－2平断面図



第7図　SD－2出土遺物実測図1



第8図　SD－2出土遺物実測図2

4.7m、深さ0.6mを測る。埋土は上層から第1層緑灰色細砂・第2層緑灰色シルト・第3層黒色シルト・第4層暗緑灰色細砂・第5層黒色シルトと緑灰色細砂の互層・第6層黒色粘質シルトである。遺物は第5層および第6層から古墳時代前期［布留式古相］に比定される土器類ががコンテナ1箱程度出土したがその大半が小片であった。そのうち、図化したものは37点（9～45）である。内訳は、短頸直口壷$A_2$1点（9）、広口壷A1点（10）、直口壷$A_1$2点（11・12）、小型壷$B_2$1点（13）、小型壷$B_4$1点（14）、鉢$G_2$1点（15）、鉢$F_1$1点（16）、鉢$E_1$1点（17）、鉢$H_2$5点（18～22）、高杯$A_3$2点（23・25）、高杯$B_2$1点（24）、高杯$C_2$1点（28）、高杯不明2点（26・27）、器台$B_3$1点（29）、器台$C_1$1点（30）、器台$C_2$3点（31～33）、甕$B_4$9点（34～42）、甕$F_2$1点（44）、甕E1点（45）、甕不明1点（43）である。一部、夾雑遺物が含まれているが布留1期の資料である。

落ち込み状遺構

落ち込み1

北トレンチの西部で検出した。大半が調査区外のため全容は不明であるが、検出部の形状は北西－南東方向に伸びる溝状を呈するもので、中央部をSD－1により切られている。東西幅4.5m、深さ0.1m前後を測る。埋土は青灰色砂質土一層である。遺物は古墳時代前期に比定される壷・甕の小片が極少量出土した。

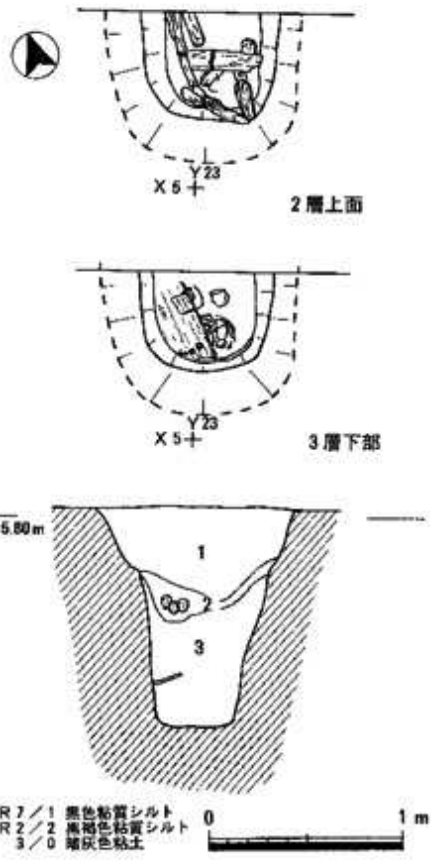
2）第7層上面検出遺構

井戸（SE）

SE－1

北トレンチの下層確認調査で検出した。構築面は第7層上面である。北部が調査区外のため全容は不明であるが、検出部分からみて上面の形状が南北方向に長い楕円形を呈する素掘り井戸と推定される。検出部分で東西幅1.0m、南北幅0.75m、深さ1.15mを測る。埋土は上層か

ら第1層黒色粘質シルト・第2層黒褐色粘質シルト・第3層暗灰色粘土で最下層は湧水層である青灰色シルトに達している。なお、第2層には多量の植物遺体のほか、焼け焦げ跡のある丸木（径5～7㎝）が数本含まれていた。遺物は第2層から完形の甕1点（50）が出土したほか、第3層の下部から甕6点（46～49・51・52）と板材1枚（53）が出土した。遺物の特徴から井戸の廃絶時期は古墳時代初頭［庄内Ⅱ期］に比定されよう。



第9図　SE－1平断面図

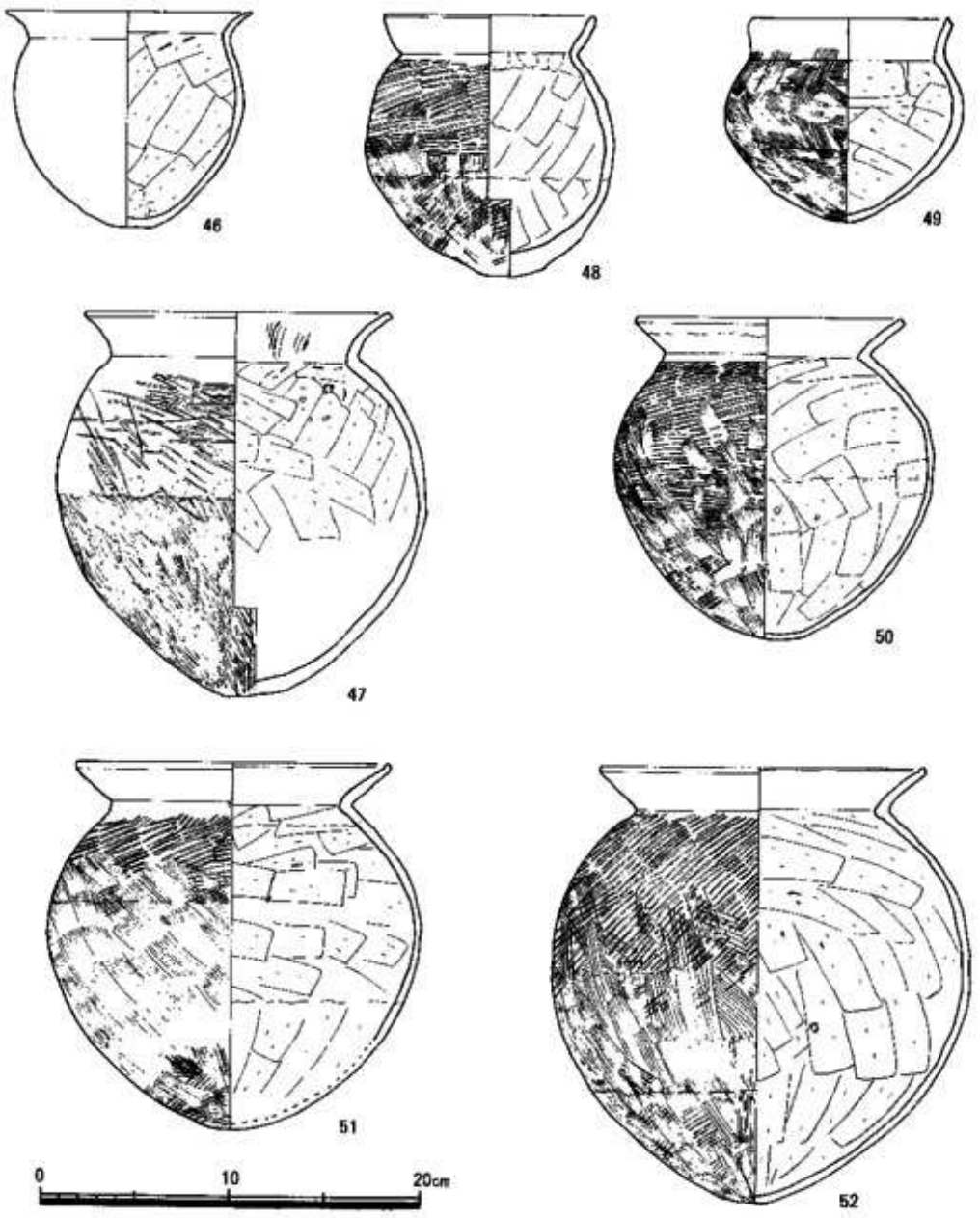
・SE－1出土遺物

SE－1からは甕7点（46～52）と板材1点（53）が出土している。土器類はいずれも完形ないしはそれに近いものである。（46～48）の3点は底部の形態から甕A_3としたもので、いわゆるV様式系の甕と考えられるものであるが、（46）のように体部外面にタタキ調整が行われていないものや（47）のようにに体部外面にヘラミガキを行うなど他に類例を見ないものである。（49）は体部外面を乱方向にハケナデ調整を行うもので、甕Ⅰに分類したがこれもこの時期類例が少ない。（50）は体部外面を三分割にタタキ調整を行った後、ハケナデを施す甕B_1に分類されるもので、河内型庄内甕の最古の形態を示している。（51・52）は体部外面のタタキ調整が連続的に行われた後、ハケナデを施すもので甕B_2に当たる。遺物の特徴から庄内Ⅱ期に比定される土器群である。（53）は長方形を呈する板材である。幅20㎝、長さ60㎝で厚さは0.6～1㎝で中央部分が厚く端に行くに従ってやや薄く削られている。短辺側から約7㎝内側に短辺に平行して4個の円孔が穿たれている。円孔は中央部の2個が径1㎝で、両脇の2個が中央部よりやや大きめで径1.6㎝を測る。さらに、もう一方の短辺側から3㎝付近にも径0.7㎝を測る円孔が1個穿たれている。広葉樹と推定されるが樹種は特定できない。

3）遺構に伴わない出土遺物

・第7層出土遺物　（54～63）

南トレンチの西部付近から出土した。下層確認調査の段階で出土したもので平面的な広がり

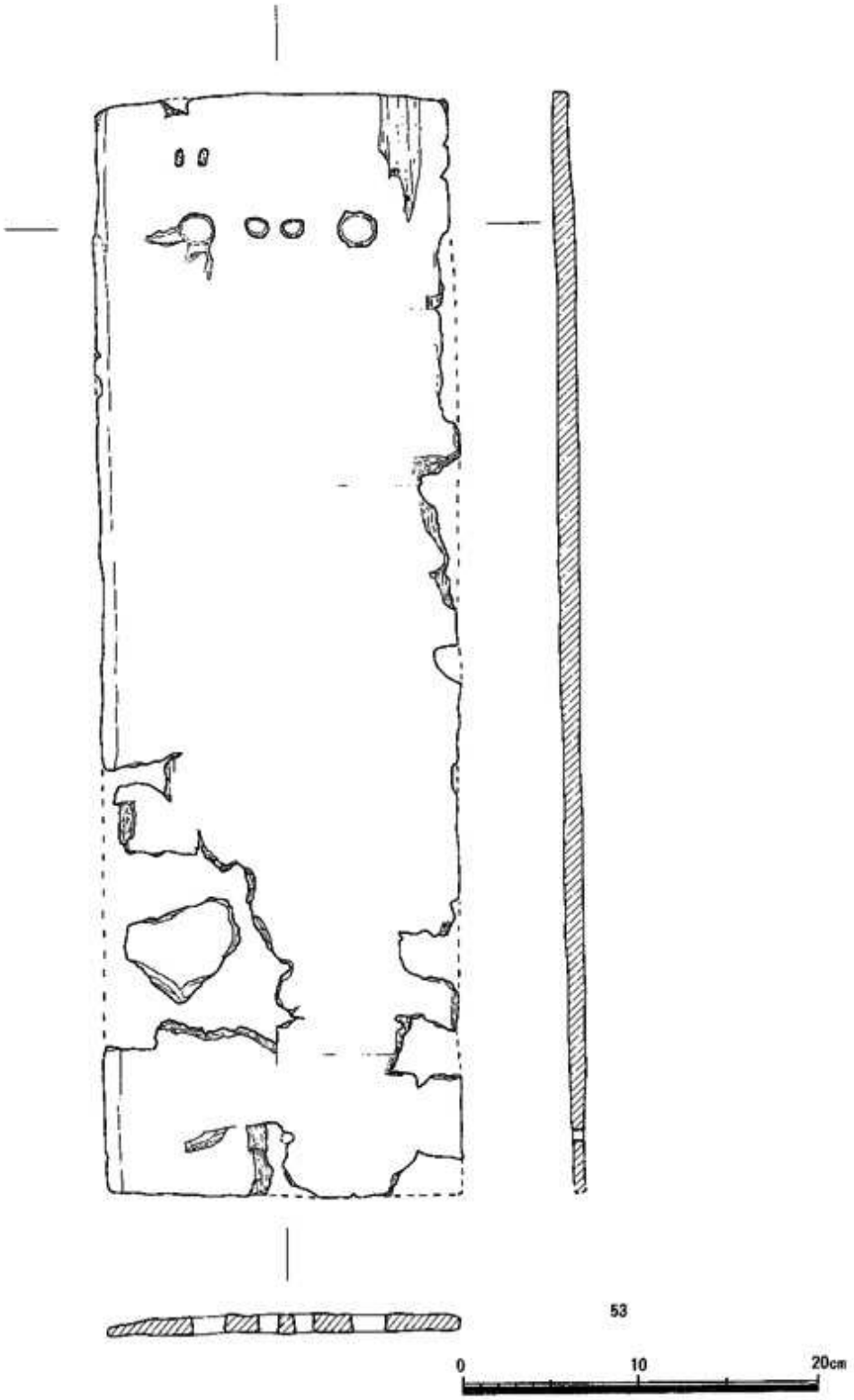


第10図　ＳＥ－１出土遺物実測図

は確認できなかったが、土器類は概ね集中して出土している。時期的には弥生時代中期（Ⅲ様式）に比定されるもので、広口長頸壺（61）の体部下半には焼成後の穿孔が認められることから、付近に同時期の墓域が存在した可能性が高い。

・第６層出土遺物（64～68）

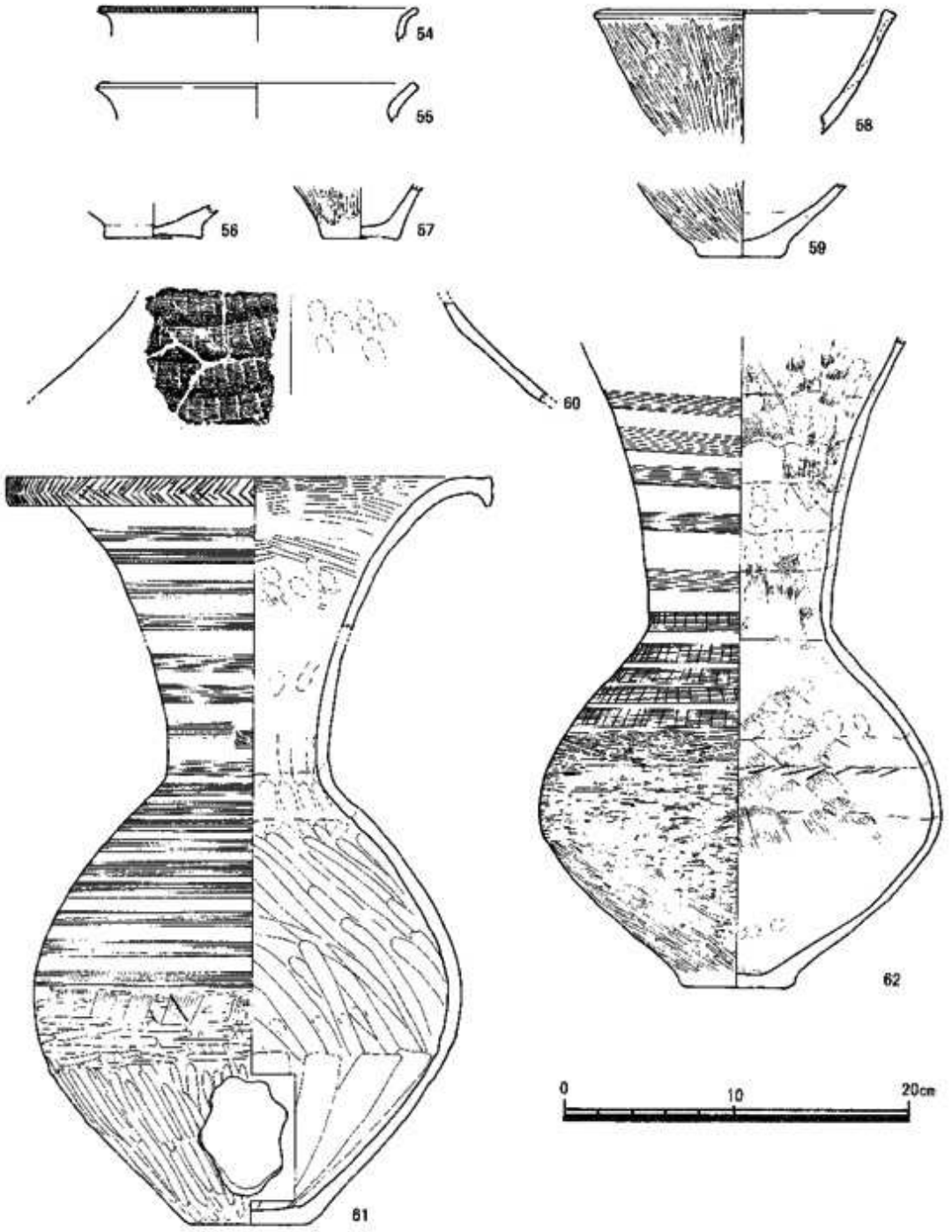
５点を図化している。内訳は甕B₃２点（64・65）、複合口縁壺Ｄ１点（66）、高杯A₁１点（67）、鉢Ｊ１点（68）である。庄内Ⅲ期を中心とした資料である。



第11図　ＳＥ－１出土板材実測図

・第5層出土遺物（69～79）

11点を図化している。内訳は甕D2点（69・70）、甕B$_3$2点（71・72）、高杯A$_3$1点（73）、高杯B$_3$1点（74）、高杯不明3点（75～77）、器台B$_3$2点（78・79）である。庄内Ⅲ期～布留

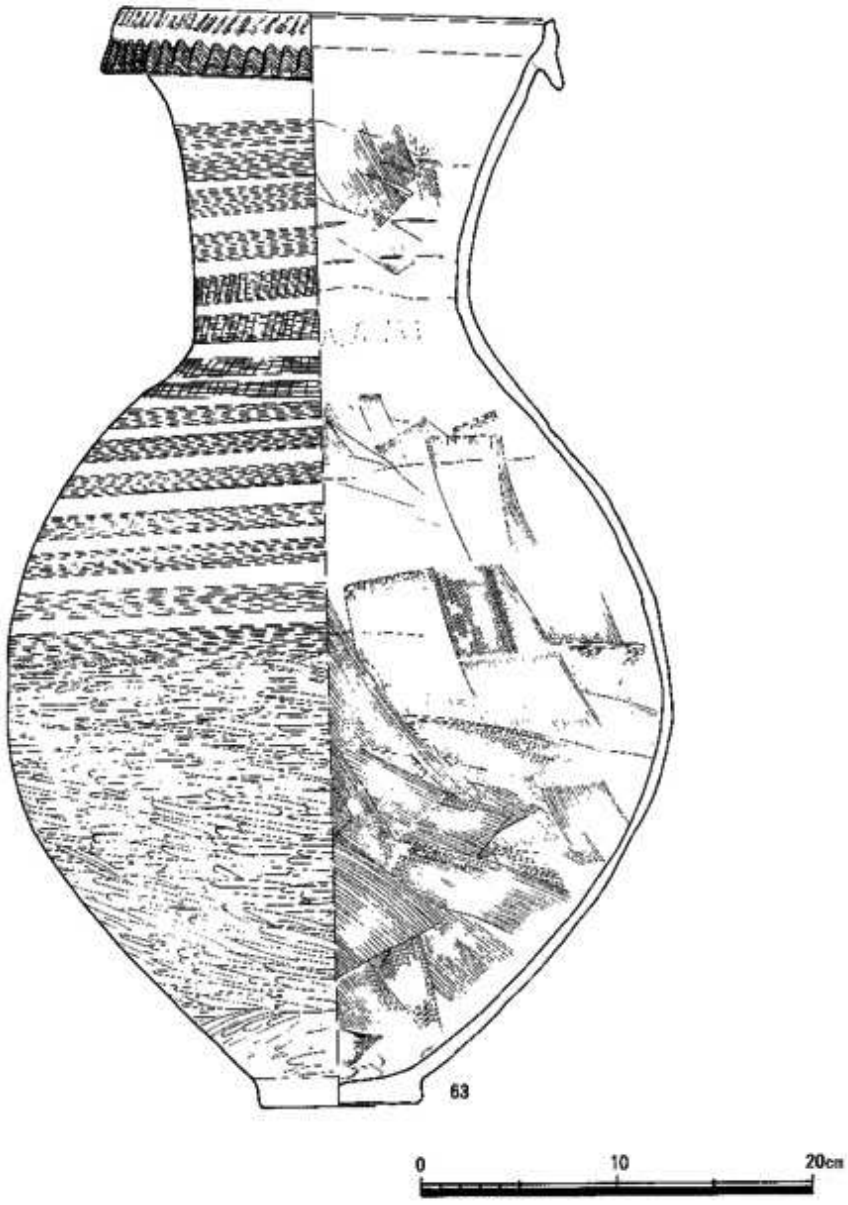


第12図　第7層出土遺物実測図1

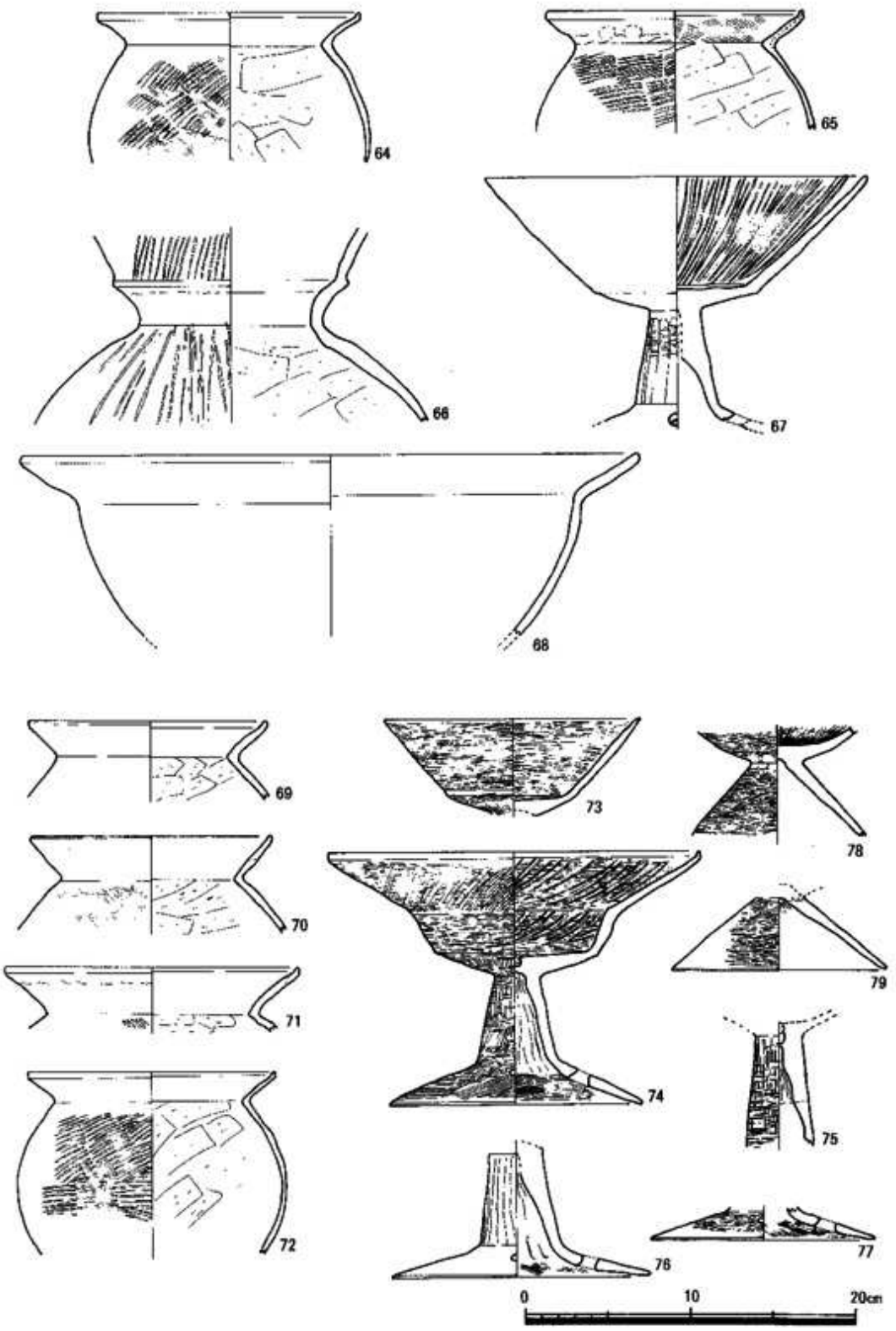
I期の資料と考えられる。

・第4層出土遺物（80～92）

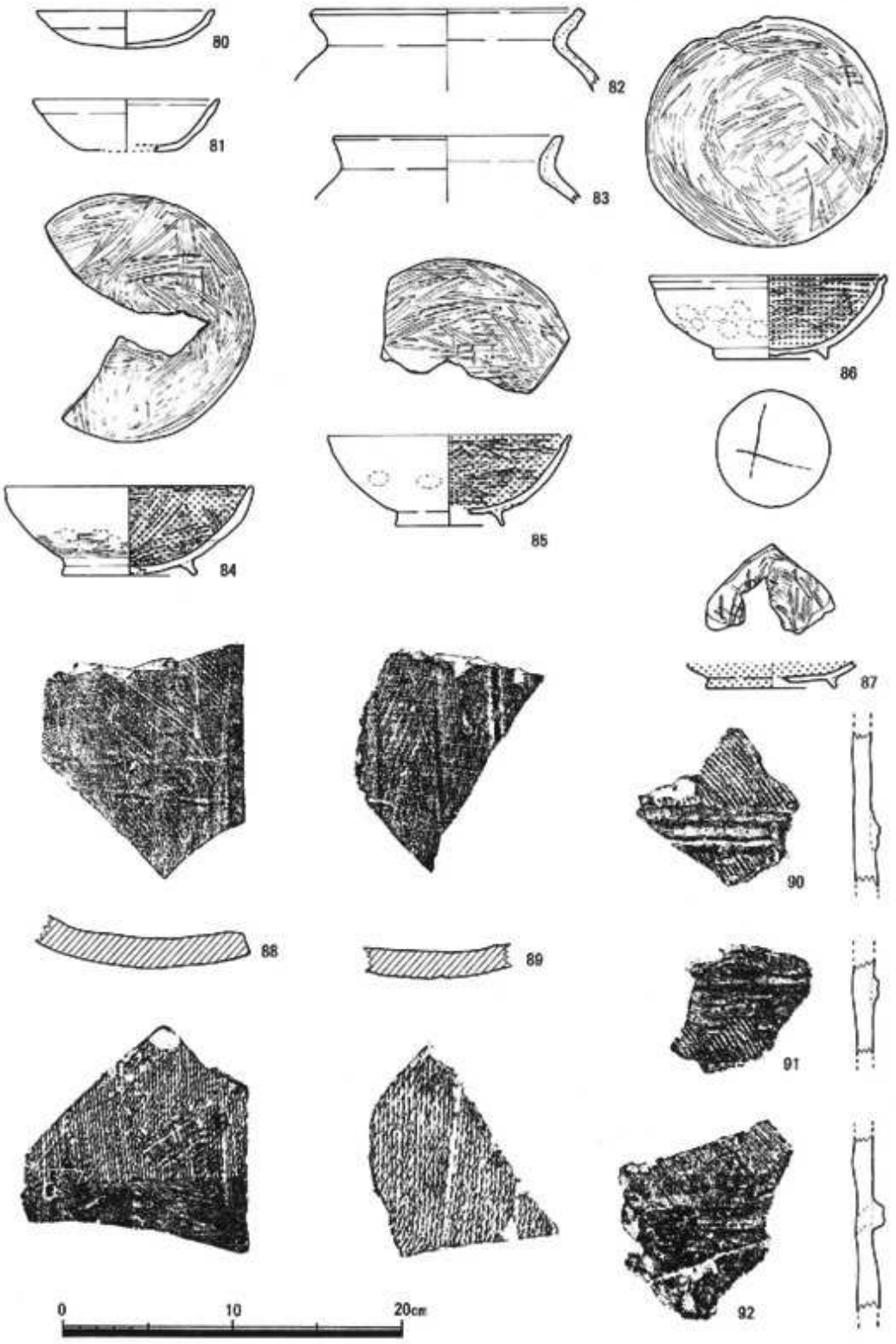
すべて、南トレンチから出土したもので、13点を図化している。内訳は平安時代後期－土師器小皿1点（80）・杯1点（81）、甕2点（82・83）、黒色土器A類椀3点（84～86）、黒色土器B類椀1点（87）、平瓦2点（88・89）、古墳時代中期末～後期初頭－円筒埴輪3点（90～92）である。なお、平瓦（88）の凹面に「蒙」の文字が線刻されている。



第13図　第7層出土遺物実測図2



第14図　第6層（64～68）、第5層（69～79）出土遺物実測図



第15図　第４層出土遺物実測図

第3章　出土遺物観察表

SⅠ－1

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師器 小型壺 B₄		7.6 －	口縁部内外面および体部外面上位弱いナデ。体部内面および体部外面中位以下ヘラケズリ。	淡茶色	密 長石（0.5㎜）を少量含む。	良好	¼
2 四	土師器 器台B₁		－ － 裾径 9.0	受部内面指頭圧成形後、弱いナデ。受部外面および脚部外面横方向のヘラミガキ。脚部内面ヨコナデ。	淡茶灰色	精良	良好	口縁部欠損
3	土師器 高杯A₁		22.3 －	杯部内面横方向のハケナデ。杯部外面横方向のヘラミガキ。	乳灰色	密 長石（0.1～0.5㎜）を少量含む。	良好	杯部½
4	土師器 鉢II₁		12.8 －	口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。体部面弱いナデ。	灰白色～茶色	精良	良好	⅛
5	土師器 鉢H₁		15.2 －	口縁部内外面および体部内面ナデ。体部外面ヘラケズリの後、弱いナデ。	茶褐色	密 長石（0.1㎜）を多量に含む。	やや不良	⅛
6	土師器 鉢H₁		15.0 －	口縁部内外面および体部内外面横方向の密なヘラミガキ。	黒灰色	精良	良好	⅛
7	土師器 甕E		13.5 －	口縁部内外面および体部外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。	乳灰色	やや粗 長石・チャート（0.1㎜～3㎜）を多量に含む。	良好	口縁部⅛
8 四	土師器 甕E		14.0 22.7	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上位左上りの密なハケナデの後、ロクロ回転による水平方向のハケナデ。以下は乱方向のハケナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面上位に棒状工具による刺突文が3個遺存。	茶褐色	やや粗 長石・石英（0.1～2㎜）を含む。	良好	口縁部外面から体部外面に煤付着完形
9	土師器 短頸直口壺A₁		14.4 －	口縁部外面縦方向の粗いハケナデの後、ヨコナデ。口縁部内面左上りの粗いハケナデ。	淡灰色	やや粗 石英・長石・チャート（0.5～1㎜）を多量に含む。	良好	口縁部¼

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
10	土師器 広口壺A	16.8 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横方向の密なヘラミガキの後、縦方向のヘラミガキ。体部内面ヘラケズリ。	内面 茶褐色 外面 黒褐色	やや粗 長石・角閃石・黒雲母(0.1～1mm)を多量に含む。	良好	¼
11	土師器 直口壺A1	—	口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ナデ。体部外面上位ヘラミガキ、以下はヘラケズリ。	内面 茶褐色 外面 淡灰黄色	精良	良好	
12 四	土師器 直口壺A1	— — 体部最大径 4.3	口縁部外面横方向の密なヘラミガキ。口縁部内面ヨコナデ。体部外面横方向の密なヘラミガキ、中位以下はヘラミガキがハケ状に遺存。体部内面ナデ。	赤茶色	精良	良好	体部完存
13 四	土師器 小型壺B1	10.6 —	口縁部外面ヨコナデ、一部ヘラミガキが遺存。口縁部内面左上りのハケナデの後、弱いヨコナデ。体部外面横方向のヘラミガキ。体部内面ナデ。一部粗いヘラミガキが遺存。	茶褐色	精良	良好	底部欠損
14 四	土師器 小型壺B1	10.3 7.9	口縁部内外面横方向の密なヘラミガキ、内面上位に右上りのヘラミガキ。体部外面上位左上りの密なハケナデの後、横方向のヘラミガキ。体部外面中位以下は、ヘラケズリの後粗いヘラミガキ。体部内	淡茶褐色	精良	良好	体部完存 口縁部½
15 四	土師器 鉢G2	9.2 5.5	手づくね風の粗い成形。口縁部外面ヨコナデ、内面はハケナデ。体部外面は、粗いヘラケズリの後、ハケナデ。体部内面ナデ。	内面 茶褐色 外面 黒褐色	やや粗 長石（0.1mm）を少量含む。	良好	½
16	土師器 鉢F1	11.5 6.8	口縁部の外面左上りの粗いハケナデ。体部外面乱方向のハケナデ。体部内面ナデ。	黄灰色	精良	良好	½
17	土師器 鉢E1	10.0 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面未調整。体部内面ナデ。	茶褐色	やや粗 石英・長石(0.1～1mm)を少量含む。	良好	¼
18	土師器 鉢H2	16.1 —	口縁部内外面および体部外面ヨコナデ。体部内面横方向のヘラミガキ。	灰黄色	精良	良好	口縁部⅛
19	土師器 鉢H1	14.3	口縁部内外面および体部内外面横方向のヘラミガキ。	乳灰色	精良	良好	口縁部⅛
20 四	土師器 鉢H2	12.1 4.4	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上位横方向のヘラミガキ、中位縦方向のヘラミガキ、体部内面ナデ。	茶褐色	精良	良好	½
21	土師器 鉢H2	16.0 —	口縁部内外面および体部内面横方向のヘラミガキ。体部外面ナデ。	黄褐色	精良	良好	¼

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
22	土師器 鉢H₁	15.0 —		口縁部内外面ヨコナデ、体部外面上位ヨコナデ、以下ヘラケズリ。体部内面横方向の密なヘラミガキ。	茶褐色	精良	良好	⅓
23	土師器 高杯A₃	17.3 – 杯部高 5.6		杯部内外面横方向の密なヘラミガキ。杯部外面下半ヘラケズリの後横方向の密なヘラミガキ。杯部内面ナデ。	乳灰色	精良	良好	杯部½
24	土師器 高杯B₂	25.0 —		杯部外面右上りのハケナデの後、横方向の密なヘラミガキ。杯部内面ヨコナデの後、放射状ヘラミガキ。	茶褐色	精良	良好	杯部⅓
25	土師器 高杯A₁	— — 裾部径 13.0		柱状部外面縦方向にハケナデを施した後、上半はヘラミガキ、下半はヨコナデ。裾部はヨコナデ。柱状部内面シボリ目。裾部内面はハケナデ。	淡茶褐色	密 長石（0.1㎜）を多量に含む。	良好	脚部½
26	土師器 高杯	— —		柱状部外面ナデ調整の後、縦方向のヘラミガキ。裾部外面ナデ。柱状部内面ナデ。裾部内面ヘラケズリ。	淡茶褐色	密	良好	柱状部完存
27	土師器 高杯	– –		杯部内面ナデ。柱状部外面縦方向にヘラナデにより面取を施した後横方向の密なヘラミガキ。柱状部シボリ目。	乳灰色	精良	良好	
28	土師器 高杯C₂	— – 裾部径 11.3		柱状部外面指頭圧成形後、縦方向のヘラミガキ。裾部ヨコナデ。柱状部内面ナデ。裾部内面ナデ。	淡茶褐色	密 長石（0.1～2㎜）を含む。	良好	脚部½
29	土師器 器台B₂	— —		脚部外面上半縦方向のヘラケズリによる面取りの後、密なヘラミガキ。脚部外面ハケナデの後、ナデ。透孔4個。	茶褐色	精良	良好	
30	土師器 器台C₁	— —		受部外面ヨコナデ。受部内面および脚部外面ヘラケズリ。	淡灰色	密 長石・角閃石・雲母（0.1～2㎜）を含む。	良好	受部⅛
31	土師器 器台C₂	— — 裾部径 11.1		脚部外面横方向の密なヘラミガキ。脚部内面ハケナデの後、弱いナデ。	茶褐色	精良	良好	脚部½
32 四	土師器 器台C₂	— —		受部内外面ヨコナデ。脚部外面ヨコナデ。脚部内面上位ナデ、下半ハケナデの後ナデ。	茶褐色	精良	良好	
33 四	土師器 器台C₂	10.8 —		受部外面横方向の密なヘラミガキ。受部内面横方向の密なヘラミガキの後、放射状にヘラミガキを粗く施す。脚部外面横方向に密なヘラミガキを施した後、放射状にヘラミガキを装飾的に施す。脚部内面ハケナデ後、ナデ。	明茶色	密 長石・チャート・赤色酸化土粒（0.1～1㎜）を含む。	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 器高 法量	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
34	土師器 甕B₄	13.0 —	口縁端部に一条の沈線が廻る。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面右上りの細筋タタキ（6本／cm）。体部内面ヘラケズリ。	乳灰色	やや粗 長石・角閃石（0.1～0.5mm）を多量に含む。	良好	口縁部¼
35	土師器 甕B₄	16.0 —	口縁部外面ヨコナデ、一部指頭圧痕遺存。口縁部内面ヨコナデ、一部ヘラ状工具による条線。体部外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。	淡灰茶色	やや粗 長石・角閃石・雲母（0.1～2mm）を多量に含む。	良好	口縁部⅙
36	土師器 甕B₄	17.8 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面右上りの細筋タタキ（6本／cm）の後、縦方向のハケナデ。体部内面ヘラケズリ。	淡灰色	やや粗 長石・角閃石・雲母（0.1～1mm）を多量に含む。	良好	口縁部⅓
37	土師器 甕B₄	16.6 —	口縁部上半指頭圧痕遺存。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面右上りの細筋タタキ（6～7本／cm）。体部内面ヘラケズリ。	茶褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母（0.1～1mm）を多量に含む。	良好	外面全面煤付着 口縁部½
38	土師器 甕B₄	15.8 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面右上りの細筋タタキ（6～7本／cm）。体部外面ヘラケズリ。	茶褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母（0.1～2mm）を多量に含む。	良好	外面全面煤付着 口縁部⅓
39	土師器 甕B₄	15.4 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面右上りの細筋タタキ（7本／cm）の後、左上りのハケナデ。体部外面ヘラケズリ。	乳灰色	やや粗 長石・角閃石・雲母（0.1～0.5mm）を多量に含む。	良好	口縁部煤付着 口縁部¼
40	土師器 甕B₄	13.1 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面右上りの細筋タタキ（6～7本／cm）。体部内面屈曲部付近までヘラケズリ。	黄灰色～灰色	やや粗 長石・角閃石・雲母（0.1～0.5mm）をわずかに含む。	良好	口縁部½
41	土師器 甕B₄	17.1 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。	茶褐色	密 長石・角閃石・雲母（0.1～1mm）を散見する。	良好	外面全体煤付着 口縁部⅙
42	土師器 甕B₄	17.8 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。体部内面ヘラケズリ。	淡茶褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母（0.1～1mm）を多量に含む。	良好	外面全体煤付着 口縁部⅓
43	土師器 甕	17.5 —	口縁部外面指頭圧成形後、ヨコナデ。口縁部内面横方向のハケナデ。体部内面ヘラケズリ。	乳灰色	やや粗 長石・雲母（0.1～1mm）を少量含む。	良好	口縁部外面に煤付着 口縁部¼
44	土師器 甕F₂	16.6 —	口縁部内外面ヨコナデ。	茶褐色	やや粗 長石・角閃石（0.1～0.5mm）を少量含む。	良好	口縁部外面煤付着 口縁部⅙
45	土師器 甕E	14.2 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上位縦方向のハケナデ、中位横方向のハケナデ。体部内面屈曲部付近までヘラケズリ。	茶褐色	やや粗 長石・石英（0.1～1mm）を多量に含む。	良好	外面全体に煤付着 口縁部½

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
46 五	土師器 甕A₂	13.0 11.6 体部最大径 12.1	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面剥離の為調整不明。体部内面ヘラケズリ。底部内面指頭圧痕遺存。	茶褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母(0.1～0.5㎜)を多量に含む。	良好	外面全体に煤付着 ほぼ完形
47 五	土師器 甕A₂	16.0 20.7 体部最大径 19.4	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上位は水平ないしは左上りの密なヘラミガキ中位以下は左上りの密なヘラミガキ。体部内面中位から屈曲部までヘラケズリ、中位以下はナデを施す。底部内外面ナデ。	黄灰色	やや粗 長石・角閃石(0.5～3㎜)を少量含む。	良好	外面全体に煤付着 底部に炭化物付着 ½以上
48 五	土師器 甕A₂	11.0 14.1 体部最大径 13.1	体部三分割成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面のタタキ（5本／cm）は、上位で右上り、中位で水平、下位で右上りで、中位以下にはタタキの後、縦方向のハケナデ。体部内面および底部板ナデ。底部外面未調整。	黄灰色	やや粗 長石・石英・チャート(0.1～3㎜)を多量に含む。	良好	体部中位以下煤付着 体部内面中位以下炭化物付着 完形
49 五	土師器 甕I	10.2 10.9 体部最大径 12.4	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面の上位はハケナデをほぼ等間隔に縦方向に施すか、以下は底部まで乱方向に施す。	茶褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母(0.1～1㎜)を多量に含む。	良好	体部上位以下煤付着 完形
50 五	土師器 甕B	13.8 17.3 体部最大径 16.7	体部二分割成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面のタタキ（6本／cm）は、上位右上り、中位水平、下位右上りで、上位以下はタタキの後、左上りのハケナデを粗く施す。体部内面ヘラケズリ。	茶褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母(0.1～2㎜)を多量に含む。	良好	体部上位以下煤付着 体部内面下位に炭化物付着 ほぼ完形
51 五	土師器 甕B₂	16.4 19.8 体部最大径 19.7	体部連続タタキ成形、口縁部内外面ヨコナデ。体部外面は右上りのタタキ（5本／cm）で、タタキの後、上位以下に左上りのハケナデを密に施す。体部内面ヘラケズリ。	茶褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母(0.1～1㎜)を多量に含む。	良好	体部中位熱による剥離 ほぼ完形
52 五	土師器 甕B₂	17.0 23.5 体部最大径 22.1	体部連続タタキ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面は右上りのタタキ（5本／cm）で、タタキの後、上位以下に左上りのハケナデを粗く施す。体部内面ヘラケズリ。	茶褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母(0.1～0.5㎜)を多量に含む。	良好	体部上位以下煤付着 完形

第7層出土遺物

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
54	弥生土器 甕	18.2 —	口縁端部にヘラ状工具による刻目。口縁部内外面ヨコナデ。	淡灰色	やや粗 長石・チャート（0.1～1㎜）を少量含む。	良好	南トレンチ 2A 口縁部½
55	弥生土器 甕	18.0 —	口縁部内外面ヨコナデ。	灰色	やや粗 長石・チャート（0.1～2㎜）を少量含む。	良好	南トレンチ 2A 口縁部⅙
56	弥生土器 甕	— — 底径 5.6	体部内外面ナデ。底部内外面および側面ナデ。	赤褐色	やや粗 長石・石英・チャート(0.1～2㎜)を少量含む。	良好	南トレンチ 底部¼
57	弥生土器 甕	— — 底径 4.4	体部外面縦方向のヘラミガキ。体部内面ナデ。底部内外面ナデ。	淡茶褐色	やや粗 長石・石英・チャート(0.1～1㎜)を多量に含む。	良好	南トレンチ 2A 底部完存

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
58	弥生土器 鉢		16.2 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面左上りのヘラミガキ。体部内面ナデ。	淡橙色	やや粗 長石・石英・チャート(0.1～3㎜)を多量含む。	良好	南トレンチ 口縁部⅓
59	弥生土器 壺	底径	— — 4.7	体部外面左上りのヘラミガキ。体部内面ナデ。底部内外面ナデ。	茶褐色	やや粗 長石・角閃石・雲(0.1～4㎜)を多量に含む。	良好	南トレンチ 2A 底部完存
60	弥生土器 壺		—	体部外面簾状文。体部内面指頭圧成形後、ナデ。	乳灰色	やや粗 長石(0.5～4㎜)を多量に含む。	良好	南トレンチ 2A
61 六	弥生土器 広口長頸壺	底径 体部最大径	26.7 — 6.9 24.8	口縁端面羽状文。口頸部外面櫛描き直線文8帯。口頸部内向指頭圧成形、一部ハケナデ。体部外面上位から中位に櫛描き直線文9帯。体部外面中位粗いハケナデ後、横方向のヘラミガキ、下位ヘラミガキ。体部内面ユビナデ。	淡灰橙色	やや粗 長石・石英(0.1～2㎜)を多量に含む。	良好	南トレンチ 2A 体部下半に焼成後の穿孔あり
62 六	弥生土器 広口長頸壺	底径 体部最大径	— — 6.0 23.1	頸部外面櫛描き直線文5帯。頸部内面ナデないしはハケナデ。頸部下端から体部上位外面簾状文5帯。体部中位外面横方向のヘラミガキ、下位は左上のヘラミガキ。体部内面指頭圧成形後、粗いハケナデ。	茶褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母(0.1～3㎜)を多量に含む。	良好	南トレンチ 2A ½
63 六	弥生土器 広口壺	底径 体部最大径	22.1 56.0 7.9 34.4	口縁端面列点文、波状文各一帯。頸部外面直線文4帯、簾状文2帯。体部上位から中位簾状文2帯、直線文7帯、中位以下横方向のヘラミガキ。口縁部内面ヨコナデ。頸部および体部内面ハケナデ。	乳灰色～茶褐色	やや粗 長石・石英・チャート(0.1～1㎜)を少量含む。	良好	南トレンチ 2A 体部⅓欠損

第6層出土遺物

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
64	土師器 甕B₁		15.8 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面右上りのタタキ(6本/㎝)の後、ハケナデを粗く施す。体部内面ヘラケズリ。	茶褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母(0.1～3㎜)を多量に含む。	良好	北トレンチ 1,2E 口縁部⅛
65 六	土師器 甕B₁		15.3 —	口縁部外面ヨコナデ、一部指頭圧痕が遺存。口縁部内面左上りのタタキ(7～8本/㎝)。体部内面ヘラケズリ。	茶褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母(0.1～1㎜)を多量に含む。	良好	北トレンチ 1,2E 口縁部¼
66 六	土師器 複合口縁壺D		— —	口頸部内外面ヨコナデ。口縁部外面放射状ヘラミガキ。体部外面ナデの後、ヘラミガキを放射状に施す。体部内面ヘラケズリ。	明橙色	やや粗 長石・雲母(0.1～1㎜)を少量含む。	良好	北トレンチ 1,2E
67	土師器 高杯A₁	杯部高	23.4 8.1	杯部外面剥離のため調整不明。杯部内面ヨコナデの後、ヘラミガキを放射状に施す。柱状部外面縦方向に面取りをした後、上部で横方向のヘラミガキ。柱状部内面および脚部内外面ナデ。	淡灰茶色	精良	良好	北トレンチ 1,2E 杯部½ 柱状部完存
68 六	土師器 鉢J		37.8 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	淡橙色	粗 長石・石英・角閃石(0.1～4㎜)を多量に含む。	良好	北トレンチ 1,2E 口縁部⅛

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
69	土師器 甕D	14.3 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面剥離のため調整不明。体部内面ヘラケズリ。	乳灰色	やや粗 長石・石英・チャート・雲母（0.1～2㎜）を多量に含む。	良好	北トレンチ 2D
70	土師器 甕D	14.4 —	口縁部外面左上りのハケナデの後、ヨコナデ。口縁部内面ヨコナデ。体部外面左上りのハケナデ。体部内面ケズリ。	淡橙色	密 長石（0.1～0.5㎜）を少量含む。	良好	北トレンチ 2D 口縁部⅙
71	土師器 甕B₂	17.8 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面左上りの細筋タタキ（8本／cm）。体部内面ヘラケズリ。	淡茶褐色	やや粗 長石・角閃石・雲母（0.1～1㎜）を多量に含む。	良好	北トレンチ 1,2E
72	土師器 甕B₂	14.4 —	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面右上りのタタキ（6本／cm）の後、ハケナデを粗く施す。体部内面ヘラケズリ。	乳灰色	やや粗 長石・角閃石・雲母（0.1～1㎜）を多量に含む。	良好	北トレンチ 1,2C 口縁部½
73	土師器 高杯A₂	15.6 — 杯部高 5.9	口縁部内外面ヨコナデにより平滑にした後横方向に密なヘラミガキ。杯部下半外面ヘラケズリの後ナデないしは、ヘラミガキ。杯底部内面ナデ。	明茶褐色	精良	良好	北トレンチ 2D 杯部外面全体に煤付着 杯部½
74	土師器 高杯B₂	20.6 15.5 裾部径 15.2 杯部高 7.7	口縁部上半外面やや粗いハケナデ後、ヨコナデ。口縁部下半外面密なヘラミガキ。体部外面ハケナデ後、ヘラミガキ。口縁部内面ヨコナデ後、放射状にヘラミガキ。口縁部内面ヨコナデ後、放射状にヘラミガキ。柱状部外面縦方向に面取りを施した後、ハケナデさらには上位と下位にヘラミガキを密に施す。裾部外面ハケナデの後、乱方向にヘラミガキを粗に施す。柱状部内面シボリ目。裾部内面ハケナデ。杯部内底面中央に径6㎜大の円孔を焼成前に穿つ。透孔は3個。	乳灰色～赤茶色	精良	良好	北トレンチ 1,2B 杯部⅓ 脚部½
75	土師器 高杯	— —	柱状部外面縦方向にヘラによる面取を施した後、横方向にヘラミガキを施す。柱状部内面シボリ目。	褐色	精良	良好	北トレンチ 1,2E
76	土師器 高杯	— — 裾部径 15.7	柱状部外面縦方向にヘラによる面取。裾部ナデ。柱状部内面ナデ。裾部内面指頭圧成形後、ハケナデ。	内面 黒灰色 外面 茶褐色	精良	良好	北トレンチ 1,2B
77	土師器 高杯	— — 裾部径 13.6	裾部外面ナデ。一部ハケ目遺存。裾部内面ハケナデ。透孔は4個。	淡茶褐色	精良	良好	北トレンチ 2D 裾部¼
78	土師器 器台B₂	— —	受部外面横方向に密なヘラミガキ。受部内面ナデの後、放射状ヘラミガキ。脚部外面横方向に密なヘラミガキ。脚部内面ナデ。	乳灰色～茶褐色	精良	良好	北トレンチ 1,2CD
79	土師器 器台B₂	— 裾部径 13.0	脚部外面横方向に密なヘラミガキ。脚部内面ナデ。	灰紫色	密 長石（0.1㎜）を多量に含む。	良好	北トレンチ 1,2E 脚部⅙

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
80	土師器 小皿	10.4 2.4		口径部内外面ヨコナデ。底部外面指頭圧成形後、弱いナデ。底部内面ナデ。	明橙色	やや粗 長石（0.1～0.5mm）を多量に含む。	良好	南トレンチ 2.3EF 完形
81	土師器 杯	11.0 —		口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面および底部内外面ナデ。	赤褐色	やや粗 長石（0.1～0.5mm）を多量に含む。	良好	南トレン2.3 EF 口縁部¼
82	土師器 甕	15.6		口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	乳灰色～ 淡赤橙色	やや粗 長石（0.5～2mm）を少量含む。	良好	南トレンチ 2.3EF 口縁部¼
83	土師器 甕	15.4 —		口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	乳灰色～ 淡橙色	密 長石（0.5mm）を散見する。	やや不良	南トレンチ 2.3EF 口縁部¼
84	黒色土器 椀	14.7 5.4 高台径 8.0		口縁部内外面ヨコナデ。口縁部端部内面に沈線が一条廻る。体部外面ナデ、内面乱方向のヘラミガキ。高台側面ヨコナデ。底部内面乱方向のヘラミガキ。底部外面ナデ。	内面 黒灰色 外面 茶褐色	やや粗 長石・チャート（0.5～4mm）を散見する。	良好	南トレンチ 2.3EF A類椀 ½以上
85 七	黒色土器 椀	14.4 5.3 高台径 6.3		口縁部内外ヨコナデ。体部外面指頭圧成形後、ナデ。体部内面ヘラミガキ。高台側面ヨコナデ。底部外面ナデ。	内面 黒色 外面 淡褐色～ 赤褐色	密	良好	南トレンチ 2.3EF A類椀¼
86 七	黒色土器 椀	13.9 5.0 高台径 6.1		口縁部外面ヨコナデ。口縁端部内面は段状に窪みが一周する。体部外面指頭成形後、弱いナデ。体部内面密なヘラミガキ。底部内面は一定方向のヘラミガキ。底部外面ナデ。底部外面に焼成後の×のヘラ記号。	内面 黒灰色 外面 淡茶褐色	やや粗 長石・チャート（0.1～2mm）を多量に含む。	良好	南トレンチ 2.3A A類椀 完形
87	黒色土器 椀	— — 高台径 7.6		体部外面ナデ。体部内面および底部内面乱方向のヘラミガキ。底部外面ナデ。高台側面ヨコナデ。	黒色	精良	良好	南トレンチ 2.3EF B類椀
88 七	平瓦	— —		凹面は細い布目。側縁から1cm程度はヘラケズリにより平滑されてる。凸面は細かい縄目叩キが縦位に通るが、端面側はナデ調整のみである。凹面には「夏」の文字が線刻されている。	灰色	精良	堅緻	南トレンチ 2.3EF
89 七	平瓦	— —		凹面は細い布目。横滑痕遺存。凸面はやや粗目の縄目叩キが縦位に通る。	凹面 橙色 凸面 淡灰色	やや粗 長石（0.1～5mm）を多量に含む。	堅緻	南トレンチ 2.3AB
90	円筒 埴輪	— —		外面左上りのハケナデ。内面ナデ。タガは断面台形状で突出度が低い。タガ上面および側面ヨコナデ。無黒斑。	乳灰色	やや粗 長石・チャート・赤色酸化土粒（0.1～5mm）を多量に含む。	良好	南トレンチ 2.3CD
91	円筒 埴輪	— —		外面左上りのハケナデ。内面ナデ。タガは断面台形状で突出度が低い。タガ上面および側面はヨコナデ。円形のスカシ孔。無黒斑。	赤褐色	やや粗 長石・雲母（0.1～2mm）を少量含む。	良好	南トレンチ 2.3AB
92	円筒 埴輪	— —		外面左上りのハケナデ。内面指頭圧成形後ナデ、一部水平方向にハケナデを施す。タガは断面台形状で突出度が高い。タガ上面および側面はヨコナデ。無黒斑。	淡橙色	粗 長石・チャート・赤色酸化土粒（0.1～4mm）を多量に含む。	良好	北トレンチ 1.2B

第４章　まとめ

今回の調査では、弥生時代中期（第Ⅲ様式）・古墳時代初頭（庄内式古相）・古墳時代前期（布留式古相）・平安時代後期に比定される遺構・遺物を検出した。

弥生時代中期においては、南トレンチの西部の第７層から遺存状況の良好な土器類が出土している。それらの土器類の中には、供献土器を想定させる穿孔のある土器が含まれており、調査地付近が同時期の墓域であった可能性が高い。

古墳時代初頭～前期の遺構には第７層上面で検出した井戸１基（SE－１）と第６層上面で検出した竪穴住居１棟（SI－１）・土坑１基（SK－１）・溝２条（SD－１・SD－２）・落ち込み状遺構１箇所（落ち込み１）がある。前者が庄内式古相（庄内Ⅱ期）、後者が布留式古相（布留Ⅰ期）に当たるもので、検出した資料からみれば集落が一時期断絶したことが窺える。既往調査の結果では、両時期に該当する遺構が、当調査地から西550ｍ地点の久宝寺南（その２・その３）の調査で検出されているほか、布留式古相に比定される遺構が当調査地から東400ｍ地点（久宝寺４丁目74－第３次調査[註1]）、西320ｍ地点（神武町２番35号－第13次調査[註2]）、南西650ｍ地点（北亀井３丁目１－第１次調査[註3]）、北650ｍ地点（久宝寺北（その１～３）[註4]）で検出されている。いずれの地点も距離が離れており、現時点では有機的な関係を推定するまでには至っていないが、特にこの地域では布留式古相段階において集落の拡大・分散が顕著であったようである。

平安時代後期に比定されるものは、第４層から出土した土器類と瓦類がある。特に、瓦類は小片ではあるが30点余り出土している。これらの屋瓦類については、調査地の東200ｍ地点に存在する式内社の許麻（こま）神社の神宮寺であった久宝寺に関連した屋瓦の可能性が考えられ、今後も注意を払う必要があろう。

註記

註１　赤木克視・一瀬和夫『久宝寺南（その２）』㈶大阪文化財センター　1987
赤木克視　『久宝寺南（その３）』大阪府教育委員会・㈶大阪文化財センター1986

註２　西村公助　「６　久宝寺遺跡（第３次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』㈶八尾市文化財調査研究会報告25 ㈶八尾市文化財調査研究会 1989

註３　西村公助　「17. 久宝寺13次調査（KH91－13）」『平成３年度　㈶八尾市文化財調査研究会事業報告』㈶八尾市文化財調査研究会　1992

註４　本書掲載　Ⅱ久宝寺遺跡第１次調査

註５　寺川史郎・金光正裕ほか『久宝寺北（その１～３）』㈶大阪文化財センター　1987

図　　版